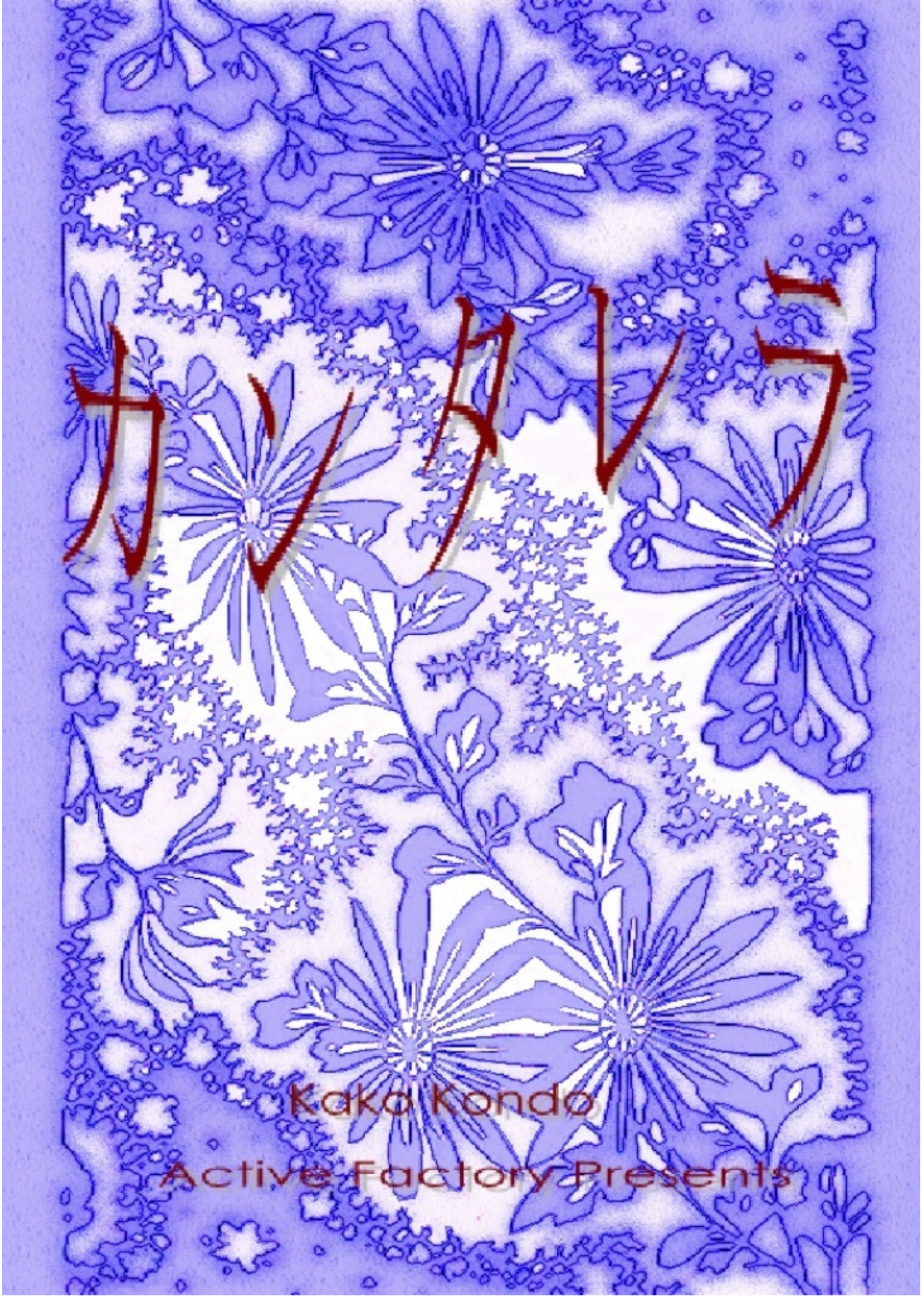
カノカレラ
Kaka Kondo
Active Factory Presents

　それは劇薬だから、と言ったのは誰だったか。
　だったら何だと言うのか。
　ならば、それを飲んで死んでしまおう。
　貴方が、得られないのなら……。

　闇の中に高く足音が響く。何事かと思いながら視線を廻らそうにも、何も見えない。そのうち、じゃっ、という軽い金属の擦れ合う音がして、きつい声が放たれた。
　「若様、若様!!いい加減起きてくださいまし！」
　エレナ、という名の、かつてはその姿を一目見んと、屋敷の周辺を若い男達が群がるほどだったメイドも、今では老婆というに相応しい老女中だ。一体いつまでうちにいるつもりか、と彼が尋ねた時には、それは勿論、死ぬまででございますよ、といけしゃあしゃあと言ってのけた。エレナに頭が上がる人間は、このボロージア家には誰一人としていない。当主であるモントリーヴォですら、彼女の前には子供も同然だ。そりゃあ私は、今の旦那様がおむつの頃からこの屋敷においていただいているんですから、というのがその老女中の口癖である。誰が本当の主なんだか、と、ベッドの中の彼はうんざりしながら思っていた。
　「……勘弁してくれよ、帰ってきたの、夜明け前なんだぜ？」
　「それは承知しております。おりますけれどね、若様。世間様はもうお昼なんですよ？いくら今日がお休みだからと言って、いい若者が朝帰りの上、昼過ぎまで寝ているなんて。しかもボロージアの若様ともあろうお方が……」
　エレナの説教は長い。彼はベッドの中で寝返りを打ち、開きそうで開かない目蓋をじわじわと開いた。昼だという陽光が、開け放たれたカーテンの外から強く差し込んでいる。眩しい事にはもう一つ理由があった。今は盛夏だ。夜半と言われる時刻まで、この国では太陽が輝いている。真昼の太陽なら、言わずもがな。直射でなくともその光は彼の目を焼く。眉をしかめ、彼は渋々ベッドから起き上がった。
　「解った、起きるよ、ばあや」
　「お目覚めになりましたら、お支度なさって食堂にいらしてくださいまし。寝巻きのままではいけませんよ」
　畳み掛けるようにばあやの声が続く。眉をしかめ、彼はベッドからさほど離れない、大きな窓の側の老女中を睨む。
　「なんでだよ？いいよ、腹も減ってないし……きついエスプレッソでも持ってきてくれたら……」
　「今日はお客様がおいでなんです。旦那様からも言い付かっておりますし……ああ、この間着ていた、破れた真っ赤なシャツみたいな、あんな格好ではおいでにならないで下さいましね。お客様に失礼ですから」
　彼の眉は更にしかめられる。黒とも藍ともつかない、暗い色の柔らかな髪と、同じく深い色の双眸。肌の色は少々血色に乏しい。その白い頬はその時、微々たるものではあったが痙攣していた。不機嫌なのだろう。しかし、目の前の老女中にしてみれば、孫にも近いような年頃の青年である。主の子息であろうとなかろうと、その扱いはぞんざいだった。
　「ほら、若様。お起きになられたんなら、ちゃっちゃとお動きなさいまし。それとも何です？二十四にもなって、まだばあやの手を煩わせるおつもりですか？」
　「……解った、解ったよ！ああもう……」
　うんざりしながら青年は言って、その柔らかい黒髪をかきむしった。苛立つ彼の様子に満足げな笑みを浮かべ、老女中は早くお支度なさってくださいまし、と言葉を残して部屋を出ようとする。
　「ったく……人が寝てる時に……誰だよ、昼飯に呼ばれる客、なんて……」
　「おや、ばあやは昨日言いませんでしたか？今日はモリエーロから、エリザベッタ様とルクレチア様がおいでになる、と」
　「初耳だよ……叔母上と、ルゥが？」
　老女中が早くお支度を、と重ねて言い残し、部屋を出て行く。彼は、どこかぼんやりとした目で、しばしベッドに座ったままだった。

　ボロージアと言えば、その一帯では知らない人間はいない。グラローニーの資産家であり、数百年の歴史を持つ旧貴族の血脈を継ぐ一族だ。かつてはこの地方の領主だったらしいが、今でも町の四割ほどの土地を所有し、その商業施設の殆どがボロージアと何らかのつながりを持っている。現当主モントリーヴォ・ボロージアはここ何代かの当主の中でも抜きん出て商才に優れ、先の代よりも更にその富を増大させた、とも言われている。町はボロージアで成り立ち、ボロージアなしでは立ち行かない。元領主、ではなく、未だにその土地はその一族に統治されているようなものだ。加えて某国の王族に端を発した、と言われるその血統も連綿と受け継がれており、生きた歴史を証明する一族、とまで呼ばれている。聞く度、ご大層な事だが、とその家に生まれた青年は、その事柄を鬱陶しく思っていた。家の名の為に、いい思いは勿論してきた。恐らくその名があれば、この土地で、一生暮らすには困らないだろう。どんなに小さな野望を持った野心家でも、その名に惹かれない人間はまずいまい。旧貴族、元領主、加えて土地一帯でも屈指の資産家、と来れば、どんな

形でも繋がりを得たいと思うに違いない。グラローニで成功したければ、どんな形でもボロージアとつながる事だ。それが一番の近道で、そして確実な手段だ。おかげで、彼の周りにもその目的を達しようとする人間が耐えない。もっとも、今現在の彼には何の力もない。仕事に就く事を拒んで、町にある小さな私立大学の大学院で、ひねもす文学を紐解く身である。それでも、その名と彼の身分は魅力的だ。現ボロージア当主の一人息子、エドアルド・チェーザレ・ボロージア。近隣の年頃の女性達も、勿論彼の一挙一動に注目している。何しろボロージア家唯一の男子だ。お眼鏡にかなえば、妻にはならずとも、一時は、いい夢が見られようというものだ。

「何をしていた、このバカ息子」

身支度を整えて食堂に足を踏み入れる。まず最初に彼が浴びたのは、父親の忌々しげな罵声だった。眉一つ動かさず、エドアルドはその声に返す。

「その日最初に会ったら、まず挨拶が先ですよ、父上」

「減らず口を叩いている暇があるなら、お客人に先に挨拶しろ」

嘆息混じりの低い声の後、くすくすと楽しげな笑い声がして、エドアルドは顔を上げた。自分と同じ色だったはずの、白いものが混じった髪と髭の男の傍ら、柔和な笑みの熟女の姿がある。亜麻色の長い髪を結い上げた、空色の瞳の女性は少女のような笑みをたたえて、さも楽しげに言葉を紡いだ。

「お久し振り、エドアルド。相変わらずお父様と、仲が悪いのね」

「……お久し振りです、叔母上。叔母上は相変わらずお美しくいらっしゃる」

叔母、エリザベッタの言葉に、エドアルドはにこやかに微笑み、軽く頭を垂れて返す。澱みなく流れる言葉に彼女はまたさらに楽しげに笑い、

「お上手ですこと。流石はボロージアの若様ね。兄さんの若い頃とは全然違うわ」

「リザ」

その言葉に、モントリーヴォが思わず妹を叱責する。くすくすと笑いながら、妹は構わない様子で言葉を続けた。

「兄さんが貴方くらいの頃には、もっと乱暴で粗野で、まだ可愛らしいくらいの顔だったのに無精ひげまで伸ばして。あれは正直、みっともなかったわね。それでもばあや以外はみんな兄さんを持ち上げるものだから、見ていられなかったわ」

「へぇ……父上にそんな過去が」

わざとらしく目を見開くようにして、エドアルドは父親を見遣る。かつての青い過ちを披露された男はぐっと言葉を詰まらせ、再び叱責するように妹の名を口にした。

「リザ！」

「はいはい、もうこの話はお仕舞いにしましょうね。当主様がお冠のようだわ」

「それは残念だな……とても興味深いのに」

言いながらエドアルドは父親の顔を見ずに席に着いた。やり込められた形のボカロジアの当主は、言葉もなく、苦虫でも噛み潰したような顔をしている。全く構わず、エドアルドは室内を見回し、誰に問うでもなくその問いを投げた。

「ルゥも一緒だと、聞いたのですが」

「ああ、あの子は……」

「お前を待っていられずに、先に食事を終えて、出て行ってしまったよ」

叔母の言葉を制するように、父の声がする。そうですか、と軽く返し、エドアルドは今度は叔母に尋ねる。

「モリエーロは如何です？」

「そうねぇ……こちらよりまだ涼しいかしら。私達は相変わらずよ」

「相変わらず、ですか」

「ええ、そう。亡くなった主人の遺産で、悠々自適」

くすくすと叔母は笑っている。エドアルドは何も返さず、テーブルの上で指を組んだ。

父親の妹であるその女性は、二度の結婚の後、二人目の夫に先立たれていた。二人目の夫であった男は彼女より二十歳以上も年上で、しかも先妻が二人あり、その先妻達との間に数人の子供を儲けていた。子供、と言っても彼女とさして年齢も違わない。嫁いだ先はモリエーローの名家で、ボロージア同様に旧貴族の後裔だ。それは明らかに家同士の策略のための結婚だった。彼女の悠々自適、も、どこまでが本当のところかは解らない。金銭的に困窮するとは到底考えられないが、彼女の立ち位置は苦しいものに違いあるまい。この柔らかい少女のような笑みの下には、何が隠れていることか。思わずエドアルドは吐息を漏らす。聞こえたのか、父親の咳払いが耳を打った。目を上げると、モントリーヴォのあまり機嫌の良くなさげな目がこちらを向いていた。無視して、エドアルドは言った。

「一度モリエーロにも伺いたいですね。いっそ、そうだな……もっと北の方まで足を伸ばそうかな」

「あら、避暑にでも行くの？いいわね、それ」

「ここは暑いですからね。寝ているだけでも汗だくになる」

「それは貴方がお昼まで眠っているからよ。私はグラローニの夏の朝が好きよ。とても気持ちが良くて、毎朝生まれ変わったような気分になれるわ」

和やかに叔母と甥の会話が続く。再び咳払いが聞こえて、二人は漸く昼食の主催者を見遣った。
「夜には、アデレードも呼んでいる。リザとルクレチアは、暫くこちらにいることになった」
「へぇ……姉上も……そうなんですか」
父親の言葉にエドアルドはまた僅かに目を見開く。叔母は変わらない笑みのままで、
「そうなの。暫くお世話になるわね、エド」
「こちらこそ、叔母上」
軽く頭を下げた彼女に、満面の笑顔で彼は応えた。

身なりを整えろ、と言われた昼食も、客が身内だったおかげが堅苦しいこともなく、ただ父親の機嫌を損ねた程度で片付いてしまった。叔母と一緒にやって来たはずの従妹は結局その席に顔も出さず、流石の叔母もそれには幾分か不服の様子だった。いつまでたっても子供で、とこぼしていたが、そういう叔母も、いつまでたっても少女のような部分を持ち合わせており、時折対応に困る事がある。その叔母の娘たる従妹は、確かまだ十七歳だ。子供であっても何の不思議もないだろう。ふらふらと庭を歩きながら、エドアルドはそんなことを考えていた。
ここ数日、帰宅は夜半過ぎか夜明け前、という生活を繰り返している。帰る家は、このやたらと大きな屋敷だ。他に行く宛もない。しかし、喜んで帰るような場所でもない。旧貴族で資産家、といえば聞こえはいいが、暮らしている人間は到底、人の羨むような暮らしをしてはいなかった。まず、当主の妻たる女が、そこにはいない。もう数年前から別居しており、息子であるエドアルドでさえ長い間まともに顔も見ていない。最後に話をしたのは、いつの事だったか。彼の母親は、町の、屋敷がある一帯とは別の高級住宅地にあるアパルトメントで、メイドと暮らしている。が、それ以外の情報は彼のところには入ってこない。
恐らく父と母は、そろそろ離婚するだろう。元々まともな結婚ではなかったらしいことは、様々な形で彼の耳にも入っている。何しろ家柄が家柄だ。男女の情愛で結婚など決められるはずもない。そして、資産が資産だ。肉欲を満たすための相手なら、金に飽かせれば幾らでも選べる。万が一の事があったとしても、それも幾らでも闇に葬ることが出来るだろう。どこの土地のどんな家にでも良く転がっている話だ。だから当然、彼もそれを気にしてはいない。
彼を育てたのは母顔ではなく、彼の祖父と、屋敷に仕える使用人達だった。父親は、同じ屋敷で寝起きを共にしてはいるものの、到底、育てられたという感覚は抱けない。それでも、幾分か母親よりはましのような気もする。褒められる事は殆どなかったが、叱られ、罵倒される事は日常茶飯だ。最近では逆にやり込めて、溜飲もいくらか下げられるようになった。厄介な年上の悪友、とでも言う感覚か。養ってもらっている身分ではあるが、彼にとって父親は、そういう形で近しい存在だった。
もう一人の血縁者は、母親を別にする姉だ。その姉も、父親と同じくボロージア本家の屋敷で暮らしている。が、最近は父親からもぎ取る形で手に入れた仕事が楽しいらしく、朝早くに出かけて行って、帰宅はやはり遅いため、顔を合わせるのも週に二、三度程度しかない。それでも姉、アデレードは、彼にとってはもっとも気安い家族だ。母親が違い、育った環境も違うが、そのせいか気性の強い彼女を、エドアルドは嫌いではなかった。そう言えば夕食には呼んでいると父が言っていた。叔母と従妹を迎えての夕食会でもするつもりなのだろう。暫く二人とも滞在すると言っていたし。
姉が家にいると、場が活気付く。華やかというよりも、彼女にはその形容が相応しい。聡明で、それでいて炎の様な気性で、これまで二度の結婚をしたが、いずれも長くもたなかった。もっとも、最初の彼女の結婚は相手側の政略的なもので、二度目は分家から押し付けられたものだった。やはり情愛の欠片もなく、そんなものを黙って享受できる性分でもなかったのだろう。今度三度目の夫を紹介する、といつか言っていた。今度もどれだけもつか、解ったものではない。
その彼の姉は、何故か叔母と気が合った。同じく、ずっと年の離れた従妹とも。今度の滞在を聞けばきっと喜ぶ事だろう。多少は家に寄り付くようになるかもしれない。だとすると、自分も家に縛り付けられるようになりそうだ。思ってエドアルドは一人苦笑した。老女中と姉には叶わない。そう言えば二人はどこか似ている。あまり仲は良くないが。
「お嬢様、年頃の娘が、そんなはしたない！」
「だってここはモリエーロと違って暑くて。それに、町の女の子はみんなこんな服を着てるもの。はしたなくなんてないわ」
「それでも、お嬢様は肌がお弱いんですよ。せめて肩は隠して……ああもう、爛れでもしたら、どうなさるんです！」
噂をすれば影か。老女中の声に何気にエドアルドは思い、視線をめぐらせた。庭師の手で美しく整えられた庭の向こう、老女中、エレナと、十代の少女とおぼしき声の持ち主が、何やら騒いでいる。従妹がいるらしい。真夏の日差しの中、眩しさにエドアルドはその手で日差しを遮るようにしてそちらを見遣った。叱咤する老女中の前を、まるで子犬のようにはしゃぐ少女の姿が見える。亜麻色の髪を二つに分けた、藍とも青とも付かない色の大きな目をした少女は、笑いながらくるくると身を翻す。
「もう、ばあやったら。私はお母様じゃないわ。ちょっと日に焼けたくらいで爛れたりしないから、安心して」
「何を仰いますか！ばあやだってそんなに耄碌しちゃいませんよ。それに、いつだったかおいでになった時、お庭でお倒れになった事をお忘れですか？ああもう、本当に……」
「やーねぇ、それってもっとずっとちっちゃい子供の頃でしょ？私だってもう子供じゃないんだから、そんなに心配し

なくても……」
「ばあやからしてみたら、ルクレチア様はまだまだ子供ですよ。お母様も同じ様にね。さ、言う事をお聞きになって。こちらはモリエーロと違ってまだまだ暑くなるんです。涼しいお部屋にお戻り下さい」
「はぁーい……つまんないの」
はしゃいでいた少女はそう言って軽く肩を竦める。キャミソールにショートパンツ、という、夏の町では珍しくないその格好が、老女中には気に入らないらしい。過保護な事だ。思いながらエドアルドは、声もかけずにその様子を見ていた。七つ年下の従妹は、ばあやが言う以上にまだまだあどけなく子供っぽい。見ているだけで頬が自然と緩む。とは言え、会うのはいつ以来か。思いながらエドアルドは歩みをそちらに進めた。くどくどとばあやのお説教が続く。少女の表情がうんざりしかけた頃、エドは声をかけた。
「ばあや、お客様だろう？そんなに意地悪するもんじゃないよ」
からかい口調のエドアルドの言葉に、老女中と少女は一瞬にしてそちらを向く。直後、少女は満面の笑みを浮かべてすぐさまエドアルドに駆け寄った。
「兄さま！」
弾けるようなその動きに、エドの表情が緩む。胸に飛び込んで、少女は無邪気に笑い声を立てた。
「大きくなったな、ルクレチア。久し振り」
「そうよ、もう十七歳。なのにばあやったら、私のこと赤ちゃんみたいに言うのよ？」
胸の中、拗ねるように言ってルクレチアはちらりと老女中を見遣る。エレナはやれやれと溜め息をついて、
「ええ、お嬢様も若様も、エレナからすれば大きな赤ん坊みたいなものですよ。全く、二人とも、ちゃんとお昼にも出られないなんて。亡くなった大旦那様が知ったら、なんて情けないと、お嘆きになりますよ」
「あら、私はちゃんと伯父様とお昼をご一緒したわ。いなかったのは兄さまだけよ」
エレナの言葉に少しだけむきになってルクレチアが反論する。ははは、と軽く笑い、
「俺も、昼の席には行ったんだけどね。ルゥは待ちきれなくて、どこかに行った後だった」
「だってお腹がすいてたんだもの。兄さまこそ、お昼の時間になっても起きなかったんでしょ？私とどっちが非常識？」
「どちらも同じ様なもんですよ」
エドの言葉にまでルクレチアが反論しようとする。制したのはエレナだった。胸に彼女を抱いたままでエドは笑い、その髪を何気なく撫でる。
「背が高くなったな……前に会った時には、もっと小さかったのに……」
「やん！くしゃくしゃになっちゃう！」
撫でられた頭をかばうようにしてルクレチアがエドの胸から離れる。幼い仕種にまたエドは笑って、
「もうずっとくしゃくしゃだよ。はしゃぎすぎだ」
「兄さまのいじわる！」
ルクレチアが舌を出す。その様子を見て笑うエドアルドの傍ら、老女中は疲れたように言った。
「若様、お嬢様も。夕食にはきちんとおいでになってくださいまし。旦那様が、今夜はアデレード様もご一緒にと仰っておいででしたからね。宜しいですか？」
「解ってるよ」
「はぁーい」
「それから、お召し物も。若様は構いませんが、ルクレチア様は、そんな下着のようなものじゃなく、ちゃんとした服を御召し下さいまし。仮にもボロージアの……」
老女中の説教が始まろうとしている。二人は目を合わせ、同時に笑うと、
「逃げるぞ、ルゥ」
「はぁーい。じゃ、エレナ、またねー！」
そう言って同時にその場から駆け出す。弾ける様に飛び出した二人に驚くも、エレナはそれを追うことも出来ず、
「あっ、お二人とも！お待ちなさい！まだばあやの話は終わっちゃいませんよ！待ちなさい、こらー!!」
その場で一人、大きく喚いた。

七つ年下の従妹、ルクレチア。エドアルドの叔母、エリザベッタの最初の夫の娘である彼女は、幼い頃からしばしばボロージア家を訪れていた。母親の実家である事を鑑みれば何の不自然もないことではあるが、嫁したはずの女性が、それほどまでにしばしば実家に戻るのは、果たして常識的なのか否か。幼い頃ならまだしも、今ではそんな邪推をせざるを得ない。久々に対面した従妹のはしゃぐ様子を眺めながら、エドアルドはそんな思いを巡らせていた。叔母にはルクレチア以外には子供がいない。元来、病弱だったらしい彼女には、妊娠も出産も容易ではなかったのかもしれない。兄であるモントリーヴォにはその頃のトラウマでもあるのか、妹に対して時折異常な執着を見せる。事ある毎に彼女をグラローニに呼びつける。亡くなった祖父もそうだった。そうかそれで、叔母もこの子もこの家に良く出入りしていたのか。エ

ドアルドは胸中、自分の行き着いた結論に納得する。物思いに耽る彼の目の前、はしゃぐ従妹は高く細い声で笑いながら、
「兄さま、夏のお祭はいつだったかしら？……ねえ、兄さまったら！」
全く自分の話を聞いていないエドアルドに、漸くそこで気付いたらしい。笑顔からふくれっ面に一瞬にして豹変すると、
「兄さま、私の話、聞いてるの？」
「あ？……ごめん、何だっけ……」
気のない声音でエドアルドが謝罪すると、ふくれっ面の少女は更に憤慨して、
「もういいわ！お祭には、アデレード姉さまに連れて行ってもらうから！」
「祭？……何だ、そんな時までこっちにいるのか？」
滞在は数日の事かと高をくくっていたエドアルドは、半月ほど先の夏祭りの話題に目を丸くさせた。ルクレチアはふくれっ面のまま、そっぽを向き、
「わかんないけど……母様が、伯父様と大切なお話があるから、暫くはグラローニにいる、って」
「……大切な、話？」
少女の表情が曇る。瞬きして、エドアルドは彼女の言葉を待った。しかし返答はない。数秒の沈黙の後、エドアルドがその名を、何かを問うように呼ぶ。
「ルクレチア？」
「……モリエーロの、一番上のお兄様が……」
「君達に、出て行け、とでも言っているのか……」
不安気で、沈んだ語調の言葉が途切れる。先読みして、エドアルドは嘆息した。ルクレチアはその眉を痛々しいほどに顰めて、無言のまま小さく頷く。そして、
「兄さまは……ルゥと母様が、ここにいるのはいや？」
問われて、エドアルドは瞳を見開いた。力ない、弱々しい視線がこちらを向いている。泣き出しそうな双眸を見返して、エドアルドは笑ってみせた。
「どうしてそんなことを？」
「……ちゃんと答えて。私だって……もう小さな子供じゃないんだから」
かすかに震えながらも、声は気丈に答えを求める。儚くも果敢、と言うべきか。すねたようにも見えるその表情にまたエドアルドは笑みをこぼした。そして、
「いやじゃない。ルゥは好きなだけ、ここにいるといいよ」
返答の直後、曇っていた少女の表情が明るくなる。輝かんばかりの笑顔で、ルクレチアはエドアルドに飛びついた。
「良かったぁ……兄さま、大好き」
「それはそれは、光栄です、お嬢さん（セニョリータ）」
「お嬢さん（セニョリータ）？」
聞き慣れない、と言うより言われ慣れない単語に、胸の中でルクレチアが顔を上げる。不思議そうに自分を見上げるその目を見返して、エドは笑って返した。
「だってルゥは、もう小さな子供じゃないんだろ？社交辞令だよ」
「なぁに、それ」
その言い様が気に入らないらしい。ルクレチアはまた膨れて、僅かに恨みがましげにエドアルドを睨む。エドの手が伸びて、金色の髪を撫でようとすると、先んじてルクレチアがその胸から離れる。
「何だ、撫でてやろうと思ったのに」
「それのどこが大人の扱いなの？失礼しちゃう」
拍子抜けしたエドアルドの言葉にルクレチアは舌まで出して言い返す。その様子に自然とエドアルドの表情が緩む。この子が来るといつもそうだ。華やかで、けれどどこかぎこちない家の中が、明るく柔らかい空間になる。年下の従妹の来訪が、彼は嫌いではなかった。長期間になればそれだけ束縛もされるだろうが、所詮自分はしがない学生の身分だ。毎日忙殺されている訳でもなし、恐らくこちらには他にろくに知り合いもいない、この従妹の相手役をするのに、不都合は特にない。それに、飽きたら飽きたでその時には、残酷かもしれないが本当のことを言えばいいだけだ。いや、黙ってそれを隠し通す事の方こそ、酷い仕打ちなのかもしれない。けれど、相手はもう子供ではないと言い張るのだ。なら、それ相応の扱いをしてやらなければ、失礼というものだ。
「ねぇ兄さま、私、町をお散歩したいわ」
ふくれっ面も瞬きほどの時間で解けて消える。少女は無邪気に笑って、どこか残酷な思いを巡らせる男に手を伸ばす。エドアルドは苦笑して、
「散歩ですか。この暑いのに、物好きだね、君は」
「だって何だか久し振りなんだもの。こうやって兄さまと会うのも、この家に来るのも」

「君のお目当ては散歩じゃなくて、ノッチェの店のスウィーツじゃないのかい？」
やれやれと言いながら漏れる嘆息には、笑みが混じる。えへへ、と笑うルクレチアに、年上の従兄は笑い返してその手を取った。
「仕方ない、お供しますよ、セニョリータ」
「わぁ、有り難う、兄さま。だから兄さまって、大好き」
細い指が彼の手に絡む。本当に、この子は大きくなった、大人になろうとしているのだな。以前、手を繋いだのは、いつだったか。その手を掴み返して、思いながらエドアルドは言った。
「本当に大きくなったな、ルクレチア。というか……手の形、叔母上にそっくりだ」
「そう？でも母様の手は何にも出来なくて、不器用なのよ？ばあやが何でもやってしまったから、なんですって」
くすくすと、たわいのない言葉にも少女は笑う。軽く握って、エドアルドは笑った。
いつか、この手を捕まえて、引き寄せたから、この子はここに来なくなった。でも今は、忘れていよう。この手はそれをきっと望んでいない。自分の手も、離すことを望まない。だから。
「兄さま、どうかした？」
不意に黙り込んだエドアルドに、ルクレチアが問いかける。頭を軽く振って、
「何でもないよ。君は食べるのが遅いから、さっさと行って帰ってこないと、夕食に間に合わないかな、って思っただけ」
「やん。もう、兄さまの意地悪」
詰りながらも少女は笑っている。詰られた男は、言葉なくただ笑い返した。

「全く、一体どこをほっつき歩いてらしたんです？ばあやがあれほど、今日の夕食会には遅れないように、と口を酸っぱくして言ったというのに」
夕刻。自室でエドアルドは夕食会に出るための身支度を整えていた。傍らには老女中が鬼のような顔をしており、まるで自分を見張っているようだ。白いシャツと細めに作られた袖の上着に腕を通し、袖口を金鎖の連なるカフスで留める。身内の夕食会というには少々仰々しすぎやしないか、という反論は、あっさりと退けられた。叔母と従妹とは言え、二人は食客である。昼食は簡単に済ませはしたが、夕食ともなればそうは行かない。正装とまではいかずとも、きちんと整った身なりをしてもらわなければ困る、というのが老女中の言い分だった。そしてその文句に、エドアルドはやはり反論できない。と言うより、それを聞いてはもらえないようだった。襟元まで揃いのブローチで固められて、思わず小さくうめき声を上げる。
「こんなのつけてたら、まともに飯なんて食えないよ」
「若様、お口が汚うございますよ」
「だって本当のことだろ？第一、なんでうちで食事するのに、こんな……」
「このところ若様はたるんでおいでですから、こういう時くらいはばあやがピリッとさせて差し上げなきゃなりませんからね。毎晩毎晩、バールでだらだらお酒なんかお召しになって。そんな風では折角覚えたマナーも何もかも、忘れておしまいになりますよ。そうなったらまた……」
「あー、解った、解ったよ。けどろくに食えなかったら、夜食の一つも支度してくれるんだろうな？エレナ」
恨みがましく老女中を睨むと、彼女はしれっとした顔で、
「今夜の泊まり番はばあやじゃございませんからね。誰ぞ他の者に頼んでくださいな。それでも若様、あんまり遅いお時間に食べますと、お太りになりますよ？」
「……ああ、そうだね。覚えとくよ」
反撃も虚しく、エドアルドはそれ以上の攻撃をやめた。落ち着きすぎず、それでもそこはかとなく華やいだ雰囲気のスーツを身に纏うと、傍らの老女中がおやおや、と感嘆の声を漏らす。
「そうやってちゃんとなさっておいでになると、亡くなった大旦那様のお若い頃のようですよ」
「それって、俺、褒められてるの？ばあや」
「当然ですよ。グラローニでも一、二を争う伊達男と呼ばれた方ですよ、あの方は」
「……へーえ」
どこか恍惚さえ見え隠れする声音の老女中の賞賛に、エドアルドは冷めた声で返す。チェーザレ・ボロージア。現ボロージア当主の父親で、エドアルドの祖父だ。数年前に没して入るものの、この近辺で彼を知らない人間はいない。エレナの言う通りに若い頃には浮名も流したらしい。どこまでが本当か嘘かは解らないが、手をつけられて愛人に昇格したメイドも、少なくないと言われている。
ボロージアの男達は女にだらしがない。この町に来てその名を出せば、まず最初に出てくるのがその言葉だ。昼過ぎからバールで程よくアルコールに侵された老人達は、まず決まってその話をする。どこそこの若い娘が、あの大きな屋敷の使用人に連れて行かれ以来、家にも戻らず、屋敷の一室でそれまでとは比べ物にならない暮らしをしていた、だの、壁を塗る職人が日参している間に女主人が何人変わった、だの、ある日は赤ん坊を抱えた女が門扉の前で、主の名前を叫びな

がら泣いていた、だのと、話の種は尽きない。そのどれが嘘でも真実でも、言いたいことは同じなのだろう。巨万の富と権力を独り占めし続けた一族の主を、男として妬み、同時に羨んでいる。自分にも同じだけの力があれば、同じ事をどれだけ言われようとも、きっとそうするに違いない、と言わんばかりに。愚にもつかない酔っ払いの言葉の中にも、ボカロジアへの羨望と嫉妬は存在する。この土地のどこへ行っても、それは一族に纏わり付いた。
　女にだらしがない、その次に言われるのが女達の不貞だ。幾度となく結婚と離婚を繰り返し、その多くが最終的にはこのグラローニに戻ってくる。子連れで、或いは子供を置き去りにして。かつては幾度も政略結婚を繰り返し、そうしてボロージアの家は大きくなってきた。それは今でも変わらないのかもしれない。ボロージアと繋がりを得たい人間は、未だに消えてなくなりはしないし、それを利用して、一族は今もその富と力を増大させている。例えば、叔母であるエリザベッタだ。一度目の夫とどんな理由で離婚したのかは知らないが、二度目の夫は明らかに、この家との繋がりを得るため彼女と結婚した。先妻と離婚してまで。その夫も亡くなって数年が経つ。当然のように、嫁ぎ先での彼女の立場は悪くなる一方だ。今度の滞在も、それと関係があるのかもしれない。もしかしたら彼女も、他の女達のように、このグラローニに戻るのだろうか。
　そうしたら、ルクレチアはどうするのだろう。ふと思って、その思いに至った自分をエドアルドは笑った。自分はあの子を意識しすぎている。従妹は彼女しかいないのだから、それを心配するのはおかしな話ではないが、それにしても、あまりにも彼女のことを考えすぎている。理由は、と問われれば、恐らく困窮するほどに。年が離れていて、見ていられないからだ、と言い訳して、どれだけの人間が納得してくれるか。いや、あの子は本当に子供だから、誰もが納得してくれるかもしれないが。思うとまた、口許に苦い笑みが昇った。
　「ああ、もうこんな時間だ。若様、早くなさってくださいな」
　老女中の急く声がする。エドアルドは笑って、
　「解ってるよ。俺より、もう一人手のかかる大きな赤ん坊はいいのか？ばあや」
　「ルクレチア様にはばあやじゃなくて、ルカがついております。あの子は若いながらにしっかりしているから、大丈夫です」
　「へぇ……やるなぁ、ルカも」
　冗談めかして言葉を返して、エドアルドは部屋を出る。
　食堂に続く長い廊下を歩く間、エドアルドの表情は凍えた様にぴくりとも動かなかった。幾つかの角を曲がり、時折数人の使用人とすれ違うが、視線はそちらを向くこともなく、同様に反応もしない。屋敷は普段通りに静けさの中にあった。夕食会、と言えば通常なら外からの客を招き入れて行なわれるため、邸内は波のようなざわめきに包まれているものだが、今夜はごく身内のみの会食だ。静かであっても何の不思議もない。が、その中に僅かに雑音が走っている。突然戻った叔母が、暫くこの屋敷に留まる、そのことを噂しているらしい。口さがない、下賤が。耳元に届く僅かな人声に、エドアルドは小さく舌打ちした。
　使用人は所詮雇われの身だ。ボロージアの人間ではない。広い為に、身内よりも他人の方が数多く蠢くその家が、彼は好きではなかった。だから寄り付かないでいたかった。そうしてしまったこの家の、その名も、忌み嫌っている。
　母親が出て行ってしまった理由の一端も、もしかしたらそこにあるのかも知れない。嫁いで来た彼女にしてみれば、嫁ぎ先の家族よりも厳しい目が、それ以上にあることは苦痛に違いない。そんなところにだけ、彼は母親に同情した。それでも、憐れとは思わない。彼女も家の道具として使われた。しかしそれは、己の意志の弱さのためではないのか。強く拒んだなら、こんな家に嫁がされる事もなかっただろうに。思い至り、何気に嘆息する。自分の耳にも重く響いたその吐息に、声は投げられた。
　「あら、お疲れ？エドアルド」
　高くはないが女性の声に、彼は目を上げた。深い臙脂のスーツを身に纏ったブルネットの女性の姿に、思わず頬が緩む。情熱的な真紅のルージュを引いた口元が微笑んでいるのを見て、彼は口を開いた。
　「お久し振り、というべきでしょうか、姉上」
　「あら、私はお前とは違って毎日ちゃんと家に帰ってるわよ？エドアルド」
　「そうでしたっけ？ではお会いしないのは、どうしてかな？」
　「……まあ、その辺はお互い、不問にしましょう」
　腕組みして、楽しげに彼女は笑っている。歩み寄って、エドアルドは気安い口調で彼女に尋ねた。
　「忙しいみたいだね、姉さん」
　「まぁね、ヒマじゃないわね」
　「会社の方はどう？少しは落ち着いた？」
　「そうねぇ……ぼちぼち、ってところかしら」
　砕けた弟の言葉に、姉と呼ばれた女性が同じく、親しげな言葉で返す。アデレード。エドアルドとは母親の違う、彼より五つ年上の、この家の長女だ。髪を短く切った髪と、大きく、どこか鋭さを感じさせる瞳はチョコレートブラウン、とでも言うべきか。母親似なのよ、と決まって言う彼女だが、その商才は間違いなく父親譲りだ。彼女がもしエドアルドと同じ母親から生まれていたなら、間違いなくモントリーヴォは後継者に彼女を選んでいた事だろう。父親から奪うよう

な形で得た小さな会社を、今では手に入れた当時の三倍ほどにまで成長させている。その実力は分家の人間も一目置いているらしい。それでも、彼女が妾腹であることを理由に、この本家から切り離そうと言う輩は多い。彼女が経て来た二度の結婚も、そのために分家から持ち込まれた、と言っても過言ではない。最も、どちらも半年ともたずに解消されているのだが。
「そんなスーツで、ばあやに何か言われないの？」
からかい口調で笑いながら、エドアルドがアデレードに尋ねる。笑い返して、
「家で夕食をとるのに、いちいちドレスなんて着ていられないわよ。それに、そんな、なんていうけれど、結構これ、いいものなのよ？」
「知ってますよ。エルヴィラの新作でしょう？本店の大得意様だって、評判だし。似合ってますよ」
「まぁね」
身に纏うお気に入りのスーツを褒められて、アデレードも悪い気はしないらしい。くすくすと笑うと、弟に先んじて食堂のドアへと歩みを進め始める。
「商談にはこのくらいが丁度いいわ。相手に見くびられもしないし」
「この辺りで姉さんを見くびるような相手なんて、まだいるんだ？」
言葉とともにエドアルドも歩き出す。わざとらしく嘆息して、
「そうなのよ、結構いるの。例えば、ボロージアの当主様とか。本当、バカにするのもいい加減にしろ、って言うのよ」
「……一応釘は刺しておくけど、今夜は叔母上とルゥのための夕食会だからね」
「解ってるわよ。でなきゃわざわざ仕事を切り上げてまで帰ってこないわ」
この気性の激しい姉と、幾つになっても我侭を通そうとする、子供じみた父親は、会う度何かと衝突する。とは言え、憎み合うほどでもないらしい。血族の妙、とでも言うのだろうか。それとも、姉にも父にも、別に思うところでもあるのか。その間に立つ女性が、亡くなったとは言え、この家の本妻ではなかったことも含めて。
エドアルドは何も言わずに苦笑して、扉を開ける姉に続いて食堂に入る。白く大きなその扉が両開きに開かれると、真正面、無駄なほどに大きなテーブルがあった。季節の花々で彩られた食卓には、主催者であるこの屋敷の主人と、主賓である叔母と従妹が既についている。アデレードを先に行かせて、無言でエドアルドは歩みを進める。数人の若い使用人と、父親の側にいる古参の執事の姿が見える。食事がすめば若い使用人達はすぐにも部屋を追い立てられるだろう。執事は父親の腹心だ。あの老女中と同じく、モントリーヴォが幼い頃からこの屋敷を出入りしているらしい。重々しい身内の話はそれからか。それとも、あの子も同じく外へ出されるかな。何気に思いながらエドアルドが席に着く。それよりも先に、室内にルクレチアの声が響いた。
「姉さま、お久し振り」
「ルゥ、大きく……ああでも、あんまり変わってないかしら。元気？」
「姉さま、ひどーい！」
テーブルを挟んで、賑やかにやり取りが始まる。はしゃぐ従妹とそれを揶揄う姉、という光景が、彼は嫌いではなかった。見ていると頬が緩む。彼と同じく、叔母もその様子を、穏やかな笑みで見詰めている。ごく自然で、当たり前で、それ故にここでは滅多と見られない光景だ。しばらくこんな夕食が続くのだろうか。悪くはないかも知れない。
「あらあら、おしゃれして。そのドレスはどうしたの？」
「え？これ、姉さまのお古じゃないの？」
「私は知らない……って言うか、そんなの、作った覚えはないわよ？」
ライムグリーンの、肩を見せる形のカクテルドレス姿で、ルクレチアは目を丸くさせる。長い髪も、昼間とは違って高く結い上げられていた。華奢な首筋が更に映える。こぼれる金色のほつれ毛が、燭台の明かりに音もなく煌く様子を、エドアルドは眺めていた。大きくなった、いや、大人になった。これから、この子はもっと変わっていくことだろう。もう子供ではないといって尖らせた唇も、いつかは艶然とした微笑をたたえるようになるに違いない。それとも、叔母と同じ様に、いつまでたっても、どこか少女のような印象を、ずっと持ち続けるだろうか。ほんのりと化粧を施した、それでも幼い顔に不思議そうな表情を浮かべて、ルクレチアは首を傾げている。
「今夜のドレスはルカとばあやが直したものだそうよ。物がいいから、新しく作るよりはそうした方がいい、ですって」
アデレードとルクレチアに、エリザベッタが教えるように言った。
「へーえ、ばあやとルカが。やるわね」
「元々は私のものだったのだけど、着るのは今夜で三人目、だったかしら」
「叔母様の？」
「じゃあ二人目は誰？母さま」
従姉妹同士の二人が、ドレスの元持ち主に問うように言葉を投げる。元持ち主は微笑んだまま、
「この家の娘、だとすれば、貴女のはずよ？アデレード」

くすくすとエリザベッタが笑う。アデレードはその言葉に驚き、戸惑いながら、
「え？そうだったかしら……ごめんなさい、全然覚えてない……」
「そうね、貴女がそれを着ているのを見たのは、私も一度だけだし。覚えていなくてもおかしくないわ。でも私も、それを着たのは何度もないのだけれど」
女達の他愛のない会話が続く。無言で、エドアルドはその様子を眺めていた。しばしの歓談の後、咳払いが響く。放置すれば終わりの見えない会話を、夕食会の主催が制したのだろう。女達の視線がそちらを向く。モントリーヴォはテーブルの上で指を組んだ。
「そろそろ始めてもいいかな？三人とも」
それぞれの表情で女達は沈黙する。一人、熟女は困ったように笑い、少女は恥ずかしそうに小さく肩をすくめる。もう一人、淑女と呼ぶには激しい気性の持ち主は少々不服そうな顔をするも、異論もないのか、やはり黙していた。主催者が傍らの執事に耳打ちすると、一礼して執事が動き始める。家族の食事に、この仰々しさは必要だろうか。その様子にエドアルドは短くはあるが重めの息を吐く。何が出てきても、もしかしたら味も解らないかもしれない。そんな不安が過ぎるが、しかしそれも杞憂に終わった。
食事が始まると、女達は先程と同じようにおしゃべりを始め、アルコールが回りだすと叔母は自分の兄をからかい半分にいたぶり始めた。アデレードは乗じて彼女の兄、自分の父親を攻撃し始め、やりこめられまいと彼は子供のように反論した。食卓は、それまでの堅苦しい雰囲気もなく、そしてそれまでにエドアルドが知っていたものとは全く違う展開を見せた。姉と叔母とが笑い合いながら、グラスを交わし、心地好い音を立ててグラスは何度も満たされる。従妹はそれを口に出来ないことを悔しがりはしたが、それでも楽しげに会話に混じり、主催者の前に出たデザートをねだってみせた。野に出て採る昼食のように、そこにあったのは、明るく楽しい、笑顔の絶えない空間だった。会話に参加せず、エドアルドは暫くその様子を静観していた。笑うつもりもないのに、頬は自然と緩み、気がつくと叔母や姉と共に父親に口撃していた。やり込められまいと当然相手は反論するものの、悔しげな表情の端にも、暗い影は見られない。
これは何だろう、やけに楽しい。どうしてこんな風に、自分達は心地好く、嬉しくなっているのか。これも、従妹と叔母のおかげだろうか。父はこうなる事を見越して、この夕食会を催したのか。
気がつけば、食事は総て終わっていた。食後の飲み物をサーブする使用人が姿を消し、残ったのは執事一人になる。誰もがその顔に満足げな表情を浮かべ、一人未成年の従妹も、ご機嫌で、クリームたっぷりのカプチーノを口に運んでいる。こんなに楽しい食事はいつぶりだろう。いや、もしかしたら初めてかもしれない。奇妙な、そして高揚すら覚える違和感に浸りながら、エドアルドは小さく笑った。悪くはない、いや、むしろいい気分だ。
同時に、心のどこかが冷ややかにそれを判断する。二度とこんな夜はないかもしれない。どんな境遇にいて、どれほどの暮らしをして、どれだけの財を所有していようとも、こんな風にいつも冷めている自分がいる限り。二度とないのなら、これは幻だ。夢と同じで、儚く、そして価値もない。確かに掴んでおけないものの価値は、量れないのではなくて、量らない。時と共に記憶が薄れゆくなら、それも同じく価値のないものだ。見ただけ虚しさを覚える夢。あまりに鮮やかで眩しい、幻だ。
「エド、どうかしたの？」
表情に影を覗かせたエドアルドに、エリザベッタが何気なく尋ねる。笑みを作って、エドアルドは答えた。
「いえ、何も。少し疲れているみたいです」
「そう？そう言えば、昼間はごめんなさいね。ルクレチアが我侭を言ったみたいで」
「いいえ。お構いなく」
自分を気遣う言葉に、同じ笑みのままでエドアルドは返した。くすくすと、未だ姉は笑っている。
「でも、何だか久し振りに楽しかったわ。ご飯も美味しかったし。こんな風なら毎日ちゃんと同じ時間に帰って来たいわね」
「姉さま、私たち、暫くこっちにいるのよ？」
アデレードの何気ない言葉に、ルクレチアが嬉しげに反応する。飛び出したその言葉にアデレードは一瞬驚くも、すぐにも楽しげな顔になり、
「あら、そうなの？あー……でも、毎晩ルゥの相手も、疲れるかなー……」
「姉さま、ひどい！」
「あはは、冗談よ、冗談」
膨れる従妹を姉が笑っていなす。価値のない幻だ、そう判断したはずの光景に、無意識にエドアルドの頬は再び緩んだ。笑い声が室内に響く。遮るように、モントリーヴォがその時、口を開いた。
「エリザベッタとルクレチアは、暫くこの屋敷にいることになった。そのうち、別邸に移るが」
言葉に、エドアルドは父親に向き直った。アデレードもルクレチアも、同じくモントリーヴォに向き直り、その顔に驚きを浮かべる。困った様に微笑んで、エリザベッタは無言だった。誰もが沈黙する中、屋敷の主たる男は言葉を続ける。
「ロミッツィ側も承諾した。離婚の成立も、時間の問題だ」

「叔母様……本当なの？」
驚愕の表情でアデレードが詰め寄るように尋ねる。エリザベッタは肩を軽くすくめて、
「ええ。ごめんなさい、アデレード。お話が遅くなってしまって」
その返答に、アデレードは沈黙する。静まり返る室内、長く重い嘆息をモントリーヴォが漏らす。
「もっと早くても良かった。あれからもう三年だぞ。私も、これで一安心だ」
「母さま……私達、もうモリエーロには、帰らないの？」
不安げに、ルクレチアが母親に尋ねる。尋ねられた母親は優しく微笑んで、
「ええ、そうなるわね。ごめんなさい、ルクレチア。貴女にはもっと早く話しても、良かったのだけど……」
「あちらがリザの離縁に応じたのが昨日の夜だ。話している時間もなかったんだ。ルゥ、リザを責めないでやってくれ」
再び、嘆息と共に重く、モントリーヴォの声が響く。困惑の瞳を彷徨わせ、ルクレチアは言葉を失う。誰もが黙り込む中、エドアルドは微かな苦笑を漏らした。そして、軽い口調で言った。
「いいんじゃありませんか、叔母上は、貴女の妹なのだし。離婚したなら実家に戻るのは、当然でしょう」
場に、奇妙な緊張が走る。誰もが驚きと、奇妙な戦慄さえ含んだ視線でエドアルドを見る。おやおや、と言いたげに眉を上げて、殊更軽く、エドアルドは言った。
「今までのロミッツィの方がおかしかったんですよ。ボカロジアとの繋がりを絶ちたくないが為に、叔母上を縛り付けすぎていた。叔母上だって、まだお若い上に、こんなにもお美しいんです。今度こそ、生涯を共にする伴侶を得ても、罰は当たらない。違いますか？」
その言葉の後、僅かの間を置いて、吐息に溶けるようにエリザベッタが微笑む。ほんの僅かに、困惑しているような笑みで、彼女はエドアルドに返した。
「そう言ってもらえると、気が楽になるわ。有り難う、エドアルド」
「僕は事実を言っているだけです。この家だって馬鹿みたいに大きくて、部屋数だけは無駄に多い。叔母上やルゥの一人や二人、転がり込んだってびくともしませんよ」
肩をすくめ、少々おどけてエドアルドが言う。エリザベッタは安堵したように息を吐き、それをきっかけにするように、その場の緊張がそっと緩んだ。
「エドの言う通りね。うちは大きなのだけがとりえみたいなものだし、ルゥが走り回ったって壊れるほどボロでもないものね」
続けてアデレードがおどけた声で言うと、ルクレチアはそれにすぐにも頬を膨らませ、
「姉さま！」
「やーねえ、ルクレチア。例えばの話よ。そんなにすぐ怒らないの」
声を上げたルクレチアの様子に、アデレードが声を上げて笑う。最後に、安堵の息を吐いたのはモントリーヴォだった。表情は緩むも、言葉はない。笑顔のアデレードは、構わず言葉を続けた。
「二人とも、ここが本当の自分のうちだと思ってくつろいだらいいわ。私は今少し忙しくて、なかなか戻ってこられないけど……今日の夕食は本当に楽しかったもの。こんなに楽しいの、本当に久し振りだし」
「それは私達も同じよ、アデレード。本当に有り難う。心から感謝するわ」
「やぁねぇ、叔母さま。そんな堅苦しいこと、言わないでよ。家族みんなで食事して楽しい、なんて、普通の事よ？」
エリザベッタの言葉に、照れ隠しでもするようにアデレードが返す。確かにそれは、ごく普通の事なのだろう。それでも、ここでは滅多と見られない光景だ。いや、そんなものがここに存在していた事など、未だかつてあっただろうか。表面だけの笑顔のまま、エドアルドは言葉もなく、そんな思いをめぐらせていた。
物心ついた頃には、食卓にはいつも、自分と母親以外、家族の姿はなかった。姉はその頃、まだこの家にはいなかったし、父親は不在がちな上、母親が彼の同席を嫌っていた。理由は解らない。姉であるアデレードがこの家で暮らし始めたのは、彼女の母親が亡くなってからだ。
隣町に、何代か前の当主が作らせた、小さな別邸で、姉はその母親と十五歳まで暮らしていた。彼女がこの屋敷に引き取られた頃、エドアルドの母親はここを出ていた。以来、モントリーヴォが在宅の時、エドアルドの母親がここに足を踏み入れる事は殆どなかった。
それでも、その場所に全く団欒がなかった訳ではない。時折叔母と従妹がこの家を訪ねたその時には、必ず父親と姉、そして生前には祖父が、同じ食卓を囲み、こうして食事をした。それはまるで、ボロージアの人間が、その血縁ではないものと相容れない、そんな事を暗示しているような光景だった。ルゥと叔母と、初めて食事をしたのは、いつの事だっただろう。不意に、エドアルドはそんなことを思いつく。記憶を辿っても、その先端は見えては来ない。しかしその場所に、自分の母親が同席していた事は一度もない。夫の妹と同席しない妻というのは、果たして尋常な女なのだろうか。それとも、やはりこの家の人間が、どこか歪んでいるのか。
「エドアルド、どうしたの？さっきから黙ったままで」
アデレードが声を投げる。気付いて、エドアルドは我に返った。打たれたように目を上げると、女達の不思議そうな

視線とぶつかる。
「いや……寝不足かな……朝はばあやにたたき起こされたし……」
誤魔化すように言って、エドアルドは笑った。心配そうにその顔を覗いて、エリザベッタは彼に尋ねる。
「やっぱり、昼間ルゥが我侭を言ったから、疲れているのね」
「いえ、そんなことは……」
「今夜は早く休んだほうがいいわ。これから抜け出して、バールになんか行っては駄目よ、エド」
心配そうに響きながらも、言葉には皮肉が混じる。思わずエドアルドが目を丸くさせると、エリザベッタは少女のように楽しげに笑い、
「ばあやが困っていたわよ。毎晩のように外で飲んで戻ってくる、って。体を壊さないとも限らないわ、もう少し、自重なさいね」
「……敵わないな、ばあやと叔母上には」
してやられた格好になって、エドアルドは苦笑する。ほんの僅かに離れた場所で、不安げな目でそれを見つめていたルクレチアの表情も、その言葉にそっと緩んだ。

モリエーロのロミッツィと言えば、ボロージアと同じく、某国の王族を端に発する、旧貴族の家系だ。グラローニでボロージアが、まるでその土地を支配しているかように、ロミッツィもまた、半ばモリエーロの支配者のような存在だ。膨大な資産と土地、そして政府関係者との強いつながりを持ち、中央政府に揺さぶりをかけることさえ容易にやってのける。ボロージアとロミッツィの違いは、そのパイプの有無だった。一地方の資産家、というには、ボロージアは余りにも大きな資産を所有しているが、かと言って当主には、中央へ進出しようという気はさらさらないらしい。分家の中には様々な手段を投じて、政治家であるとか、中央の財閥や銀行と繋がりを持とうという輩もいるが、その志は半ば折れることが多い。ボロージアの名は、中央でもそれなりの価値を持つのか、最初は分家ではあってもそれ相応の処遇をされる。だが、所詮分家は分家である。飽きられればあっさりと手を切られ、逆に吸い取られて捨てられるような憂き目にも会う。これでは自分の家はおしまいだ、と、当主に泣きつく人間も少なくない。とは言え本家の当主はそれほど甘くはない。名を没収するほどの事は今ではできないようだが、それ相応の対処はしているらしい。つまり、手を差し伸べるような事は全くしない。それは当代も先代も、全く同じ考えらしい。滅びるなら滅びればいい、没落するならすればいい。自分達は家を繋ぐ為に生まれた訳ではない。土地を守るために生きている訳でもない。エドアルドの父親も祖父も、その点に関しては何故か共通の認識を持っていた。だと言うのに、この家を捨てようとも、外へ出て自由に生きようともしない。傍から見れば、彼らはボロージアを堅く守っているようにさえ見える。不思議といえば不思議だった。執着などしないと口にしながら、彼らは家を捨てる事はできずにいる。結局はその財や力に、しがみ付いて生きるしかないと、知っているからなのだろうか。確かに、家という柵よりも、そちらの方が遥かに魅力がある。この土地にいる限り、その財がある限り、ボロージアの人間に、できない事はない。金に飽かせて派手に生きる事も、その金を回して更なる財を得ることも。例えそれにしくじったとしても、彼らの資産はその穴を埋めて余りあるほどだ。後方を憂うことすら、夢幻の如く、だ。

自分には商才もなければ、政治にも向かない、と、エドアルドは父親と話したことがあった。この家を継ぐなら姉、アデレードの方がずっと相応しい、とも。確かに、商家としてのボロージアを、このまま永く繋いでいくのなら、彼女の方がその主には相応しいだろう。妾腹ということで、分家の連中は喧しく言うだろうが、今のボロージアの財産を維持できるとすれば、彼女以外にはいまい。しかし、血統や家柄のボロージアの後継者となれば、エドアルド以外には存在しない。

分家というのは、祖父以前の当主達が、愛人に生ませた男子から派生したものだ。その中でも商人としての才を持ち、グラローニで豪商と呼ばれるほどまで大きくなった家の子孫だけが、一応の分家としてボロージアを名乗っている。当然、時流に流されて消えていく分家も多い。本家に直接連なる人間は、実のところ余り多くはなく、その本家の人間の方が、ボロージアに対する執着も薄い。分家の人間は、それでも本家を守ろうとする。それはその名の持つ影響力の為だ。この地方だけではなく、この国のどこでも、その名は威力を発揮する。その名に縋って生きていく限り、本家はなくてはならない一族の要なのだ。

「……おかしな話だ」

昼下がり。庭木が大きな影を落とす、窓際のソファに横たわり、エドアルドは呟く。庭先ではエレナがまたルクレチアを叱っていた。屋敷に叔母と従妹がやってきて、そろそろ二週間になる。従妹は先日、当主にねだって小さな子猫を手に入れた。どこかで購ったものではなく、散歩に出た先で拾ってきたらしい。それも、四匹。老女中はそれを許した当主にお冠だった。飼うなとは言わないが、余りにも彼がルクレチアに甘い、と言って。結局、紆余曲折を経て、子猫は一匹だけが屋敷に残される事になった。後の三匹は使用人達が手分けして、あちこちに引き取られたらしい。確か一匹は、老女中の孫が引き取ったとか。

ばあやの怒鳴り声が庭から聞こえる。また子猫が何かしたようだ。毎日毎日、年が多いというのにばあやは元気だ。こちらは暑さにやられて、参りかけているというのに。

「お嬢様、その子はお嬢様の猫なんですよ。ちゃんとしつけてくださいまし。でないとばあやは毎日毎日、こうやって怒っていなきゃなりません。寿命が縮んでしまいますよ！」

「きゃーっ、ごめんなさーいっ」

謝りながらもルクレチアは笑っている。体を起こして、エドアルドは庭を覗いた。

あれから毎日のように、家にいる限り、食事は彼女達親子と一緒だった。と言っても仰々しい会食はあの夜一度限りで、毎回エドアルドは、叔母と従妹が使っている部屋に呼ばれる形を取っていた。

部屋、と一口に言っても様々な形がある。扉を開ければそこには、一家族が裕に暮らせるだけの広さがあった。学友が暮らす家族仕様のアパルトメントを尋ねた事があったが、それが今現在、叔母と従妹が使う部屋より狭かった。友人の父親は出迎えるなり、狭いところだが、とお決まりの文句を口にしたが、確かに狭いと内心思ったほどだ。いや、やはりこの家が大きすぎるのか。もし商売が立ち行かなくなったら、貸間でもやったらどうか。それとも、ホテルなんかどうだろう。何気にエドアルドはそんなことを思った事もあった。とは言え、この家が立ち行かなくなれば、モリエーロ一帯が既に立ち行かなくなっているだろう。貸間やホテルをやっている余裕などないに違いない。それ以前に、ボカロジアの商

[illegible]売が総て立ち行かなくなる事の方が、遥かに在り得ないことなのだが。
　家を守るということは、どういうことなのだろう。資産や土地や権力を維持し続ける事に、それほどの意味などありはしないのに。それとも、それが人の欲望ゆえなのだろうか。己の望む総てを叶える為の道具は、足りないとは感じても、有り余ることはないのだろうか。
　父親は、商売に向いていて、それが嫌いでもないらしい。しかし、祖父と仲良くやっていた、という印象が彼にはなかった。自分と父親以上に、祖父と彼とはどこか距離を置いていた。息子の二つ目の名につけた「チェーザレ」は、モントリーヴォの父親のものだ。名付けた理由が、その名を持つ人間より優位に立ちたかった為だと、容易く想像できる。
　同時に彼は、この家を捨てる事も出来た筈だ。実際、そうしてもいいと公言して憚らないし、彼なら一握りの金貨からでも、身を立てていく事ができるだろう。だというのに、どこか躍起になって、この家を維持しようとしている。家庭を守る、などという使命感も、彼には殆どないはずだ。使用人の雇用のことさえ、どうとでもなれと思っている節もある。その辺りは執事を筆頭に、古くからの使用人達が、ある程度制御もしているようだが、比較的若い使用人の顔が、しばしば入れ替わる事も多い。最も、彼が気を回す程の事ではないのかも知れないが。
「兄さま、助けてー」
　きゃー、と叫びながら、ルクレチアが窓に駆けてくる。体も起こさず、エドアルドは窓の外に問いかけた。
「何をしたんだい？今日は」
　叔母と従妹が来てから、屋敷の中はがらりと様子が変わった。それは確かだ。留守がちだった姉とも、しばしば叔母の部屋で同席するようになった。とは言え彼女は現実に、相当忙しいらしい。顔を出してすぐ退席、ということも珍しくなかった。それ以上に変化を見せたのは、当主モントリーヴォだ。それまで殆ど外でしていた仕事を屋敷に持ち込み、勿論それでも彼が屋敷にいる時間は少ないが、エドアルドと顔を合わせる機会も、当然の様に増えていた。どうやら父は自分の妹の娘、ルクレチアを相当気に入っているらしい。まるで自分の娘の様に、時には膝に上げようとまでする。流石にルクレチアもそこまで子供ではないので、嬌声を上げてそれを拒むのだが。
　悪い変化ではない。けれど、こんな時間が続くのも、長くはないだろう。心地好い午睡の様に、それは一瞬のものだ。余りにも儚い。それ故に、失い難いと感じる。それだけだ。
「ジュリオが壁を引掻いたの。私じゃないわ」
「ジュリオ……その猫の名前かい？」
　窓からルクレチアが顔を覗かせる。僅かに体を起こして、少女の腕の中の子猫を見遣ると、子猫は不機嫌そうな鳴き声を上げた。
「そうよ、ジュリオ。男の子なの」
　何がそんなに楽しくて、嬉しいのだろう。ぼんやり思いながら、エドアルドはそれでも笑った。この子に自分の、本当の胸の内を知られたら、どうなるのだろう。まだ幼い、あどけなささえ残る少女は、驚いて、きっと落胆するに違いない。それを避けたいとまでは思わないが、幸福そうなこの子に水を差すのも、何故か憚られる。いずれは知れてしまう。それでも、今がその時でなくてもいい。薄い笑顔で、エドアルドは言葉を紡いだ。
「大層な名前を貰ったな、そいつは」
「大層？どうして？」
　ルクレチアが小さく首をかしげる。子猫は、どうも抱かれているのが嫌いらしい。先程からしきりに声を上げていた。体をしっかりと起こし、窓に寄りかかるようにしてエドアルドは言った。
「ガイオ（ガイウス）．ジュリオ（ユリウス）．チェーザレ（カエサル）、のジュリオ、だろう？」
「そうよ。兄さまやおじいさまと同じなの」
　問いかけに、ルクレチアが笑って返す。その返答にエドアルドは驚きの顔を見せた。それを見て、ルクレチアは再び首を傾げる。
「なあに、兄さま。何かおかしい？」
「いや……意外に物知りなんだなあ、と思って」
　言葉の最後に笑い声が混じる。揶揄われたと感じたルクレチアはすぐにも膨れて、
「意外って何よ。これでも私、歴史は得意なのよ？」
「へぇ、そうなんだ。それも意外だな」
「兄さま！」
　憤慨するルクレチアの声が耳に届く。あはは、と声を立てて笑うも、その声音はどこかうつろだった。すぐさま、溜め息が漏れる。ふくれっ面のルクレチアの表情も、それと同時に変わった。目つきが翳る。見ないまま、エドアルドはソファに身を沈めた。子猫はまだにゃーにゃーと鳴いている。ルクレチアはそれを離して、窓の中のエドアルドにそっと声をかけた。
「兄さま」
「……何だい？ルゥ」
「元気がないわ……どうかした？」

「いや……別に、どうもしないよ」
返答は素っ気無い。思ったが、エドアルドはそのままにした。もう取り繕えないのかもしれない。ならばそれでもいい。隠していたつもりはない、それでも、今までの自分はどことなく偽りを演じていた。苦痛ではなかったが、後ろめたさがなかったわけでもない。沈黙が降りる。静けさは、真夏の午後だというのに、辺りを冷たく支配した。温いはずの空気が、ぎこちなく、固い。ルクレチアは何を思っているだろう。思って、エドアルドは顔を上げた。窓の外では不安気に、何かに怯えるような目でルクレチアが佇んでいる。見付けると、やけに心が騒いだ。やはりまだ、早いのか。己の真実の姿に、この子は耐えられないか。直感して、彼は苦笑した。ならばもう少し、この幼い少女のために、偽りの仮面を被っていよう。この子を無理やり、大人にする事もない。
「大丈夫だよ、少し暑さにやられてるだけだ。君は、いつも元気でいいね」
「そう？……私が側にいて、うるさくない？」
「……どうして」
ルクレチアの唇から紡がれた言葉に、エドアルドは驚きを露わにした。子供だとばかり思っていたその口から、そんな言葉が出るとは。ルクレチアは言葉を続けた。
「だって兄さま……時々、とても疲れた顔をしてるわ。私達が来たから、その……」
上手く単語を選べないのか、ルクレチアの声が濁る。申し訳ない、というよりも、自分の哀しさがより強く表された顔に、エドアルドはまた苦笑した。この子はまだ子供で、だからきっと寂しいのだ。いや、今までも、ずっとそんな思いで過ごして来たのだろう。家の政略によって結婚させられた両親の元で、金銭的には不自由なくあっただろうが、最も欲するところの愛情には、満たされなかったに違いない。母親の二度目の結婚のために、父親の家も離れ、三年前にはその夫も死別して、頼れる人間もろくにいない土地で、母子二人きりで、半ば閉じ込められるような生活を送っていたのだ。慮って余りある。
それが、この家に来て、我侭を叱られながらも、血を同じくする人間と一緒に過ごしている。そのうちの一人から唐突に突き放されれば、驚きもしようし、哀しくもなるというものだ。この子は、普通の女の子だ。姉のように強くもなければ、自分のように、何も求めずに生きていくことも、出来ない。思い至って、エドアルドは嘆息した。何のために出た吐息だろう。この子を哀れんでいるのか、疎んでいるのか。思いながらも、エドアルドはルクレチアに笑いかける。
「君や叔母上のせいじゃないよ。確かに、今までとは色々なことが変わったけど……」
「……やさしい事、言わなくても平気よ、兄さま」
「そんなんじゃないよ」
ルクレチアが俯く。少し見ない間に、この子は本当に大人になった。なりつつある。体の大きさだけではない。内面も、知らない間にきっと、大人の女になっていくのだろう。愁いを見せる横顔は、少女というには余りにも翳っている。綺麗になるんだな。ぼんやりと心のどこかで、エドアルドはどこか他人事のように、暢気に思った。
「いいの……兄さまは優しいから、そうやって言ってくれるのでしょ？伯父さまも、アデレード姉さまも」
「そう言われると、心外だな」
言葉に棘が含まれる。どうしたことか。聞こえた自分の声に、エドアルドは疑問を覚える。同時に、ルクレチアが再び顔を上げた。意外ではあるが、それでも、彼の口からは、刺々しい声音で、言葉は紡がれた。
「俺や姉さんが、君達を疎んでいると思われているなんて」
「兄さま……違っ……」
「叔母上は父さんの妹だし、君は俺達にとっては、たった一人の従姉妹だ。歓迎こそすれ、嫌がる理由がどこにあるんだ？」
「兄さま、違うの！そうじゃなくて……」
「それとも本当は、君がここにいたくないのかい？ルゥ」
泣き出しそうな反論も、そこで止まる。ルクレチアは俯いて、その目を強く閉じた。しまった、泣かせたか。胸に動揺が走る。どうしたものかと、エドアルドは思いをめぐらせた。ばあやは近くにはいないらしい。もう人声は聞こえてこない。見られていたら彼女の事だ、何をしたのかと自分に詰め寄るに違いない。叱られるのは慣れている。痛くもかゆくもないと言えば嘘だが、それで片付けば造作もないことだ。だが。思い、エドアルドは一人、苦い顔になった。謝ることは簡単だ、声を荒げそうになったのは自分なのだし、それに彼女が怯えても、致し方ないことだ。しかし。
「ルゥ、入っておいで」
言葉の後、彼は息をついた。ルクレチアが顔を上げる。ソファに身を沈めて、重ねてエドアルドは言った。
「そこじゃ話が出来ないよ。おいで」
「……でも……」
「怒っていないから、おいで」
躊躇う声に、怒っていないと言いながらも、彼の言葉は強い。うん、と小さく言って、ルクレチアが歩き出す。数十秒はかかるだろう彼女の到来を待ちながら、エドアルドは溜め息をつく。
確かに彼女達がここへ来て、変化はあった。悪くはないと思っている。そしてそれが、永遠に続くものではない、とも

。ならばもっと冷ややかに、事の総てを受け流せるはずだ。自分は、一体何に感情的になっている？あの子の言葉に、どうしてこんなにも苛立つのだ？彼女ももう子供ではない。いや、きっと同じ世代の少女に比べれば、今までの境遇が過酷すぎた分、大人なのかもしれない。気遣われる事に気付いて、それに気を使ったところで、何も不思議でもないだろう。それを痛々しいと思いこそすれ、どうして苛立ちなど、覚えるのか。思うと、エドアルドは自分の中の奇妙な感覚に、眉をしかめた。そういうことなのか。この目が見ている彼女は、家の食客でもなければ、子供でも少女でも、従妹というものでもないのか。そして重く嘆息する。解っていたことだ。彼女が、母親についてこの家に来たのは、三年ぶりだ。その間にも何度も叔母はこの家に訪れていた。長い時には三ヶ月も滞在している。

なのにあの子は、ここに来なかった。学校の都合もあるだろうが、一度たりとも、だ。それでなおさら思い知った。そして解っているはずだ。その理由も、焦燥の訳も。そして、もっと理解している事がある。どうなろうと、どうしようと、彼女を得ることは叶わない。もし叶ったとしても、そこに永遠はない。それは、他の事柄の総てがそうであるのと、同じ様に。ならば夢など、見ないに越した事はない。いつかなくなる幻に焦がれれば、狂って死ぬのが落ちだ。

「兄さま」

足音は聞こえなかった。声がして、エドアルドは顔を上げた。肩を小さく縮めて、扉の前にルクレチアが立っている。今自分は、どんな顔をしているだろう。笑ってはいないが、きっと優しい顔もしていないに違いない。思いながら、それでも構わないと思い切り、エドアルドは言った。

「こっちにおいで、ルクレチア」

「……でも……」

「怒っていないから、もっと近くに来なさい」

困惑の目でルクレチアがこちらを見ている。笑っていないどころの話でもないようだ。それでも、エドアルドの表情は変わらなかった。返答はない。彼は言葉を重ねた。

「もっと近くに。聞こえないのか？」

促される、というよりは、強要される形で、ルクレチアが歩き出す。ソファで、彼はその距離が縮むのを待った。その一歩手前で、ルクレチアが止まる。体を起こして、エドアルドは今にも泣き出しそうなその顔を、睨むように見た。

「兄さま……あの……」

「二度と言わないから、ちゃんと聞くんだよ」

何を言いたいのだ、と、エドアルドは思った。自分はこの子に、何を言って聞かせたいのか、解らせたいのか。言葉など選べるのだろうか。しかし、思惑とは裏腹に、滑らかに、それは彼の唇から紡がれる。

「俺は、君を嫌いだなんて思ったことは、一度もない。確かに、疲れている時や眠い時に、近くで騒がれれば腹も立つ。そういう時にはそう見えるかもしれない。でも、君や叔母上を歓迎しているのは嘘じゃない。逆に、疎んでいるなんて思われたら、その方が哀しい」

「……ほ、本当？」

少女の声が震えている。随分と怯えさせたらしい。それでも、彼は笑えなかった。

何を言っているのかと、自分でさえ耳を疑う言葉だ。嘘ではない。しかし、何かがずれている。ああ、そうか。これはこの子が、自分に望んでいる言葉だ。思った瞬間、エドアルドの心の中の、何かが解けた。無意識に、その表情も緩む。そんなにも自分は、彼女を愛しく思っているのか。こんなにも、傷付けまいとしているのか。そう胸の中で呟くと、体のどこかで大きな流れがうねるような、そんな感覚が起こった。一瞬でそれは消えるものの、大きく痕を残すように、全身に奇妙な強張りが残る。永遠などないと言うのに、この体はそれを欲するのか。解りきった理だというのに、自分はそれに逆らおうというのか。面白い。思った瞬間、口許に笑みが昇った。ルクレチアは何かに戸惑うように、そんな彼を見詰めている。そのまま、エドアルドは彼女に手を差し伸べた。

「ここにおいで」

「え？」

「仲直りしよう、ルゥ」

ルクレチアは戸惑っている。構わず、伸ばした手でエドアルドは彼女の腕をつかみ、引き寄せた。小さく、悲鳴が上がる。抱き寄せて、エドアルドは笑った。

「に、兄さま？」

「昔は、良く一緒に昼寝しただろ？」

「え、あ、お、お昼寝？」

腕の中の少女は赤面して戸惑っている。その愛らしい様子にエドアルドは惚けた様子で、

「ルゥは、兄さまと昼寝するのは嫌か？」

「あっ、あっ、あのっ……」

「いつだったか、君は「兄さまと一緒に寝る、一緒じゃなきゃ眠らない」って大騒ぎした事もあったのに。寂しいな」

口調が、揶揄う時のものに変わる。ルクレチアは真っ赤になったまま、それでも憤慨して、

「し、失礼ね！ルゥはもう、そんな子供じゃありません！」

「そうかなぁ……まだまだ大人でもないと思うけど」
「兄さま！」
激昂したルクレチアの様子に、エドアルドは笑う。こうしてじゃれ合えるのも、きっともう暫くの間だけだ。揶揄っている時、この子はとても可愛い。確かにこれは一瞬で消える。けれど、その一瞬を愛おしいと思うことは、罪だろうか。仮にでも満たされることは、許されない事だろうか。確かに、失う痛みは、この一瞬よりも遥かに長く続く。それでも一時、こんな風にともにいられることを喜ぶことは、愚かだろうか。笑いながらも、エドアルドはどこかでそんなことを思った。胸の痛みを伴うこの感情が、ただそれだけのものでないことに自分は気付いている。この子にそれを知られたら、どうなるのかと考えれば、痛みは張り裂けんばかりになる。けれどその焦燥を隠して、こうしてわずかの間でも、近くに彼女を置いておきたい。永遠が叶わないなら、尚更。
「兄さま？」
僅かに黙り込んだエドアルドに気付いて、ルクレチアがその瞳を覗く。我に返って、もう一度エドアルドは笑った。
「俺は寝るよ。ルゥはどうする？」
「え？え、え、えっと……」
「ああでも、偉大なるジュリオ・チェーザレが、また何か悪戯するかもしれないな。探してくるかい？」
子猫の名前が出て、ルクレチアははっと息を飲む。そして、慌てた様子でエドアルドの腕を解いた。
「そ、そうね。知らないところでばあやに捕まってたら、大変だもの」
その後に言葉も無く、ぱたぱたと足音を立ててルクレチアは彼のそばを離れた。部屋を出るまで見送って、エドアルドは一人、息をつく。
「……好きだよ、ルクレチア」
それまで封じ込めていた言葉を、口にする。七つ年下の彼女に、その想いを抱き始めたのはいつだったか。思いをめぐらせて、エドアルドはまた呟く。
「君を愛してるよ……ルクレチア」
聞かれていないことは解っている。知られれば、何よりもきっと、彼女が怯えて、傷つく。いや、もう知られているかもしれない。三年前のあの日に、もしかしたらとっくに自分は、それを口にしていたかもしれない。覚えていないのは、罪の意識なのか、それとも、天の高みから何もかもを冷ややかに見下ろすような、内なるもう一人の自分からの、警告か。
溜め息は自ずと漏れた。聞くものはいない。夏の暑さに反したその冷たさと重さに、エドアルドは眉をしかめた。

その夜エドアルドは、叔母の誘いを断った。友人と約束がある、と偽って、町へ出、いつものバールに足を運ぶ。連れなどいはしないが、カウンターには馴染みの顔ばかりが並んでいた。銭があるなら奥に席でも取れ、と、いつか揶揄われたが、彼にしてみればどちらにしてもはした金だ。奥でも表でも関係はない。古びたビニル張りの椅子に腰掛けてカウンターの奥に声を投げる。アルコールが出るより先に、背中に纏わりつく気配があった。
「エドアルド、久し振りー」
女の、嬌声にも似た声が聞こえた。酔っ払っているらしい。振り返らずとも誰がそこにいるのか解った。いつも夜明け前には帰るが、彼女の部屋でベッドを共にした事も何度もある。娼婦ではないが、体の関係以外はなかった。父親がいつか言っていた。金以外で女と関わるな、身を滅ぼしかねない、と。
最初の夜、その女は支払いを拒んだ。理由は二つ、まず自分がそれを生業にしていないこと、もう一つは、哀れに思っただけだから、と。相手はボロージアの当主の一人息子だ。上手くやれば一夜の伽で一生楽に暮らせるかもしれない。それなのに、その女はそういったことに興味がないらしい。ただ可哀相だから、と。だから払わないでいるが、いつか請求されたとしても、彼はそれで構わないと思っていた。心はここにはない。他の誰かを思ってしているわけでもない。それは身を滅ぼす。父親は、意味を解って言ったのかと、時折疑問に思うが、それは的を得ている言葉だ。癪に触るが従うのが賢明だった。
「ここんとこご無沙汰だったじゃない。何してたのよ？」
「別に」
「とか何とか言って。解った、本命の彼女が出来たんだ？そうなったらあたしはお払い箱？やーねぇ、寂しくなるわぁ」
「思ってもないだろ、そんなこと」
エドアルドの返答は素っ気無い。その女以外にも彼に近付こうという女は多い。ボロージアの直系の名を持っているのだ、当然といえばそうだった。が、どうやらそれだけでもないらしい。女達には、彼の冷たいその態度が、どうやら好ましく思えるらしい。加えて神秘的とも言えそうな、暗い色の髪と瞳を持っている。睨まれただけでも、艶めいた吐息を漏らす女もいる。同じ年頃の男達が競う様に誰かを口説いている傍ら、彼にはそんな気配がまるでなかった。競うほどでも飢えるほどでもない、というのがエドアルドにしてみれは実情だ。僅かにそぶりを見せれば、誰もが尻尾を振ってついてくる。誘うという程の手管もいらない。それでも、なるべく他の女に手出しはしない。無用のトラブルを避け

るため、というのもある。分家の目も、素行の悪さに関しては特に鋭い。喧しく言われるのも鬱陶しかった。それも一笑に伏して終わる事ではあるのだが。
「なーんてね、噂は聞いてるわよ」
女はくすくす笑ってエドアルドの隣に座った。ちらりと視線を上げる。栗色の巻き毛を長く伸ばした、豊かな胸を持つ、彼よりも年上のその女は、短いスカートからすらりと伸びた足を高く組んで、ニヤニヤと笑ってみせながら、言葉を続けた。
「何だか大仰なお客が、あんたんとこに来てるって。もしかして父親の再婚相手？」
「叔母だよ。親父の妹だ」
短く、エドアルドは返した。女はその大きな目を更に見開いて、
「叔母さん？」
「モリエーロのロミッツィから、戻ってきたんだ」
「へー……そうなんだ……出戻り？」
臆する事無く女が尋ねる。あまりしゃべらない方が賢明か。思いながらもエドアルドは返した。
「三年前に死別してる。引き止められてたらしい」
「へー……それってあんたの父親が、ボロージアの頭領だから？」
「多分な」
へー、へー、と女は感嘆の声を繰り返す。そして、
「やっぱ金持ちとか貴族って、面倒だわ。ダンナが死んでも次の相手もマトモに探せない、なんて」
「そうだよ。ジルくらいが気楽でいいんだろうな」
名を呼ばれて、同時にあてつけられて、女は一瞬目を丸くさせた。が、怒る訳でもなく、あはは、と軽く笑う。
「そーねぇ、あたしくらいなのが一番気楽よね。三回も離婚して、親とも喧嘩して縁切って、今じゃ一人でふらふらしてる。それでもってボカロジアの坊ちゃまのセフレだもん。お気楽よね」
言葉に他意は全く感じられない。エドアルドは暫し彼女を眺め、それから、普段通りの素っ気無さで言った。
「ジルは最初から、俺に金をせびる気、なかったのか？」
「ないない。いつも言ってるでしょ。あたしはあんたが可哀相だから寝てるんだ、って」
女はそう言ってからからと笑う。その言葉が気に入らず、エドアルドは少しだけむきになって聞き返した。
「可哀相ってことは、愛してるってことだって、どこかの国の文豪が言ってるぜ？」
「何それ。ありえない」
手をパタパタ振りながら、ジルは軽快に答える。この女は、はっきりしていて後腐れがない。最初の夜には金を取らないことに驚き、多少困惑もしたが、本気でそんなつもりはないらしい。こういうのを割り切った関係、とでも言うのか。
「あんただけじゃない。他の男とだって、そんなの抱えて寝たりしないよ。どんなに愛したって、男は裏切る。寝たら尚更ね。だから金も取らないし、追い縋らない」
「そういうもんか？」
「あたしはそうよ。これがあたしの真理。でも、あたしも可哀相なのよ。一人で眠れないくらい、寂しい夜があるんだから」
女の言い分は矛盾している。どんなに愛してもいつか裏切られる、体を許せば尚更、それが辛くなる。だから誰も愛さない。だというのに、愛されたいとどこかで願っている。
けれど人間とは、所詮はそんなものか。失う事に怯えて、得ることも躊躇う。だというのにいつも渇望している。この女も自分も、きっと同じ類の人間なのだろう。その矛盾からは逃れられない。
だから彼女は金を取らない。可哀相なのは自分も同じ、だからだ。
「一緒にいとこが来てるんだ。姉貴も、お気に入りらしい」
「へー、じゃ、あんたは忙しい父親と姉貴の代わりに、お相手役ってとこ？」
「そうだな」
何気なく、エドアルドの口から言葉が漏れる。ジルは合点がいったとでも言いたげな顔で、また感嘆の声を漏らす。そして、
「あんたのいとこかぁ……年はいくつよ？」
「十七。言っとくけど、女だぞ」
「十七！……って、言っとくけど、って何よ？……え？十七歳の女の子!?」
その年齢に驚いた後、更にまた驚いた声をジルが上げる。へー、へー、へー、と、更に感嘆の声は続いた。その後、女の顔がにやりと歪む。何がおかしいのか。何かおかしなことを言っただろうか。思って、エドアルドは言った。
「何だよ」
「じゃ、あんたは「お兄さま」なわけだ？」

「……何だよ、だから」
「十七歳の従妹かぁ……へー……その従妹ちゃんは、お兄さまがこんなところでこんなのとつるんでる、なんて、知ってるの？」
言いたい事が全く解らない。エドアルドが何も答えないでいると、ジルは声を立てて笑い出し、ばしばしとエドアルドの背中を叩いた。
「ちょっ……何だよ、いきなり！」
「何だよ、じゃないわよ！あーもー、考えただけで笑えるったら。その子にバレたら大騒ぎね。「お兄さま、こんなところでそんな女と何をなさってるの、不潔よ！」とか言って」
言いながらジルは、カウンターテーブルをばんばん殴ってげらげら笑った。振動でテーブルの上のアルコールに波が立つ。こぼれそうだと思いながら、エドアルドはグラスを手に取り、無言でそれに口を付けた。ひとしきり笑って、ジルはいったんそれを収める。が、相当おかしいらしい。こらえきれずにまた笑い始める。何だ、この反応は。思いながらエドアルドは傍らの女を睨む。睨まれた女はにやついた笑みを顔に貼り付けたまま、やけに楽しそうに言った。
「珍しい」
「何が」
「あんたが家族のこと話すなんて。しかも自分から」
ジルはまた声を立てて笑う。果たして、それは自分から言った事だったか。聞かれた質問に答えたら、自然とそうなっただけのような気がするが。エドアルドは答えず、そんなことを思った。カウンターに頬杖をついて、ジルはふふふ、と笑うと、少々わざとらしく言った。
「寂しくなるわぁ、これから」
「……何が」
「何が、じゃないでしょ。あんたはきっと、ここに来なくなる。それってちょっと寂しいじゃない？」
「……そんなこと、思ってないだろ」
返答が、遅れる。それは女の「寂しい」という言葉に反応して、ではなかった。女にもそれは解っているのだろう。ふふふ、とまた、楽し気に笑う。
「図星なんじゃない。あんたはここに……全く来ないってこともないだろうけど、確実に回数は減る。あたしと寝る事もなくなる」
他の女なら躊躇いそうな科白を、ジルは簡単に言ってのける。エドアルドはその態度に僅かに怯む。それさえも楽しいらしい。彼女はご機嫌だった。何がそんなに楽しいのだろう。単に酔っているだけの話か？それとも。
「……ジル」
「何」
「……誘ってる、のか？」
尋ねると言うより、確かめるような声だった。ジルはその問いかけも笑い飛ばし、
「何それ。さっきあんたが言ったんでしょ？寂しいなんて、思ってないくせに、って」
「……そうだけど」
「別に死に別れるわけじゃなし、ここを覗いてりゃ、たまにはあんたの顔も見るだろうし。遊んでくれない分には、ちょっとはそうかもしれないけど、それだってそれだけの事よ。寂しくなんかないわ。それとも……あんたがやりきれないなら、付き合ってやっても、いいけど？」
何について、どう、とは聞かない。エドアルドは笑うジルを見ていた。肩を軽くすくめて、女は彼の目を、悪戯っぽく覗き込む。
自分はこの女に何を求めて、抱いたのか。ただ欲求を満たすためだけなら、もっと簡単な相手は幾らでもいた。金で話がつけば、唸るほどにあるのだ、それが一番簡単だ。払いを拒んだ女と、時折夜を共にすることは、危険な事かもしれない。それを解っていなかったのか、それとも、解っていても、その危険を冒すメリットがあったのだろうか。
答えは解らない。いや、それは彼女の言った「可哀相」の、その理由なのかもしれない。同情以下の、憐憫で、体を許したというなら、許された側はそれだけ、哀れだという事だ。救われようもない。思って、エドアルドは笑った。自分は、自分でも嘲けきれぬほど、哀れなのだ。真理を知るその女が言うのだから、間違いはあるまい。
「じゃあ……気持ち良くしてくれよ。俺は可哀相なんだろ？」
自暴自棄な言葉に、ジルは笑うのを一旦やめた。しかしすぐにまた、今度は別の意味を含んだ笑みを浮かべ、ずいとその顔をエドアルドに近づける。
「そうよ、見てられないくらいに可哀相。その辺の、けだものみたいなヤツより、ずーっと可哀相」
「どうして」
「そんなの知らないわ。でもあたしと寝て気持ち良くなっても、やっぱりあんたは可哀相なままよ」
「じゃ……なんで俺にやらせるんだ？救ってくれる訳でもないのに」
「ばかね、それはあたしが女だからよ」

答えになっていない。思ったが、エドアルドはそれを口にしなかった。唇は女が自分のそれで塞いだ。暖かく、柔らかい感触が包み込む。この女とも最後かと、何気に思いはしたが、寂しくも辛くも感じない。捜せば、自分に悦楽を供じようという女は幾らでも現れる。口付けなど、求めるというほど欲せずとも、いつでも得られる。その体も同じ事だ。
女の、ゆったりとした口付けが終わる。熱を孕んだ唾液が糸を引いて、音もなく切れた。
カウンターの上に飲みかけのワインを残して、エドアルドは席を立つ。腕は組まなかった。女は彼を先導しても、振り返ることはなかった。

屋敷に戻ったのは昼過ぎだった。女の部屋の狭いベッドで、眠るでも起きているでもないような時間を過ごして、体には澱の様な疲れが溜まっている。最後という言葉が引っかかりでもしたか、と何気に思うが、単に眠っていないだけのことかも知れない。とは言え、いつもよりそれが重かったとすれば、久々だったせいもあるだろう。叔母と従妹が来て以来だ。それでも、久しいと言えば大袈裟だが。
行為は悦楽を運ぶ。運ばれる悦楽は、自分の中の野生を揺さぶる。それに浸っていたいという強い願望は、更に悦楽を求めて、まるで生きているこの体を削ぎ落とさんばかりに、自分を追い立てる。果てても、その向こうへと、体が渇望する。男は誰もみな同じだ。本能を掘り起こせば、飾っているものなど無に等しくなる。得たいもののために、何もかもを忘れる。それを奪うまで、止まる事はない。
しかしそれはいつでも手に入るわけではない。それは不自由ということになるのだろうか。不自由である、自由が利かない。だから己を律している。だとすれば、この家にしがみ付いていれば、律する必要などないのかもしれない。門扉を外から眺めて、エドアルドは思った。
女を抱くのは、嫌いではない。むしろ自分はそれが好きなのだと思う。肌の感触も匂いも、気が付けば総てを、まるで麻薬のように欲しがる自分がいる。達する時の感覚も、恍惚も、一瞬だというのに忘れられないほどの快楽だ。四六時中行為に没頭していれば、確かに体が持たない。それでも、絶え間なくそれがあればと思う瞬間が、ないわけでもない。
しかし同時に、そう思う自分がいることが、余りにも愚かしく感じる。それが何のためのものなのか、単に一時の悦楽のためだとするなら、その一時の為にどれだけの事が意味なく過ぎ行く事か。そして自分にとって、女と寝る事は、それ以外の何も伴わないのだ。愛情だのというものは欠片もない。ましてや、そんな言葉で誤魔化すような事さえない。単に欲求を満たすためだけ、その欲求も、満たした後にはただ虚しさがあるだけだ。愚かしい。余りにも、愚かしすぎる。
「あら、ごきげんよう、エドアルド。今頃お帰り？」
門扉の中から声がして、彼は顔を上げた。くつろいだ格好の、化粧もしていない姉の姿がある。苦笑して、エドアルドはアデレードに返した。
「お早う、姉さん。今日は休みなのかい？」
「ええ、ちょっと疲れが溜まって、無理やりに。昨夜なんかわざわざ運び込まれたわ」
姉の口調は不機嫌だ。何事かと、エドアルドは重ねて問う。
「運び込まれた？」
「立ちくらみがしたのよ。そしたらマルコが……」
「過保護……いや、それは当然かな。彼は貴女の片腕で、婚約者なんだから」
聞きなれた名前に、エドアルドが笑う。アデレードは眉をしかめて、門の外の弟を睨みつけた。
「婚約者、ね……」
「何だよ……何か、不服でも？」
「不服だらけよ、貴方にも、その婚約者にもね。昨夜はどこにいたの？」
アデレードの目つきに鋭さが増す。目を丸くさせ、エドアルドは答えずに聞き返す。
「何かあったの？昨夜」
「先に私の質問に答えなさい、エドアルド。昨夜はどこにいたの？」
語調の鋭さが増す。エドアルドは苦笑して、
「姉上の想像通りのところですよ」
「……でしょうね」
「解っているなら、聞かなくてもいいでしょう？意地の悪い……」
相当機嫌が悪いらしい。思いながら、エドアルドは外から門の鉄格子の扉を開けた。きしむ音を立て、それは容易に開く。アデレードは溜め息で弟を迎え入れ、苛立たしげに吐き捨てた。
「叔母さまが出てきたのよ、迎えに。それで、彼に言ったの。アデレードは焔の様だ、って」
「それは……でも、褒め言葉じゃないのかな」
「そうね、叔母さまはそのつもりなんでしょうね」
婚約者の前で恥でも掻く羽目になったか。姉の様子を慮って、エドアルドは無言だった。くつろいだ、というよりアデレードの格好はほぼ寝巻きだ。こんな姿で庭先をうろついていれば、またあの老女中がうるさかろうに。思っているエドアルドに全く構わない様子で、アデレードは更に言った。

「それでもこんなに魅力のある女性は、他にはいない、ですって。いけしゃあしゃあと」
「……何が気に入らないんですか？それの」
その言葉も十分、褒めているというよりも惚気に聞こえるのだが。アデレードの苛立ちは治まらない。ああそうか、と、エドアルドは思いつく。魅力的なのは、その焔の様な気性ではなく、この家の名だ。それが彼女には気に入らないのか。しかしそれも、ボカロジアの人間なら言われて当然の事だ。今更気にするほどの事でもないだろう。エドアルドは苦笑を漏らした。そして、
「姉さんは……マルコをどうして選んだのさ？」
「……どうしてそういう話になるのかしら、今」
「聞かれたいんじゃないのかい？それを」
弟の口調が揶揄い気味になる。アデレードは益々眉をしかめ、更にきつく彼を睨む。
「……彼は優秀よ、それだけだわ。一生私についてきなさい、とは言ったけど……」
「へえ、そうなんだ」
素っ気無く言って、エドアルドはアデレードを置き去りに、歩き出す。アデレードは悔しそうな目でそれを追い、後に続くように歩き始める。
「それで、どうして婚約者に？」
「私に忠誠を誓ってくれるなら、ボロージアの家の損にもならないわ」
「でも、彼がこの家の名に魅力を感じている事は、気に入らないんだ？」
アデレードが黙り込む。言いすぎたか、思ってエドアルドは歩みを止め、振り返った。俯き加減に、アデレードは歩き続けている。そのまま自分を追い越す彼女を、エドアルドは見送った。
「姉さん」
「……そうしてでも、側にいさせたいわ。向こうは私を愛してはくれないけど、ボスである私を裏切る事はない。今のまま、お互いに利用価値があれば」
アデレードは、言葉を残して歩き去る。三人目の夫は、自分の片恋で選んだのか。その事実にエドアルドは驚いていた。姉なら解っているはずだ。それがどれほど意味も価値もなく、そして愚かしいかを。数メートル見送って、エドアルドも再び歩き出す。追いながら、エドアルドは思わずそれを口にした。
「意外だな」
「何が？」
「いや……姉さんは、そういうことは、もっと割り切っているかと……」
「利害関係だけの結婚なんて、良くある話でしょ。その辺は私も、そのつもりだけど」
「いや……そうじゃなくて……」
「私の母親が愛人だから、男と女の愛情なんて、とでも言うと思った？」
アデレードが振り返る。口許には意地の悪い笑みが昇っていた。先んじて言われて、エドアルドは再び閉口する。アデレードは意地悪く笑ったまま、どこか得意げに言った。
「お前の言いたいことは解るわ。きっとみんな、同じ様な事を思っているだろうし。確かにそれは綺麗事よ。それが美しいものだ、なんて、口が裂けても言えない。でも、それとこれとは違うわ」
「違うって……何が？」
「一つ、いいことを教えてあげるわ」
ふふん、と、鼻先でアデレードは笑う。楽しげなのは、自分をいたぶろうとしているからか。彼女の態度にエドアルドがそれを感じ取る。笑いながら、アデレードは言葉を続けた。
「母さんと二人でレヴォアにいたころ、毎月この家から誰かが来てたわ。私の様子を見させるために、おじいさまと父さまが寄越してたのよ。どういうことか解る？」
「さあ……」
「少なくとも、私の母さんは、あの人のことを愛してた。だから抱かれて、私を産んだ。それが解っていたから、あの人達は母さんにせびられていた訳でもないのに、私達にそれ相応の暮らしをさせてくれていた。そういうことよ」
勝ち誇ったように見えるのは、気のせいか。それとも女というのは、姉ほどの人間であっても、そんな夢を見るものなのか。思いながら、エドアルドは思わず、昨夜聞いた女の言葉を口にした。
「どんなに愛しても、男は裏切る、っていう女がいる。抱かれれば尚更だ、それが真理だ、って……」
「残念ね、それはその人だけの真理よ。それとも、裏切られるのが怖いだけの、臆病者の言い草だわ」
姉の顔は変わらない。誇り高き女帝のようにさえ見える。どうしてこの人は、こんなにも毅然としているのか。思いながら、エドアルドはほぼ無意識に、次の言葉を紡いだ。
「俺は……目に見えないものは、信じない」
「そう……ならそれが、お前の真理よ、エドアルド」
アデレードは、それを肯定も否定もしなかった。彼女の笑みは、意地悪く、誇り高く、そして動じない何かを秘めて

いた。ふふ、と小さな笑みを漏らし、アデレードは歩き出す。先へと進む姉を見送っていると、進んだ彼女がまた口を開いた。
「ルゥがしょげてたわ。自分が何かしたから、お前が出かけたんじゃないか、って」
その名前に、エドアルドの心臓がぎくりときしむ。それさえ見透かしているように、アデレードはちらりと彼を見る。
「謝るなり機嫌をとるなり、しておきなさいよ。嫌われたくなかったら」
「……そうだね、考えておくよ」
胸がきしんだのは一瞬だった。後には、何かが抜け去ったような脱力感だけが残る。これは何だ、思いながら、暫くエドアルドはそこに立ち尽くした。姉の姿が屋敷の中へと消えても、彼はそこから歩き出そうとはしなかった。

時計は昼を回っていた。こっそりと私室に入ろうとするところを、いつも通りにばあやに見付かり、説教を食らう事、数十分。エドアルドが自分のベッドに飛び込んだのは、家の門をくぐってから一時間以上経ってからのことだった。しかも、ばあやはまだ側にいる。
「シャワーくらい浴びたら如何です？若様」
「……勘弁してくれよ、エレナ……」
「だったら昨夜の早いうちに、お帰りになれば宜しいんですよ。それに昨夜は、アデレード様がマルコさんをお連れになったんですよ？そんな時に、おいでにならないなんて」
「……そうらしいね、聞いてる」
返答する気力はとっくに失せていた。が、ばあやのおしゃべりは止まらない。相手をしなければしないで、この老女中はまたうるさい事を言う。が、今は本当に眠い。ベッドにうつ伏せになって、エドアルドは困りきった声で言った。
「ばあや……今俺、死にそうに眠いんだよ……勘弁してくれないか……」
「それもこれも自業自得でございますよ。でもまあ、良うございます。今はごゆっくりお休みなさいまし。でも夕食前にはお起きになって、シャワーを浴びて、もう少しましなものに着替えてください。解りましたか？」
「……解った、努力する」
返答も妖しくなる。ばあやは全くもう、とか何とか言いながらため息を吐き、ベッドに突っ伏した彼に背を向け、歩き出そうとする。エドアルドは遠ざかる気配に気付いて、眠いと言いながら、ばあやに問いかけた。
「ねえ、エレナ」
「何です？若様」
「姉さんが家に来る前は……どんな暮らしをしてたか、エレナは知ってるかい？」
問いかけに、老女中は皺に隠れそうな目を僅かに見開いた。そして、少し困ったように笑うと、
「ええ、少しは。けど、何です？急に……まさか……」
「姉さんに、ちょっと聞いたんだ。良く考えたら、俺も、姉さんの昔のこと、良く知らない……」
振り返った老女中の顔に驚愕が走るのを、エドアルドは見ていなかった。言葉は途切れて、そのまま寝息になる。老女中は見守るようにそれを見詰めていたが、しばらくするとその場で安堵の息を吐き、そのまま無言で部屋を去る。くうくうと無邪気に、エドアルドはそのまま眠っていた。

目が覚めると、辺りは夕暮れに包まれていた。夏の日は長い。いつまでも太陽が空に留まっているおかげで、時計以外に夜を知らせるものがない。それでも部屋の薄暗さに、時間の経過を感じてエドアルドは体を起こした。昨日から着たままのシャツは汗にまみれている。しわくちゃになったその胸元から手を入れ、汗で蒸れた肌を掻く。時計が指す時刻は、夕食というより既に夜食の時間だ。起こされなかったのか、それとも、起きなかったのだろうか。まだ眠気に支配され気味の目蓋を無理やり開けるようにして、サイドボードのライトを灯す。もう少し頭がはっきりしてきたら、シャワーでも浴びよう。今夜はこのまま眠れるだろうか。何となくエドアルドはそんなことを思った。パタパタと、どこか遠くから足音がする。開け放たれた窓の方からだ。何気に視線をめぐらせると、そこに黒い人影が二つ、見えた。使用人か、それとも、姉か、従妹か。見るでもなくそちらに意識を向けていると、若い女の声が聞こえてきた。
「待ってよエレナ、どうして教えてくれないの！」
影の一つは、姉らしい。そしてもう一人は、老女中のようだ。ベッドを出て、ふらつく足取りでエドアルドは窓に向う。薄暗い部屋の中に、アデレードの、怒りと悲しみのこもった、悲鳴のような怒鳴り声が聞こえる。
「どうしてもこうしても。確かに私は古くから、このお屋敷にお世話になっております。けれども、知らないものは知らないんですよ。お嬢様、もう勘弁してくださいまし」
「嘘よ！だってエレナだって、あの頃、私達のところにっ……」
姉は、ばあやに何か尋ねているらしい。それも、何かとても重要な事のようだ。窓からエドアルドが覗く。何をしているのかと、尋ねようとしてできなかったのは、そこに見えた姉の表情が、余りにも悲痛だったからだ。叫びは、再び庭に響く。
「貴女の、姪だったんでしょう？私の母さんは……おじいさまの、隠し子なんでしょう？」

言葉の意味が解らなかった。これは夢か、それとも、現実なのか。詰め寄るアデレードに、エレナの表情は変わらない。困った、と言わんばかりの顔つきで、深く息をついて、ばあやは頭を下げた。
「お嬢様、ばあやはこれで失礼致しますよ。何かありましたら、若い者にお申し付け下さいまし」
アデレードに背を向けて、エレナは立ち去る。残されたアデレードは暫くそこに立ち尽くしていた。泣き出すだろうか。エドアルドは思いながら、しかしそれを見ているだけだった。疲れたように、アデレードが踵を返す。目があったのはその時だった。無言のアデレードも、その表情は驚きに染まっている。エドアルドは動けないまま、
「あ、いや……声がしたから、誰がいるのかと、思って……」
アデレードはそう言ったエドアルドから視線を逸らし、歩き出す。窓から身を乗り出し、エドアルドは彼女を呼び止めた。
「姉さん」
「聞いていたのね。立ち聞きなんて、あんまりお行儀のいいことじゃないわよ、エドアルド」
アデレードが足を止めた。その言葉に、エドアルドは何も返さない。言葉が、出なかった。姉の母親が、あのばあやの姪だというのだ。驚かない訳がない。しかもそれが、祖父の隠し子、だとは。
「……本当なのかい？今の……」
それでも、尋ねずにはいられなかった。アデレードは薄く笑っていた。笑顔だというのに、そこにあるのは哀しみだけのようで、エドアルドはその表情に怯んだ。この強気の、炎のような姉が、こんな顔をしようとは。昼間聞いた、片恋の話も意外だったが、こちらはもっと意外だ。この人が、泣きそうな顔をする、なんて。思っていると、アデレードが口を開いた。
「そういう噂もある、って話よ。まだ確かめてはいないわ」
「じゃあ……」
彼女の言葉に、何故か安堵を覚えて、エドアルドがほっと息をつく。アデレードはくしゃくしゃと、自分の髪を掻く。そして不思議な笑みのまま、
「でも、だとしたら、この家の人間は最低だわ。私は、父さんもおじい様も……誰も許さない……」
声は、憎しみに染まって、僅かに震えていた。吐き捨てて、アデレードは歩き出す。もしかしたら姉は、もうこの家に戻らないかも知れない。直感が電撃の様に、エドアルドに走る。引き止めるべきか、それとも。思い、戸惑う彼に、アデレードはもう一度振り返った。そして今度は笑いもせず、射抜くような目でエドアルドを睨む。
「姉さん……」
「お前も、あの二人のようになるのかしらね。この家の男だから」
「……姉さん、俺は……」
緊張が走って、咽喉が枯れる。やっとの事で紡いだ声も、掠れて、言葉にはならない。
「せいぜい上手く立ち回りなさい。外に作った子供に、情けなんてかけては駄目よ。私のように……信じていたものに裏切られて、傷ついてしまうから」
アデレードは歩き出す。エドアルドに言葉はなかった。夕闇を、姉の後姿が遠のいていく。上手く立ち回れと言った彼女の言葉が、頭の中でこだまする。上手くとは、どういう意味なのだろう。ぼんやりとエドアルドは思った。そしてどこかで冷ややかに、姉もまた愚かな女なのだと、そんなことさえ感じた。
それは手に入れられない幻だと、あの人も知っていたはずなのに。どうしてそれを望んだのか。解っているのなら、手を伸ばすことは愚かな行いだ。それとも、そうせずにはいられないのか。何のために、どうして？
気がつくと、彼の眉は歪んでいた。気分が悪い。寝ている間にかいた汗のせいではないだろうが、シャワーでも浴びて、気分を変えたい。そう思って彼は窓から離れた。室内の明かりを灯し、シャツを脱ぐ。胸元に奇妙な赤い痕がついているのに気付いたのは、その時だった。明らかに故意につけられたと思しきその痕に、またエドアルドは眉をしかめる。
人の想いなど、信じるに足るものではない。束の間に消えて、次にめぐり合う時、それはもう、風の彼方に吹き飛ばされている。
だから信じないと、あの女は言っていた。姉は、それを臆病だと言いながら、裏切られたと吐き捨てた。ならば、それはやはり、価値のあるものではないのだろう。不確かであるなら、それに意味はない。縋れば、それに裏切られる。失くせば、痛みに耐え切れず、忘れるために、別の傷を作る羽目になるかもしれない。
父親がいつか言っていた。金以外で女と関わるな、身を滅ぼしかねない、と。
それはもしかしたら、こういうことなのだろうか。思いながらエドアルドはシャワールームに向って歩き出す。気分が悪い。シャワーだけでは洗い流せない何かが、この体には纏わりついている。いや、この体の中に、棲んでいるのか。思う彼の顔に、表情はなかった。洗い流せるものなら、流してしまいたい。叶わないなら、この体ごと、捨ててしまいたい。思って、直後、彼は苦笑した。いや、それを思うことすら、意味がない愚かな事だ。覚えている事さえも。なら、忘れてしまえ。ぬぐう事ができない、それが人の言う宿命なら、感情など、殺して生きればいい。
幻は追わない。手に入らないもの、不確かなものには、価値はないのだから。思い直すと、口元の笑みは更に冷たくなる。部屋の電話が鳴ったのは、その時だった。耳につく古いベルの音に、エドアルドは視線をそちらに投げる。部屋の

真ん中にすえられたテーブルの上で、今時流行らない、ゴシックスタイルに作られた固定電話が鳴っていた。無言で歩み寄り、受話器を取る。
「もしもし」
『兄さま……あの、ごめんなさい、寝てた？』
「いや……起きてるよ」
従妹の声に、何故かエドアルドの表情が緩んだ。不安げで頼りない細い声は、良かった、と電話の向こうで息をつく。そして、
『今から……兄さまのところに、行ってもいい？』
「構わないけど……どうして？」
『うん……母さまが、伯父さまとお話があるから、って……』
戸惑いながらルクレチアが言う。聞いて、エドアルドは吐息の様な笑みを漏らした。
「いいよ……こっちにおいで」
『有り難う、兄さま』
電話が、彼女から切られる。受話器を置いて、何気にエドアルドは息をつく。このままこんな風に、彼女を偽り続けられるだろうか。そんな思いがよぎると、その顔から表情は消えた。
ルクレチアは間もなく部屋にやってくるだろう。その前に、この汗臭い体を何とかしておこう。嫌われるのは構わないが、理由が汗臭い、では格好も付かない。思いながらエドアルドは再びシャワールームに向けて歩き出す。いっそそんな下らない事で、嫌われてしまうべきかもしれない。今ならまだ、あの子を深く傷付ける前に、総てを捨てられるかもしれない。そんなことさえ考えながら。

III

　エドアルドがシャワーを浴び終えると、自室の中央のテーブルに、ルクレチアの姿があった。部屋着らしい薄桃色のワンピースにショールをまとい、腕に子猫を抱えた少女は、髪を拭きながら歩いてくるバスローブ姿のエドアルドを見ると、立ち上がり、
　「兄さま、ごめんなさい……あの……」
　「構わないよ。父さんに部屋を追い出されたんだろう？」
　そのままでエドアルドは歩み寄り、困惑しているルクレチアのそばまでやってくると、その顔を見下ろし、笑った。ルクレチアは焦った様子で、そのまま言葉を続ける。
　「ほ、本当は、客間かどこかを使おうかなって思ったの。でも、エレナもルカも、見付からなくて……その……」
　屋敷に来て二週間の彼女には、まだ馴染みの使用人があまりいないようだ。自分を頼ることに戸惑う様子も愛らしい。思って、エドアルドは笑う。そして、
　「何かありましたら遠慮なく、このエドアルドにお申し付け下さい、セニョリータ」
　おどける様に、エドアルドが笑いながら頭を垂れる。ルクレチアはその様子に僅かに笑い、奇妙な困惑と緊張を解いた。
　「ごめんなさい……有り難う、兄さま」
　いつもの笑みがその顔に昇る。無言でその少女の髪を撫でて、エドアルドはクローゼットに向って歩き出す。
　「父さんは、一体叔母上に何の用なんだい？こんな時間に」
　「私の、学校の事、みたい」
　「君の？じゃあ君を追い出す事もないのに……何を考えているんだか」
　ルクレチアはテーブルの側から動かないまま、着替え始めるエドアルドを目で追う。着替えを適当に見繕うと、手早くエドアルドはそれを身につけた。濡れたままの髪を拭きながら、再び彼はルクレチアの元へと戻る。
　「きっと私には解らない、難しいお話があるのよ」
　ルクレチアは困ったように笑っている。エドアルドは首をかしげて、
　「そうかな……君も、もう小さな子供じゃないんだ。自分のことなら、きちんと聞いた方がいいんじゃないのかい？」
　問われても、ルクレチアは笑っているだけだった。無言のままの彼女に、エドアルドはそれ以上を言うのをやめる。そして、
　「それで、ルゥ、どうする？」
　「え？どうって……」
　「俺が、客間を使ってもいいけど？」
　時計の針は、既に真夜中を指し示している。つい先程目を覚ましたエドアルドにはどうということはないが、昼間普通に起きていたルクレチアには、そろそろ眠気に襲われる頃合だろう。問いかけに、ルクレチアは目を丸くさせていた。行き場がないから、と頼ってきた彼女は、それからやっと気付いたように、
　「ううん、いいの。ここは兄さまのお部屋なんだし……お話が終わったら、ここにいるから、って、母さまにも伯父さまにも、言ってきたから……」
　そう言って、慌てた仕種でその手を振る。そう、と小さく返してエドアルドは微かに笑った。ニャー、と、ルクレチアの腕の中で子猫が鳴く。今の彼女の動作に締め付けられて、息苦しさでも感じたらしい。間をおかず、子猫はその腕から飛び出した。弾け飛ぶ矢のような、しなやかで力強い動きに、ルクレチアが慌てる。
　「ジュリオ、待ちなさい！」
　子猫は飼い主の声も聞こえない様子で、そのまま軽やかに駆けていく。追いかけようとするルクレチアを、笑いながらエドアルドが制した。
　「好きにさせておけよ。君があんまりぎゅうぎゅう抱きしめるから、窮屈だったんじゃないのか？」
　「で、でも、兄さま！」
　「心配ないよ、この家は広いから、どこにも行けやしない。出てこなかったら、俺も一緒に捜してあげるよ」
　慌てるルクレチアを制して、エドアルドはまた笑った。ルクレチアは返す言葉もないらしい。少し膨れてエドアルドを睨むが、それ以上何も言わなかった。
　「何か飲む？ああ、でも、こんな遅くに飲み食いしたら、ってばあやに言われるかな」
　笑いかけながら、エドアルドがその頭を軽く叩く。ルクレチアは照れくさそうに少し笑って、そんなエドアルドを見上げていた。
　「……何だい、ルゥ」
　「兄さま……優しいのね」
　「……何が？」
　唐突な少女の言葉に、エドアルドは目を丸くさせた。えへへ、と笑って、ルクレチアはそんなエドアルドを、ただ見上

げるだけだ。
「有り難う……大好き、兄さま」
はにかんだ笑みとともに、言葉がこぼれた。応えるように、エドアルドが返す。
「それはそれは……光栄です、セニョリータ」
この子は、何がそんなに嬉しくて笑うんだろう。思いながら、エドアルドがまた、おどけた様子で頭を下げる。何でもいい、この子が笑ってくれるなら。こうやって無邪気に、幸せそうにしていてくれれば。思うと彼の口許にも、やわらかな笑みが昇る。
「何にもないのもつまんないだろ。ミント水くらいなら平気だろうから、持ってこさせようか」
「ううん、いいの。大丈夫」
言ってルクレチアが再びテーブルに着く。エドアルドが目を丸くさせると、
「母さま達のお話しがすむまで、ここにいさせてくれるだけでいいの。兄さまも、眠かったら休んで」
「……そう、かい？」
いや、自分はさっき起きたばかりで、眠くも何ともないのだが。思いながらもそれを言わず、エドアルドはそこにいるルクレチアを見ていた。ルクレチアは変わらない笑みで、少しだけ照れくさそうに、言った。
「兄さま、有り難う……大好き」
「それは、どうも有り難う。嬉しいよ」
それは、嘘偽りではない。エドアルドは思いながら、けれど何かが違うその言葉を、彼女に返した。

ルクレチアに、部屋に戻れという連絡のないまま、夜は過ぎた。最初テーブルについていた彼女は、すぐにもそのテーブルで舟をこぎ始めた。きっとベッドに運ばれた事にも気付いていないに違いない。
エドアルドは彼女を一人部屋に残し、その夜は書斎ですごした。眠っている人間の側をうろつけば、僅かでも物音を立てて起こしかねないし、だからと言って一晩中、何もしないで大人しくもしていられそうにない。眠る彼女に何かしよう、という気は起こらなかった。無邪気で安心しきった寝顔を、自分の手で歪めたくはなかった。見ていられるものなら、とも思ったが、それも何気に憚られた。いつかのように、許される訳でもないのに触れて、嫌われるのも好ましくない。その衝動は、いつでも自分の中に眠っている。陶器のような滑らかな頬を撫でると、少女は眠っていながらも、幸せそうに笑った。今はこれで十分だ。見ているだけで、暖かい気持ちになる。子猫は、気が付くとその足元で眠っていた。拾われて数日だというのに、自分の主をちゃんと解っているらしい。義理堅いものだ。
夏の夜明けは早い。けれど明けたからと言って、屋敷の使用人の全てが昼間同然に動いていることは稀だった。早朝何かしらの作業をしているのは、庭師と、朝食番のコックやメイドくらいのものだ。何かしらを頼めば動いてはくれるだろうが、それも憚られる。昔ばあやに、朝は忙しいから、使用人の方から申し出がない限りは無理強いをしないように、と叱られた事があるせいかもしれない。身の回りのことは一通りできるように、というのもばあやの方針で、おかげで誰かの手を借りずとも、身の回りの事はこなしていた。最も、彼は雇われている多くの人間を、信用していなかった。若君、と囃されて育った人間にしては、他人に甘える事もない。
数時間を書斎で過ごし、彼は庭へと出た。夜明け直後の庭は、夏とは言えども寒さを感じる。朝露に濡れた薔薇でも持っていったら、ルクレチアは喜ぶだろうか。そんなことを思いながら庭をふらつく。そう言えば、姉はあれからどうしたのだろう。アデレードのことをふと思い出し、エドアルドは足を止める。戻っているのだろうか、それとも、あの時感じたように、二度とこの家に足を踏み入れることは、ないのだろうか。外気ではなく、自分の中から感じる薄い寒さに、エドアルドは困惑した。姉と言いながら、彼女と初めて会ったのは、十歳の時の話だ。母親も違う。一緒に育ったわけではないし、今も、同じ家に暮らしているとは言いながらも、家族と呼ぶほど密に会っているわけでもない。近しい友人ほどの存在、それが彼にとっての、アデレードだった。勿論、友人程度に思うところはある。だがそれ以上に、自分が彼女に踏み込めるとは思っていない。ならば何故、こんな風に体の奥から、寒く渇いた感触が沸き起こるのだろう。この家の男だからと、詰られたからだろうか。つい昨日の事だというのに、それがずっと以前の事のような気がして、エドアルドはその場で立ち尽くした。姉はこれから、どうするのだろう。あの時彼女が言っていたことは、真実なのだろうか。ぼんやりと、エドアルドはそんなことを思った。
主が、愛人に産ませた娘。どこの資産家にも良くある話だ。しかし彼女はそれだけではないと言っていた。その愛人は、祖父の娘だと。自分と彼女の様に、二人は腹違いの兄妹だったのだろうか。
「リザ、おいで。百合が咲いているよ」
声がして、エドアルドは我に返る。どこかはしゃいだ、熟年の男の声だ。一体誰がこんなところで、何をしているのか。思ってエドアルドは視線をめぐらせた。やや離れた庭の奥手に、白い露台が見える。人影は、その近くにあるようだった。無言のままで彼は歩き出す。庭師が、娘でも連れてきたのだろうか。今この庭を取り仕切る庭師は、父親と同世代で、ばあやの甥だと聞いたことがある。若い頃には別の土地の大都市で花屋を営んでいたが、商売に失敗して土地を追われて、とか何とか。腕は確かだからと、ばあやが先代、彼の祖父に頼み込んで雇わせたらしい。花の良し悪しは解らないが、実直で真面目な男だ。商売向きではないが、仕事は熱心らしい。ばあやの甥なら、信用に足りるだろう。あの子

に花をと言ったら、それなりに見立ててくれるだろうか。
「ええ、知ってるわ、お兄さま。私は毎日のようにここを散歩しているもの」
歩みを進めるうち、もう一つの声が聞こえた。聞きなれた、女の声だ。いや、いつもの声よりも、それはずっと無防備で、そして幼く感じられる。足を止めて、エドアルドは耳を疑った。今のこの声は、叔母ではないか。くすくすという笑い声が続いて、それに、先程の男が、何故か憤った声で返す。
「何がおかしいんだい？リザ」
「いいえ、何も。手荒な事をして、折ってはだめよ、お兄さま。百合が可哀相」
さくさくと、軽い足音が聞こえる。答えた女が庭へと出たらしい。二つの人影は近付き、男はやってきた女を軽々と抱き上げた。少女のような笑い声が聞こえる。そこにいるのは、確かに父と叔母だった。明らかに寝巻きと思しき姿で、まるで子供のように、二人は小さな百合の花を見て、じゃれあっている。これは、何だろう。夢でも見ているのか。エドアルドは自分の目を疑いながら、その光景から顔を背けられずにいた。二人は楽しげに笑い、どちらからともなく互いの体に腕を回す。
それは若い恋人達の、愛の交歓のようにも見えた。叔母も父も、恋する男女のように、生き生きと、見た事がないくらいに幸せそうな表情をしている。
「モントリーヴォ……私の、お兄さま……」
吐息混じりの声で、彼女が自身の兄を呼ぶ。どこかうっとりとした声は、エドアルドが聞いたことのない不思議な響きを持っていた。およそ、妹が、兄を思慕して呼ぶ声とは思えない。それとも、自分の父と叔母との間では、これが普通なのだろうか。
「夜が明けるわ……部屋に戻りましょう、お兄さま」
耳元で、彼女はささやく。男は低く応えて、彼女を抱いたまま、ゆっくりと歩き出す。身動きも取れず、エドアルドはそれを見送った。何事があったのか、俄かには信じがたい。眠くならなかったから、とは言え、夜を明かして、自分は幻でも見たのだろうか。その場に立ち尽くし、エドアルドはその額に、無意識に手を当てる。頭を数度振って、彼はきびすを返す。父は、確かに妹である叔母に、酷く執着している部分がある。幼い頃にも、きっと彼女を溺愛していたのだろう。いつかルクレチアを膝にあげようとしたように、未だに叔母に対して、そんな感覚を持っているのかもしれない。
しかし叔母は、どうだろう。あの人は、それに付き合うような人間だろうか。いや、彼女は、いい年をした大人の筈だ。父の戯れに、自分から乗るとも思えない。では、気のせいか。彼女がいつにも増して無邪気で、幼く、そして幸せそうに見えたのは。思って、エドアルドは漸く歩き出した。眠くないと思っていたが、どうやら自分は相当疲れているようだ。部屋に戻って少し眠ろう。そうすれば、今見た光景も、きっと納得のいく記憶になっているに違いない。兄妹である父と叔母が、恋人のように抱き合っていた、など、有り得ないのだから。
そのまま、エドアルドは何も考えず、もと来た道を歩いた。部屋が見える頃、そう言えばあの子にあげる花を忘れていた、と思い至るが、それも忘れることにした。
自分のベッドでは変わらず、少女と子猫が眠っていた。穏やかな寝顔の少女を見下ろすと、自然と頬が緩む。触れるだけなら構わないだろうか。それとも、起こして、驚かれるだろうか。規則正しい寝息を立てるルクレチアを見下ろしながら、ぼんやりとエドアルドは考える。が、動きは無意識のうちだった。屈みこんで、頬に口付ける。
瞬きの間の、触れるだけの接吻に、眠る彼女は気付かない。寝息は変わらず規則正しく、表情は穏やかだ。自分は、何をしているのか。これも、眠気のせいか。そう思ってエドアルドは自重の笑みを漏らした。気付かれれば、驚かせるかもしれないと思いながら、もしかしたら自分は、それを望んでいたのかもしれない。目覚めた彼女に、怯えた目を向けられる事を。そうなったら、自分はどうするのだろう。冗談でも言って取り繕うのか、それとも、今度は、その唇を荒々しく奪うのか。しかし、自分は臆病だ。出来たとしても、前者に決まっている。あんまり寝顔が可愛くて、とか何とか言いつくろって、いつものように彼女を怒らせて、事は過ぎていくだろう。しかしそれは、自分が本当に欲しいものではない。本当に欲しいのは……。
「……兄さま……」
小さく、ルクレチアの声が聞こえる。妄想めいた思いに耽っていたエドアルドは、ぎくりとして目を剥いた。ベッドの中、ルクレチアは眠ったままだ。自分に気付いた訳ではないらしい。むにゃむにゃと何かを言って、ルクレチアは笑っている。寝言か。エドアルドは安堵の息を吐き、ベッドを離れる。ばあやが部屋に踏み込みそうな時刻まで、二時間ほどある。寒い季節ではないから、ソファで構わないだろう。ゆっくりとした足取りで、エドアルドは窓際のソファへと歩みを進める。
それにしても、叔母と父はルクレチアを追い出して、一晩中何を話していたのだろう。ソファに身を沈める直前、エドアルドはふとそんなことを思った。せめて叔母にだけでも、確かめなければ。彼女はルクレチアの母親なのだし、話していた内容がルクレチアのことなら、尚の事だ。思いながらエドアルドは目を閉じる。睡魔は、すぐにも彼の意識を奪った。夜が明けていく窓辺で、それに逆らうように、彼は間もなく眠りに落ちた。

「兄さま、兄さま」

ゆらゆらと、体が揺さぶられる。何故か肩が、堅く痛い。ソファの中、エドアルドはそっとその目を開けた。目の前、飛び込んできたのはルクレチアの、困惑の顔だった。そう言えば昨夜は、この子が自分のベッドで眠っていたのだった。思って、エドアルドは目の前の幼い顔に、笑いかけた。
「やぁ……おはよう、ルゥ」
「おはよう……じゃないわ、兄さま。ここで寝ていたの？」
困惑するその顔は、同時に酷く動揺していた。泣き出すのではないかと思われるほどの顔つきに、エドアルドは何故か笑う。可愛い顔だ、などと言ったら、この子は何と言うだろう。思いながらもエドアルドは辺りを見回す。そして、
「ああ……少しね」
「少し？」
「書斎にいたんだ……寝たのは、少しだよ」
「だって兄さま、もうすぐお昼よ？いつから寝ていたの？」
「……え？」
ルクレチアの言葉に、エドアルドは目をしばたたかせた。サイドボードの上の時計は、時代物ではあるが、こまめにばあやが時間を合わせているおかげで、殆ど狂いがない。昼の刻限より少しだけ速い時刻を示すそれを見て、エドアルドは驚く。が、
「……それで肩が痛いわけだ……少しと思ってたんだけどな……」
「兄さま、ごめんなさい」
言いながら暢気に、エドアルドがその腕を回し始める。ルクレチアは泣き出すのではないかとさえ思える顔で言って、その頭を彼の前で下げた。が、エドアルドは、
「ん、何が？」
「だ、だって……私がベッドを取っちゃったから、兄さま……」
ストレッチを始めながらの彼の問いかけに、ルクレチアがおろおろしながら返す。その様子にエドアルドが笑うと、ルクレチアは泣きそうな顔のまま、
「兄さま、どうして笑うの？」
「え？いや……」
「私は謝ってるのよ？ごめんなさい、って」
「ああ……そうだね」
その、謝っているはずの彼女を、どうやら怒らせたらしい。自分は何かしただろうか。思っているとルクレチアは膨れて、
「どうせ兄さまは、私がこんなこと言うなんておかしいって、そう思ってるんでしょ？私だってもう、小さな子供じゃないのよ？悪い事したら、ごめんなさいって、そのくらい……」
そう言って拗ね始める彼女の様子は、やはり幼い子供のように見える。しかしこれ以上笑えば、本格的に彼女の機嫌を損ねることになるだろう。エドアルドは笑みをかみ殺し、わざとらしいほどの殊勝な態度を取った。
「ごめん、ルクレチア。君は確かに、もう小さな女の子じゃない。俺が悪かったよ」
「……本当？本当に、そう思う？」
確かめる、というより、イエスという答えをせがむように、ルクレチアが問いを重ねる。かみ殺しても、頬が緩む。駄目だ、怒らせる。それでも、こらえようがない。ぷっと、エドアルドは吹き出した。途端にルクレチアは憤慨して、
「兄さま！」
「ご、ごめんごめん。いや、別に君が子供っぽいとか、そういうことじゃないんだ」
慌てて取り繕うにも、その言葉では弁解になりようがなかった。ルクレチアは眉を吊り上げ、
「もう知らない、兄さまなんて嫌い」
そう強く言ってぷいとそっぽを向く。やっぱり怒らせたか。それでも、どうしてこの子はこんなに可愛らしいのか。自分の容量の悪さを悔やみながらも、エドアルドはどうしても、それを思って笑った。あまりやりすぎると、本格的に嫌われる。今のうちに何とか修復しなければ。思っていると、ルクレチアは彼に背を向けて歩き始めた。ソファに座ったまま、エドアルドは苦笑して、
「悪かった、謝るよ、ルゥ。君はもう立派な大人だ。だから」
「そんなこと言って、煽てても駄目。兄さまなんか知らない」
ルクレチアは振り返ろうとさえしない。今回は部が悪いらしい。その上、取り付く島もないようだ。困った、そう思いながらも、エドアルドの顔から笑みは消えない。立ち上がり、困ったように彼は息をついた。
「そんなこと言わないでくれよ、ルゥ。哀しくなるだろ」
「そうかしら。兄さま、本当は意地悪なんだもの。ルゥが嫌いになったって、きっと何ともないわ」
「……そんなこと、ないよ」
冷たい彼女の言葉に、エドアルドの声が遅れる。違和感を覚えたのか、ルクレチアが振り返った。困惑の表情で、そ

れでも笑って、エドアルドは彼女を見ていた。見つけたルクレチアの顔が、強張る。
「……兄さま？」
「君に嫌われたら、本当に哀しい。本当にごめん……ルクレチア……許して、くれる？」
口許は笑っている。けれどその瞳は、どこか哀しげだった。ルクレチアはそれに驚き、反射的に叫ぶ。
「やっ……やだ、兄さま！ルゥが兄さまのこと、嫌いになるわけないじゃない」
叫ぶように言ってしまった後、ルクレチアは我に返った。本当は、もう少し困らせてから許そうと思っていた、そのはずだったのに。
年上の従兄は、いつも自分を揶揄って遊ぶ。嫌ではないが、もう自分だって十七歳にもなるのだ。いい加減、子ども扱いはやめて欲しい。だから今回はとことん困らせて、もう少し苛めるつもりだったのに。思いながらも、ルクレチアは焦っていた。こんなはずじゃなかった。意地悪して、謝らせて、許す代わりに、また甘えようと思っていただけなのに。
「ルゥ……」
「ごっ、ごめんなさい、ルゥが言いすぎたわ。だから兄さま、私、兄さまのこと、嫌いになったりしないから！だから……」
そんな顔をしないで、そう言いかけた言葉は、彼女の口から出ては来なかった。唇が動きを止める。エドアルドの表情が、僅かに緩んだ。笑みが、ゆっくりといつもの姿を取り戻す。それに、気付かないままルクレチアは安堵の息をついた。そしてもう一度、謝罪の言葉を重ねる。
「兄さま……ごめんなさい」
「いや、俺の方こそ……悪かった」
エドアルドはゆっくりとルクレチアに歩み寄る。目の前に来た彼の、少しだけ高い位置の顔を見上げ、ルクレチアは少し笑った。良かった、兄さまは許してくれる。この人に、嫌われなくて良かった。思っていると、エドアルドの手がすっと伸びた。髪を撫でるのか。そう感じて、ルクレチアの表情は更に緩んだ。
髪を乱されるのは、確かに、あまり好きではない。けれどその手が、彼女は大好きだった。いい子だと褒められる事も、本当は嫌ではない。それでも、もう自分も十七歳にもなるのだ。子供っぽい事は解っている。でもそれで揶揄われるのも、癪に障る。
この人に触れられるなら、小さな従妹としでではなくて、本当はもっと、危うげに触れられたい。それが彼女の願いだった。口には出せない。出してしまえば、きっとこの人は自分の近くには来なくなる。だってあの時、逃げたのは私だもの。びっくりして、怖くなって、やめてと叫んでしまった。この人が優しいのは、私が年下の従妹だからだ。そうでなかったらきっと、他の誰かのところに行ってしまう。せめて、側にいて欲しい。いてくれるなら、小さな従妹のままでもいい。その手が優しく髪を撫でてくれるなら。近くにいてくれるなら。
「……ごめん」
目を閉じて、エドアルドの手が伸びるのを待っていたルクレチアに、言葉だけが聞こえた。手はそれ以上彼女に伸びずに、下に降ろされる。いつものように撫でてくれると思い込んでいたルクレチアは、驚いて顔を上げた。困り顔で、エドアルドはそこに立っている。どうして撫でてくれないの、そう言いそうになって、ルクレチアはその言葉を飲み込んだ。
「兄さま……」
「ごめん、ルクレチア……」
その謝罪は、何のためのものだろう。ルクレチアには解らなかった。けれどそれでも、彼女は首を強く横に振って、
「いいの、ルゥも、いけなかったの。兄さまは、何も悪くないわ。ルゥが……」
言葉が途切れる。何故か涙がこみ上げて、ルクレチアはその瞳を強く閉じた。何だか、何かが変だ。どうして自分は泣くのだろう。単に従兄は、自分の悪ふざけを謝っているだけなのに。自分は、それをやめて欲しいと主張して、その主張が通ろうとしているのに。
「ルクレチア」
エドアルドの声が、静かに彼女を呼んだ。気がつくと目の前に、彼の胸が迫っていた。そのまま抱き寄せられて、ルクレチアは混乱する。
「に……兄さま？」
「泣かないでくれよ……叔母上やばあやに、叱られる」
困りきった声の後に、優しく背中を叩かれる。寄りかかって、ルクレチアは瞳を閉じた。無意識に、眉間にきつく皺が寄る。
この人はやっぱり、自分を子ども扱いしている。こうして抱いていたら、きっと落ち着いて、泣き止むと思っている。子供扱いに怒って、怒ったことに自分で混乱して、それで泣き出したとでも思っているに違いない。それはそれで違ってはいないのだが、そう思われていることが、何故か悔しい。
「……泣いてはいないけど……兄さまの意地悪は、前からでしょ」
強がるように言って、ルクレチアはエドアルドの体を、強く押し返した。腕が解けて、体が離れる。どうしたらいい

のか解らない。自分には、こんな風にしか出来ない。本当はどう思っているのか、言葉に出来ない。どうしてなのか解らない。だから、どうしようもない。思いながら、ルクレチアは少しだけ恨めしげにエドアルドを睨んだ。
「ルゥ……」
「兄さま、私もう、抱っこされて喜ぶほど、子供じゃないんですからね」
べ、と舌まで出してルクレチアは言った。エドアルドは一瞬、放心したようにその様子を眺めて、それからすぐにも苦笑すると、
「そうだね。気をつける」
「気だけじゃ駄目。本当に謝るつもりなら、誠意を見せてくれなくちゃ」
「誠意？」
人差し指を立てて、ルクレチアが詭弁を気取るように言う。エドアルドが目を丸くさせると、彼女は得意げに言った。
「そうね……もうすぐお昼だし……どこかに食べに連れて行ってくれたら、許してあげるわ」
強気な科白がその口から出る。エドアルドがぷっと吹き出し、ルクレチアは唇を尖らせる。
「何よ、兄さま。何がおかしいのよ？」
どうせ、子供だと思っているに違いない。でもいいのだ。子供っぽい年下の従妹の相手なら、この人はしてくれる。やさしいから。だから今はこうして、もう少し甘えたい。大好きだから、離れたくない。
大好きだから、離れたくないーーー。
「しょうがないな。解りましたよ、セニョリータ。お連れしましょう」
おどけた様子でエドアルドが言う。ルクレチアは、その言葉に花が綻ぶ様に笑った。エドアルドの笑顔が、いつもの、優しい従兄の表情になる。
「着替えておいで。ああ、肩の出ない服にするんだよ」
「え、どうして？」
最後のエドアルドの言葉に、ルクレチアは首をかしげる。エドアルドは苦笑して、
「ばあやに叱られるし、昼間は日差しが強いから、日焼けするよ。君は叔母上と一緒で、肌が弱いだろ？」
「……はぁーい」
その言葉にルクレチアは肩をすくめる。そのまま身を翻して駆け出す彼女を、エドアルドは微笑みながら無言で見送る。
「ジュリオ、おいで」
どこにいたのか、呼ばれた子猫がニャー、と、まるで返事でもするように鳴く。じゃあね、兄さま、すぐに支度するね、そう言い残してルクレチアは部屋を出て行く。一人その場に残って、エドアルドは苦笑を漏らした。
とんだ醜態を見せた、そんな気がする。あの子に嫌いだと言われた時、自分は一体どんな顔をしていただろう。いや、あの子の態度を見ていれば解る。いつになく狼狽してしまった。取り乱しすぎた。もしかしたらもう、隠してはおけないのかもしれない。思ってエドアルドは薄く笑った。
解っていたことだ。この幸福は長く続かない。今までのように、彼女が数日の間だけここに逗留しているだけなら、何とでもしたかもしれない。けれど、いつと知れることのない、奇妙な滞在は、今まで以上に自分を狂わせる。いつまでいるのか解らない、いついなくなるのか解らない。いっそ、二度と会わないのなら、その方が自分は救われる気がする。
二度と会えなければ、姿を見なければ、この手で、触れなければ。思うと、胸がきしんだ。近くにいればいただけ、思いは募る。手を延ばして掴もうとすれば、たやすく捕まえられる。けれどそれは出来ない。掴んで引き寄せて、拒まれたら。あの時のように、嫌だと叫ばれたら、どうすればいいのだろう。そして繰り返し思う。愛おしい。けれどそれを知られたなら、きっと彼女は逃げてしまうだろう。こんな風に近くにいられるのは、自分が優しい従兄を演じている間だけだ。無くしたくない。叶うなら、支配したい。側においてずっと見詰めていたい。自分だけのものにしたい。
自分自身の胸の中に渦巻く思いを、彼は嘲笑した。この世界に、永遠は欠片もない。今はこんなに焦がれていても、手に入った瞬間、その思いが、消えてなくならないとも限らないのに。どうしてこんなにも、自分は彼女を求めるのだろう。側においておくだけの女なら、労せずとも幾らでも手に入る。夜伽も、妻たる女も、戯れの相手にも、不自由する身分ではない。なのにどうして、自分はあの子がこんなにも、欲しいのか。年の離れた従妹は、まだ本当に、子供じみた少女だと言うのに。
どれだけ考えても答えの出ない疑問を、彼は解くのをやめた。今は考え事をしていられる時ではない。暫くしたらまた、ルクレチアはここへやってくるだろう。話の流れで昼食を外で取る羽目になったし、それならそれで自分も、身支度を整えなければならない。食事を外で、と言ったら、またばあやに何か言われるだろうか。ルクレチアにジャンクフードなど食べさせたら、叱られるかもしれない。
思いながらもエドアルドは歩き出す。まずはシャワーか。そう言えば、昼も昼だが、夕べから何も食べていなかった。こんな空腹で外へ出たら、倒れやしないだろうか。思いをめぐらせていると、部屋のドアを開閉する音とともに、いつもの、老女中の声が響いた。
「若様、起きておいでですか」

「ああ……おはよう……にしても、遅すぎるかな」
老女中は、くしゃくしゃのシャツと皺だらけのスラックス姿のエドアルドを見ると、
「そうでございますね……それでも、お出かけなさるとか」
「うん……ルゥと出かけてくるよ……どうしてか、昼飯を食わせることになった」
言いながらエドアルドは笑う。老女中は少し困った様子で、それでも微笑むと、
「若様、解っておいででしょうが」
「ルクレチアを連れて、変な所には行かないよ。まああの子は、時々変わったものに興味を示すから、市場をめぐりたいとか、言い出しそうだけど……」
「そのくらいなら宜しゅうございます。それでも若様、夕食までにはお戻り下さいましね。エリザベッタ様が、そう言っておいででしたから」
「……ああ、解った」
叔母の名前が出て、エドアルドの返答が遅れた。話があるのはこちらも同様だ。昨夜はルクレチアを追い出して、父と二人で、一体何を話していたのか。奇妙に、エドアルドの心の中にそれは引っかかっていた。ばあやはにこにこと笑って、エドアルドの身支度を手伝い始める。
「折角のデートですからね、また変な、ペンキをぶちまけたような柄のシャツなんか、御召しにならないで下さいましよ」
「デートって……ばあや、俺はルゥと飯食いに行くだけだぜ？大袈裟な」
茶化すような老女中の言葉に、思わずエドアルドは反論する。ばあやは笑いながら、
「あのくらいの女の子は、年上の男の人と食事をするだけでも、そういう風に思うものですよ。あんまり子供扱いして、お嬢様のご機嫌を損ねないように、お気をつけなさいまし」
「……努力するよ」
この老女中は、どこまで解って物を言っているやら。思って、エドアルドは苦笑した。

エドアルドの予想通り、その外出は、昼食のみに留まらなかった。町へ出たルクレチアは、まず食事を、それから唐突に、買い物に行きたいと言い出した。グラローニは、決して都会と言える土地ではない。大型のデパートや、小洒落たブティックなどあろうはずもない。屋敷で扱う、いわゆる高級雑貨は、出入りの御用聞きが用意しているらしいが、エドアルドもその細かいルートは良く知らない。何が欲しいと言えば、屋敷の誰かが手配して、気がつけば手元にある、という暮らしだ。
それでも、エドアルドはそれなりに町の地理に通じていた。大学に通うようになってから、随分と外のことを覚えた。それまでは外出するにも、必ず使用人が一人以上、付き従っていた。いい加減鬱陶しいと言ってそれをやめさせて以来、彼は町の様々な場所に足を踏み入れていた。この町は半ばボロージアの所有物のようなものだ。迷ったとしても屋敷へ行きたいと言えば、どうにか帰りつくことは出来たし、素性が知れれば屋敷に人が走る事まであった。何か粗相をすれば後が解らない、と、こそこそ話しているのを聞いたこともある。自分の父が、勝手に外出した息子の処遇に対して何かしら行使する、とは考え難いが、この辺りの人間は多かれ少なかれ、ボロージアの家に対し、どこか畏怖めいた感情を抱いている。が、子供の頃は逆に、誘拐されそうな目にも会った。とは言えその後にも、父や祖父が強権を振るった事もない。エドアルドの方が、無防備だ、と叱られるほどだった。
男に対して、当主は甘くない。それどころか放任的だ。自己責任の行動を重んじる、と言えば聞こえがいいが、何か事を起こしても、ボロージア事体が取り合わないような、そんな態度を示す事も多い。分家の手前、本家の人間の不祥事の後始末には、結局執事が走る事にはなるのだが、その場で父親の姿を見た事は、殆どない。帰宅して顔を合わせれば罵倒されるが、それも親が息子を叱るようなものではなかった。恥をかくのは勝手だが、もっと上手く立ち回れ、いつかはそんなことすら言われた。そして尚且つ、自分の父親は質が悪い。自分の若い頃にはこうした、と、少々大袈裟に、彼自身の冒険譚を語るのだ。貴方は俺を馬鹿にしているのか、といつか尋ねたら、馬鹿を馬鹿だと思って何が悪い、と開き直られたこともある。
何かしらの不祥事を起こしても、そんな男に助けられたくはない。だから、言われた通りになるのは癪だが、上手く立ち回るに越した事はない。エドアルドはそんなことを思っていた。実際、上手くやれているかどうかは解らない。しかしバールで酔いつぶれたのも、裏通りで不逞の輩に絡まれたのも、僅か数度の事だ。その都度父親にコケにされて、以来一度たりともそんな憂き目にあったことはない。腕っ節が立つとか、めっぽう酒に強い訳ではないが、その辺りは程度を覚えればどうとでも切り抜けられる。もっとも、それは一人歩きの場合だけだ。ボロージアに関わる人間と歩いていれば、その限りでもない。
「あー……楽しかった。兄さま、私、何だかお腹がすいちゃった」
「何だか、かい？」
昼食を採ったのは、いつだっただろう。町の中央にそびえる、教会の時計塔を眺め、エドアルドは苦笑する。そろそろ時刻は、夕刻と言って差支えがない。午後のティータイムもとっくに過ぎて、これではハイティーの扱いだな、と何気に

思いながら、無邪気な従妹にエドアルドは言った。
「そろそろ帰ろう。叔母上も、待っているだろうし」
「えー、もう少しならいいでしょ。ダメ？」
ルクレチアがその眉をしかめて、上目遣いでエドアルドを見る。あざとくさえ見えるその仕種に、エドアルドは僅かだが眉を寄せる。これはわざとだな。思って、エドアルドは彼女から目を逸らした。
「ダメだよ。これ以上は。帰るのが遅くなる」
「だったら、夕食も外で食べましょうよ？それなら……」
無邪気と言おうか、暢気と言うべきか。はしゃいでルクレチアが提案する。その様子もまともに見ることもなく、
「ダメだ。本当に、叔母上と約束があるんだ」
「母さまと？何の約束？」
問われて、エドアルドは返答に窮した。約束と言っても、ばあやの口伝えで、叔母が自分を待っているらしいと聞いただけなのだが。困惑していると、ルクレチアがその腕にからみついた。えへへ、と笑う彼女を見下ろすと、ルクレチアは言った。
「母さまと約束しているなら、仕方ないわ。でも兄さま、また連れてきてね。約束よ」
無邪気なその表情に、無意識のうちにエドアルドの頬が緩む。腕を組むような格好で、二人は石畳の町並みを歩き出す。
「君は一体、何がそんなに楽しいんだい？」
歩きながら、くすくすと笑い続けるルクレチアに、エドアルドが問いかける。ルクレチアはご機嫌で、
「だって、グラローニに来てから、やっと二回目のお出かけだもの。お屋敷のお庭も広くて綺麗だけど、毎日同じところをお散歩だもの。飽きちゃった」
「あれ、そうなのかい？」
やっと二度目の、という言葉に、エドアルドが首をひねる。ルクレチアはそんな彼を見ないまま、
「そうよ。ばあやが、一人で外に出てはいけません、って」
「そうだね。君はこちらの地理に詳しくないし……悪い輩にからまれたり、攫われでもしたら、大変だ」
不満げな口振りに、エドアルドが小さく笑う。それも不満らしい。頬を膨らませて、
「でも、退屈よ。毎日ずーっとお屋敷の中、なんて。それに私、もう少ししたら、こちらの学校に通うのに。それまでにもう少し、町のことも知っておいたほうがいいんじゃないかしら」
その言葉に、エドアルドは目を丸くさせた。そう言えば、昨日確かそんなことを言っていた。父と叔母が、この子の学校の話をしているとか、何とか。腕にからみつく従妹を見下ろすと、それまでの不服顔はなく、もっと不安げで寂しい、静かな顔が見えた。嘆息するルクレチアに、エドアルドは足を止める。
「ルゥ？どうした？」
「……何でもないわ。ちょっと、不安なだけ」
問われて、ルクレチアはその顔に作り笑いを浮かべる。確かに、不安だろう。血の繋がらない家族と共に、とは言え、ルクレチアがモリエーロにいたのは数年もの間だ。グラローニには、彼女の母親の実家がありはするものの、故郷と呼べるほどの馴染みがある土地でもない。抱きつくルクレチアの腕を解く。何事かと、戸惑う視線を上げたルクレチアの肩を、エドアルドの腕が抱き寄せる。
「兄さま……」
「何も、心配する事はないよ。ここには俺や姉さんもいる。家には、ばあやもいるし。まあ、ばあやは、ちょっと煩いけど」
心もとなげな従妹は、その腕に抱かれると小さく笑った。子猫が身を摺り寄せるような仕種で、ルクレチアはそっとエドアルドに寄り添う。瞬間、ふわりと、甘い香りが鼻をくすぐった。気付いて、エドアルドは問いかける。
「ルゥ……何かつけてる？」
腕を離す。ルクレチアは問いかけに、一瞬目を丸くさせる。が、すぐに、
「ああ……香水よ？ちょっとだけ」
そう言って、どこか照れくさそうに笑う。まだ化粧をしようと考える大人ではないのか、唇さえ素肌のままのように見える彼女は、鳥の羽根が宙を舞う様な、軽やかな動きで、エドアルドから離れて身を翻す。照れを隠すそのしぐさは子供のものなのに、そこにいるのは少女でも淑女でもない、不思議な存在に見えて、エドアルドは数秒、そこに固まった。
「いい香りでしょう？それとも……兄さまはこういうの、好きじゃない？」
「いや……ちょっと驚いて……」
嗅覚というのは、こんなにも人を驚かせたり、敏感にさせたりするものなのか。奇妙なほどにエドアルドは驚いていた。他に言い繕うこともできず、素直に思ったままの答えを口にすると、ルクレチアは少し膨れて、それでも楽しげな笑顔で、

「驚くって何？ルゥが香水なんて、おかしい？」
「ああ……そうじゃないよ」
それでも慌てて、エドアルドは彼女の言葉を否定する。こんなにも早く、見ている目の前で、彼女は変わっていくのか。幼い時から自分の後にくっついて歩いていた、小さな女の子は、束の間見ない間に、途轍もないスピードで大人に変わっていく。内面も外見も、いつか、まるで別の生き物のように、変わってしまう。何だか少し、寂しい。思ってエドアルドは、そう思った自分を笑った。子ども扱いを詰ろうとしていたルクレチアは、笑うのをやめて、目をしばたたかせ、その顔を覗き込む。
「何？兄さま……やっぱり、ルゥには似合わない？」
「そうじゃないよ。君もすぐ、大人の女性になるのかなぁって、そう思って」
笑いながら言って、今一度近付いたルクレチアの頭を、エドアルドが撫でる。さらさらとその髪が音を立てる。こんな風に触れられるのも、あと僅かなのかも知れない。彼女はもう、撫でられる事も嫌がっている。また怒られるかな。思いながらこぼした笑みに、苦いものが混じる。ルクレチアはそれを払いのけようともせず、不思議そうにエドアルドを見上げていた。無防備であどけないその表情を見下ろしながら、エドアルドはその手を収める。
「ああ……もうこういうのも、嫌なんだっけ……ごめん……」
もう子供ではないのだ。安易には触れられない。泣きじゃくる姿を見ても、抱きしめてやれない。そんな思いがエドアルドに満ちる。ルクレチアの表情が、同時に歪んだ。唇を尖らせて、その通りよ、とでも言うかと思っていたエドアルドが、思わずそれに怯む。
「……ルゥ？」
ルクレチアは彼を見上げて、何も言わない。空色の瞳が歪んで、伏せられる。これは、何だろう。自分は何か、ひどいことでもしただろうか。思ってエドアルドはその場で困惑する。ルクレチアは俯いて、小さく首を横に振った。
「ごめんなさい……何でもないの」
「ルゥ……」
「何でもない、何でもないから……」
目を閉じて、彼女が言葉を繰り返す。見下ろすだけで、エドアルドは何も出来ない。彼女は今、何を思ってこんな顔をしているのだろう。寂しそうに見えるのは、気のせいだろうか。優しくされたいと、言葉にしないまでも、自分に訴えているように感じるのは、思い込みか。
暫く、二人はその場所で、向かい合わせに立ちながら、顔も合わせず、エドアルドは戸惑って、ルクレチアは小さく震えて、動かなかった。乾いた、まだ昼間の熱を孕んだままの風が、流れる。さらさらと、二つに分けて結わいたルクレチアの金色の髪が揺れた。甘い香りが、その風に乗せられて、もう一度エドアルドの鼻をくすぐる。こんな風に、装う様になったんだ。もう、子供じゃない。小さな従妹ではない。簡単に手を伸ばして、捕まえてはいけない。いや、捕まえられない。子供でないと言うなら、彼女は一人の女だ。そして自分にとっては、他に並ぶもののない、その「たった一人」になる。
「ルゥ……帰ろう」
俯いたままのルクレチアに、エドアルドが呼びかける。そのまま、無言でルクレチアは頷いた。

屋敷に帰り着くまで、二人は無言だった。隣を歩きながら、振り返ることもなく、互いを盗み見ることすらせず、ただ、目的の場所を目指して歩き続ける。
今日というこの日、一体何が変わってしまったのだろう。歩きながら、エドアルドはそれを思っていた。いつもと変わらないはずの、昼下がりの外出のはずだった。いや、それは出かけるより前から、始まっていたのかも知れない。ソファで寝ていた自分を、彼女が起こしに来た、その時から、眠る前とは世界が変わってしまった。いや、もしかしたら、眠る前にした、あの余りにも儚い接吻から、だろうか。思うと、胸がきしんだ。もう彼女は自分の前で、無邪気に笑ったりしないのだろうか。無防備に駆けてきて、その声で「兄さま」と、呼んではくれなくなるのだろうか。甘えて、膨れて、我侭を言って、ご機嫌を取ると最後には、大好き、と言ってくれたあの声も、もう聞かれないのか。無意識のうちに、眉がしかめられる。見られまいと、振り返ることもできなかった。
それでも、それは解っていた筈の事だ。彼女もいずれ大人になる。誰もが生まれれば、その生を全うして、永遠の眠りにつく。その理と同じに。そしていつか、手の届かないどこかへ去ってしまう事も、同じ様に。
それに気がついたのと、どこかでそれを拒み始めたのは、いつだったか。歩きながら、エドアルドは思いをめぐらせた。隣を歩く幼い従妹が、いつか大人の女になって、自分以外の誰かと手を取って、遠くに消えてしまう。
物心つく頃には、彼女は側にいた。時折屋敷に連れてこられて、いつも自分の後を追いかけてきた。兄ではないのに、兄さま、と、彼女が呼び始めたのは、いつだっただろう。
この子は、いつか大人になって、誰かの元に嫁いだ後にも、こんな風に自分を呼ぶのだろうか。例えば父や叔母のような年になっても、自分は兄でいられるだろうか。従兄妹同士でも、それは叶うのだろうか。
「……ルクレチア」

屋敷裏の、鉄格子作りの小さな門扉を開く。きしんだ音を聞きながら、エドアルドはその名前を呼ぶ。隣でふさいでいたルクレチアが、そっと顔を上げた。瞳は歪んで、不安げに閃く。手を伸ばして、エドアルドは彼女の腕を捕まえた。突然の従兄の行動にルクレチアが戸惑う。
「ルクレチア……好きだよ」
ささやくように小さな声が、エドアルドの唇から漏れた。そのまま彼女を引き寄せて、顔を近づける。
「やっ……兄さまっ……」
「好きだよ」
無理やりに、唇は奪われた。ルクレチアは唐突なその行為に驚くが、身動きも取れない。瞳は見開かれたまま、強張った体だけが、わなわなと震え始める。沈黙は、数秒続いた。押し付けられただけの唇が離れると、ルクレチアの体がその場にくずれる。掴んだままの手に惹かれるように、エドアルドもその場で僅かにバランスを崩した。
「……ルゥ、ごめん」
座り込んだ彼女の手を離して、エドアルドはそれを見下ろす。放心して、ルクレチアは動かない。見ていられず、エドアルドは眉をしかめて、彼女から顔をそらす。
この子を愛おしいと思っている。幼い頃から、ずっと見てきた。たった一人の、年の少し離れた従妹だ。家族も同然の彼女に、自分は何故こんな風に、こんな気持ちを抱くのだろう。遠くを眺める様にして、眉をしかめたまま、誰にも聞こえないほどの小さな声で、エドアルドは呟く。
「君を……愛してる」
それは従妹としてではなく、勿論家族としてではなく、一人の女として。知られてしまえば、もう側にはいられないだろう。自分はこの子の従兄だから、「兄さま」として、こうして近くにいられたのだ。それを失えば、その姿を見詰める権利さえ、ないのかもしれない。なのに。
「っ……ひっ、ひっく……ふぇぇ……」
背後で、細い泣き声が聞こえた。背中越しに見遣ると、ルクレチアは座り込んだまま、その顔に手を当てて泣き出していた。泣かないでくれ、そんな風に。心臓が痛くなる。
胸が引き裂かれる様に、痛い。心ではなく体の全てが、その痛みに悲鳴を上げそうになる。引き裂かれて、いっそ死んでしまいたくなる。この身の総て、何もかもが、痛い―――。
「ルゥ……」
「っ……兄さま……っ」
ルクレチアが、エドアルドを呼びながら顔を上げる。屈みこんで、その耳元で、もう一度エドアルドは囁く。
「君が好きだ……愛してるよ……」
もう元には戻れない。それでも、止まらない。感情の濁流に全てが流されていく。失うものはどれほどだろう。それでも、止められない。
間近でその顔を覗き込んで、エドアルドはくしゃりと顔を歪ませた。自分は、笑っているのだろうか、それとも、泣いているのだろうか。ルクレチアは肩を震わせて涙しながら、エドアルドの、わずかに高い位置にある瞳を見詰め返す。
「に……兄さま……」
無言でエドアルドは、その頬を拭う。指が、涙で濡れた。そのまま頬を撫でると、こらえきれないようにまた、ルクレチアは瞳を閉じる。涙が、溢れて零れ落ちた。熱い涙が、エドアルドの手をも濡らす。小刻みに震え続けるその姿を見て、エドアルドは呟く。
「君を、愛してる……」
謝罪のような言葉だと、胸の内で彼は思った。手の中の、柔らかな頬の感触が心地いい。その感覚にさえ、溺れそうになる。それは、この触れ合いが最初で最後だからだろうか。ぼんやりと、心のどこかで彼は思った。笑ったつもりだった顔が、別の形に歪むのが解る。痛むほどに眉間を寄せて、それでもどこかうっとりとした声で、彼はもう一度、その言葉を繰り返した。
「ルクレチア……君を、愛してるよ……」

Ⅳ

泣き出したルクレチアは、使用人を呼び出して押し付けてしまった。叔母との曖昧な約束も、忘れた振りを決め込んで、エドアルドは私室のソファで、ぼんやりと虚空を眺めていた。泣いて帰ったルクレチアを発見した老女中が乗り込んでは来たが、喧嘩して泣かせた、謝っておいてくれ、と曖昧に言い訳して追い出した。今は一人でいたい。誰の顔も見たくない。いや、今くらいは本当の自分自身でいたい。何も偽る事ない、疲れて、傷ついた、哀れで愚かな自分で。

体を支配する疲れは、後悔の度合いによるものだ。不規則な眠りのためでも、外出によるものでもない。この体を重くしているのは、後悔、ただそれだけだ。どうして自分は、あんなことをしてしまったのだろう。

そうしたいという願いはいつも、心の奥にはあった。子供をあやすように、ではなく、愛しい相手として、ずっと触れたいと願ってきた。それでもそうしなかったのは、拒まれる事を恐れたからだ。解っていたはずなのに、どうして。思いながら、エドアルドは嘆息する。

三年前もそうだった。三年前の初夏の夜、あれは確か、叔母の夫が亡くなった後だ。事後の報告と、この先の叔母の身の振り方について、この家に父と叔母と、分家の人間達とが集まって話し合っていた。分家の言い分など聞く必要などないだろう。しかも彼女の直接の親族でもない人間が、一体何に口出しがしたいのか。エドアルドはそんな思いでその様子を伺っていた。同じ頃、姉も二人目の夫と離婚していた。その場には彼女の話題も上ったらしい。いっそのことアデレードを、ロミッツィの誰かと娶わせるのはどうか、という意見も出たようだが、それは本人が出て行ってねじ伏せたらしい。尤も、分家によって持ち込まれた彼女の結婚は、二度も失敗に終わっているのだ。持ち込む側の考えも甘すぎる。一通りの話し合いの後、結果として叔母はこの家に戻る事なく、その後三年もの間、死んだ男の妻として、モリエーロで半ば軟禁されるように暮らす羽目になった。それ以降も度々、彼女が里帰りする事はあったが、その話し合いがされた日から三年間、ルクレチアは彼女と共についてグラローニを訪れた事はない。

あの時はどうして、あんな事をしたのだったか。ぼんやりと、エドアルドは記憶をめぐらせる。

あの日は、確か遅くまで分家の人間に粘られて、その場にいたわけでもないのに、自分までいらついていた。この家にいることさえ嫌になって、日が暮れる頃には、一人で屋敷を抜け出していた。戻ったのは夜半だったか。

いつものように裏門からこっそり庭に入ると、明かりのついた部屋からあまり離れない庭先の露台に、ルクレチアがいた。大人の話し合いだから、と追い出されて、そのまま放置されていたのだろう。紅茶道具一式と空の菓子皿を目の前に、ルクレチアはぼんやりと座っていた。自分はその時酔っ払っていた。やけになって、というほどでもないが、普段より明らかに飲みすぎて、気持ちも高揚していた。いつものつもりで声をかけようとして、確か、出来なかった気がする。彼女はその時、それまでに見た事がないほど憔悴しきっていた。酷く疲れて、悲しげで、そのまま夜の闇に融けてしまいそうだった。頬には涙の後が見えて、心がやけにざわついたのを覚えている。初めて、手に入れたいと強く思ったのは、この時だったかもしれない。この子もいつまでも子供ではない。いつまでも、子供のままではいられない。今は時折ここに訪れて、幼い頃と同じ様に、戯れることもできる。でもそれが、あとどれくらいの時間、許されるのだろう。こうして側にいられる時間は、どれほどか。側において触れられるのは、いつまでなのだろう。思うと、いてもたってもいられなくなった。それで名前を呼んだ。彼女はいつものように振り返って、慌てて涙をぬぐって、いつものように自分を呼んだ。

後のことは、あまり思い出したくない。無くしたくないと思った時に、余りにも取り乱しすぎた。それで事を急いたのかもしれない。いや、幾ら急いても焦っても、あんな事はするべきではなかったのだ。それは先程も同じだ。やっと彼女はやここへ来てくれたというのに。例えそれが、どんな事情であろうとも、だ。

部屋のドアが外から叩かれる。またばあやでも来たのか。億劫に思って、エドアルドは溜め息をついた。今は誰にも会いたくない。このまま眠ってしまいたい。そして迎える朝、何もかも忘れて、生まれ変われるなら、どんなにいいだろう。返答もせず、エドアルドはそんなことばかりを思った。もし時を遡れるのなら、三年前のあの夜のことも、先程のあの接吻も、全てなくしてしまいたい。こんなにも悔やむなら、一時の欲望に任せて、あんな風に触れるのではなかった。ドアは幾度も、外から叩かれる。いらついて、エドアルドは声を荒げた。

「誰だ。今は一人にしておいてくれと、さっきばあやにも言ったはずだ。下がれ」

ドアをたたく音は、途切れる。沈黙が降りると、今一度エドアルドは嘆息した。このまま、ここで眠ってしまおうか。いや、せめてベッドに移動しようか。それとも、屋敷を抜け出して、いつものバールにでも。心は落ち着かず、どこかざわついていた。今夜自分は、眠れるのだろうか。このまま日が落ちて、闇が降りてきたとしても、朝は本当にやってくるのだろうか。ごく当然の事さえも、疑わしく思える。それは何のためだろう。不安と後悔のためか。それとも、ここにある絶望のためか。

「兄さま、あの……」

細い声が聞こえた。一瞬、心臓が止まるかと思いながら、エドアルドはその場で目を剥いた。部屋の扉は外から開かれる。夕暮れの薄闇の中、聞こえてきたのはルクレチアの声だ。声にはまだ、涙が絡んでいる。開けきらない扉の向こうから、声は続いた。

「母さまが……あの……」

戸惑う、というより怯えているように聞こえる。エドアルドは息さえつめて、その声を一音たりとも聞き逃すまいと、耳を澄ませる。
「お話が、したい、って……来て、くれる？」
震える小さな声は、やっと聞き取れるほどだった。身動きも出来ず、エドアルドはまだ息をつめたままだ。どうしてここに彼女が、と、やっとその思いに至っても、他には何も考えられない。それほど彼は驚き、そして混乱していた。どくどくと心臓が高鳴る。体は強張って、息さえ出来ない。
「……兄さま？」
もう一度声がして、その後に、その影がドアの中へと進んだ。顔は良く見えない。けれどそれでも、そのおびえと緊張が、手に取るように解る。
「……ごめんなさい、あの……」
「叔母上が、話したい、って、言ってるのかい？」
声は震えていないだろうか。動揺が、伝わりはしないだろうか。その言葉に答えながら、そればかりを彼は思った。ルクレチアがこの部屋に来たことに、確かに驚いている。けれどどうして自分は、こんなにも動揺して、緊張しているのか。落ち着け。落ち着いて、もう二度と、暴走するな。胸の中で唱えながら、エドアルドはソファから立ち上がる。
「あの、でも……兄さまが、嫌なら……」
「いや、構わないよ……元々、戻ったら一度伺おうとは、思っていたんだし」
それを勝手に反故にしたのも、自分なのだが。動揺して、痛いほどに心臓を鳴らしながらも、どこか冷静にエドアルドはそう思って苦笑した。体中に震えが走る。何か悪い病気でなければいいが。それとも、これが当たり前なのだろうか。ついさっき泣かせた彼女の前で、平静など装える訳も、ないのだから。思いながら、ゆったりとした足取りでエドアルドは歩き出す。近付く彼の姿をルクレチアは目だけで追って、側に彼が立つと、その視線をそらした。俯き加減で固まって、そのまま彼女は僅かの間、動かない。
「……どうして君が、ここに？」
僅かに低い彼女を見下ろして、エドアルドが問いかける。俯いたまま、ルクレチアは何も言わない。恐らく、自分の機嫌が悪い事を、叔母はあの老女中に聞いたのだろう。他の使用人では、きっとすげなく追い返される。だが呼びに来たのがルクレチアなら、彼は何かしら、応えざるを得ない。少なくとも一言、伝言くらいはするだろう。それを見越しているらしい。お嬢様育ちでおっとりとしてはいるが、かなりの策略家だ。流石はあの父の妹だけのことはある。思ってまた、エドアルドは苦笑した。ルクレチアは黙り込んだまま、俯いて動こうともしない。平気でいられなくとも当然だろう。それより、母親に言われたにしても、彼女がここへ出向くことは、にわかには信じがたい事だった。無理やりに唇を奪われて、一方的に気持ちを告白されて。まだ彼女は十代の少女だ。驚いたり怯えたりしても、何もおかしくはない。
「行こうか、ルゥ」
極力平静を装って、エドアルドが声を投げる。返答も、頷く仕種も見せないまま、ルクレチアはきびすを返し、彼の先を歩き始める。
もう口も聞いてもらえないのだろうか。歩きながら、エドアルドは苦笑していた。目の前の背中は小さい。肩も、折れそうに細く見える。ショックを受けて立ち直れない、そんな様子がその背中から丸解りだ。感情を隠したり、誤魔化す事もできないのだろう。それは幼いからなのか、それとも、彼女が素直だからなのか。
出来ることなら今のままずっと、無垢であってほしい。あざとく男を誘うような、そんな女にはなってほしくない。戯れに、愛のない相手と遊戯の様な恋をするような、そんな大人になってほしくはない。ずっとこのままでいてくれたら、どんなにいいだろう。出来るならこのまま、ガラスケースに閉じ込めて、ずっと自分の側においておきたい。いや、刻一刻と代わり続ける彼女を、ずっと側で見ていたい。許されるなら、触れ合いたい。抱きしめて、口付けして、叶うなら、この体の中に取り込んでしまいたい。その背中を見詰めながら、エドアルドは思いに耽る。ルクレチアは振り返らない。
やがて、二人はその部屋の扉の前に辿り着く。足を止めて、ルクレチアがその扉を叩くと、中から、お入りなさい、と柔らかな声が聞こえた。扉が開く。四つの部屋が続きになっているその部屋のメインルームの中央には、食卓がすえられていた。来客を饗応するが如く、今の部屋の主であるエドアルドの叔母、エリザベッタと、控える年若いメイドの姿が見える。テーブルの上には食事の支度がされていた。今から夕食なのだろうか。
「御免なさいね、エドアルド。呼びつけてしまって」
申し訳なさそうにエリザベッタが笑う。ドアの中に足を踏み入れて、エドアルドはその顔に笑みを浮かべた。心の中からではなく、それは、条件反射で浮かび上がる表情だ。笑ってなどいられる状況ではない。が、ここで何かしら事を起こして、父に知られれば後が面倒だ。思いながら、エドアルドは頭を下げる。
「いいえ。僕も、叔母上に聞きたいことがありましたから。一度ちゃんと伺おうと思っていたところです」
「あら、そうなの」
叔母の様子は普段と変わりがない。室内を見回すようにして、エドアルドは何気ない様子で問いかける。
「今から、夕食ですか？」
「ええ、貴方のね」

答えは、何やら的外れだった。目を丸くさせると、エリザベッタは軽く笑って、
「ばあやに、貴方が部屋に閉じこもって、人払いをしたままだ、と聞いたものだから。お腹がすいているでしょう？エド」
まるで小さな子供に尋ねるように、どこか意地悪く叔母に問われる。エドアルドは苦笑して、
「まあ、満たされてはいませんね」
「だったらどうぞ、お座りなさいな」
にこにこと叔母は笑っている。促されて、エドアルドは一礼すると自分のために用意された、主賓の席についた。食事と言っても大袈裟なものではなく、普段一人で取る時と同じ様な、簡単なメニューだ。パンとスープ、そしてメインとサラダが目の前に並ぶ。彼女の前には白磁のティーカップの中に、琥珀色の紅茶があるばかりだ。奇妙な席だ。思っていると彼女はまた笑って、
「さぁ、どうぞ。召し上がって」
「……戴きます」
時折、この叔母がよく解らなくなる。そろそろ四十も過ぎようという年齢なのに、いつ会ってもどこかあどけなく、無邪気な部分を持っている。かと思えば、時折見せる憂い顔には、奇妙な色香が漂っていた。世の男に言わせれば、そのギャップが彼女の魅力なのだろう。甥である上、二十歳近く年の離れたエドアルドにはあまり関わりのない話だが、解らないでもない。澄んだ水色の目は、楽し気にエドアルドを眺めている。小さな子供を見ているような、穏やかで優しい視線だ。が、エドアルドは困ったように、叔母に訴えた。
「あまり……じろじろ見ないでもらえませんか。僕でも、ちょっと……」
「あら、ごめんなさい」
言い難そうな彼の言葉に、彼女はくすくすと笑った。頬杖をついて、彼女は言葉を続ける。
「こうして見ていると、お兄さまに良く似ているなあって思って」
「……父に、ですか」
笑う彼女は、まるで少女のようだった。何だかその様子に、奇妙にエドアルドは辟易していた。一体どんな顔で対応すればいいのか、解らなくなる。その様子もおかしいのか、彼女はまたくすくすと笑った。照れているとでも思っているらしい。エドアルドは困惑して、困り顔で言葉を返す。
「親子ですから……似ていないことも、ないと思いますが」
「そうね。親子ですものね」
エリザベッタはまだ笑っている。何故この人は、自分をここに呼んだのだろう。思いながら、エドアルドは食事を続ける。
目の前のメニューが大方片付く頃、側に控えていたメイドが動き出す。空いた食器が片付けられ、食後のエスプレッソが運ばれて来ると、エリザベッタはメイドを下がらせた。室内には、二人だけが残される。ルクレチアは、いつの間にか姿を消していた。続きの寝室にでも、引っ込んだのだろうか。白いカップの中の、夜の闇のような飲み物を、見るでもなく見詰めて、エドアルドは思った。
「ねぇ、エドアルド」
「何です、叔母上」
問われるように呼ばれて、問い返すようにエドアルドが言う。エリザベッタは困ったように笑っていた。肩をすくめて、彼女は言葉を紡いだ。
「ルクレチアと、喧嘩をしたの？」
「……ええ、まあ」
話というのは、そういうことか。泣いて帰った彼女のことをエレナに詰め寄られ、その時弁解するのに使った言葉を思い出し、エドアルドはその奇妙な夕食の席の事を漸くのように理解した。娘が泣いて買えれば、彼女も母親だ、気にしない訳がない。これは、まずかったか。思いながらエドアルドは、言い訳を考え始める。が、軽い嘆息が聞こえて、直後、
「きっとあの子が、何か我侭でも言ったんでしょう？ごめんなさいね、エドアルド」
「……は、あ……いや、そんな……」
予測とは全く違う叔母の反応に、エドアルドは困惑する。エリザベッタはそのまま、申し訳なさそうな顔で微笑み、
「あの子も、反省しているみたいだし……良かったらこれからも、仲良くしてやってくれるかしら」
「ああ、ですから、それは……」
「我侭がすぎれば、叱ってくれてもいいし……私も、随分あの子を甘やかして育ててしまったから……」
「……ルゥは、いい子ですよ」
ここは、素直に彼女の話に、乗っておくべきか。思ってエドアルドは苦笑する。エリザベッタは少し驚いたように、
「そうかしら……いつまでたっても本当に子供で、貴方にも甘えてばかりで……迷惑をかけていない？」
「とんでもない」

少しおどけるように言って、エドアルドは肩をすくめて見せる。彼女の、どこか不安げな表情が解けた。父と自分同様、この人とルクレチアも、良く似ている。ほっとした時に見せる、安堵した顔は、どこか幼く、余りにも無防備だ。
「良かった……これであの子も、安心だわ」
「ルゥが……何か？」
ほっとした顔で発せられた叔母の言葉に、エドアルドが尋ねる。彼女はくすくすと笑うと、
「貴方に嫌われたと思って、随分しょげていたのよ。母さまも謝ってあげるから、って、そう言ってもなかなか、泣き止んでくれなくて」
本当に子供なんだから、と、彼女が付け足す。見当違いの過ぎる言葉に、エドアルドはやはり苦笑を禁じえない。何があったのか、ルクレチアはこの母親には、話していないようだ。いや、誰かに話せるような事でもないし、彼女がそうするとは、到底思えない。それでも、ここに戻っても、ずっと泣いていたのか。
「エドアルド、あの子には貴方だけが頼りなの。もうそんな年でもないけれど、仲良くしてやってね」
「そうですね、もうそんな年でも、ありませんが」
重ねられる叔母の頼みごとに、エドアルドは苦笑で返す。叔母は安堵の息を吐き、そのまま、少々重い口調で言葉を続けた。
「モリエーロにいた頃には、あの子は私とずっと二人きりだったの。本家と言っても、私達は離れで暮らしていたし、夫だったあの人も、私達のところに来るのは、月に何度かだけだった。お友達もいたんでしょうけど、そんなでは、呼ぶことも出来なかったし……随分寂しい思いをさせてきたわ。ここへ来て、あの子がとても楽しそうなのは、貴方のおかげだと思うの」
「僕も、随分とルゥには、楽しくさせてもらっていますよ」
沈んでいきそうな言葉を、救おうとするように、エドアルドが言葉を返す。エリザベッタは細く笑って、
「そう言ってもらえると、本当に嬉しいわ。貴方があの子の側にいてくれれば、私も色々と、安心だし」
「ばあやは、冷や冷やしているようですよ。出かける前にも、変なところに連れて行かないようにと、釘を刺されたし」
「そう？エレナは昔からそうよ。心配性なの」
おどけるようなエドアルドの言葉に、くすくすと彼女は笑った。そしてもう一度、彼女は同じ言葉を繰り返すように言った。
「エドアルド、ルクレチアと、仲良くしてやってね」
「僕はあの子を嫌いにはなりませんよ、叔母上。安心して下さい」
望まれるであろう言葉を、エドアルドは選ぶ。その言葉に満足したように、彼女は優しく微笑んだ。
「有り難う、エドアルド」
嫌いにはならない。いや、嫌われるとすればむしろ、自分の方だ。表面だけの笑顔を浮かべて、エドアルドは自分の中の、どこか冷たく凍える場所でそれを思った。彼女は、自分とルクレチアの間に何があったのかを、知らない。ルクレチアが泣いていた理由も、だ。知られれば、この叔母はどんな顔をするだろう。驚いて、見たこともないほど驚愕するだろうか。それとも、子供の戯事だと、一笑に伏すだろうか。
彼女を愛している、一人の女性として。そう言ったなら、目の前のこの人は、どんな顔をするだろう。幼い日に、ルクレチアが、自分のことを大好きだと言ったその時と同じ様に、穏やかに笑うだろうか。だとするなら、あの頃のように、子供の言う事だと、まともに取り合ってすらもらえまい。
それとも、彼女を連れてどこかへ消えてしまうだろうか。自分を危険だと判断して、彼女と自分とを、引き離してしまうだろうか。もしあの子に嫌われたなら、いっそその方がいいのかも知れない。思うと、エドアルドの胸はきしんだ。
好かれないまでも、嫌われたのなら、二度と会えない遠くに連れ去って欲しい。この先二度とその姿を見ることもないのなら、これ以上彼女を傷付ける事もないだろう。手を伸ばしても届かない、遥か彼方にいるのなら、どんなに叫んでも、声の届かない遠くにいるのなら、いっそその方がましだ。あの瞳が哀しく歪むことに比べたら、それは些細な痛みでしかない。いや本当は、それすらも身を裂くほどに、胸に痛い。それでも、手に入らないなら、この先二度と会えない方がいい。会えば求めてしまう。そしてそれはきっと、止まらない。
「エドアルド、どうしたの？」
黙り込んだ彼に、叔母が問いかける。我に帰って、エドアルドは苦笑した。誤魔化すように、彼は何気なく話題を変えた。
「そう言えば、ルクレチアはこちらの学校に通うみたいですね」
「ええ……トゥーレに。夏休みが終わり次第ね」
「トゥーレ……姉さんが通っていた、あの女子校ですか」
聞いたことのあるその名に、エドアルドは目を丸くさせる。かつて姉が通っていた、いわゆる良家の子女だけが通う、六年制の女子校だ。くすくすとエリザベッタは笑って、
「ええ、そうよ。私も通っていたから、色んなことが良く解っているし。グラローニは本当に、心安くていいわ。あの

子を学校へ行かせるにも、こんなに安心だもの」
　満足そうな表情で彼女は言った。へぇ、とだけ返して、エドアルドはそれ以上何も言わない。エリザベッタの表情が僅かに曇ったのは、間もなくの事だった。エドアルドが首を軽くかしげると、彼女はどこか申し訳なさげに言った。
　「その頃には……私達はアパルトメントに移るのだけど」
　「ここを……出るんですか？どうして」
　叔母の言葉に思わずエドアルドが尋ねる。彼女は困った笑みのまま、
　「あまり外聞が良くないでしょう？二度も出戻りした人間が、この家にいるのは。この家の当主は貴方のお父様で、私の父ではないのだし」
　「そうでしょうか……ここは貴女の生まれた家ですよ。部屋だって余っているし……何の不都合もないと思いますが」
　答えは腑に落ちない。外聞が何だと言うのか。あの父が、そんなことを気にする筈もないのに。思って、エドアルドは打たれたようにはっとする。そして、
　「喧しいのは、世間ではなくて分家ですね」
　吐き捨てるようなエドアルドの言葉に、叔母は苦笑を漏らしただけだった。そういうことらしい。思って、エドアルドは嘆息する。
　「どうして父は、あんな奴らの言うことをいちいち聞くんでしょうか。ボロージアの当主はあの人でしょう？分家の人間にしても、祖父よりずっと前の代の当主の、外腹の家系だ。未だにこの家にしがみ付こうなんて、どうかしている」
　「ボロージアには、それだけの価値があるということ、でしょうね」
　そう言って、彼女は力なく笑う。意味が良く解らず、エドアルドは眉をしかめる。
　「貴方のお父様が悪い訳ではないわ。あまり責めてはだめよ、エドアルド」
　無言のままのエドアルドを諭すように彼女が言う。彼は何も答えない。そのボロージアの価値のために、彼女は幾度も翻弄されてきた。一度目の結婚は、祖父が持ち込んだらしい。それも商売のために。間もなくそれは解消されたが、すぐにも彼女は二度目の結婚をさせられた。もしかしたら分家の連中は、この幸薄い叔母に、三度目の縁談を持ち込む気かもしれない。それとも、それを持ち込むのは、父か。思うと無意識に、眉が寄せられた。その様子にエリザベッタは困ったように笑って、冗談めかして言った。
　「エドアルド、そんな顔をしていると、幸せが逃げていくわ。それに、貴方は貴方のお父さまやおじい様に似てハンサムなんだもの。そんな顔してはダメよ」
　「そうでしょうか……似てはいるかも知れませんが」
　叔母の言葉を笑う事もできず、エドアルドが返す。不貞腐れたようなその顔がおかしいのか、彼女は小さく声を立てて笑った。
　「そう言えば、叔母上」
　揶揄われているようだ。それを不服に思いながら、エドアルドは話題を変える。エリザベッタは相変わらずくすくすと笑いながら、
　「何かしら、エドアルド」
　「叔母上は……姉さんの母親という人を、ご存知ですか？」
　唐突な問いかけだった。エリザベッタは笑うのをやめる。揶揄われるの回避するために、何気なく取り上げた話題に、場が沈黙する。エドアルドは自分で言っておきながら、その状況におや、と眉を上げた。彼女は驚いた顔で数秒黙し、それから、困ったような笑みをその口許に浮かべる。
　「……叔母上？」
　「ええ、知っているわ。フィオフィレーナ」
　初めて聞くその名に、エドアルドは息をつめる。どこか懐かしげに、そして寂しげに、エリザベッタは無言で微笑む。
　「亡くなって、もうどのくらいになるのかしら……」
　エリザベッタはそれ以上、何も言わなかった。単に名前と顔を知っている、というだけではなさそうだ。何か、二人の間にあったのだろうか。エドアルドの頭を、そんな疑問が過ぎる。ふっと息をついて、エリザベッタは今一度エドアルドを見遣る。そして、
　「アデレードのように……いいえ、もしかしたらフィオナの方が、もっと激しい人だったかもしれないわね……とても強い人だったわ。アデレードに、何か聞いたの？」
　「いいえ……そういうわけでは、ありませんが」
　返された声は穏やかだった。兄の愛人だったという女のことを、妹という立場の人間は、こんなにも穏やかに語れるものだろうか。そのことに驚く、というよりも、たじろぐような心地で、エドアルドは思った。そう、と短く返して、彼女はまた懐かしげに、その目を細める。この叔母は、やはりつかみどころがなくて、良く解らない。思いながらエドアルドは、エスプレッソのカップに口を付ける。熱くて苦いその口当たりに、彼は僅かに眉をしかめた。

　奇妙な会食を終えて、エリザベッタの部屋を出る。傾いていた太陽は、更に低く沈もうとしていた。もうすぐ日も落

ちる。昼前まで眠っていたせいか、それとも、昨夜の変則的な眠り、そのもののせいか。今夜も上手く眠れないのではないか。そんな思いがエドアルドの胸をよぎる。いや、そんなことが不眠の理由なら、寝酒でもひっかければ簡単に解消できるだろう。それとも、その類の薬でも使うか。思って、彼は嘆息する。自分は相当重症らしい。眠れそうにない、という些細な懸案に、そこまで思いつめるとは。眠れなければまた、書斎で夜を明かせばいい。書かなければならない論文もある。自宅にあるだけの資料でどれだけのものが書けるかは解らないが、大学も所詮は暇つぶしのために通っているようなものだ。学校側も、ボロージアの子息が在籍している事には、少々恩恵を受けているようだが、彼の勉学の程度にはあまり興味もないらしい。それでも、彼を買っている教授の姿もちらほら見られる。暇に飽かせて読んでいた本から得た知識が、多少なりとも役に立っている、というより、彼らの関心を得ているようだ。このまま、一生分の暇を、読書とそれに付随する何かに費やすのも、悪くはないかもしれない。ふと思ってエドアルドは苦笑を漏らす。ボロージアの次期当主が、しがない大学の講師か。分家の連中は何と言うだろう。それに父親も。情けないと、嘆くか、罵るか。どちらにしろ、自分の将来を決めるのに、自分の意思などあまり重要視されないに決まっている。

その名を持つものは、それを守る事に必死だ。見ていると同情するほどに。父親や祖父までもが、それに逆らわず、従ってきたことさえも、愚かしいを越えて哀れにすら見える。土地も資産も、一人の人間がその一生涯をかけても消費しきれないほどのものを、ボロージアは抱えている。所有する家屋敷を維持するのに、どれだけかかっているかは解らないが、そのために四苦八苦する事もないだろう。一体何のために、彼らはこの家を守ろうとしているのか。何のために、この家を繋いでいるのか。エドアルドは笑っていなかった。哀れで、愚かしい。けれどそれも、考えてみれば、それだけの事だ。滅びるに任せたほうが、楽だろうに。冷ややかに思って、何気に彼は目を上げた。渡り廊下の向こうに、夕闇に沈んでいく庭が見える。白くぼんやりと、その中に露台が浮かんで見える。そこに、あまり大きくない人影を見つけて、エドアルドはその目を見開いた。誰かと思いながら、目を凝らす。

「……ルクレチア」

思わずその名が唇から漏れた。いつかの夜のように、彼女は一人、心ここにあらず、というような表情で座っていた。いや、今もまだ、泣いているのか。黙ったまま、エドアルドはその様子をじっと見詰めていた。時折、その肩が僅かに上下する。暮れていく夕日を眺めているのか、それとも。思ったその時、唐突に影が動く。

「ジュリオ、待って！」

チリン、と、小さな鈴の音が聞こえた。子猫は首輪と鈴を貰ったらしい。抱いていたか膝に乗せていた子猫が逃げでもしたようだ。けれどこの夕闇では、どこかに紛れた小さな子猫を捜すのは、容易ではないだろう。どうするのかな。思いながら、エドアルドはその様子を見詰め続けた。困惑した様子で、立ち上がったルクレチアは辺りを見回す。

「ジュリオ、戻ってきて、ジュリオ！」

悲鳴に近い、高い声が響いた。慌てる様子を見せながらも、諦めているのか、ルクレチアは駆け出そうとはしない。暫くその場所できょろきょろと辺りを見回していたが、すぐにも露台に戻り、同じ椅子に腰掛ける。がくりと肩を落として、彼女はそのままテーブルにその顔を伏せた。長く伸ばした髪を二つに分けた、そのシルエットが浮かび上がって見える。空は刻一刻と、その色を闇に染めていく。屋敷の敷地内とは言っても、暗がりに一人にしておくのは、あまり良くないかもしれない。思いながらエドアルドは歩みを進めた。どんな顔をされるかは解らない。けれど、部屋に送るくらいなら、構わないだろう。さくさくと芝生を踏んで、エドアルドはその露台に近付く。

「っ……兄さま」

辿り着くより先に、ルクレチアが気付いて顔を上げた。声がしたのと同時に、エドアルドは足を止める。そしてわざとらしい口調で、少しおどけて言った。

「こんなところで、何してるんだい？ルゥ」

「あ……あの……」

「叔母上との話は、もう終わったよ。追い出してしまったのかな？」

目の前で、ルクレチアは困惑していた。笑いかけて、エドアルドは言葉を続ける。

「暗くなると、幾ら庭でも危ないよ。誰かが、君がいないと騒ぐかもしれないし。部屋に戻ろう」

ルクレチアはエドアルドから目を逸らし、そのまま動こうとしない。嫌われた、というより、怖がらせているようだ。当然か。思ってエドアルドは息を吐いた。浮かべていた作り笑顔が消える。眉を軽くしかめて、エドアルドはそっと、彼女の名を呼んだ。

「ルクレチア」

細い彼女の肩が、跳ねる。そんな風に、怯えないでほしい。いや、こんな風にしてしまったのは、自分か。冷ややかにそれを思いながら、エドアルドは彼女の近くへと、歩みを進める。かすかな足音に、ルクレチアが勢い良く顔を上げた。

「にっ……兄さま……っ」

「部屋に戻ろう。もう遅いから」

視線がぶつかる。夕暮れの中、怯えた目を見つけて、エドアルドは更に眉をしかめた。怖がらないでくれ、嫌わないでくれ。心で、祈るように彼は思った。隣に腰掛けて、エドアルドはもう一度、ルクレチアの名を呼ぶ。

「ルクレチア」
「……ごめっ……兄さま、ごめん、なさ……」
言いながらルクレチアは立ち上がり、その場から逃げ出そうとする。追うように腰を浮かせて、エドアルドはその手を捕まえた。強く引っ張られて、ルクレチアが思わず声を上げる。
「きゃあっ」
「ルゥ……どうして逃げるの？」
「に……兄さま……」
「俺から逃げないでくれ……頼むから」
言葉が終わる頃には、エドアルドは彼女を腕の中に閉じ込めていた。背中から抱きしめられる形になって、ルクレチアは驚く。
「兄さま……は、離して……いや……」
「嫌だよ……俺を嫌いに、ならないでくれ……」
悲鳴に涙が混じる。腕の中でルクレチアが暴れるのを、力ずくで彼は閉じ込めた。声が吐息に紛れる。泣いてしまいそうだ。思いながらエドアルドは、その細い体を抱きしめた。ルクレチアの抵抗が、止む。力なく、彼女は俯く。そして小さく、背中の彼を呼んだ。
「兄さま……」
もう逃げるつもりはないらしい。それを感じ取って、エドアルドは腕を緩めた。ルクレチアは小さく震えている。きっともう、元には戻れない。思いながらもエドアルドは冷静だった。この子はもう二度と、自分に心を許さないだろう。思いながら、その手に彼女の髪を捕まえる。それでも、今はこうしていたかった。手に入らないから尚更、恋しく感じる。ないものねだりだ。そんなことは解っている。もし彼女が容易く頷いたら、次の瞬間自分は、興味など失ってしまうかもしれない。それなら拒まれて、このまま嫌われて、遠くへと離れても、その方がましかもしれない。永遠に焦がれていられる。満たされずとも、この気持ちは消えずに残る。冷めてしまうことに比べたら、ずっとその方がいいのかもしれない。いや、それは詭弁だ。忘れて、何もかもなかった様に生きられるほうが、ずっと楽に決まっている。苦しまずにすむ。彼女を傷付ける事も、苦しめる事もない。この気持ちが忘れられたら、どんなにいいだろう。どれだけの安息を得られるだろう。こんなにも苦しい。胸をナイフで引き裂いて、死んでしまいたいほどに。
「……兄さま」
小さな声が聞こえた。エドアルドはそっと、ルクレチアの顔を覗く。ルクレチアは俯いたまま、小さく言った。
「ごめんなさい……ごめんなさい……」
「……どうして、謝るの？」
問いかけて、解りきったことなのにと、エドアルドは自重の笑みを浮かべた。彼女は自分がこうする事を、望んではいないのだ。でなければ、こんな風に謝ったりはしないだろう。この子にとって自分は、この先もずっと、今までのように、従兄でしかない。その言葉はそれを指し示している。嫌われてはいないかもしれない。けれど、男としては愛してもらえないのだ。どれほど願って、思っても。
ルクレチアの体に回した腕を、エドアルドは解いた。ここまで拒まれては、これ以上子のこの側にいることはできない。いれば自分が苦しむだけでなく、この子もまた、深く傷付ける事になる。これ以上暴走する前に、自分はもっと遠くへと去るべきだ。いや、時を経ずして、彼女達はこの家を出て行くというのだ。暫くは、それを待てばいい。そうなったらもう、彼女に会うのはやめよう。思いばかりを引き摺って、また苦しむ事になる。
「ごめんよ……ルゥ」
ルクレチアから、そっとエドアルドは離れた。怯えた目のままで、ルクレチアはそっと振り返る。笑いかけて、自分は本当に笑えているだろうかと、エドアルドは思った。立ち上がって、一歩下がる。距離が遠のいて、ルクレチアは彼に向き直った。
「兄さま」
「暗くなると危ないから、早く戻るんだよ？」
「あの時のこと……覚えている？」
立ち去ろうとした時、そんな問いかけが耳を打った。ルクレチアはエドアルドを見詰めて、震えながら答えを待っている。あの時。心の中で繰り返して、エドアルドはああ、と小さく声を漏らす。
「覚えてるよ……君がここで、泣いてた、あの時だろ」
「どうしてあの時……あんなことをしたの？」
ルクレチアが立ち上がる。エドアルドは少し驚いたが、目の前の彼女の問いかけに、苦笑混じりに答えた。今更、嘘は言えない。すべてのことを語ってしまおう。償いにはならない。それでも、自分の気だけは、すむかもしれない。
「君の事を、失いたくなかったから」
「……私を？」
「そうだよ」

「どうして……」
「決まってるじゃないか……それを今更、言わせるのかい？」
漏れたのは自嘲の笑みだった。いや、自分を哀れむ笑みかもしれない。なんて哀れなのだろう。こんなに思って、言葉を口にしているのに、それに応えてはくれない女に、そのことについて問い質されるとは。少し意地悪く響いたエドアルドの言葉の後に、もう一度、ルクレチアは問いかける。
「……本当？」
「……何が」
「兄さまは……私のこと、本当に……」
「好きだよ」
震える足で、ルクレチアが歩き出す。近付く彼女に、エドアルドは驚く。そのまま、彼女は彼の間近までやって来て、その顔を見上げ、もう一度彼に問いかけた。
「だからなの？本当に、そう思ってるから……あんな……」
彼女の問いかけの意味が解らない。戸惑いながら、エドアルドは自分を見上げる少女の瞳を見詰め返した。ルクレチアは言葉を失う。軽く開いた唇から、短く静かな息が漏れた。
「ルクレチア……？」
ほろほろと音もなく、ルクレチアの瞳から涙がこぼれた。泣き出すその顔を、エドアルドはただ見下ろしている。この子は何を言いたいのだろう。どうして泣くのだろう。また謝罪の言葉を口にするのなら、それは罪でしかないと、解っているのだろうか。知らないうちに自分を傷付けていると、知っているのか。
「ルゥ……？」
「……キスして」
ささやくように、小さく動いたルクレチアの唇から、声が漏れた。耳を打ったかすかなその声に、エドアルドは驚いて息をつめる。
「ルゥ……」
「本当に私のこと、好きなら……もう一度、ここで……」
泣きながら懇願する声に、エドアルドの体が震えた。どくどくと心臓が脈打つ。これは何だろう。この子は、何を言っているのだろう。ろくに回らない頭で、エドアルドはそんなことを思った。体を駆け巡る、緊張と興奮が、何から起こるものなのか解らない。眩暈さえしそうな感覚に揺さぶられながら、エドアルドはその手をゆっくりと上げた。
「……好きだよ」
何度目かの言葉の後、その手で彼女の顔を捕まえる。何かに操られるように、エドアルドはルクレチアに顔を近づけた。
「君を、愛してる」
「私も……」
小さな囁きが聞こえた。幻聴かもしれない。彼女が目を閉じる。唇を重ねて、エドアルドは眉をしかめる。これは夢ではないのか。思いながら、そっと顔を離す。これは夢で、総てが幻で、もしかしたら自分はそこまで病んでいるのか。幻覚を見て、それに溺れるほどまで、彼女を愛しているのか。ぼんやり思いながら、エドアルドはルクレチアを見つめた。目を閉じたまま、ルクレチアは涙を流している。その手で顔を覆って、彼女はそのまま、エドアルドの胸に倒れこむ。重みと温かさが心地いい。肩を抱いたのは無意識だった。これは夢ではないのだろうか。口付けを求められたのは、幻聴ではないのか。
「……兄さま……大好き……」
腕の中で細く、ルクレチアが言った。見下ろして、エドアルドは何も言わない。
「大好き……離さないで……」
胸の痛みで、これが現実なのだと、信じていいのだろうか。ぼんやりとエドアルドは思った。抱いている細い肩は、細かく震え続けている。幻覚なら、現実でも、このまま彼女を手に入れたい。目が眩むほどに強く思って、エドアルドは突然、その体を抱き上げた。抱き上げられて、ルクレチアは驚く。
「に……兄さま？」
大きく見開かれた瞳が見える。エドアルドは笑いかけて、何も言わずにその頬に口付け、そのまま彼女を抱いて歩き出した。

太陽が空から姿を消す。名残ほどの光しかない室内にも、小さな明かりしか灯さない。部屋の最も奥までルクレチアを運んで、座らせる。戸惑う瞳でルクレチアは、自分を運んだ男を見上げた。呼びかけようとしても、声が出ない。無言のままでエドアルドが、涙に濡れるその頬を優しくぬぐう。何度も撫でられて、ルクレチアはその心地よさに軽く目を閉じた。口許に笑みが昇る。唇がそっと緩んで、彼女はそっと、目の前の男を呼んだ。
「兄さま……」

顔が両手で捕まえられる。ルクレチアが目を開けて見上げると、薄闇の中にどこかぼんやりとした顔があった。近付く気配に、もう一度彼女は目を閉じる。自分からも僅かに身を乗り出すと、口付けは再び降りた。柔らかく触れ合うそれは、ゆっくりと彼女の唇を解き始める。温い感触に僅かに戸惑うと、その隙を突くように、エドアルドの舌が彼女の唇に忍び込んだ。初めての感触に戸惑って、体が強張る。怯えに感じたのか、エドアルドはすぐにも、彼女の唇を解放した。
「っ……兄さま……？」
「ごめん……」
顔が離れる。それでも、二人の間にさほどの距離は生じない。息がかかるほどに近くで、二人は互いの瞳を見詰めた。エドアルドが口許に、強張った笑みを浮かべる。ルクレチアはそれに戸惑って、僅かに瞳をゆがめた。
「兄さま……」
「このまま……俺を、許してくれる？ルクレチア」
「……許す？」
「君を、抱きたい……」
声は、掠れている。言葉に、ルクレチアの顔に朱が走った。耳まで真っ赤になって、ルクレチアは思わず顔を背ける。
「ルクレチア……」
事を急かし過ぎているのか。止まらないのに。思いながら、エドアルドは彼女の答えを待った。ルクレチアは俯いて、ちらりと彼を見る。仕種はまだ幼い。愛らしいその様子に、エドアルドが笑う。揶揄われているのか。こんな時にまで。いや、こんなところにこんな風に連れてきたくせに、まだこの人はこんな風に言うのか。ルクレチアは思って、悔しげに言った。
「……嫌なら、私だって……キスなんて、させない」
「え？」
「されるのが嫌なら……して欲しいなんて、言わない、って……言ってるの！」
語尾が強くなる。どうしてか泣きそうになって、ルクレチアは目をきつく閉じた。どうしてこの人は、ここまで来て、こんな風に言うのか。子供だと思って、バカにして。恨めしげにルクレチアは思った。エドアルドはその側で彼女の発言に狼狽している。怒っているとでも思っているのだろうか。いい気味だ。思いながら、ルクレチアは更に言った。
「どうして、解らないの？それとも……ルゥがそんな風に言ったら、おかしい？」
「いや……そうじゃない……」
「じゃあ何？兄さまがさっき言ったのは、嘘？私のこと……ほ、本当は、やっぱり、子供だって、そう思って……」
声が震える。詰りながら、ルクレチアは怯えていた。全部嘘だったとしたら、どうしたらいいのだろう。あの甘い口付けも、総て悪ふざけだったとしたら、自分はどうしたらいいのか。怒りと戸惑いと、何より恐怖がルクレチアを襲った。そっと目を開けると、困惑するエドアルドの顔が見える。強く、ルクレチアは言った。
「兄さまはっ……どうしてそんなに、私のこと、苛めるの？こんなに、私、こんなに、兄さまのことっ……」
「……そうじゃないよ、ルゥ」
真直ぐに、エドアルドの目がルクレチアを見詰める。エドアルドが初めて見せる、憂いと怯えに満ちた目に、ルクレチアは思わず息を飲む。
「兄さま……」
「……君を、抱いてもいい？俺を……許してくれる？」
懇願するような、甘えるような声だった。答えるより前に、エドアルドは彼女の髪の先を捕まえて、その先に口付ける。感覚のないはずの部分の接吻に、ルクレチアの体が震えた。
「に、兄、さま……」
「君を愛してる……好きだよ」
顔が再び捕まえられる。口付けは額に、目蓋に、鼻に、頬に、顎に、そして唇に下りた。離れると、額に額が押し付けられる。僅かに乱れた息が顔にかかると、ルクレチアの背中を、ぞくぞくするものが駆け上がった。
「兄さま……」
そのまま、彼女はベッドにゆったりと倒された。覆いかぶさる彼の表情は、熱に浮かされたようにぼんやりして見える。
ゆっくりとした手つきで、エドアルドは彼女の着ているものをはがし始める。鎖骨が顕になると、その凹凸に口付けた。唇は、首筋を舐める。触れる度に、ルクレチアの体が小刻みに震えた。口付けを繰り返しながら、着ているものは剥がされ、その素肌が空気にさらされていく。白く細い体が顕になる頃、二人の呼吸は熱く乱れ始めていた。エドアルドが、自分の着ているものを脱ぎ捨てる。さらした素肌で抱擁すると、たまらず彼はうめくように言った。
「綺麗だよ……ルクレチア」
「……ほ、本当？」

「誰にも、渡さない……」
耳元で囁いて、その耳朶に噛み付くように口付ける。間近に聞こえた声と、かかる吐息に、ルクレチアの体が震えた。

V

　ふと目を上げると、目の前で眠るルクレチアの顔があった。くうくうと、規則正しい寝息が聞こえる。自分自身が横になっていることに気付いて、エドアルドは小さく笑った。
　叔母から、部屋に電話が数度あったらしい。何度目かに出ると、案の定、ルクレチアがいないと騒いでいた。子猫が庭に逃げたのを捜していたところに出くわして、と適当に嘘をついて、今夜もこちらで預かると告げると、彼女はあっさり信用して、そう、ごめんなさい、宜しくね、と言って電話を切った。ルクレチアはその時には、まだ起きていた。シーツに包まって不安げに、電話に出るエドアルドを見ていた。誰から何の電話かと尋ねられて、正直に答えると、相当動揺したらしい。泣きながら、どうしよう、と狼狽え始めた。適当な事を言って誤魔化したから、と笑いかけても、彼女は暫くそれを信じていない様子だった。それでも何とか宥めて、その後にもずっと、二人でベッドの中にいた。ただ触れている、その温もりがあまりに心地好くて、いつの間にか眠ってしまったらしい。それでも、昨夜からの変則的な眠りのせいか、夜明けよりも早く目が覚めたようだ。ベッドの中で体を起こして、エドアルドは辺りを見回す。
　カーテンの外から、僅かな光が差している。室内の空気は、まだほのかに冷たい。もう少しここで、まどろんでいようか。思いながらエドアルドは傍らの少女を見下ろし、その頬をそっと撫でる。
　昨夜は、酷い目に合わせてしまった。自分は、今までに感じたことのないほど、幸福な夜だったのだが、この子にはあんなに辛い夜も、なかったかもしれない。それでも止められなかった。細い声が名を呼ぶと、それだけで、魂まで震えるような気がした。何度も繰り返し、許しを乞う様に口にした言葉は、偽りではない。それでも、罪の意識は拭えなかった。この子を汚してしまった。自分は何と、罪深いのだろう。けれどそれでも、求めずにはいられない。愛していると、そう思ったから。
　「……兄さま？」
　横たわっていたルクレチアが、そっと目を開けた。起こしてしまったらしい。苦笑しながら、エドアルドはその頬を撫でる。
　「ごめん……起こしたね」
　「ううん……平気」
　緩く、その口許に笑みが昇る。いつもの彼女だ。思いながら、そっとエドアルドは言葉を紡ぐ。
　「まだ寝ていていいよ……夜明けも来ていないから」
　「兄さまは……眠れた？」
　無邪気に、ルクレチアは笑っている。問いかけに、エドアルドはそっと返した。
　「ああ……ちゃんと寝られた。君は？」
　ルクレチアは答えない。何が楽しいのか、ふふふ、と彼女は小さく笑った。そのまま、ルクレチアはエドアルドに抱きつく。
　「ルゥ？」
　「兄さま、あったかい……いい気持ち……」
　彼の体に頬を摺り寄せて、ルクレチアは笑う。幼い仕種に、エドアルドはまた笑う。髪を撫でて抱き返すと、ルクレチアは幸せそうに、小さな声を立てた。
　「何がそんなに嬉しいんだい？ルゥ」
　「だって……兄さまが、側にいてくれるから」
　「それはそれは……光栄です、セニョリータ」
　おどけて、エドアルドは返す。その額に口付けすると、彼は今一度、優しく言った。
　「まだ早いから、もう少し寝ていていいよ」
　「ううん……兄さまが起きてるなら、私も起きてる」
　えへへ、とルクレチアが笑う。エドアルドはそっと彼女の体を離し、その隣に身を起こした。見下ろして、その額を撫でる。指先が触れて、ルクレチアはまた笑う。エドアルドは何も言わず、柔らかにその額に触れ続ける。指は髪を撫でる。一房を手にとって、エドアルドはその先に口付ける。何も言わない彼の様子に、ルクレチアは横たわったまま、小さく首を傾げた。
　「……兄さま？」
　「……何だい？」
　目を閉じて、エドアルドはその髪に頬を摺り寄せる。どことなく恍惚の表情でありながら、何故か翳りの見えるその様子に、ルクレチアは戸惑いながら、
　「何って……あの……やっぱり、眠れなかったの？」
　「どうして？」
　問い返されて、ルクレチアは口ごもる。エドアルドは軽く笑って、手にした彼女の髪を落とした。さらさらと音を立てて、金色の細い髪が、彼女の肩の上にこぼれる。

「兄さま？」
「昨夜は……辛くなかった？」
「……え？」
なされた問いかけに、ルクレチアが戸惑う。エドアルドの表情に苦いものが混じる。彼女が起き上がると、エドアルドは苦笑したまま言った。
「泣いてただろ？ずっと」
「あっ……兄さま、あれはっ……」
ルクレチアの顔が朱に染まる。そのまま口ごもった彼女を抱き寄せて、耳の側でエドアルドは笑った。
「無理をさせてしまったね……ごめん」
「そんなっ……兄さま……」
「もう二度と、君をあんな目には合わせない……誓うよ」
低く静かに、その声が言葉を紡ぐ。ルクレチアは腕の中で戸惑いながら、首を強く横に振る。
「兄さま、私なら、平気よ。大丈夫だから」
何故か必死になってルクレチアはそれを訴える。確かに昨夜は、痛みに耐え切れずに泣いてしまった。体を重ねる事が、あんなに激しいものだとは知らなかった。二つの体が、本当に混ざり合ってしまいそうな、砕けて粉後になって、壊れてしまいそうな衝撃に、耐え切れずに何度もやめてと叫んでしまった。今もその余韻が、体に残っている。それでも、とても幸せだった。今度があったら、耐えられるかどうかは解らないけれど。思いながら、ルクレチアは自分の顔が更に熱くなるのを感じた。
「ルゥ？」
真っ赤になったその顔を、エドアルドが覗き込む。ルクレチアは俯いて、
「に……兄さまが、その……あの……」
「俺が……何？」
問いが重ねられる。いいたいことは胸の中にあるのだが、上手く言葉にできない。いや、どう言えばいいのか解らない。そんなことを口に出して言うなんて、はしたないと思われないだろうか。もしそんな風に思われたら、恥ずかしくて死んでしまう。思いながら、何故かルクレチアは拗ねた。
「ルゥ？」
「……兄さま、わざとしていない？」
「……何を、だい？」
唐突に、まるで詰られるように言われて、エドアルドは目を丸くさせる。小さくうめいて、ルクレチアは彼を睨む。首を傾げると、彼女はそこで更に不機嫌顔になった。
「ルゥ？」
「兄さまは……私とこんな風になっても、意地悪なのね」
「……は？」
彼女は拗ねている。どうやら自分のせいらしい。しかし理由が解らない。泣きべそをかき始める彼女を抱いたまま、エドアルドは困惑した。ルクレチアは少しだけ黙り込んで、涙のからんだ声で、
「だから、その……あの……」
「……俺が悪いなら、謝るけど……」
背中を撫でながら、エドアルドが困った声で言う。子供扱いだ。思ったルクレチアはその手を振りほどく。驚いて、エドアルド、
「……ルゥ？」
「だから、そうじゃなくて……ど、どうして、解らないの？」
「……ごめん」
真っ赤になって涙まで浮かべて、ルクレチアが詰る。詰られたエドアルドは訳が解らないまま謝罪するが、それも気に入らないらしい。そのまま、ルクレチアは手で顔を覆って泣き始める。
「ちょ……ルゥ、どうして泣くんだよ……本当に俺が悪かったから、泣かないで……」
「どうしてそんな風に謝るの？……私は、嫌だなんて、言ってないのに……」
ぼろぼろと涙を流しながら、やっとのことでルクレチアが言った。エドアルドの目が丸くなる。ルクレチアは顔を再び上げて、そのまま、泣くに任せるように、何故か怒った口調で続けた。
「昨夜だって……ここに来てまで、あんな風に言って……た、確かに、びっくりしたけど……い、痛かったし、泣いたりしたけど……」
「うん……だから、ごめん、って……」
「あ、あやっ……謝るくらいなら……しなければいいでしょ？わ、私、私、はっ……」
言葉が上手く続かない。それでも、訴えなければ、伝えなければいけないことがある。言わなくちゃ、何とかして、

伝えなきゃ。思いながら必死で、ルクレチアは続けた。
「私だって……兄さまにっ……」
「俺に……何？」
エドアルドはじっと、ルクレチアの言葉を待っていた。真直ぐに見つめて、動かない。視線に気付いて、ルクレチアは息を飲む。どくどくと、胸が早鐘を打った。顔だけではなく体中を真っ赤にして、ルクレチアは叫ぶように言った。
「……愛してるって、言われて……抱きしめて、キスして、もらって……抱かれて、本当に、嬉しかったん、だから……」
だから謝らないで。罪なんて、感じないで。そう言いたくて、出来ずにルクレチアは涙を拭う。泣きすぎて、体が痙攣し始める。エドアルドはあまりに幼い自分の恋人を、どこか眩しくさえ感じながら、見詰めている。
「ルゥ……」
「……兄さまだけが、悪いんじゃないわ……私だって、嬉しかった……だから、そんな風に言わないで……」
言葉の後、ルクレチアはエドアルドの肩に抱きつく。歓喜に満ちた吐息を漏らして、エドアルドはそっと笑った。抱き返して、そのまま、耳元で囁く。
「有り難う、ルクレチア……大好きだよ」
目頭が熱くなる。愛おしいと、思うだけで泣けてしまう。それは幸福だった。腕の中に、手に入れたくて堪らなかった女がいる。自分の罪を許して、尚且つ、受け入れてくれる。思うと、笑みはこぼれた。頬が緩む。胸のどこかが甘く締め付けられる。心地いい痛みと、くすぐったいような感覚に、エドアルドは笑っていた。腕の中、泣きながら、ルクレチアは少しふてた様子で言った。
「……でも、やっぱり……ちょっといや」
「ルゥ？」
「……だって……は……は……恥ずかしいもの」
言葉にエドアルドは目を丸くさせる。直後、吹き出して、
「可愛いなぁ、ルゥは」
「かわっ……可愛くなくていいもん！ 兄さまの意地悪！」
腕の中でルクレチアが喚く。強く抱きしめて、構わずエドアルドは笑いながら、覗く首筋に軽く口付けする。驚いて、ルクレチアは声を上げた。
「やんっ……兄さま、何っ……」
「好きだよ、ルゥ……愛してる」
「そ、そ、そ……そんなこと言っても、い、い、いっ……今は、そういうのは、嫌！」
「何が？って……何のことだい？ルゥ」
惚けた様子でエドアルドが、わざとらしく尋ねる。ルクレチアは更に激昂して、
「何って、何って……何って、それは……」
言いかけるも、途中で口ごもって、それ以上何も言えなくなる。勝った、と胸中でほくそ笑み、エドアルドは腕の中の彼女に、くどいくらいに口にした言葉をまた更に囁いた。
「本当に可愛いよ……愛してる、ルクレチア」
「～～～～っっ、兄さまの、意地悪！」
罵倒する声が聞こえる。声を立てて、エドアルドは笑った。

ルクレチアと母、エリザベッタがグラローニに来てから、そろそろ一ヶ月か経過しようとしている。二人は数日後には、ボカロジアの本宅からさほど離れない区域にある、高級アパルトメントへと移ることになっていた。ほぼ同時に、夏の休暇が終わり、エドアルドの大学とルクレチアの通う予定の、女学校の新学期も始まる。
「兄さま、あのね……お願いがあるの」
「お願い？……何だい？改まって」
「今度行く学校から、前の学校で出てた課題を提出しなさい、って……文学のレポートなんだけど……」
数日後に引越しを控えたその日の午後、ルクレチアは筆記用具を抱えて、書斎のエドアルドを訪ねていた。エドアルドはエドアルドで、やはり自分に課された論文作成の真っ最中である。やって来たルクレチアを一瞥すると、
「そういうのは、ちゃんと自分でしなきゃダメだよ、ルゥ」
「失礼ね、ルゥだって課題くらい、一人で出来るわよ。ここにある御本を借りていい？って、聞きに来たのに」
ドアの前でルクレチアが膨れる。エドアルドはその様子を見ると、意地の悪い笑みを浮かべて、
「それはそれは。僕の早とちりでしたか。失礼しました、セニョリータ」
「もう、兄さまの意地悪！」
ルクレチアが膨れる。エドアルドはそれを見て、声を立てて笑った。
二人の間柄は、あの夜以来変わったかと言えば、特別大きな変化もなく、至極平和と言えばその通りだった。流石に

エドアルドの夜歩きは激減したが、毎夜二人で時間をすごす、という訳でもない。ただ時折、示し合わせて真夜中の露台で、蜜月を楽しむ。どことなくひそやかなその遊びが、ルクレチアは相当のお気に入りらしい。とは言え彼女の母親にも使用人達にも、その、少々子供じみた遊びの事は黙認されていた。咎められないのは、屋敷中の人間に知られているからだ。最も、エドアルドもその遊びの最中には下手も打てない。軽い夜食をサーブして、時には眠ってしまう彼女を部屋まで運ぶ、という、何とも微笑ましい状況だ。不服ではないが、少々彼には物足りない逢瀬である。
「本を持っていくのはいいけど、ちゃんと返すんだよ。それから、昼寝の枕なんかには、絶対にしないこと。いいね？」
「お昼寝の枕になんかしません！失礼しちゃう」
エドアルドの言葉に、べー、とルクレチアが舌を出す。少々意地悪がすぎたか。思いながらエドアルドは苦笑する。そして、
「書けたら、見てあげるよ。持っておいで」
「うん」
エドアルドが笑いかけると、ルクレチアは嬉しそうに答える。早速本を物色し始める彼女を見て、エドアルドは何気に尋ねた。
「けど、今頃から始めて、間に合うのかい？新学期はもうすぐだろ？引越しの支度だって……」
「平気。大きな荷物はないもの。モリエーロから、直接運んでもらう事になるし」
「へぇ……」
ルクレチアは書架に梯子をかけて、数冊の本を棚から取り出しては、ぱらぱらと捲り始める。その様子を見て、エドアルドはまた小さく笑った。ルクレチアは分厚い上製本を脇に抱えて、そんなエドアルドへと振り返る。
「何？兄さま」
「別に何でもないよ……ああでも……引っ越していったら、寂しくなる、かな」
時折、エドアルドは彼女に甘えるような目を見せる。いつか、子猫のようだ、と言ったら叱られたが、ルクレチアには七つも年上の彼がそんな顔をすることが意外だった。そして、何度見てもその視線にどぎまぎしてしまう。慌ててそっぽを向いて、ルクレチアは少しだけ冷たい口調で、
「また、そんな風に言って。そんなこと、思ってもいないでしょ、本当は」
「思ってるよ。寂しくなる」
言いながら、エドアルドはルクレチアのいる書架に歩み寄る。はしごの下で待ち構えるようなエドアルドの姿に、その上のルクレチアは小さくうめいた。にこにこと、エドアルドは笑っている。小さく呻いて、ルクレチアはそっぽを向いた。
「そ……そんなこと言っても、仕方ないでしょ。学校だって始まるんだし……」
「ここを出て行っても、時々会ってくれる？ルクレチア」
問いかけに、ルクレチアは固まった。その質問は何だ。思って振り返ると、やはり彼は笑っていた。また揶揄われているらしい。毎度のことながら、腹が立つ。けれど、彼に敵わないことも知っている。相手の方が自分よりも、ずっと上手だ。時にはこちらから、意地の悪いことを言って困らせもするが、結局彼の一言で、自分は何もかもを許す羽目になる。何だか悔しい。悔しいけれど、それでも彼といられることが、ルクレチアには何よりも幸せだった。
「答えてよ、ルゥ」
「……兄さまがそう言うなら、会ってあげなくも、ないわ」
言いながら、ルクレチアがぷいとそっぽを向く。エドアルドは笑って、
「意地が悪いな、ルクレチア。僕はこんなにも、君のことが……」
「兄さま、それを言ったら私が何でも許すって、そう思ってるの？」
「あれ、違うのかい？」
決まり文句を口にする前に切り返されて、とぼけた顔でエドアルドが問い返す。ルクレチアはそっぽを向いたまま、
「違います！当たり前でしょ？そんな風に言われたって、嬉しくも何ともないんだから」
「けど……寂しいのは本当だよ、ルゥ」
声のトーンが落ちる。ルクレチアがちらりとそちらを見ると、エドアルドはまた甘えるような目で、ルクレチアを見上げていた。息を飲んで、ルクレチアもエドアルドを見る。
「兄さま……」
「時々、君を誘っていい？」
問いかけに、ルクレチアは僅かに眉をしかめた。エドアルドが手を差し伸べる。無言で、本を抱えたまま、ルクレチアは梯子を降りた。エドアルドの手を取って、床まで降りる。手は、まだ握られたままだ。俯くと、頭の上でまた、エドアルドの声がした。
「時々、君に会いに行ってもいいかな」
「……うん」

頷きながら、それだけ返す。本当は、自分だって寂しい。同じ屋敷にいれば、毎日は会えなくても、どこかで気配は感じられる。けれど全く別の場所に暮らすことになれば、些細な事で、相手を感じる事など、出来はしない。寂しい。本当は私だって、寂しい。思いながらルクレチアは顔を上げた。エドアルドの目は、まだ甘えるような、どこか寂しげな光を放っている。
「兄さま……」
「君が女学校を卒業したら、結婚しよう、ルクレチア」
手を握ったまま、さらりとエドアルドが言った。唐突な言葉にルクレチアは驚き、抱えていた本を床に落とす。どさどさいうと重々しい物音の後、室内は静まり返った。赤面して、硬直して、ルクレチアは何も言わない。エドアルドは穏やかに笑って、そんな彼女を見下ろしている。
「俺とじゃ嫌？ルクレチア」
「えっ……え、え、え……えっと、あの……」
余りにも気の早いその申し出に、ルクレチアは混乱した。しかし同時に、また揶揄われているのか、という思いが頭をもたげる。いたずらっ子のように、エドアルドは問いを重ねる。
「答えてよ、ルゥ」
「……っ、に、兄さま……？」
「名前を呼んでよ……あの時の様に」
手を掴んだまま、エドアルドが言った。ルクレチアは泣き出しそうな目で、そんな彼を見上げる。
「チェー、ザレ……？」
「一生離さない……絶対に、幸せにするよ」
言葉の後、エドアルドがその額に口付けする。ルクレチアは変わらず、固まったままだ。微笑んで、エドアルドは彼女から離れる。そして、
「何か解らないことがあったら、聞くんだよ？ルゥ」
そんな風に言葉を投げる。口付けされた額にその指で触れて、ルクレチアは照れくさそうに、それでも心底嬉しそうに、声もなく笑った。

「あらあら、それでこの子は、書斎で寝てしまったのね」
夕刻。エドアルドはルクレチアを背負って、叔母、エリザベッタの部屋にいた。背中のルクレチアはくうくうと寝息を立てている。何のことはない。本を枕にこそしなかったが、結局彼女はそこで船を漕ぎ始めたのだ。レポートは何とか書き上げたらしい。何度か呼びかけられた事は覚えている。エドアルドはエドアルドで、自分の読書に夢中だった。ルクレチアは彼が一息吐くのでも待っていたようだ。が、待ちきれずに、というところか。
「すみません……もう少し早く、気付くべきでした」
「いいのよ、エド。それよりも、また貴方に迷惑をかけてしまって……ごめんなさいね。ルクレチア、起きなさい。ルクレチア」
エドアルドの背中のルクレチアに、エリザベッタが呼びかける。むにゃむにゃと小さく言いながら、ルクレチアは閉じていた目をそっと開く。
「母さま……あれ？私、どこに……」
「随分なご身分ね、ルゥ。ボロージアの若様の背中でお昼寝、なんて」
寝ぼけ眼のルクレチアには、まだ状況の把握が出来ないらしい。あちこちを見回して、自分が背負われているその背中に、再び拠りかかる。
「兄さま……兄さまは？」
「俺はここだよ、ルゥ」
困ったように言いながら、エドアルドは笑う。ルクレチアは口許をゆるく結んで、小さく笑うと、
「兄さま、あったかい……いい気持ち……」
「ルクレチア、起きなさい。貴方がおぶさっているのは、その兄さまの背中よ」
呆れたように言う母親の声に、ルクレチアはその目をしばたたかせた。直後、
「えっ、ええっ……きゃあっ」
叫ぶように言って体を起こす。背負っていたエドアルドは驚くが、上手くバランスを取って、背中の彼女に笑いかけた。
「やぁ、お目覚めかい？ルクレチア」
「なっ……えっ……どうして私、兄さまにおんぶして……」
「とりあえず、暴れないでくれるかな、ルゥ。危ないよ」
ルクレチアが赤面して固まる。その様子にエドアルドはまた笑って、そっと彼女を背中から降ろした。ルクレチアは真っ赤になったまま、やはり動かない。呆れたようにエリザベッタは溜め息をつき、

「本当に、貴女って子は。エドアルドに謝りなさい」
「……ご、ごめんなさい、兄さま……」
言われるままに、殊勝な態度で、ルクレチアが頭を下げる。エドアルドは軽く笑って、
「仕方ないよ。退屈だったんだろ？それに、今日のことで一つ解ったことがあるし」
「……解ったこと？」
にこにことエドアルドは笑っている。不思議そうにルクレチアが尋ねると、
「随分重くなったんだね、ルクレチア。昔はもっと軽かったのに」
「お、重っ……に、に……兄さまのバカ！もう知らない！」
にこやかなエドアルドのその言葉に、ルクレチアはそう言ってきびすを返し、部屋の奥に向って走り出す。見送って、エリザベッタが珍しく、叱責の声を投げた。
「ルクレチア、何ですか、その言い方は。待ちなさい。ちゃんと謝りなさい」
「いいんですよ、叔母上。お構いなく」
「エドアルド。あの子と仲良くしてくれるのは嬉しいけれど、あんまりあの子を甘やかさないでちょうだい」
その叱責がエドアルドにまで及ぶ。おやおや、自分まで叱られたか。思ってエドアルドは肩をすくめた。エリザベッタは、駆け去ったルクレチアと彼とを交互に見て、困ったように嘆息する。それすら笑いながら眺めて、それからエドアルドは、手にしていた数枚の紙束を、エリザベッタに手渡した。
「ルクレチアの、レポートです。良く書けていた、と伝えてもらえますか」
「課題までも見てもらったのね、あの子ったら……」
「俺が手出しした訳じゃありません。ルゥだってやる時はやりますよ」
余りにもからかいすぎて笑いすぎた従妹のフォローをするように、エドアルドが言った。困った様な笑みを浮かべて、それを受け取ったエリザベッタは、
「本当に……貴方にはお世話になりっぱなしね、エド」
「俺は何もしていませんよ。でも叔母上、何かあったらいつでも言ってください。父も僕も、きっと姉も、できる限りのことはしますから」
「……有り難う、エドアルド」
困惑の残る顔で、それでも心からの言葉とともに、エリザベッタは笑う。エドアルドは一礼して、きびすを返すと歩き出す。背後から、叔母がルクレチアを呼ぶ声と、続くお小言がかすかに聞こえた。
幸福とは、こういう事を言うのだろうか。思いながら、エドアルドは歩いていた。口許は無意識のうちに緩み、心も、いつもどこか軽い。毎日が平穏という訳にはいかないが、嫌なことも、小さな出来事に笑えば、忘れられる。そのおかげか、些細な事に腹が立たなくなった。以前なら許せなかった、例えば、使用人の小さな失敗も、今では笑って流せる。先日は、入ったばかりの若いメイドが、水差しを運ぶ途中に、その水をこぼした。以前なら、役立たずだから、と自分の近くに寄せる事も嫌ったが、拭いておくようにと言ったものの、それ以上のことは思わなかった。どの道、始末をつけるのは失敗した彼女自身なのだし、床を多少濡らした程度の事に腹を立てるのも、思えば浅はかな事だ。最近若様は、何かいいことでもおありですか、とばあやにも何度か尋ねられた。自分は相当変わったらしい。別に何も、と答えると、それではお熱ですか、と真顔で言われた時には面食らったが、その変化をばあやも、悪いと思ってはいないらしい。相変わらず小言は多いが、若いメイドにだけは手を出さないように、と変な釘も刺された。若様は亡くなった大旦那様に似て、二枚目でおいでですから、若い娘がその気になりでもしたら困ります、と、これまた真顔で言われ、エドアルドは思わず笑ってしまった。ばあやも、この屋敷に来てから長い。代々の当主の所業に、思うところもあるのだろう。気をつけるよ、とエドアルドも一応答えたが、その心配は杞憂に終わるだろう。いい顔をしてメイドに気に入られよう、などという気はさらさらない。いや、戯れの相手など、もう必要ないのだ。こぼれる奇妙な微笑の理由は、そのたった一つだった。他の何者も、こんな幸福を運んでは来ないだろう。不満がないわけではないが、それでも彼は今、十分幸せだった。
「お父様、話を聞いて！」
「私の出す条件が飲めるなら、な。使いたければ幾らでも、ボロージアの名前を出せ。お前は私の娘だ。その名を名乗る事を禁じた覚えはない」
廊下を歩き続けるエドアルドの耳に、言い争う声が聞こえる。顔を上げて、エドアルドはその声へと振り返った。早足に歩く父の後を、姉が小走りに追いかけている。五十近くになろうと言う父親は、年齢にそぐわない程、今でも俊敏に、力強く、そして精力的に活動している。歩く速さもそれに比例しているらしい。いや、あれは少し、いらついているからか。足を止めて、エドアルドは思った。父はそのまま足早にその場を去る。姉、アデレードは立ち止って、その背中に罵声じみた言葉を浴びせた。
「誰もボロージアを名乗らせろなんて、言った覚えはないわ！」
彼女も彼女で、相当いらいらしているようだ。何かあったのか。エドアルドはしばし無言で、父親の背中を睨みつける姉を眺めていた。忌々しげに舌打ちして、アデレードは思い切り良く振り返る。目があって、彼女は驚いたようにエドア

ルドに言った。
「エドアルド……いたの？」
「いや……通りかかっただけだよ」
「今の話……聴いていた？」
アデレードの顔に苦い笑みが上る。肩を軽くすくめ、エドアルドは同じ様に苦笑を漏らすと、
「最後の一言はね。姉上らしいですよ」
そう言って彼女に歩み寄る。アデレードは疲れた顔になると、その短く赤い髪を荒々しい手つきで掻きむしった。何か問題でも起きたらしい。思いながら、エドアルドは言葉を紡ぐ。
「どうかしたの、なんて、聞いていいのかな」
「……大したことじゃないわ。買収しようとしている企業が、なかなか首を縦に振らなくて」
言葉の後、アデレードの口から溜め息が漏れる。エドアルドは苦笑して、
「企業の買収……また、大きなことをやるんですね、姉上は」
「抱き込んでおかないと色々と面倒なのよ。モリエーロに駒を進めるのにね」
「モリエーロ？」
聞き知った土地の何、エドアルドは目を丸くさせる。その様子に気付いて、ああ、とアデレードは言った。
「ロミッツィ絡みじゃないわよ、今のところは。この先は、解らないけれど」
「へぇ、そうなんだ……俺には、そういう話は、良く解らないけど……」
言葉を濁すようにエドアルドが返す。アデレードは弟の、そ知らぬふりを決め込む態度に苦笑した。ロミッツィはモリエーロでは最も大きな資産家だ。その土地で商売をするには、多かれ少なかれその名前と関わらずにはいられない。幾ら彼がその手の話に疎くとも、それを解っていない筈がない。
「父さんは……何だって言うんだい？」
「ロミッツィがらみの件からは手を引け、若しくは、関わるな、だそうよ。そうよね。叔母様も戻ってきた事だし……関わりたくないのが本心よね」
あーあ、と、やや大袈裟に、アデレードが嘆きを声に表す。エドアルドは苦笑すると、
「だろうね。前の当主がなくなってから三年も、叔母上はその人の妻として、縛り付けられていた訳だし……ああでも、今の主はそんなに、うちとの関係を重視していなかったんじゃないのかな」
「あら、どうしてそんなことが解るの？」
思案顔になったエドアルドの言葉に、アデレードが問い返す。エドアルドは笑いもしないまま、
「ルゥが言ってたんだ。長兄が、自分達を追い出したがってたみたいだ、って」
「へぇ……そうなの……」
エドアルドの意外なニュースソースに、アデレードが目を丸くさせる。感心する姉の様子に、彼は肩をすくめると、
「とは言っても、それも俺の憶測だけど。商売をするんだったら、そういうのと話は別、なんだろ？」
「そうね……向こうの、由緒の怪しい「ロミッツィ」は、ボロージア本家と繋がりを持ちたいって、聞かないでもないもの……でも今回は、一杯食わされた気がするわ」
疲れた声で言って、アデレードがまた苦笑する。エドアルドは軽く笑い返すと、
「お疲れのようですね、姉上。少し遅いけど、お茶でもしていったらどうですか？」
「あら、優しいわね、エドアルド」
その言葉に、アデレードが笑う。そして、
「最近は、素行も宜しいみたいだし？ボロージアの若様は、一体どうしちゃったの？」
「苛めないでくれよ、姉さん。ちょっと思う所があるってだけだよ」
「ルゥもいるし？」
言われて、エドアルドは言葉に詰まった。姉は自分をいたぶるつもりなのか、ニヤニヤと、奇妙に楽しそうに笑っている。言葉は更に続けられた。
「夜遊びの回数が減った、って、ファビオが言ってたわ。で、オマケに、可愛らしい従妹と、夜な夜なお庭でハイティー、ですって？」
「……夜な夜な、って訳じゃないよ。あの子が呼びに来るから、時々……」
執事の名前が出る。エドアルドは困り顔でそっぽを向いた。周知の事実だろうとは踏んでいたが、言われると何も反論できなくなる。相変わらずアデレードは、ニヤニヤと笑っていた。そして、
「そんな若様のご相伴に預かったら、可愛らしいお嬢様に、やきもち焼かれちゃうわね。どうしようかしら」
「……姉さん、揶揄わないでくれよ」
困り果てたようにエドアルドが返す。アデレードはふっと、優しい表情になると、
「でも、いいことよ。お前は今までが、あんまり幸せそうじゃなかったもの」
そう言って、今ではもう自分より高くなった、その頭に手を伸ばして撫でる。エドアルドは驚いたように姉を見た。ア

デレードは静かで、そしてどことなく寂しげな笑みで、言葉を続ける。
「あの子に、あんまりひどいことをしては、ダメよ。私が許さない」
「何だか怖いな……姉さんに言われると」
あはは、と、エドアルドの口から、乾いた笑い声が漏れた。アデレードはにっこりと笑うと、
「あら、何も怖くなんかないわよ。お前があの子を大事にしていれば、何の問題もないことだもの。私の母さんや、お前の母親が、父さんにされたような仕打ちは、絶対にしない、って、そう誓えばいいだけよ」
「姉さん……それはちょっと、違うような……」
エドアルドの視線が、泳ぐ。この人は一体、どこまで何を知っているのだろう。ちらりと見遣ると、アデレードは変わらずに笑っていた。次には一体どんな言葉が飛び出すだろう。思っていると、彼女は言った。
「最近ちょっと疲れてるから、今日はゆっくりしようかしら。そうだ、若様、一つお願いしていい？」
その言葉に、奇妙な緊張が解ける。苦笑し、エドアルドは少しだけおどけた素振りで彼女に返す。
「……何なりと、セニョリータ」
「じゃあ、えーっと……『ラルゴ』のオレンジレーキが食べたいわね。それと、ガトーショコラも。1ラウンド……ううん、半分でいいわ。それから、レアチーズと……」
「姉さん、一人でそんなに食べる気かい？」
見た目ややることとは全く違う姉の要望に、呆れながらエドアルドが返す。アデレードは笑いもせず、
「あら、誰も私一人で、なんて言っていないわよ？若様が主催のちょっと遅めのお茶会に、可愛らしい従妹のお嬢様も、勿論そのお母様も、招待してくれるんでしょ？」
いたずらっぽくその目が光る。敵わないな、そんな風に胸の中で呟いて、エドアルドは言った。
「今からか……ばあやに叱られそうだな……」
「心配しなくても、物さえあったら一人走ればすむことよ。ばあやじゃなくてもね」
アデレードが、勝ち誇ったかのような顔になる。エドアルドは一礼して、恭しく返した。
「かしこまりました、セニョリータ。すぐにも手配いたします」

少々遅い、そして少人数ではありながらもやや騒がしい午後のお茶会は、案の定、老女中に見付かるところとなった。年若いメイドが数人、庭でその支度をしているところから、ばあやの小言は始まった。今時分からお茶なんて、これから夕食の支度もあるのに、メイドをこんなことに使うなんて、と始まったその小言も、ばあやとそのメイド達にもケーキを振舞ったおかげで、普段より数倍早く納まった。が、老女中がそれで全てを納得した訳ではなく、これでは夕食が後れてしまう、遅くなっても文句は聞きませんよ、と、続いた。しかし、誰もそれに文句も言わなければ、小言に対する不平不満の欠片も表さなかった。
老女中の宣言通り、夕食の時間はずれ込んだ。が、遅いティータイムの後で、誰も空腹を覚える事も、まして訴える事もなく、その夕食もまた、少々騒がしくはあるが、支障もなく、むしろ円滑で和やかに済まされた。主を除くボロージアの面々は、その夕食が終わってもなかなか食堂を離れず、しばらく団欒に興じた。時計を見て、アデレードが慌てて、初めて四人は時間の経過を知ったほどだ。明日も早いし忙しいから、とアデレードが席を立ったのを皮切りに、四人の夕食会はお開きとなった。夏の日没は遅いが、既に外には青い闇が迫っている。
「じゃあね、兄さま。お休みなさい。それから、今日は有り難う」
部屋に戻る直前、ルクレチアそう言って手を振る。見送って、エドアルドも同じくその手を振り替えしてから、自室に戻る。
夏季休暇の終わりと、ほぼ同時に、ルクレチアはこの屋敷を出て行く。初めから決まっていたこと、とは言え、やはり寂しいことに変わりはない。三年もの間、一目たりとも会えなかったと言うのに。思ってエドアルドは苦笑した。
確かにこの腕に抱いて、お互いの気持ちを確かめ合って、触れ合うことも出来たのに、時折、会いに行くことも叶うのに、この寂しさは何だろう。そしてその寂しさのあまり、昼間の自分は少し、先走りすぎた。あの子はまだ十七歳だ。女学校を出ても、大学に進みたいと言い出すことも考えられるのに、卒業したなら結婚しよう、などと。思って一人、エドアルドは赤面する。それでも、いずれは口にするはずの言葉だった。言ってしまったことは、今更悔やまない。ただ、そこまで自分が捕われているのだと、彼女に知られるのは、少しまずいかもしれない。素直ではあるが、ルクレチアは「やや我侭」だ。今まで、何不自由なく育ってきて、この先、自分がその気持ち故に、彼女の望む何もかもを叶えてしまうように思われるのは、まずいかもしれない。今でも、些細な事ですぐに膨れて、時々手を妬くことがある。出来れば、主導権は握っておきたい。何事においても。尻に敷かれる、とまでは行かなくとも、自分の意見すら言えない様な事になっては、色々と厄介だ。もう少し厳しくしつけるべきか、いや、それで嫌われたら、元も子もないか。
そんな思いをめぐらせて、エドアルドは一人、笑う。今までは、ずっと焦がれていた。今は一人でも、どこか満たされて、笑える。
彼女を思えば、幸せが心を満たす。愛し愛されるとは、こういうことか。こんなにも、心地好いものか。半ばその感覚に酔う様に、エドアルドはそれを思った。愛していると囁く時の、あの子の表情が、愛おしい。未だ慣れない口付けの

後の、恥らう姿が、目蓋に焼きついて、離れない。あの夜、泣きながら自分を呼んだ声が、忘れられない。安らぎと共に、劣情さえ連れてくる、愛(アモーロソ)しい人。
　ベッドの側の小さな明かりだけをつけて、エドアルドは、部屋の窓から夜の庭を眺めていた。グラローニは片田舎だ。そして、屋敷の近くには他に建物がない。夜を昼に変えるような、喧しいネオンも届かない庭は、青い闇に沈んでいた。月明かりが、庭の木々を照らしている。流れる風は、時を経るごとに冷たくなっていく。秋が近い。
　コンコンと、硬い音が室内に小さく響いた。扉を外からたたくその音に、エドアルドは目を上げる。ばあやか、メイドか。何の用だろう。明かりをつけないまま、エドアルドはその音に答えた。
　「誰だい？」
　扉は、外から開かれる。見えたその影に、彼はその目を見開いた。
　「……ルゥ、どうしたんだい？」
　ルクレチアがいつかのように、その扉の外にいる。歩み寄って、エドアルドは彼女を室内に招きいれた。同時に、部屋の明かりをともす。ルクレチアは少し困ったように笑って、
　「ごめんなさい、兄さま。もう、お休みになるところ？」
　「いや……まだ、構わないけど……君は、まだ休まなくていいのかい？」
　またいつもの、庭遊びの誘いだろうか。思っていると、ルクレチアはエドアルドの顔を見上げて、
　「伯父さまがね、外しくれ、って……」
　「……また？」
　やや呆れて、エドアルドが聞き返す。ルクレチアは僅かに申し訳なさそうなになると、
　「最初は、姉さまのところに行こうと思ったんだけど……明日、早いって言ってたでしょう？だから……」
　「全く、あの人は……」
　夕食の席にいなかった父親の事を思いながら、エドアルドがぼやく。ルクレチアは少し戸惑いながら、
　「ああ、でも……伯父さまも、母さまと、もうゆっくりお話できる機会も、あまりないでしょう？ルゥなら、どこか別の部屋に行くから……」
　「……ここで良ければ、幾らでも使っていいよ、ルゥ」
　慌てる口調のルクレチアの様子を、少しだけエドアルドは笑った。ルクレチアは更に慌てて、
　「ううん、本当に、いいの。ただ……ちょっと兄さまの顔が、見たかっただけだから……」
　「俺の顔が？……どうして？」
　エドアルドは、その言葉に首を傾げる。ルクレチアはほんの少しだけ不服そうに、その目を逸らし、
　「昼間……言ってたでしょ？その……」
　ルクレチアが言葉に詰まる。エドアルドは黙して、その続きを待つ。
　「……寂しくなる、って……」
　「……ああ……言った、ね……」
　相槌を打つように言って、エドアルドはかすかに赤くなる。ルクレチアはそれを見ず、彼よりももっと赤い顔で言った。
　「母さまと、伯父さまを見てたら……私も……その……」
　ごにょごにょと言葉が、また小さく濁る。見下ろして、エドアルドは吐息を漏らすように笑った。ルクレチアが目を上げる。泣き出しそうなその閃きを見て、エドアルドはそっとその手を彼女の頭に乗せた。
　「兄さま……？」
　「それで、俺に会いに来てくれたの？」
　「……うん」
　返答と共に、ルクレチアがまたそっぽを向く。その様子をくすくすと笑いながら、エドアルドはいつものように、優しくおどけて言った。
　「光栄です、セニョリータ。散らかった部屋ですが、どうぞおくつろぎ下さい」
　「……いいの？」
　恐る恐る、ルクレチアが目を上げる。エドアルドはにっこりと笑って、
　「ゆっくりしていくといいよ。それとも、今夜もここに泊まるかい？」
　「……ルゥは、ソファでいいわ」
　言われんことを何気に察知して、ルクレチアが言う。エドアルドは肩をすくめて、
　「とんでもない。女性をソファで寝かせるなんて、そんな真似、俺には出来ませんよ、セニョリータ」
　「で、でも、兄さまが……」
　慌ててルクレチアが反論しようとする。エドアルドは笑いかけて、
　「二人で一緒に寝ればいいよ。そんなに狭くないし……」
　「一緒に？」

不思議そうに、ルクレチアがエドアルドを見る。エドアルドは笑いながら、
「こんな時間に男の部屋を訪ねて来るんだから……そういうことじゃないのかい？ルゥ」
屈みこんで、耳元で囁く。言われて、ルクレチアの顔が一瞬で真っ赤に染まる。同時に泣き出しそうな顔になると、
「に、に、兄さまっ……わた、わた、私、そんなつもりじゃっ……あ、あ、あのっ……」
「冗談だよ、ルゥ」
くつくつと、エドアルドが笑う。真っ赤な顔で泣き出しそうな目のまま、ルクレチアは安堵の息を漏らす。いつものようにまた、怒らせるかな。思いながら、エドアルドは彼女の次の言葉を待った。ルクレチアは、そのまま俯く。あれ、兄さまのバカ、が、聞こえてこない。思っていると、彼女は細い声で、小さく言った。
「……兄さまが、その……」
「……ルゥ？」
その肩が震えている。しまった、怒らせる、ではなくて、泣かせたか。エドアルドは内心焦る。が、ルクレチアは震えたまま、細い声で続けた。
「……兄さまが、そうしたいなら……私、あの……」
ちらりと、ルクレチアがその視線をエドアルドに向けた。予測していたのとは違う展開に、焦りながらも、エドアルドは心臓が高鳴るのを押さえられなかった。その声は、今、何と言ったか。細く途切れがちの、泣き出しそうな声が紡いだ言葉は、途切れてしまったが、それでも十分に、彼女の思いを伝えてきた。何てことだ、抗えない。思いながら、エドアルドは頬の引き攣るような笑みを、その顔に浮かべた。思惑とは全く違う展開は、だからこそ、彼を高揚させる。奇妙としか言いようのない、どこかいびつな笑みを浮かべた彼を見ず、ルクレチアは慌てた様子で弁解を始める。
「ほ、本当に、そんなつもりで来たんじゃないのよ？ただ兄さまとも、もうすぐ離れるんだなあって、そう思ったら……さ、さっきまでみんなで一緒にいて、兄さまとだって、レポートを書いてる時にも、一緒にいたけど……だけと……」
「……うん」
頭がぼんやりする。この子が、こんな風に言うのを聞けば、その姿を見たなら、やはり正気ではいられない。今まで自分を誘ったどんな女よりも、彼女は魅力的だった。愛らしいその容貌は、欲情するには確かに足りない。恐らく、そういうことではないのだろう。自分の奥底が、彼女を求めている。触れ合うことも含めて。勿論、本能ゆえの部分もある。けれどそこにあるのは、もっと奥深く、濃密な、何とも言い知れぬ欲求だ。取り込んで、一つになってしまいたい。それほどまでの。
体の求める欲を満たすだけなら、他の女でも構わない。けれどそこまで、他の誰かを思うことはない。今までも、これからも、彼女以外には。
「ルゥ」
「……ごめんなさい、やっぱり、誰かに言って、他の部屋に……」
泣き出しそうな目でルクレチアが言う。その肩に手を置いて、エドアルドは笑いかけた。
「俺の顔が、見たかったの？」
意地悪な質問だろうか、言ってしまってから、エドアルドは思った。ルクレチアは無言で頷いて、その目をきつく閉じる。
「ルクレチア……」
「ごめんなさい……あの……」
「どうして謝るの？俺は、嬉しいよ」
その言葉に、ルクレチアは恐る恐る顔を上げた。エドアルドは笑いかけて、その髪を撫でる。
「兄さま……」
「今夜は一緒に寝よう、ルゥ」
「っ……え？あ、あの、でも……」
「君が嫌がる事は何もしないよ……約束する」
エドアルドの言葉に、戸惑いを浮かべた瞳をルクレチアが見せる。笑いかけて、エドアルドは彼女の答えを待つ。
「誓うよ。君が嫌がる事は、何もしない」
「……うん」
視線が泳ぐ。ルクレチアが真っ赤な顔で頷いて、エドアルドは小さく笑った。髪を撫でた手でその頭を軽く叩くと、エドアルドはそのまま、彼女の顔を捕まえた。
「可愛いよ、ルゥ」
すかさず、頬に口付けする。ルクレチアは軽い口付けに瞬間、頬を緩める。が、
「……こういうのも、いや、って言ったら、兄さま、どうするの？」
「え？ダメなのかい？」
「……ダメじゃ、ないけど……」
「どっちだい？ルゥ。はっきり言ってくれなきゃ、解らないよ」

耳元、エドアルドが囁く。声が笑っている。ルクレチアは眉をしかめ、キスされた頬を手の甲で拭うと、
「じゃ……『ダメ』」
「……冷たいなぁ、ルゥ。昔は「兄さまがキスしてくれなきゃ寝ない」って……」
「そ、そ、そんなこと、言ったこと、ないもん！」
「あれ、そうだっけ？」
惚けたようにエドアルドが言う。ルクレチアは膨れて、
「もう、兄さまって、どうしてそんなに意地悪なの？知らない！」
「知らない、って……ルゥは寂しいから、兄さまに会いに来たんじゃなかったのかい？」
「知らない、知らない、知らない！兄さまのバカ！」
半べそでルクレチアが怒鳴る。エドアルドは眉を軽く寄せて、
「困ったな……そんな風に言わないでくれよ、ルゥ。大好きだからさ」
言いながらも、ご満悦の表情で笑っていた。

「母さまって、伯父さまのこと、凄く好きなんだと思うの」
明かりを消して、お互いの顔を見るように、向かい合わせで二人はベッドに横になる。間近に見えるルクレチアの言葉を聞きながら、エドアルドは目を丸くさせた。
「君のお母さんが、かい？」
二人は兄妹で、エリザベッタは兄であるモントリーヴォを頼ってグラローニに戻ったのだ。不仲、ということはないだろうが。思って、エドアルドは眉を寄せる。ルクレチアは困ったような顔で、
「だって本当に、そうなんだもの。今日だって、追い出されたし……それに……」
「それに？」
途切れた言葉の先を尋ねるように、エドアルドが言った。ルクレチアは困った顔で、
「どう言ったらいいのか、解らないけど……そういう顔になるの、母さまが」
「……そういう、ねぇ……」
「兄さまだって、解るでしょ？そういうの」
「俺は……そういうところに遭遇したことが、ないからなぁ……」
言いながら、エドアルドは自分の中の、叔母と父とが同席している場面の、記憶を手繰る。そのまま考え込むエドアルドに、ルクレチアが言った。
「母さまのお母さま……私達のお祖母さまって、母さまを産んですぐ、死んでしまったんですってね」
「ああ……そうみたいだね」
詳しい事情は知らない。が、祖母は産後の肥立ちが悪く、叔母を産んですぐ亡くなった、と老女中や生前の祖父に聞いたことがある。エドアルドの言葉の後、ルクレチアは寝返りを打って、その顔を天井に向けた。
「ルゥ？」
「ルゥには、きょうだいがいないから、良く解らないけど……でも、もしいたとしたら、その人のこと、凄く好きになると思うわ。だって、世界でたった二人なんだもの」
真直ぐに天井を見詰める、その横顔を見て、エドアルドは笑う。手を伸ばして、エドアルドはルクレチアの手を捕まえた。目だけを、ルクレチアが彼に向ける。笑いながら、エドアルドは、
「じゃ、俺は、君が一人っ子で良かった、って思おうかな」
「……どうして？」
「もし他に……そうだな、君にもし、弟でもいたら、きっと君とこんな風に、二人きりにはなれないだろ？」
「……もう、兄さま、そんなことばっかり。兄さまには、アデレード姉さまがいるでしょ？」
言葉を茶化すエドアルドから、ルクレチアは視線をそらす。軽く笑って、エドアルドは無言だった。手は、ゆるく繋がれたままだ。指先に触れるぬくもりが、心地いい。
「姉さんか……俺は姉さんに、そんなに好かれてる感じが、しないな……」
力のぬけたルクレチアの手を弄びながら、何気なくエドアルドが呟く。ルクレチアは少し笑って、
「でも兄さまは、姉さまの事、嫌いじゃないでしょ？今日だって、姉さまが疲れてるから、わざわざ『ラルゴ』のケーキを四種類もお願いして……」
「ああ……まあ、ね」
半ば強要されたような気もするが。思いながら、エドアルドはそれを口にしなかった。くすくすと、ルクレチアが笑う。訝しげに思って、エドアルドは身を起こし、ルクレチアに尋ねた。
「何がおかしいんだい？ルゥ」
「何もおかしくないわ、兄さま」
「……そう、かなぁ……」

エドアルドは不審の目で、ルクレチアを見る。ルクレチアはそれ以上何も言わず、暫くくすくすと、小さく笑っていた。

白いシーツは波立って、ベッドが軋む度にその模様を変えた。陸に上げられた魚のように、白い体がその上で跳ねる。指と指がからんで、強く互いの手を握り合う。女が爪を立てると、その痛みに僅かに男は眉をしかめた。
絡んだ下肢が熱い。目の前で、女は顔を伏せて、仰け反る。白い首筋を汗が流れた。吸い取るように口付けして、男はその体を貪り尽くすように、激しくその体に打ちかかる。
「……ん、あぁっ……」
押し殺された声が、その唇から漏れる。聞こえたその声に、男は思わずその名を呼んだ。
「リザ……」
金色の長い髪が、白いシーツの上にうねっている。揺さぶられる拍子に合わせて、髪はベッドの上でさらさらと揺れた。空色の目が男を見て、笑う。吐息と共に、その声が漏れた。
「お兄さま……私の、モントリーヴォ……」
うっとりとした声色で自分を呼ぶその唇を、男は塞いだ。支配するような激しい口付けに、女はその眉を寄せる。拒む様子は見られない。打ちかかるほどに、体の下で、女の体はそれを求めた。深い繋がりを求めて、嵐の海の波のように、激しくうごめく。
「お兄さまっ……っ……もう、離さないで……」
唇が離れる。空気を欲して開放した唇を、追いかけるように女は喘いだ。その目に涙が浮かぶ。暴れるように悶えて、彼女は悲鳴をあげるように、言葉を続けた。
「もうどこへも、やらないで……貴方の側に、私を……私をずっと、離さない、で……あ、あっ……」
その体が痙攣する。押さえつけて、男はそのまま体をむさぼり続けた。咽喉から、口付けは胸に降りる。食らいつくように繰り返して、彼はその眉をしかめ、その目を強く閉じた。
「エリザベッタ……私の、妹……」
名を呼ぶと、体は震え上がった。その胸に顔をうずめて、彼は呻くように、言葉を紡ぐ。
「もうお前を、離しはしない……お前は私だけのものだ……誰にも、やるものか……」
躍動する下肢が、動きを止める。体を起こし、絡み合ったまま、男は目の前の、白く柔らかな体を引き寄せ、抱きしめる。
「お兄さま……私の、お兄さま……」
腕の中で、彼女は恍惚の表情で、繰り返すように言った。目を閉じて、その胸にもたれかかる。頬を摺り寄せる様子は、無垢な少女の眠る様にも似ていた。

ボロージアの屋敷から、エリザベッタとルクレチアの二人が、アパルトメントに移って、一ヶ月。エドアルドはそれ以前とさほど変わらない生活に戻っていた。平日の何日かを大学で過ごし、時折バールにも立ち寄る。体を重ねるためだけに会っていた女とは、遭遇して話はするものの、それ以上のことはなくなっていた。あちらも、新しい相手を見つけたらしい。店でよく見かける一人と、腕を組む姿を何度も見かけた。特別気にもならないが、彼女はその相手とも、どこか満たされない夜をすごしているのだろうか。

どれだけ時を共にして、その温もりを感じても、心の奥底が凍えたままだというのは、どれほどの寂しさだろう。それならば、一人の夜を過ごす方が、救われるだろうに。何気にエドアルドは、女に同情した。もしかしたらそれは、彼女が自分に感じていた憐憫と、同じものなのかもしれない。思いながら、彼は苦笑した。もはやそれは他人事だ。そして今、もしそれを彼女に聞かれれば、恐らく平手の一発も食らうだろう。知った口を利くな、とでも罵られるかもしれない。

殴られる事も、罵られることも、痛くも痒くもないと言えばそうだが、人の気持ちをかき回す事も、あまり趣味のいいことではないだろう。あの女は、あの女だ。二度と関わらないとは言い切れないが、自分から触れに行くこともない。そんなことをすれば、ルクレチアが哀しむ以前に、姉が怒る。

アデレードは、相変わらずの様子だった。婚約者を一度、きちんと連れて来る、といつか言っていたが、そんな余裕もないらしい。家に戻らない日も続いている。会社で寝泊りしているのか、と尋ねたら、その近くに部屋を借りている、といつか言っていた。もしかしたら近いうちに、そちらに移るのだろうか。毎日合わなければならない用も特別ないし、寂しくて堪らない、ということもない。彼女は彼女で彼女自身の、望むように生きればいい。そう言えば、モリエーロに進める駒が、という話はどうなったのだろう。父親とは、あれからも、相変わらずなのだろうか。ボロージアを名乗らせろと言った覚えはない、というあの言葉は、やはり彼女の出自と関わっているのだろうか。

ボロージアの当主が妾腹に産ませた娘、というのがアデレードの素性だ。彼らの父親だけではなく、その祖父も、それ以前の主達も、そうやって多くの妾腹に、子供を産ませてきた。男子にはある程度の財産を与え、そこから派生したボロージアが、現在分家を名乗っている。女子は、その多くが政略結婚の道具として、彼方此方に嫁がされた。ボロージアと古い縁続きの、という資産家や旧貴族がいれば、大抵がそうした妾腹の娘達の血統だ。そうして代々のボロージアの主達は、その力を守り、繋ぎ、大きくしていった。どこの旧貴族も、旧王族も、同じ様な事はやっている。今更、家柄だのというのも馬鹿馬鹿しいが、そんな手合いが消滅する事もなく、今も尚、国内だけでなく外国からも、ボロージアとの繋がりを求める声は少なくない。最もアデレードの場合は、そうやって持ち込まれた結婚を二度までもぶち壊している。三度目はないだろう。しかも今は、片恋の相手である自分の右腕を、無理やり婚約者にしてしまった。らしくない、と言うべきなのか、その強引さが彼女らしい、と言うべきか。

そう言えば、彼女がいつか言っていた、自分の母親が、祖父の妾腹の娘かもしれない、という話は、本当なのだろうか。だとするなら彼女の母親は、父とは半分、血の繋がった人間だということになる。当然、叔母ともだ。

自分の父親も、言うのも何だが、相当な男だ。老女中は隠しているつもりらしいが、町へ出ればその醜聞は耐えない。最近は大人しいようだが、どこそこの若い女に手を出した、どこそこの男に殺されかけて、金で始末をつけた、と、話の種は尽きない。当然祖父も、似たようなものだったらしい。バールで馴染みになった老人達からは揶揄い半分に、彼の生前の話を良く聞かされた。今度は若君の番だ、何か一つ面白い話の種でも提供してくれ、と言われて、さしもの彼も苦笑を禁じえなかった。恐らく最近の彼らの話の種は、自分とあの女が別れた、その類の事だろう。新しい恋人の事は、できれば知られたくはない。彼女が知らないにしても、そんな話が流布されるのはあまりいいことではない。あの子はまだ十代の少女なのだし、いずれは妻にと思ってはいるものの、叶うとも限らない。

どんなに幸福で満たされても、エドアルドの中から、その絶望に似た何かは、拭われなかった。幸福は永遠ではない。未来の総てが希望に満ちている事も、考え難い。一瞬だけ満たされた、その記憶を求めて、いつまでも渇望し続ける人間は、幾らでもいる。そして見てきた。多くを望めば、それだけ、喪失感は大きい。一度満たされれば、小さな一欠片を失う事も、耐えられなくなる。それが連れて来る痛みは、計り知れない。だから求めなかった。本当は、何よりも欲しかったものを。

それでも、あの夜自分は止まらなかった。止められずに思うまま、求めて、拒まれたなら、死んでも構わないとさえ思った。手に入れた瞬間の幸福は、何物にも代え難く、それを失うかもしれないと思った時の絶望は、何にも増して恐ろしかった。もう二度と、彼女を手放したくない。他の誰にも渡したくない。失うくらいなら、死んでも構わない。他の誰かに奪われるなら、殺してもいい。今も、ふとそんなことを思う。それだけ彼女に心を奪われている、ということなのだろうか。その思いが、いつか自分を蝕んで、癒える事のない渇望に導こうとも、それでも愛さずにいられない。失いたくない。それが崩壊の始まりでも。

もしこんな心の中を、彼女に知られたらどうなるのだろう。それを思う事も、エドアルドには恐怖だった。愛していると幾度も囁きながら、妻にと、言葉にして望みながら、それが永遠ではないと知っている自分が、ここにはいる。そうやって誰かを愛おしいと思うことで、何もかもが壊れていくかもしれないと、解っている。それは彼女への背徳だ。彼女

は嘆いて、自分の前から消えるだろうか。それとも笑って、永遠をいとも容易く、自分の前に指し示すだろうか。愛してると、その声で、変わらずに言ってくれるだろうか。目に見えない、何よりも不確かなものを、そのたった一つを信じ抜いて、自分の側にいてくれるのだろうか。
「愛してるよ、ルクレチア……」
呟く顔は、笑ってもいなければ、苦し気でもなかった。呟かれた声は冷たく、ただ小さく、そこに聞こえた。

グラローニに移って、更に母親と二人で暮らし始めて、一ヶ月。ルクレチアには慣れないことの連続だった。まずは、アパルトメントでの生活だ。それまで、不必要なほどに大きな屋敷でしか暮らしたことのなかった彼女には、まずその狭さが驚きだった。ボロージアの屋敷で母親と二人で使っていた部屋より、そこは更に一回りも狭かった。とは言え、生活に必要な機能が欠けているわけではない。食事というものが厨房で作られている、だの、洗濯は洗濯場で、という概念しかなかった彼女には、その機能を持つ場所がすぐ近くにあることすら、驚きだった。二人だけの暮らしには、勿論、使用人の数も少ない。家が狭いのだ。複数の人間が必要なわけでもないし、余計な人間がいればそれだけ狭くもなる。その認識すら彼女には無かった。身の回りの世話をするのは、二人。たった二人のメイドが家中の何もかもをする、と聞いた時にも、彼女は驚いた。二人きりで何が出来るのか、大変ではないのか、とメイドに直接尋ねたなら、彼女達には、それならお嬢様も時々、お手伝いくださいね、と笑って言われてしまった。自分は世間知らずらしい。しかも、かなり。そう思ってそのことを従兄に話すと、従兄さえも、声を立てて笑った。そして、ごく普通の家庭には、メイドすらいないものだと言われて、また驚いた。自分の家族は、普通ではないというのは何となく解っていたが、それは頭で解っていた気がしただけで、本当のところは理解できていなかったようだ。

「だからね、もっとしっかりしなくちゃ、って思ったの」
「そうですね。いい心がけだと思いますよ」
その日の昼前、メイドと共に昼食の支度をしていたルクレチアは、メイド達の前でそんなことを言った。つけられた二人のメイドは揃って二十代前半の、年若い娘ばかりだった。ボロージア本家のあの老女中のお墨付きらしい彼女達は、学校の友人や本家のいとこ達の様にルクレチアに気安く、それが何より彼女とその母親、エリザベッタには嬉しい配慮だった。まだ若すぎて色々に欠けるから、と、件の老女中も時々、こちらの様子を見らに来るが、それも二人にとっては喜ばしい事だった。最も、メイドの二人はそれをあまり歓迎していないらしい。ばあやは細かくて色々叱るから、それもそうよね、とルクレチアが言ったら、彼女自身がその老女中に叱られてしまった。
「お嬢様、ナイフは危ないですから。お皿を運んでもらえますか？」
「ええー、でも、私だって、りんごくらい剥けないと……」
「それはまた今度に致しましょう。リラがアップルパイでも焼く時に」
昼食番のメイドとそんなやりとりを交わしていると、キッチンにもう一人のメイドから、声が投げられる。
「お嬢様、奥様が、お呼びです」
「母さまが？」
部屋着にエプロン、という格好で、ルクレチアがその声に振り返る。彼女を呼んだメイドは少し笑って、
「張り切っていらっしゃるところを、申し訳ありませんが。こちらはメグが代わりますから」
「……はぁい。じゃ、宜しくね、リラ、メグ」
その言葉に、ルクレチアはエプロンを外し、母がいると思しき、彼女の私室に向かう。立ち去ったキッチンからは二人の話す声が聞こえた。二人はいつでも仲がよく、何やらいつも楽しげだ。それに混ざりたい、という気持ちが無いわけでもないルクレチアは、少々後ろ髪を引かれる心地だった。いいなぁ、二人とも、楽しそう。私も、兄さまに会いたいな。思って、ルクレチアは一人、吐息する。
引越しをして、学校が始まって、彼と会う機会もぐっと減ってしまった。彼女の母親を驚かせるといけないから、という理由で、エドアルドは彼女との関係を、暫くは伏せるつもりらしい。どうしてなのかと尋ねても、返答はいつも曖昧だった。恥ずかしいのだろうか。それとも、何か後ろめたい事でもあるのか。確かに、何もかもは話して聞かせられない。恥ずかしいし、後ろめたい気持ちにもなる。それに、自分と彼とは従兄妹同士だ。家の政略によって二度の結婚をした母親に、祝福されるとは限らない。そう言えば、母は、自分の父親だった人の事は、どう思っていたのだろう。ふとルクレチアはそんなことを思った。彼女の最初の夫、自分の父親にとって、彼女はどんな存在だったのだろう。余りにも幼い頃に、父と母は別れてしまった。未だに、その理由をルクレチアは知らない。生きているのかさえ、確かめた事がない。父の事も、殆ど覚えていなかった。モリエーロの、ロミッツィの父親のように、彼と会った記憶は僅かだ。伯父が時々したいと言うように、抱いてもらった事すら、余りない気がする。幼い日、いつも自分は、母親と一緒だった。それが当然で、寂しいと思った事はない。今も、疑問には思うけれど、それ以上の感触が、彼女にはなかった。
「母さま」
母の私室に着く。開けられたままのドアをノックして、ルクレチアが声をかける。
「ルゥね。お入りなさい」

いつも通りの声に、ルクレチアは室内に足を進めた。一応は女主人たる彼女の部屋は、やはりあまり広さを感じさせなかった。必要なだけの面積はあるが、どことなく、閉じ込められている印象がなくもない。どうしてこんな風に思うんだろう、どうして慣れないのかしら。思いながら、ルクレチアは母の側へと歩み寄る。いつものように彼女は穏やかな表情だった。ゆるい笑みを見て、ルクレチアは尋ねる。
「御用は何？母さま」
「用というより、少し話があるの。お座りなさい」
「お話？」
母が着いているテーブルの、向かいの椅子を勧められて、首をかしげながらルクレチアは腰掛ける。エリザベッタの表情が、僅かに曇った。何か、叱られるのかしら。思って、ルクレチアはその肩を強張らせた。
「学校はどう？ルクレチア」
「どう、って……まだ、変わったばかりだし……でも、みんないい人よ。クラブにも、入らないか、って、誘われたわ」
「お友達は出来た？」
「うん……」
母は、時々、つかみどころがない。雲のように曖昧で、何を求めて、何を理解しようとしているのか、解らない。どこの母親も、こんなものだろうか。いや、この人は自分以上に世間知らずで、いつまでも落ち着かずに、ふわふわとしている。何を言い出すのか解らないことも、ままある話だ。思って、ルクレチアは彼女の言葉を待った。エリザベッタはほっとしたように息をついて、それから唐突に、言った。
「モリエーロの……ブルーノは、解るわね？」
「うん……一番上の、お兄様のところの……」
ロミッツィの現在の主の、長男の名前が出て、ルクレチアは目を丸くさせる。亡くなった先代の息子達の、彼女達への態度は冷たいものだった。同じ屋敷の同じ敷地内に暮らしながら、顔を合わせるのは年に数度で、まだ年端も行かない子供だったルクレチアには、まともに声さえかけたことがない。が、彼らの子供達は、祖父の若い妻とその連れ子であるルクレチアに興味を示し、ちょくちょく二人の暮らす離れを訪れていた。それがエリザベッタの心を慰め、ルクレチアの寂しさも紛らわせてくれた。ブルーノはその子供達の筆頭で、ルクレチアより二つ年下の少年だ。小さな、と言っても七歳か八歳くらいの頃から、良く一緒に遊んだ。ロミッツィの屋敷で数少ない、二人の理解者でもある。
「なぁに、母さま。ブルーノが、どうかしたの？」
言うなれば、彼は大切な友人だ。今更解るか、などと尋ねられても。思いながら、ルクレチアは問い返した。エリザベッタは困ったように笑って、
「貴女の伯父さまから、お話しがあったのよ。ルクレチアさえ、嫌だと言わないのなら、って」
「……嫌って、何が？」
曖昧な答えだ。いや、答えですらない。言い訳じみたその言葉に、更にルクレチアは首を傾げた。エリザベッタは窓へと視線を投げる。そして、その眉を僅かにしかめて、ルクレチアに問いかけた。
「ルクレチア……貴女は、エドアルドの事を、どう思っているの？」
「えっ……エドアルド、兄さまの、事？ど、どうって……」
瞬時に、ルクレチアの顔が赤くなった。エリザベッタは振り返らない。真っ赤になって、慌ててルクレチアは、
「どうって……兄さまは、兄さまよ？その……」
「見ていれば解るわ。私は貴女の母親なんだし。彼が……好きなんでしょう？」
「……うん」
他に答えようがなく、観念したように短く、小さな声でルクレチアが言った。エリザベッタの口から、短い息が漏れる。そして、
「……それなら、お断りするわ。まだ貴女は十七歳で、学校も終わっていないのだし。でもね、ルクレチア……一つだけ、覚えておきなさい」
母親が、自分へと振り返る。その哀しそうな目を目の当たりにして、ルクレチアは息を飲んだ。この母の、この目は、何だろう。思いながら、何故か不安が過ぎって、ルクレチアは思わず、何かを問うように母を呼ぶ。
「……母さま？」
「エドアルドは……次のボロージアを継ぐ人。貴女がどんなに思っても……いいえ、思うだけなら、それは貴女の自由ね。今はまだ……好きでいるだけなら、構わないでしょう。だけどいずれは、エドアルドも、しかるべき人と結婚することになるのよ。解るわね？」
諭されるような口調だった。しかし、言われている意味は良く解らない。いや、解りたくない、のか。思った次の瞬間、ルクレチアの体が震えた。どんなに恋しいと思っても、誰よりも愛していても、彼はいずれ、自分ではない、どこかの誰かと結婚する。思いも寄らなかった母親の言葉に、ルクレチアは驚きと怯えの目になってエリザベッタを見た。エリザベッタは、困ったような目で、そんな彼女を見詰めている。そして不意に立ち上がって、ルクレチアにそっと歩み寄る

。迷うような瞳で、ルクレチアは彼女を見上げた。言葉もなく、エリザベッタは自分の娘を抱きしめる。
「ごめんなさい、ルクレチア……母さまを、許してね」
「母、さま……？」
唐突な母の行動に驚きながら、それ以上ルクレチアには言葉もない。抱き寄せられて、ルクレチアは混乱して、されるままだった。
この人は、何を謝るのだろう。自分が従兄に恋していて、それを咎めたからか。何だか、この人の方が、私よりももっと辛い思いをしている様な、そんな気さえする。謝罪する母親の様子に、何気にルクレチアは思った。そして、心の中で繰り返す。エドアルドは、ボロージアを継ぐ人間だ。いずれは、しかるべき相手と結婚する事になる。従妹の自分ではなくて、他の女性と。思った途端、胸が締め付けられるように痛む。ルクレチアは溢れる涙をこらえるように、強く目を閉じた。
優しくて、でも意地悪で、どこか子供っぽくて、そして何より愛しい人。愛していると、失いたくないと言われて、どんなに嬉しかっただろう。その腕に抱かれて、どんなに幸せだっただろう。口付けは何よりも甘美で、幸福感に眩暈さえ覚えた。その人に、離れるのは寂しいと言われて、妻にと望まれて、確かに気の早い話だと思いはしたものの、どんなに嬉しかったか。自分も離れたくないと、ずっと側にいたいのだと、いるのだと思って、なのに上手く答えられなかった。せめてあの時、まだ誰にも咎められないうちに、一言だけでも答えられたら良かったのに。もうどんなに望まれても、自分はそれにイエスと言えない。どんなに望んでも、ずっと側にはいられないのだ。その時が来たなら、彼の元から去るしかない。
母の腕の中で、声もなくルクレチアは泣き続けた。彼女を抱きしめるエリザベッタも、その眉をしかめて、それ以上何も言わない。
今、あの人に会いたい。そして抱きしめて、口付けして、愛していると言って欲しい。その手で髪を撫でて、泣かないで、と優しく慰めて欲しい。いつかは失ってしまうけれど、だから尚更、今あの人に会いたい。いつかは失ってしまう。いつかは離れてしまう。そんなのは嫌だ。でも、だったら。
「……チェーザレ……」
小さく、ルクレチアはその名を口にする。もう、呼べないかもしれない。思うと、涙はこぼれた。

エドアルドが夜半、屋敷に戻る。老女中は十年近く前から屋敷での泊まり番をしなくなっていた。もう歳ですから、と言っていたが、だったら引退してもいい、と彼が言うと、そこまで耄碌しちゃいませんよ、とか何とか言って叱られた事もある。その、帰宅したはずの老女中が、まだ屋敷内にいるのを見つけて、エドアルドは声をかけた。いつものバール帰りで、少々今夜は酒も過ぎている。叱られるか、と思ったのは後の祭だったが、ばあやはそれどころではないほどに狼狽えていた。
「……どうかしたのかい、エレナ。こんな遅くまで」
「若様……若様こそ、こんな遅くまで、どちらに……」
自分を叱ろうとする口調は、いつもより力なく、気持ちも定まっていないようだった。何事か、起こっているらしい。思いながら、エドアルドは重ねて尋ねた。
「何かあったのか？ばあや」
「いえ、ばあやは……単に帰りそびれただけですよ。さあ若様も、もう遅うございますから、お部屋に……」
言いながら、エレナはちらちらと後方を気にしていた。気がついて、エドアルドはそちらを見遣る。奥は、この家の主の、屋敷内での執務室だ。いくつかある書斎のうちの一つを、彼は自宅での仕事場に当てていた。子供の頃からエドアルドは、そこに入ることを禁じられており、呼び出されでもしなければ、滅多に脚を踏み入れた事もない。何かしら、表に出してはまずいものでもあるのだろう。何しろ彼はボロージアという、一つの巨大財閥の頂点に立つ男だ。単なる金持ちと言うだけではない。父親が、何か仕事でやらかしたのか。思って、無言でエドアルドはそちらを眺めていた。主の不機嫌の余波でも被ったか、ばあやも大変だな。思っていると、その奥の扉が勢い良く開いた。荒々しい耳につく開閉音の後、響いたのは女の声だった。
「父さん、待って！どうしてそんなことに……」
「お前には関わりのないことだ。それともアデレード、お前がロミッツィの誰かと一緒になるか？」
「何を言うのよ……そういう問題じゃないでしょう！」
肩をいからせて、部屋から出てきたのはモントリーヴォだった。後について、アデレードも部屋を飛び出す。
「エレナ、車を呼べ。今から出かける」
歩きながら、モントリーヴォが老女中に強い声を投げた。老女中は戸惑いながら、
「今から、でございますか、旦那様。もう、夜も遅うございますよ？」
いつもなら非常識な、とでも言いそうな、老女中の声は、やはり力ない。モントリーヴォは怒りを顕わに、
「お前を雇っているのは私だ、車を呼べと言うのが、聞こえないのか！」
声は屋敷を震わせるように、廊下中に響いた。老女中の肩がびくつく。流石の彼女も怯えているらしい。周囲を無駄に

威嚇する父親の姿に、側にいたエドアルドは呆れの息をつく。そして、
「そんなに怒鳴る事はないでしょう、父上。ばあやが、怖がっていますよ」
声に、モントリーヴォは初めてエドアルドに気付いたようだった。その目を僅かに見開き、ふん、と鼻を鳴らすと、
「こんな時間までどこにいた、バカ息子」
「外で飲んでいました。それが？」
淡々と、エドアルドは答える。モントリーヴォは舌打ちすると、すぐにも彼から目をそらす。相当不機嫌、いや、怒っている、と言うべきか。何にかは解らないが、ばあやに当たる事もないだろうに。エドアルドは今一度嘆息して、重ねて父親に尋ねた。
「ばあやに当たるなんて、何かあったんですか？」
「父さん、待てって、言ってるでしょう！」
その後を追っていたアデレードが、モントリーヴォに追いつく。振り返るが、モントリーヴォは無言だった。およそ両家の子女らしからぬ足取りと口調、そして形相で、アデレードは父親に追いつくと、噛み付くように言った。
「モリエーロから手を引いたわ。これ以上手出しをしないと、約束もする。だからあんな話、やめさせてちょうだい」
「姉さん……一体、何が……」
「エドアルド、お前も聞いて。ロミッツィの当主が、うちと切れたがっていたなんて大嘘よ。叔母さまをグラローニに返す代わりに、今度は……」
「今ロミッツィと手を切る訳にはいかん。これはお前の持っている、小さな会社だけの問題とは違う。ボロージア全体の問題だ。口出しは許さん」
モントリーヴォはそれだけ言って、きびすを返して歩き始める。廊下を進みながら、彼はどこにいるか知れない使用人に、怒鳴りつけるように声を放つ。
「誰かいないか、車を呼べ！」
一体何事が起こっているのか、エドアルドには良く解らなかった。困惑しながら無言で見送ると、傍ら、アデレードの嘆息が聞こえた。
「……何がボロージア全体の、よ……こんな家、くそくらえだわ」
「お嬢様、お口がすぎますよ。旦那様は……」
「ばあやまでそんなことを言うの？ばあやの家族だって、あの男やおじい様に、酷い目に合わされてきたんでしょう？腹が立ったりしないの？」
当り散らすようにアデレードが言う。老女中は困った顔で笑うと、
「夜も遅うございます。お嬢様も若様も、もうお休みなさいまし」
エドアルドは、そのやり取りを無言で見ていた。アデレードはやりきれない目で老女中を睨んでいる。けれどそれ以上は、何も言うつもりはないらしい。ロミッツィは、叔母をグラローニに帰したというのに、まだこちらに何事かを要求するのか。思いながら、エドアルドは憤る姉に、尋ねた。
「一体何があったのさ、姉さん」
アデレードはしばし無言だった。しかし、疲れたように大きく息を吐き出すと、その赤い髪をかきむしりながら、忌々しげに言葉を紡いだ。
「ルゥを……あの子を、主の息子と婚約させろ、と言ってきたそうよ」
「……ルゥを？」
その名に、エドアルドの心臓が強張る。更に忌々しげに舌打ちして、アデレードは続けた。
「あの子はまだ十七歳よ？学校だって、変わったばかりじゃない。それ以前に、あの子は……」
聞き終わるより早く、エドアルドはその場から駆け出していた。姿の見えなくなった父親を、全力で追いかける。ルクレチアを、自分の仕事の道具にするつもりか。思うと、いても立ってもいられなかった。自分の子供だけならまだしも、妹の娘にまで、そんなことをさせるのか、あの男は。いや、この家の主という人間は。心の中を怒りが渦巻く。叔母も叔母で、今までそのために、どんな思いをしてきたのか。自分の妹だというのに、その辛さも解らないのか、汲み取ろうとさえしないのか。思いながらエドアルドは駆ける。屋敷の正面玄関のホールに辿り着くと、父親は、車がその先へ回されるのを待っている様子だった。構わず、怒鳴るように声を投げた。
「父さん！」
モントリーヴォが、億劫そうに振り返る。すぐ側まで歩み寄り、エドアルドはらしくなく感情的になって、父親に食って掛かった。
「どういうことですか、ルクレチアを……あの子を、ロミッツィに嫁がせるなんて……」
「アデレードに聞いたのか、エドアルド」
「まだルゥは十七ですよ？グラローニに移ったばかりで、そんな話を……」
「エリザベッタの最初の結婚も、そのくらいだった。おかしい話ではない」
淡々と、モントリーヴォが言葉を返す。それが更にエドアルドを激昂させた。掴みかかって、エドアルドは父親に詰

め寄った。
「叔母上がそのために、どんな思いをしたのか、貴方は考えたことがあるんですか。盥回しにされるように、二度も結婚させられて。貴方も、祖父も……あの人達の気持ちを考えた事が、あるんですか！」
「……総ては、家のためだ。いた仕方あるまい」
言いながら、それまでエドアルドを見ていた顔を、モントリーヴォが逸らす。掴んだその襟元を締め上げて、エドアルドはその側で怒号した。
「家？この家が、何だと言うんですか！ただ広いだけで、ろくに人も住んでいやしない。ボロージアの名が何だというんですか！貴方は家のためだと言いはする。けれど家に住む人間の、家族のために、一体何をしてきたって言うんですか？叔母上やルクレチアが、余りにも可哀相だ。あの二人には、貴方しか頼れる人はいないんですよ！それなのに……酷すぎる……」
最後の言葉の、声が掠れる。この男に、こんなに怒りを感じた事は、今までになかった。それだけ自分は、今まで父親に期待していなかった。それでも、家などどうでもいいと、いつか父は言っていた。では何のために、この家を、ボロージアを守ろうとするのか。家族などどうでもいいと、そう言う癖に。訳が解らない。いや、きっと聞かされても、解るはずがない。ただ、その男が腹立たしい。思いながらエドアルドは、強く父親を睨む。嘆息して、しながら、モントリーヴォは言葉を紡いだ。
「……お前には、私の気持ちなど、解るまいよ、エドアルド」
言いながら、モントリーヴォはエドアルドの手を振りほどいた。力ない父親の声に、虚を突かれてエドアルドは息を飲む。哀れなほど、その表情は力ないものだった。使用人が、車が来たことを告げる。モントリーヴォはエドアルドを見る事無く、その場を歩き去った。

車がそのアパルトメントにやってきたのは、夜半だった。メイドの一人が応対に出て、部屋の主に来客を告げる。寝巻きに着替えていた彼女は慌ててショールをまとい、そのあまり広くない玄関に向かう。娘は既に眠っていた。起こす事を憚って、玄関先で対応する。
「お兄さま……こんな時間に、なんですの？」
エリザベッタは、少し疲れて、どことなくぎらついた目の兄に、恐る恐る尋ねる。怯えを見せた妹に、モントリーヴォは苦笑を漏らした。そして、
「すまない、リザ。話したいことがあるんだ……いいかな……」
「それは……構いませんけれど……」
言いながら、彼女はメイドを見やる。メイドも既にくつろぎ着姿で、唐突な来客に少々困惑しているらしい。エリザベッタは短く嘆息して、困った目で笑いながら、
「ここはお屋敷のように、いつでも自由が利く訳ではないのよ、お兄さま。メグも、休むところだったのだし」
「なら、支度をしなさい。外へ出よう」
モントリーヴォの言葉に、エリザベッタは目を丸くさせた。男は傍らに控える運転手に何やら指示を始める。運転手は一礼するとその場を下がり、何事かを手配し始める。
「……お兄さま？」
「ここでできる話ではないんだ。外へ出よう」
言い含めるような兄の言葉に、エリザベッタは苦笑した。そして、側に控えるメイドを見、
「ごめんなさい、メグ。出かける支度をするわ」
「奥様……今から、ですか？」
「ええ。ここにいるのは私達を養ってくれている、ボロージアの当主様ですもの。逆らう訳にはいかないし」
兄の我侭に、エリザベッタが皮肉めいた言葉を発する。モントリーヴォは苦笑するが、特に言葉もないらしい。メイドは困惑しながらも、解りました、と答えて、主の外出の支度を始める。二人きりになると、エリザベッタは吐息混じりに、唐突に言った。
「お兄さま、ルクレチアの、婚約の件ですけれど……諦めては下さいませんか」
「……リザ……」
「あの子はまだ十七歳よ。学校だって移ったばかりで……それに、あの子は……」
モントリーヴォは息を飲む。エリザベッタの言葉が途切れると、その場所は沈黙に包まれた。奥様、お召し換えを、と言ってメイドが戻ってくる。言葉もなく、兄に目配せして、エリザベッタは一旦玄関先から退いた。

モントリーヴォが夜中に車を仕立ててから、三日。屋敷の主はその間、自身の塒に姿を見せなかった。どこへ行ったのか、とエドアルドが使用人達に尋ねても、それに答える人間は誰もいない。全く誰も知らない、ということはない筈だ。知っていて、口止めでもされているのだろうか。思い、エドアルドは舌打ちする。父親の不在に不満なのは、彼の姉も同じだった。あれから毎日、モントリーヴォが戻ると思しき時刻を見計らって、屋敷に現れる。しかし、半ば強襲の

ような到来は、総て無駄に終わっていた。一体あの男は、どこに雲隠れしているのか、と、執事に食って掛かる様子も見られたが、執事も、私は存じません、と首を横に振るばかりだ。幾度となく強い口調でアデレードが詰め寄っても、執事は口を開かなかった。その忠誠心には恐れ入る。が、あんな男に仕える事に、それ程の価値などあるのだろうか。その様子を見ながら、何気にエドアルドは思った。
父親の考えていることも、やっていることも、理解できない。この家を守るために、まだ十七歳の従妹の結婚を勧めることもそうだが、家の為だと言いながら、彼自身の、家への執着のなさはどういうことなのか。
父親は、家庭というものを殆ど省みない男だった。確かに、仕事の都合でそうする余裕も、他の人間に比べれば少ないのだろう。結婚しながらも、妻とは共に暮らさず、子供達の世話は使用人に任せきりで、そうかと思えは出戻りの妹を受け入れ、その世話までしている。それも、経済的な部分に限られた事なのだろうが、その妹からの信頼は、奇妙な程に厚い。亡くなった自分の祖父も、若い頃にはあの父親のような男だったのだろうか。何気にエドアルドは思った。
祖父が亡くなって、そろそろ八年ほどだろうか。幼い頃は父親よりも、祖父との関わりが深かった。特別溺愛された記憶はないが、それでも、まだ家族らしかった気がする。あの祖父は、父や叔母の前では、どんな父親だったのだろう。亡くなった祖母という人とは、どれほどの愛情があったのだろう。
そう言えば、姉がいつか言っていた。自分の母親は、あの老女中の姪で、しかも祖父の娘だと。もしそれが本当だとするなら、姉を産んだ母親と、あの父親とは、父を同じくした兄妹だということになる。
「今夜も当主様は行方知れずのようね」
怒りを通り越して、呆れの口調でアデレードが言った。廊下の向こうに、モントリーヴォの執務室が見える。エドアルドは腕組みする姉を見て、小さく苦笑を漏らした。
「そうみたいだね。どこをほっつき歩いているんだか」
「グラローニは厄介ね。誰も彼もがあの男の恩恵にあずかって生きている。だから誰もが、匿えと言ったら素直に応じてしまうもの。捜しようがないわ」
疲れた声で、アデレードはどこか投げやりに言った。エドアルドは肩を軽くすくめて、
「警察にでも届けましょうか、姉上。うちの父親が、三日前から行方知れずで、と」
「無駄よ。警察だって、あの男の言いなりなんだから。知らせるなと言われれば、一切何も教えてくれないわ。本当に、厄介な男」
冗談も通じないほど、アデレードの機嫌は悪い。エドアルドはそれ以上何も言わず、無言で再び肩をすくめた。
「……本当に、一体何を考えているのかしら。あの人は」
忌々しげにアデレードが呟く。エドアルドは執務室の扉を見遣ると、
「昔からそうだよ……父さんの考えていることは、良く解らない。何が家のためで、何の為にこの家を守ろうとしているのか。この家を守ることに、そんなに意味があるようには思えないけど……」
「そうね。あの人のやってきた事を思えば、ボロージアを継いでいくことなんて、無意味に思えるわ」
何者かを嘲るように、アデレードが笑った。エドアルドがそちらを見遣る。笑うのをやめて、アデレードは無言で執務室の扉を睨む。数秒の間、二人はそこで沈黙した。
不在の主、巨大な資産、広大な土地、そして、空洞の屋敷。そこに、これがボロージアだと、確かに言えるものは何もない。あるとしても、そこに不在の主、ただ一人だ。一地方の経済を殆どその手の中に掌握し、自分の意のままに操る事さえできる人間は、その維持の為に手段を選ばない。冷静で冷酷で、どこか哀れだ。何気に、エドアルドは思った。ボロージアという家にしがみ付いていなければ生きていけず、それを継いでいくために生かされている、そんな風に見える。確かに今、ボロージアが倒れれば、グラローニ全体が崩壊するだろう。それが引き金となって、この国の経済さえも狂わせる可能性がある。ボロージアを守る事は、グラローニを守る事と同意だと、言われてみれば確かにその通りだ。しかし、自分の父親に、そんな感情があるとは思えない。何のためにこの家を守るのか、有り余る資産や土地や、この一地方でだけ許される様々の特権が、そんなに惜しいという訳でもない男が。
「お嬢様、若様」
老化の二人に、そんな声が投げられる。二人が揃って振り返ると、そこにいたメイドの一人が少々困った様子で、こう言った。
「ルクレチア様が、おいでですが……」

「ルゥ、一体どうしたの？貴女、一人なの？」
玄関ホールに従妹の姿を見つけると、アデレードは驚きの声とともに彼女に駆け寄った。二十歳前後のメイドと共にいたルクレチアは、声に振り返って破顔する。あまり大きくないバスケットと、何やら少々大仰な荷物、そして小さな鉢植えを携えたルクレチアは、駆け寄るアデレードの問いかけに、少しだけ困った顔で答えた。
「母さまがね……帰ってこないの」
「叔母さまが？」
唐突な答えに、アデレードも、その後をついてきたエドアルドも驚く。ルクレチアは眉を寄せて、

「それでね、あの……伯父さまなら、何かご存知かなって、思ったんだけど……」
「残念ながら、うちの放蕩親父も、三日前から行方不明なのよ」
戸惑うルクレチアに、困り顔でアデレードが返す。大きな溜め息と共に紡がれた言葉に、ルクレチアの表情は更に困惑の色を深める。
「伯父さまも？そんな……」
「こうなったら何としてでも、ファビオの口を割らせなきゃ。ルゥ、そこでちょっと待ってて」
そう言い残し、アデレードはきびすを返すと、どこへともなく駆け出していった。置いてけぼりを食らった格好で、ルクレチアはその場で困惑する。
「……どうしよう、母さまだけじゃなくて、伯父さまもいないなんて……」
「まあ、うちの放蕩親父は、時々こういうことをやらかす人だから、心配はいらないんだけどね」
エドアルドは、駆け出した姉を見送ると、その場で立ち尽くすルクレチアに歩み寄る。かけられた言葉に顔を上げて、ルクレチアはそこにある、いつものエドアルドの笑顔に、僅かに眉をしかめた。
「兄さま……そういう言い方って、良くないと思うわ。伯父さまは、兄さまやアデレード姉さまの、お父さまなのよ？」
「まあ……そうなんだけど」
詰め寄られるような言葉に、エドアルドは肩をすくめる。ルクレチアの足元の籠の中から、ニャー、と小さな声が聞こえる。気付いて、エドアルドはそちらに視線を投げた。
「ジュリオも一緒なのかい？ルゥ……」
「うん……置いて来られなくて……」
ルクレチアが、その視線を彷徨わせる。何事かと、エドアルドはルクレチアの次の言葉を待つ。困惑と、どことなく、怯えの混じった顔で俯いて、ルクレチアは小さく言った。
「あのね……一人でいるのが、心細くなっちゃって……もし今夜も、母さまが帰ってこなかったら、って、思って……」
言葉に、エドアルドが小さく吹き出す。直後、瞬時にルクレチアは顔を上げた。そして、
「兄さま、そ、そんな風に、笑わなくても……」
真っ赤な顔で何やら言い始めるが、それも途中で途切れる。一人でいるのが心細い、か。思いながら、エドアルドはルクレチアの頭に手を乗せた。三日間も、自分の母親が家に戻らないのだ、心細いのは当然だろう。彼女はまだ幼いのだし、自分達とは違うのだから。心の中だけで言って、エドアルドはルクレチアに笑いかける。
「暫く、うちにいるといいよ。最も、姉さんのあの様子じゃ、待つって程も待たないうちに、見つけられそうだけど」
「ほ、本当？」
安堵したように、ルクレチアの表情が緩む。エドアルドはその頭を撫で、傍らのメイドに、何気に問いかけた。
「君達は叔母上に、行き先を聞いていないのかい？」
「申し訳ありません……急なお迎えで……奥様も、すぐに戻ると仰られたので」
二十歳前後と思しきメイドは、困惑顔でエドアルドの問いに答える。ルクレチアの側で、エドアルドはその答えに目を丸くさせた。
「急の、迎え？」

エドアルドの予測に反し、彼らの父親とルクレチアの母親の行方は、なかなか見付からなかった。アデレードは屋敷中の使用人達に噛み付き、あの老女中にまで詰め寄ったが、まともな返答は一つとして返されなかった。出掛けてくる、と車を仕立てて、どこへ行くのかも、戻りがいつなのかも、全く告げずに出かける屋敷の主があるものか、と幾度となくアデレードが毒づき、早くも二日ほどが経過している。
ルクレチアは、小さな客間をあてがわれ、連れてきたメイドと過ごしていた。翌朝には屋敷から学校へ行き、夕刻には、母さまは見付かった？と言ってやはり戻ってきた。引っ越す前に戻ったようだ、などと冗談めかして言ってはいたが、本当のところは不安で堪らないのだろう。夜、眠る直前までエドアルドの部屋で過ごし、メイドの迎えで自分の部屋に戻っていく。メイドの手前、部屋に泊めることは出来ないが、そんなに不安なら、一晩中でも側にいてやりたい、というのがエドアルドの心中だった。明日の夜またここに来たら、何気に提案してみようか。お休みなさいを言って部屋を出て行ったルクレチアを見送って、ぼんやりとエドアルドは思った。
それにしても、だ。父親はともかく、叔母は一体どこで何をしているのだろう。一人になった部屋で、エドアルドはそれを思って嘆息する。五日間も留守にして、行き先すらルクレチアに言わないとは。どことなく危なげで、世間も知らないような人だと思っていたが、こんなことをしでかすとは夢にも思っていなかった。何か、悪い事に巻き込まれていなければいいが。思いに耽っていると、部屋の電話が鳴った。夜も遅い。こんな時間に、一体誰だろう。思ってエドアルドが受話器を上げる。聞こえてきたのは、姉の声だった。
『エドアルド、叔母さまを見つけたわ』

その第一声にエドアルドは目を剥く。
「叔母上を？それで、どこにいるんだい？」
身を乗り出すようにしてエドアルドが問い返す。電話の向こうで、姉は苦笑したようだった。僅かの間の後、出てきたのは意外な単語だった。
『病院よ。ストラーリの』

使用人に車を仕立てさせ、エドアルドがそこに辿り着いたのは、姉の電話から一時間ほど後の事だった。出かける前、屋敷に残った使用人達には、ルクレチアには内密で、と言っておいたが、全くの秘密に出来るとは考え難い。それでも、こんな夜中に母親が、病院で見付かったと聞くよりはいいだろう。
市の郊外の丘陵地帯に構えられたその病院も、父親が経営する組織の一つだ。院長や事務長には、エドアルドやアデレードでさえも顔が利く。病院というよりも、巨大な宗教施設のような造りの建物に到着すると、最初に彼が見つけたのは姉と、その片腕の姿だった。二人とも仕事の後、家に戻ってもいないらしい。その玄関ホールで手を上げる姉に駆け寄ると、彼女は得意げに、傍らの男を見上げて言った。
「今回はマルコのお手柄よ。褒めてやって」
「ボス、それだとまるで僕は、犬みたいですよ」
「あら、そんなに変わらないじゃない」
背の高い、僅かに波打つブルネットを撫で付けた男が、アデレードの隣で苦笑している。彼女の片腕で、婚約者でもあるその男の様子に僅かにエドアルドは笑い、軽く頭を下げると、
「それで、叔母上は？」
「昨日から入院している、そうですよ」
問いかけに、マルコが答える。アデレードはその言葉の後に嘆息して、
「割れたグラスで、手首を切ってしまったんですって。それで、驚いたホテルマンが慌ててここに運んだらしいのよ。自殺未遂じゃないか、って」
「……そうですか」
真相は、間抜けなものらしい。姉の呆れ口調の言葉にエドアルドは苦笑を漏らす。そして、
「それで、叔母上はどうしているんですか？」
「さっき会ってきたけど……暢気なものよ？連絡がついてるものだと思ってたみたいで、驚いてたわ。今日はもう遅いから、明日退院する、って」
エドアルドの問いかけに、疲れ切った様子でアデレードが答える。傍らの彼女にマルコは苦笑して、
「何はともあれ、大したこともなく、ご無事でいらしたんです。良かったじゃありませんか」
「それはそうだけど……叔母さまには、もう少ししっかりしていただきたいわ。幾ら実家の近くに戻ったからって、今はルゥと二人なんだし……」
ぶつぶつと、アデレードが小さく愚痴をこぼし始める。エドアルドは笑って、
「まあまあ、姉さん。今夜のところはそのくらいにして。姉さんもマルコも疲れただろうから、今夜は早く休んだほうがいいよ。明日俺が、もう一度、ここに叔母上を迎えに来るから」
「そうね、お願いするわ、エドアルド」
アデレードはそういうと、マルコを伴って歩き出す。エドアルドは立ち去る直前、自分に一礼したマルコに尋ねた。
「それで貴方は、どうやってここを調べたんですか？ヴィアリさん」
「ああ……大したことではありませんよ。貴方がたの父上が良くお使いになるホテルに、知り合いが勤めていましてね。多分口止めされているんでしょうが、しつこく食い下がったら教えてくれました。何日か前から、ご当主が連れを泊めていて、その連れが怪我をして、病院に運ばれた、と」
「父が……叔母を？」
その言葉に、エドアルドは眉をしかめる。それでは、と言って、マルコはアデレードの後を追い始めた。

「ごめんなさい、アデレードに、見付けられてしまったわ」
病棟の最も奥、庭園までもがつけられている特別室には、夜も遅いと言うのに明かりが灯されていた。病室としては、そこは十分広いのだろう。いや、常識的に考えたら、それが入院患者の使う部屋だというのは異常だった。ホテルの離れほどあるその部屋の、凡そ病院という場所にあるとは思えない豪奢なベッドの上では、困ったように笑う女の姿がある。傍らには。黒い髪の、難しい顔をした男が立っていた。この人が迎えに来てから、何日が経っただろう。すっかり忘れていたが、そろそろ自分は日常に戻らなければならない。いや、現実に、か。思いながら、彼女は困ったように笑っていた。男は眉をしかめて、包帯の巻かれた彼女の左腕を、そっと取る。
「エリザベッタ」
「……私、このお部屋が好きよ、お兄さま。何かあるといつも、お兄さまがここを用意してくれたもの。それに、ここ

にいれば、お兄さまはいつも、側にいてくれる……」
　言いながら、彼女は目を閉じる。男は苦しげに、呻くような声で尋ねた。
　「どうして、こんな真似を……」
　「ごめんなさい……今度こそ、上手くいくと思ったのに……」
　「お前には、ルクレチアがいるんだぞ。それに、私も……」
　彼はそう言って、恨めしげに彼女を見下ろす。女は微笑んで、男に向ってその両手を広げた。
　「だからよ、モントリーヴォ……私がいなければ、貴方はもっと自由になれる……」
　「そんなことを、私が望むと思うのか？やっとこうして……取り戻したというのに……」
　望まれるままに、男はベッドに腰掛け、手を広げる女の抱擁に応えた。耳元で、満足げな嘆息が聞こえる。
　「どうして私は……貴方の妹なんかに、生まれてきたのかしら……」
　「……もういい、エリサベッタ……やめてくれ……」
　「どうして私は、こんなに罪深いのに……こうして生きているのかしら……」
　エリザベッタはそう言って、その胸に顔をうずめる。抱きしめて、モントリーヴォが重く、嘆息する。
　「お前が生きていなければ、私にも、生きる意味はない……お願いだ、もう二度とこんな真似はしないと、誓ってくれ……わが妹よ……」
　彼女がここへこうして運ばれるのは、何度目だろう。モントリーヴォは思いながら、その眉をしかめる。
　最初は、単なる事故だった。幼かった二人が、たまたま屋敷の庭で見付けた小さな果実を口にして、気がつくと、その部屋に並べられた小さなベッドに横になっていた。父の代から仕えている、半ば自分達の乳母のような女中が、涙ながらに教えてくれた。お二人は間違って、毒の実を食べてしまったんですよ、と。最初はそこが病院だと、二人とも思わず、どこか遠くの別荘にでも来たものかと思っていた。体が回復するまでの数日を過ごし、屋敷に戻った時、その余りの近さに驚いたほどだ。
　二度目は、自分の婚約の時か。正妻と呼ぶべき女が定まった後、妹はまた『事故』を起こした。幼い日に、誤って口にしたあの果実を、わざと食べたのだと、彼女は自分にだけ告白した。
　それから数年もしないうちに、妹は最初の結婚をした。二度とこんなことは起こるまいと思っていた矢先、三度目が起こった。あの時は確か、外に作った娘の事が知れた時だったか。彼女が驚いたのは、娘がいたことに、ではない。その母親が誰なのか、それを知ったからだ。その時にも、同じようなことを言っていた。自分はこんなにも罪深いのに、どうして生きているのかと。
　気狂いだと、人は言うだろう。確かにそうなのかもしれない。幾度となく、自分と妹は、こんなことを繰り返している。彼女は自分の罪の深さに、その気持ちの重さに、幾度となく自分自身を殺そうとし、その度に、彼はその側で、やめてくれと、願い続けてきた。側において置けない、それでも、せめて生きていて欲しい。近くに取り戻しても、死んでしまっては意味がない。いや、死の国は、余りにも遠すぎる。思うことすら辛いほどに。それでも彼女は、幾度も自分を傷付ける。そして時折、こう囁くのだ。ここでこうしていれば、貴方が側にいてくれる。ここでなら、二人でいられる。それもまた、彼女の本心だった。二人でいることは、許されない。お互いを愛することは、罪でしかない。けれどこの部屋でなら、誰に咎められることなく、愛しい人と二人で過ごせる。枕を並べて眠る事も許される。優しくしてと、甘えた声でねだる事も。
　「モントリーヴォ……私の、お兄さま……」
　吐息のような声で、エリザベッタが自分を抱く男を呼んだ。抱きしめたまま、彼はそれに答えず、ただ無言だった。

Ⅶ

エドアルドが屋敷に戻ったのは、日付も変わるような真夜中だった。出迎えた泊まり番のメイドも寝巻き姿で、その少々あられない姿に苦笑する。後は休むだけだから、とそのメイドに言って、彼は私室に向った。
叔母の行方は解った。それはいい。しかし、どういう状況で、一体誰と出かけたのか、それがエドアルドの中で引っ掛かっていた。
叔母は、夜半の急の迎えに、娘であるルクレチアに一言もなく出掛けたらしい。もっともその事は、彼女が目を覚ました後、送り出したメイドが報告すれば、特に問題のないことなのかもしれない。問題は、その迎えだ。誰がそんなものを寄越したのか、そしてどうして、彼女がホテルから運ばれたのか。マルコが言っていたように、父、モントリーヴォが連れ出したとするなら、一体何のために、数日に渡って彼女をホテルに留まらせたのか。仮に、他人に聞かれたくない話があるとしても、真夜中に迎えを寄越して、数日もの間、彼女を半ば監禁するような必要が、どこにあるというのか。あの人は、一体何を考えているんだ。思って、エドアルドは嘆息した。私室のドアに辿り着く。何も考えず、普段どおりにエドアルドはその扉を開けた。
「エドアルド様、お帰りなさいませ」
扉の中には明かりが点り、そこに見慣れないメイドがいる。見付けて、エドアルドは目を丸くさせた。二十歳前後と思しきメイドは一礼して、
「失礼とは思いましたが、待たせていただきました」
「……こんな遅くまで。何か用かい？」
こんなメイドがうちにいただろうか。思っていると、彼女は困ったように少し笑い、ちらりとその視線を傍らへと投げた。ドアから少し離れたテーブルに、ブランケットに包まった人影を見付けて、思わずエドアルドが声を上げる。
「ルゥ……こんなところで……」
「若様のお戻りを、待つと仰られて……そのまま、眠ってしまわれたんです……」
申し訳ありません、と言ってメイドが再び頭を下げる。驚いていたエドアルドは、テーブルに顔を伏せて眠るルクレチアを見やり、その頬を緩める。そして、
「仕方ないなぁ、ルゥ、起きて。帰ってきたよ」
そう言ってテーブルに歩み寄り、その肩を揺さぶる。小さく呻いて、ルクレチアがその顔を上げた。寝ぼけ眼がこちらを向く。肩にかけられていたブランケットが、音もなく床に落ちた。
「兄さま……お帰りなさい……」
ふにゃふにゃと、まだまどろみの中にいるような柔らかい表情で、ルクレチアが笑う。吹き出して、エドアルドは、
「俺を待ってたんだろ？こんな遅くまで……」
「そうよ……兄さま、どこに行っていたの？」
問いかけると、ルクレチアはようやく目を覚ましたらしい。その場で大きく伸びをして、椅子から立ち上がった。
「どこって……ああ、叔母上が、見付かったって」
「母さまが？」
彼の答えに、ルクレチアの表情が、更にはっきりした驚きのものへと変わる。エドアルドは笑いながら、
「明日には戻るそうだよ。だから今日は、安心してお休み」
「明日？」
エドアルドを見上げて、ルクレチアがその言葉を繰り返す。安心したのか、その表情は緩んでいる。が、どことない不安げなものを感じて、エドアルドは首を傾げた。
「どうかしたのかい？ルゥ」
「……ううん、何も。明日になったら、母さまは、戻って来るんだなぁって……」
そう言ってルクレチアは俯く。この反応は、何だろう。何日も無断で家を空けていた母親が、戻ってくるのだ。何も不安になるような事は、ないのではないだろうか。思いながら、エドアルドは優しくルクレチアに笑いかける。
「ほら、もう遅いから……部屋に戻ってお休み、ルゥ」
その言葉に、ルクレチアが膨れる。何か気に触る事でも言ったか。思いながらエドアルドは首を傾げた。くすくすと、傍らでメイドが笑う声を立てたのは、その直後だった。何事かとエドアルドが振り返ると、ルクレチアが、何故か強い声をあげる。
「リラ、どうして笑うのよ！」
「申し訳ありません、お嬢様。でも何だか、おかしくて」
変わらず、メイドは楽しげに笑っていた。そして笑いながら、
「若様、お嬢様は、若様をずっとお待ちだったんです。折角こちらに伺ったのに、お話しする機会もないから、って」
「リラ！」
真っ赤な顔になってルクレチアが怒鳴る。エドアルドはメイドの言葉に放心し、間をおいてから、彼女の様にくすく

すと笑った。
「に、兄さままで！どうしてルゥを笑うのよ？何が、そんなにっ……」
「おかしいんじゃないよ。そうだな……俺は、嬉しいから、かな？」
エドアルドの言葉の直後、ルクレチアが固まった。声を漏らす事はないが、メイドは相変わらず笑っている。エドアルドはそちらを見ると、
「君はもう休んでいいよ。ルゥの面倒は、俺が見るから」
「め、面倒って、兄さま……？」
展開が読めず、エドアルドの言葉にルクレチアが戸惑う。メイドはにこにこ笑ったまま、
「それでは、私は休ませていただきます。何かありましたら、客間にいますから、御召し下さい。お休みなさいませ」
そう言ってきびすを返し、エドアルドの部屋を出て行く。呼び止める事もできず、ルクレチアはそれを見送る。傍らではまだ、エドアルドが笑っていた。
「気が利くメイドだね。なんて人だい？」
言葉に、ルクレチアが振り返る。何やら少々怒っているらしい。何となくその理由は解るのだが、意地悪く、エドアルドは尋ねた。
「何だい、ルゥ。怖い顔をして」
「何って、何って、それは……」
「ルゥは俺と話がしたくて、待ってたんだろ？いつかみたいに寝てたけど。もう夜も遅いし、話が終わるまで彼女を待たせるのも、悪いじゃないか」
「そ……そう、だけど……」
何も答えていないのに、言いくるめられている。ルクレチアはそれを感じながら、それでも何も反論できなかった。そんな彼女の顔を覗いて、エドアルドがもう一度、尋ねる。
「俺を待っててくれたんだろ？ルゥ」
「……うん」
頷く以外、ルクレチアには出来なかった。満足げに、エドアルドが笑う。ルクレチアはそっぽを向くと、
「だって、急にお出かけするんだもの……どこに行ったのか、気になって……姉さまも帰ってこないし……一人にされたら……」
「寂しかった？」
重ねられた質問には、言葉もなく、ただ頷く。幼い仕種が愛らしい。思わずエドアルドは彼女の頭に手を置いて、くしゃくしゃとその髪を掻いた。ルクレチアは悔しげに彼を見上げるが、やはり何も言わない。膨れて、物言いたげな目だけを彼に向けていた。
「何だい？ルゥ」
「……何でも、ありません。兄さまも帰ってきたし、私も、お部屋で……」
「今夜はここにいなよ、ルゥ」
頭の上の手が離れる。言葉に少し驚いて、ルクレチアがその目を上げた。エドアルドは柔らかな表情で笑い、変わらない、揶揄い口調で続けた。
「こんな時間に尋ねてくるなんて……一体俺に、どんな用なんだい？ルゥ」
「っ……帰って寝ます！兄さまなんてキライ！そんなことばっかり……」
一瞬で、ルクレチアが発火するように怒る。真っ赤になって怒鳴った彼女の様子に、やりすぎたか、とエドアルドはかすかに苦笑した。自分に背を向けるルクレチアに、困り声でエドアルドが謝罪する。
「冗談だよ、ルゥ……怒らないでくれよ」
「お、怒らせるのはいつも、兄さまでしょ！どうしていつもそうやって、ルゥを苛めるの？そうやって、揶揄って……」
背中が震え始める。まずい、泣かせた。思って、エドアルドは慌てる。そのまま、ルクレチアがその場に崩れた。倒れこむ前に、エドアルドがその体を抱きとめる。泣きじゃくりながら、ルクレチアは恨み言めいた言葉を紡ぐ。
「兄さまは、いつもいつも……わ、私が、どんな気持ちになるかなんて、全然考えてくれなくて……今だって、私、お屋敷に一人にされて、ふ、不安だったのに……だから兄さまのこと、待ってたのに……」
「ごめん、ルクレチア。今のは本当に、俺が悪かった。悪かったから……」
「そ、そ、そうやって……いつもいつも、あ、あや……謝る、くせにっ……どうして治らないの？私のこと、本当は好きでも何でもっ……」
「そんなことないよ、ルゥ。俺は君の事が、本当に……」
ルクレチアを背中から抱きしめる格好で、エドアルドはそこに座り込む。腕の中、ルクレチアは泣きじゃくりながら、その恨めしげな目をエドアルドに向けた。笑いかけて、抱きしめる腕に力をこめる。ルクレチアはそのまま、背中を抱く彼を無言で見ていた。耳元、エドアルドは言葉を紡ぐ。

「本当に、俺が悪かった。謝る。だからそんなに、泣かないでくれよ、ルゥ」
「……本当に、反省している？」
嗚咽が、止まらない。途切れ途切れの言葉で尋ねて、ルクレチアは自分に回された腕に、その手を重ねた。口付けが、頬に触れる。エドアルドは、耳元で笑っていた。本当に反省しているのだろうか。思いながらルクレチアは、軽く眉をしかめる。
「好きだよ、ルクレチア」
「……その前に、もう一度ちゃんと、謝って」
「もう二度と、こんな風に君を苛めたりしない。だからごめん。俺を、許してくれる？」
言いながらも、やはり彼は笑っている。あまり反省の色も見えないが、それでも、これ以上彼を苛めるのも、可哀相か。思いながらルクレチアは振り返った。エドアルドの腕が解ける。床に座り込んだまま、ルクレチアはその顔を覗く。そして、
「また同じことをしたら、今度こそ許さないんだから。兄さま、ちゃんと覚えておいてね」
「解った、肝に銘じておくよ」
参った、と言いたげな、それでも笑っているエドアルドの顔が見える。ルクレチアはそれに、安心したように笑った。エドアルドの手が伸びる。そのまま、それは彼女の顔に触れた。頬を撫でる優しい感触に、ルクレチアは笑って目を閉じる。
「本当に、もう……困った兄さまなんだから……」
頬はそのまま、固定された。言葉が終わると間もなく、唇が重なる。短い口付けの後、二人は互いを見て小さく笑った。
「それで、ルゥ。今夜はここで寝る？それとも、部屋に戻る？」
改めて、エドアルドが、今度は冗談ではなく、ルクレチアに尋ねる。ルクレチアはその場で少し思案顔になると、溜め息と共にその視線を落とした。
「……ルゥ？」
「兄さま、あのね……」
ルクレチアの視線が、床を泳ぐ。何かあったのだろうか。思いながら、エドアルドはルクレチアの、次の言葉を待つ。窓の外は、真夜中の闇で埋め尽くされていた。物音一つ、聞こえない。ルクレチアは強く目を閉じて、それから、小さく言った。
「ごめんなさい……何でもないの」
「ルゥ……？」
その目に再び、涙が滲む。その顔を覗き込んで、エドアルドがそっと、その名を呼ぶ。
「ルクレチア」
「……本当に、何でもないの……な、泣けてきちゃうのは、さっき兄さまが、意地悪したからで、それで……」
手で、ルクレチアは溢れる涙を拭う。一体何事なのだろう。訳も解らず、何も出来ないまま、エドアルドはもう一度、側にいる彼女を抱き寄せた。
「に、兄さま……？」
「ここで泣きなよ……俺がずっと、こうしてるからさ」
哀しまないで、泣かないで、と、上手く言えない。どうしてだろう。その理由が解ったなら、この子の哀しみを、消す事ができるだろうか。腕の中の彼女を感じながら、エドアルドは吐息を漏らす。
彼女の悲しみも憂いも、総て消し去る事ができるなら、自分は何でもする。どんな事でもできる。彼女を、脅かす総てのものから、守りたい。それが叶わないなら、せめてこうして、涙に濡れる彼女を抱いていたい。ここに確かに、自分がいることだけでも、解ってほしい。ここに自分はいる。君を愛して、守りたいと、ずっと願っている。それだけでも、解ってくれたら。
「兄さま……？」
ルクレチアが、そっと顔を上げた。見下ろして、エドアルドは笑いかける。額を撫でると、その目が戸惑うように泳いだ。涙を拭うと、少し驚いて、それでも、彼女はされるままだ。
「兄さま……」
「名前で呼んでよ……いつかみたいに」
言いながら、エドアルドはルクレチアの髪を撫でた。その先を捕まえて、口付けする。
「君はいつもで、いい匂いがするね……」
「え……でも、今は、何も……」
何気なく紡がれたエドアルドの言葉に、ルクレチアが戸惑う。首筋にキスが降りて、ルクレチアの口から、小さな悲鳴が上がった。
「やっ……」

「呼んでよ、俺を……ずっと君の、側にいるから……」
「……チェー、ザレ……や、やんっ」
だだをこねるような言葉に、戸惑いながらルクレチアが、小さな声でその名を呼ぶ。口付けは繰り返されて、細く白い彼女の首筋が、僅かに光った。腕の中で、ルクレチアが身をよじる。目を閉じて、エドアルドは溜め息をつく。
「兄さま、あ、あのっ……」
「こんな風にされるのは、嫌？ルクレチア」
それが声なのか溜め息なのか、解らない。耳元で囁かれた言葉に、ルクレチアは全身を強張らせた。体の上を、ぞくぞくするものが駆け上がる。直後、彼女は小さく言った。
「……貴方が、望むなら……」
「本当？俺が……抱きたいと言ったら……許してくれるの？」
ルクレチアは沈黙する。返らない答えに、エドアルドは眉をしかめた。
「ルゥ」
呼びかけても、震えるままで、彼女は答えない。また泣かせるか。思っていると、彼女は小さく言った。
「……私を抱いて、チェーザレ……愛してるって、あの時のように……」
「愛してる……君を絶対に、離さない……」
細い声が終わるより先に、エドアルドはその言葉を口にした。顔を捕まえて、口付けの雨を降らせる。唇に辿り着く前に、もう一度、彼はすぐ側で囁いた。
「君を愛してる……だから泣かないで、ルクレチア」
ルクレチアに言葉はない。唇がふさがれて、彼女の閉じた瞳から涙があふれる。ついばむ様な接吻の後に、エドアルドはその体を軽々と抱き上げた。彼の肩に腕を回して、ルクレチアは震えている。
「ルゥ……」
「兄さま、大好き……ずっとずっと、側にいて……」
震える声が懇願する。僅かに笑って、エドアルドは返す。
「ずっと側にいる。君をどこへもやったりしない。誓うよ」
エドアルドの肩に抱きついて、ルクレチアは声もなく泣き続ける。この子はどうして、こんな風に泣くのだろう。今ここに、自分がいるのに。こうして抱いているのに。思いながらエドアルドは歩き出す。こんな風に泣かれたら、何も手出しが出来ないではないか。例えば、顔を覗くことも。思って彼は軽く眉をしかめる。ベッドに辿り着いて、ゆっくりと彼女を降ろす。手を離すと、そのことにさえ戸惑う瞳を見つけて、エドアルドはぎこちなく笑った。
「何がそんなに哀しいの？ルゥ」
「かな……哀しくなんか……」
「じゃ、やっぱりこんなのは、嫌？」
真正面からその瞳を覗く。ルクレチアは戸惑いながらその瞳を泳がせて、その顔を伏せる。
「……ルゥ？」
「違うの……本当に、何でも……」
ルクレチアが首を横に振る。二つ分けの金色の髪が、さらさらと音を立てる。そして、
「……はしたない、いやらしい子だと、思わないで……」
「え？」
細く小さく、ルクレチアが言った。エドアルドが聞き返しても、返答はない。
「ルゥ？」
「っ……だって私は、貴方のものだから……してくれるなら、されたい……」
ちらりと向けられた視線が、熱い。その閃きに、エドアルドは息を飲む。ルクレチアは涙を拭う。そして、潤んだ目のままでぎこちなく笑いながら、エドアルドに腕を広げて見せた。
「ルクレチア……」
「だからお願い……沢山、愛して」
なんて事だ、誘われている。そして、抗えない。眩暈に似た何かに揺さぶられるように、エドアルドは、ルクレチアの胸に倒れこむ。ベッドがきしんで、シーツの上に彼女の金の髪がうねった。
「ルクレチア……」
名前を呼ぶと、押し倒した少女は何も言わずに、また笑った。頭がくらくらする。体中が心臓になったように、どくどくと脈を打つ。指先まで痛くなりそうな興奮が、自分を支配する。ついこの間まで、幼い少女でしかなかったはずなのに、どうして彼女はこんなにも、自分を狂わせるのだろう。いやそんなことよりも、今は一秒でも早く、体を重ねたい。頭の中を、そんな思いが駆け巡る。そのまま無言で、エドアルドは彼女の着ているものをはぎ始めた。

翌朝。

「ルクレチア、起きられるかい？」
眠ったのは、夜明け近かったか、それとも明るくなってからだったか。眠ったとしても、転寝程度だったかもしれない。すっかり日も昇りきって明るくなってから、エドアルドは起き出して、ベッドの中の彼女に声を投げていた。脱ぎ散らされたままの服は、床の上に散乱している。下着も同じく。適当に片付けて、誰か人を呼んでも差し支えのないようにしなければ。思いながら、屋敷の若君はそれらを集めて、とりあえず一まとめにしてみる。自分はまだいいが、問題はベッドの中の彼女だった。ここに泊まる支度などあろうはずもないし、ましてやこんなことになるとは、思ってもいなかっただろう。参ったな。思いながらも、エドアルドは呼びかけを重ねた。
「ルクレチア、起きられる……」
「に、兄さまの、意地悪！」
シーツのかたまりから、涙の混じった、自分を詰る声が聞こえた。エドアルドは苦笑して、そのシーツを見ながら、
「……目は、覚めてるね」
「起きてるとか、起きてないとかっ……じゃなくて、こ、これで、外になんか出られる訳、ないでしょう？」
「うん……そうだね……」
彼女が身につけていたものは、昨夜全部自分が剥いでしまった。辛うじて、破れているものはないが、どれも酷いことになっている。
「……あのメイドに言って、着替えを持って来させるよ。それから……朝飯も……」
「兄さまなんかキライ！だいっキライ！」
何を言っても、聞いてはくれないらしい。これは本当に、困ったことになった。頭をかきながら、エドアルドはベッドに歩み寄る。ルクレチアはシーツの中で丸くなったまま、更に彼を罵った。
「あんな……あんなに、するなんてっ……もう、信じられないっ……わた、わた、私のことなんか、ほ、本当は、全然、考えてなんかっ……」
「だって、ルゥだって言ったじゃないか。嫌じゃない、って」
「そ、そ、そんなの、忘れました！兄さまなんて……」
「それに……何か言ってなかったっけ？確かめるとか、何とか……あれって、何のこと……」
「知りません！兄さまなんてキライ！キライキライキライ！」
「……そんなに、言わなくても……」
ルクレチアの隣に腰掛けて、エドアルドは困り顔だった。頭だけがそのシーツから見える。撫でたりしたら、やっぱり怒鳴られるか、下手をすれば殴られでもしそうな勢いだ。どうしたものか。胸の中で呟いて、エドアルドは嘆息する。とは言え、このままシーツの中に彼女を隠しておくわけにも行かない。何とかしなければ。思いながら、エドアルドは無理やりその顔に笑みを作った。そして、懐柔策に出ようと試みる。
「俺のこと嫌いだなんて……そんな風に言わないでよ、ルゥ」
「……知りません」
「だって昨夜は言ってくれただろ？私は、貴方のものだから、って」
「そんなの、忘れました！」
「俺が、したいって言ったら、されたい、って……」
「そんなこと、思い出させないで！」
怒鳴りながら、物凄い勢いでルクレチアが起き上がる。シーツで胸を隠して、ぐしゃぐしゃの頭で、ルクレチアは真っ赤な顔でエドアルドを睨んだ。怒った顔も可愛らしい。いや、これは怒っているというより、後朝を恥ずかしがっているのだろうか。あの後、彼女がまともな抵抗も出来ないと解って、無理を強いたのは自分だし。何気に夜のことを思い出して、エドアルドが笑う。ルクレチアは更に激昂して、
「わ、笑い事じゃありません！どうして兄さまって、そんなにっ……」
「そんなに……何？」
意地悪なの、とまた、罵られるかな。思いながら、エドアルドはルクレチアの言葉を待つ。が、返された言葉は、別だった。
「いやっ……いやらしい！そんな風に、笑わないで！」
「ルゥ……これはでも、仕方ないよ……」
言い訳をするが、そのニヤニヤ笑いは止まらない。そのままで、エドアルドは逆なですると気付かないまま、思わず口を滑らせる。
「ルゥだって、もっとして、って言ったじゃないか。そんなに怒ること……」
「そ、そんなこと、言ってません！そんな……私そんな、恥ずかしい事っ……」
「じゃあ、何？君はもう、俺とああいうのは、嫌なのかい？あんなに……幸せだったのに」
ぼそりと、最後の一言をエドアルドが呟く。
夜通し繰り返された行為の後、ルクレチアは満足げに笑っていた。幾度か激しく絡み合って、その間に、彼女の得る

べき恍惚にも達したらしい。というのに、だ。今朝のこれは何だ。確かに無茶をしたし、我侭は言った。けれどこれではあんまりのような気がする。哀しいとしか言いようのない心地で、エドアルドは恨めしげにルクレチアを睨む。ルクレチアは口をぱくぱくと空回りさせて、そんなエドアルドを見返している。
「ルゥ……もう二度と、あんな夜は嫌かい？俺とあんな風に……愛し合ってはくれないの？」
甘えるように、エドアルドが問いかける。ぱくぱくと、未だルクレチアの口は動いていた。暫く、エドアルドは答えを待った。愛おしい相手とその悦びが分かち合えたなら、それは幸福ではないのだろうか。望むように悦楽を得られて、与えられて、その瞬間を同時に感じることは、悪い事なのだろうか。確かに、後ろめたさがまるでないわけではない。それでも、それ以上に、自分は彼女を抱きたかったし、その悦びを知って欲しかった。それなのに、叶ったその後で、こんな風に罵倒されて、取り繕う事もできないのは、余りにも不幸だ。
「ルゥは……俺が、嫌いになった？」
「に……兄さま……っ」
「もう俺に……触られたくもない？」
ルクレチアの動きが止まる。エドアルドは、まるで小さな子供のように、その目を覗きこんで重ねて尋ねる。
「もう俺に……抱かれては、くれない？」
「っ……私は……兄さまの、何？」
眉をきつくしかめて、ルクレチアがエドアルドに背を向ける。躊躇わず、エドアルドは言った。
「恋人だよ。愛しい人（アモーロソ）」
「っ……『愛しい人（アモーロソ）』……？」
「俺は……ずっと君が好きだった。どうしていいのか解らないくらいに、ずっと好きだった……だから、君に許してもらえて……本当に、嬉しかったのに……」
言葉と共に、エドアルドがその背中を抱きしめる。ルクレチアはその言葉に戸惑いながら、言葉もなく、されるままだ。
「もう離さない、誰にもやらないって……君は、それに答えてくれたんじゃなかったのかい？」
「そ、それは……」
抱きしめられて、耳元で、甘く囁かれる。ルクレチアは泣き出しそうにも聞こえるその声に、自分が泣いてしまうのではないかとさえ思った。エドアルドは軽く目を閉じる。そして、更に続けた。
「俺を、嫌いにならないで……拒まないで、許してよ……ルクレチア……」
「……兄さま……」
「君がそんなに嫌なら……もうこんな風にさえ、抱いたりしない……」
エドアルドの腕が解ける。ルクレチアはとっさに振り返って、怯えた目でエドアルドを見遣った。
「ちがっ……兄さま、違うの！」
「ルゥ……」
「ごめんなさい、ごめんなさい！私、兄さまのこと、嫌いになったりしてないわ。だから……そんなこと、言わないで」
「……本当？本当に、俺のこと……」
「だって、兄さまは、私のこと、ずっと好きで……私と、ずっと一緒にいてくれるんでしょう？私だって、兄さまのこと、大好きだもの。ほ、本当はね……昨夜みたいなのは……は、は、は……っ」
「……恥ずかしいの？」
真っ赤になって言葉を詰まらせるルクレチアに、エドアルドが聞き返す。ルクレチアは無言で頷いて、それから細く言った。
「私も……すごく、その……」
ごにょごにょと、言葉は小さくなって、途切れた。聞き取れはしなかったが、言葉の先を読んで、エドアルドは軽く笑った。安堵の笑みに、ルクレチアがちらりと彼を見る。
「……兄さま？」
「愛してるよ、ルクレチア」
「……うん」
「うん、じゃなくて。君はどうなの？俺のことが好き？また俺に……抱かれてくれる？」
「……うん」
だめだ、やっぱり勝てない。思いながら、ルクレチアはその一言だけを答えた。エドアルドの表情が、更に解ける。抱き寄せられて、頬に口付けが下りた。されるまま、ルクレチアは彼の胸に寄りかかる。
「有り難う、ルクレチア……大好きだよ」
「……うん」
僅かの間、二人はそうしてベッドの上にいた。上機嫌でエドアルドはくすくすと笑い、ルクレチアも、真っ赤な顔を

して、ぎこちなくはあったが、その頬を僅かにほころばせた。
「バスローブでも持ってくるよ……シャワーも、使うかい？」
「あの、でも……」
すぐ側で問われて、ルクレチアが戸惑う。エドアルドが目をしばたたかせると、ルクレチアはそのまま小さく言った。
「体が……ふにゃふにゃで……力が、入らないの……」
返答に、エドアルドは吹き出した。困惑の目で、ルクレチアが視線を泳がせる。見つけて、エドアルドは言った。
「じゃ、とりあえずバスルームまでお運びしますよ、セニョリータ」
「……一緒には、入らないんだから」
「誰もそんなこと言わないよ。中で倒れたりしたら、助けに入るかもしれないけど」
ルクレチアの言葉に、またエドアルドは笑った。そんな彼によりかかったまま、ルクレチアは膨れて、それ以上何も言わなかった。

ルクレチアを自室のバスルームまで運び、昨夜のメイドを呼び出す。着替えと、何か食べるものを、と簡単に指示を出すと、彼女はどこか楽しげに、解りました、と答えた。どうやら自分達のことが解っているらしい。ルクレチアが話したのか、それとも、そこまでしなくても解ったのか。思いながらエドアルドは、昨夜ルクレチアが眠り込んでいたテーブルの側に座っていた。身支度をさせて、朝食が済んだら、ストラーリへ叔母を迎えに行こう。その足で、二人をアパルトメントに送り届ければいい。それから、父親だ。思いながら、エドアルドは嘆息する。
父が、何を考えているのか解らない。夜中に突然、自分達のいる目の前で、使用人に車を支度させ、出かけたかと思えば、もう五日も戻っていない。しかも、その奇妙な外出に、叔母も一緒だったらしい。行き先も告げず、いや、屋敷には事情を知っている人間もいるのだろうが、自分達にはそれを教えず、叔母を探し当てたと思えば、ボロージア傘下の病院だ。訳が解らないことが多すぎる。姉も言っていた。叔母は、ホテルから運び込まれたのだと。自殺未遂ではないかと、疑われるような怪我を負って。
思いに耽っていると、室内の電話が鳴った。立ち上がって、エドアルドはそちらに歩み寄り、受話器を取る。
「はい」
『若様、起きておいでですね』
「うん……おはよう、ばあや」
聞きなれた声に、エドアルドはかすかに笑う。声の主は、少々慌てている様子だった。ここに昨夜、ルクレチアを泊めたことがばれたか。そんなことを思いながら、エドアルドは何気なく受話器の向こうに問い返した。
「何だい、慌てて。朝っぱらからお説教か？ばあや」
『旦那様がお呼びです。お仕事のお部屋に、来るように、と』
その言葉に、エドアルドの表情が変わる。どうやら父も帰ってきたらしい。調度いい、自分も父には話がある。思いながら、エドアルドは短く嘆息する。ここ数日の留守のことも、叔母の事も、ルクレチアの婚約の事も、問い質さなければ気がすまない事は山積みだ。
「解った。すぐに行くよ」
短く返して、エドアルドは電話を切る。昨夜の幸福に相反するように、今日のこれからは、修羅のようだ。上手く交わして、ここに戻れればいいが。胸の内だけで呟いて、エドアルドは歩き出す。部屋を出る前に、あの子にも一言言っておくべきだろうか。部屋の扉の手前、そんなことを思ってエドアルドはきびすを返す。
ルクレチアはシャワールームで、まだその体を清めていた。ざあざあととめどなく、水音が続いている。磨りガラスの引き扉越しに、エドアルドが声を投げた。
「ルゥ、聞こえる？」
「なぁに、兄さま……入ってきちゃダメよ」
無邪気な答えの後、少しだけ不貞腐れたような声が聞こえる。エドアルドは笑って、
「父さんが帰ってきたらしい。ちょっと行ってくる」
「伯父さま、帰ってらしたの？いつ？」
引き戸の中の水音が途切れる。驚く声に、エドアルドは軽く返す。
「さあ。すぐに君のところのメイドが来ると思うから、俺が戻るまで、待ってて」
「……はぁい。行ってらっしゃい、兄さま」
からからと音を立てて、ガラス戸が僅かに開かれる。ひょっこり顔を出して、ルクレチアが笑った。ぐっしょりと濡れた長い髪からしとしとと雫が落ち、僅かに床を濡らす。その額に張り付いた前髪を一つまみして、エドアルドは笑って言った。
「そんな格好で出てきちゃだめだよ、ルゥ。明るいんだから、全部見える」
「やん！もう、兄さまのえっち！」
べー、と小さく舌を出して、ルクレチアが顔を引っ込める。笑いながらそれを見送って、エドアルドはきびすを返す

。背を向けると、笑みはどこへともなく消えていた。

　モントリーヴォの執務室の前まで辿り着く。時計は、そろそろ八時を回ろうとしていた。起きたのがいつなのか、はっきりとは覚えていない。が、どことなく胃の辺りが軽い。何か口にしてくるべきだったか。疲労感はないが、今の自分は少々力強さに欠けている気がする。せめてコーヒーの一杯でも飲んできたら、頭ももう少し冴えただろうか。父親は、この巨大な家の主だ。愚鈍な男ではない。寝起きと変わらない自分で、太刀打ちどころか歯が立つほど、簡単な相手ではないのだ。ドアを叩く前、ふとそんな考えが過ぎる。が、躊躇いも一瞬だった。待たせれば、機嫌が悪くなる。それもあの男の性分だ。それに自分にも、これ以上待てない事が幾つもある。思いながらエドアルドはその扉をノックした。乾いた小気味良い音の後に、扉は内側から開かれる。開けたのは、中年のメイドだった。エドアルドの姿を見るなり恭しく一礼して、彼を部屋の中へと招き入れる。
　「旦那様が、お待ちです」
　無言で、エドアルドは室内に歩みを進めた。メイドは扉を閉めて、その側に控えている。
　部屋の真正面奥、そこがモントリーヴォの執務机になっている。小さめの食卓ほどあると思しき机の上には、幾重もの書類と、何冊もの上製本、辞書、その他にも様々なもので埋め尽くされていた。大きな図面のようなものさえ見えて、エドアルドは苦笑する。その執務机の手前には、接客用と思しきテーブルセットが置かれていた。三脚の革張りのソファに囲まれた低いそのテーブルの上には、軽食が用意されている。彼の朝食だろうか。とうの父親は、執務机について、何かの書類に目を落としていた。入ってきたエドアルドを見ようとはせず、そのまま、低く声を放つ。
　「座れ、エドアルド」
　「朝会ったら、まず挨拶でしょう、父上」
　揶揄うような呆れるような、わざとらしい口調でエドアルドが返す。モントリーヴォは顔を上げ、口許をにやりと歪めた。その顎が上下すると、数秒と待たず、執務室の扉の開閉音が聞こえた。メイドを下がらせたらしい。ちらりと後ろを見て、エドアルドは嘆息する。そして改めて、父親を見た。
　「五日間も、一体どちらにいたんですか、父上」
　「仕事だ。いちいちお前達に説明する必要はない」
　「あんな真夜中に出て行って、仕事で済ませる気ですか」
　「座れ、エドアルド。腹が減っているなら、適当にやって構わんぞ」
　執務机からモントリーヴォが離れる。その場に立ったまま、エドアルドは問いを重ねる。
　「叔母上が、ストラーリに入院しているそうですね。運び込まれたとか」
　「らしいな。少し怪我をした、と聞いているが」
　テーブルに移って、モントリーヴォがその上に支度されたサンドイッチを食べ始める。自分の問いかけに応じようとしないその態度に、エドアルドは軽く眉をしかめる。この男が一筋縄で行かないことは、よく解っている。でなければ、この巨大な家を統率していく事など出来ないだろう。「本家」と呼ばれる家族は一握りだ。が、ボカロジアの抱え込むものは、余りにも大きい。いや、ここまでになったのは、この男の商才があったからだ。身動きの出来ないほどの財閥を御するというのは、どんなものだろう。何気にエドアルドは思い、苦笑する。ちらりと、モントリーヴォの視線が彼を見た。
　「……何です、父さん」
　「お前は、私の若い頃に似ている、らしい」
　食べる手を止めて、モントリーヴォが唐突に行った。エドアルドは苦笑いを浮かべて、
　「いい迷惑ですね。俺は貴方ほど、野放図じゃない」
　「私がお前くらいの頃にも、父親に良く似ていると言われた。俺はあそこまで愚鈍じゃないと、本人の前で言ったこともある」
　返された言葉に、まるで動じる様子も見せず、モントリーヴォは言った。それが気に食わず、エドアルドがその眉を寄せる。モントリーヴォはまた暫く、食事を続けた。室内に沈黙が下りる。エドアルドはその男を睨むように見て、先に発した問いを、また口にした。
　「五日間も、一体どこいたんですか」
　「答える必要はない」
　「グラン・グラローニに、誰を連れ込んだかと聞いているんです」
　強い問いかけに、モントリーヴォが再び彼を見る。エドアルドは自分に向けられた視線に、何故か嘆息した。知られているのだと、解っているくせに。答えるつもりも、言い訳するつもりもないのか、この人は。思うと、苛立ちが沸き起こる。モントリーヴォはそのまま、暫く無言だった。口の中の物を租借し、飲み込み、ポットの中のコーヒーを手ずからカップに注ぎ、飲み干して、彼は漸く口を開く。が、視線は再び、エドアルドから逸らされた。
　「ロッシ銀行の頭取の娘が、今年、十九になる」
　「……ロッシ？何です、唐突に」

グラローニと接する地方の銀行の名前が出て、エドアルドは怪訝そうに眉を寄せる。モントリーヴォは彼を見ないまま、更に続ける。
「モリエーロで、アデレードの手がけた事業が焦げ付き始めた。手を離すつもりらしいが、株価がかなり下がって、このまま放置すれば面倒な事になる。あれはボロージアの名を使っている、我々の管理不足、ということになるだろうな。ロミッツィがそこに付け込んできた。30%の株を取得して、筆頭株主になってもいい、と申し入れがあった。建て直しのために融資する、とも」
「それと、ロッシ銀行の頭取の娘と、何の関係が……」
「下院議員のパスクアルの息子でも、年回りと使い勝手を考えれば構わんが、アデレードが聞くとは思えん。モリエーロの回収をするのに、ざっと二千万。アデレードの手では負えんだろう。パスクアル側も、次の選挙辺りが危ないらしい。ボロージアの後ろ盾があれば、というところだろう。資産家だが、所詮は平民出だ。ネームバリューが足りない。ま、二千万は出せんだろうが、別の方面からモリエーロを押さえられる。とは言え、こちらは希望的観測の度が過ぎる話だ。現実的ではない」
モントリーヴォの目がエドアルドを見た。エドアルドは目を剥いて、息を飲み、呻くように言った。
「……それで、今度は俺ですか」
「ルクレチアが、ロミッツィのブルーノを、嫌だと言えばの話だ。ロッシはボロージアでなく、ロミッツィとも組める立場にある。そうなれば、今の当主のことだ。ボロージアはグラローニごと、食いつぶされるだろうな。あの男は愚鈍なくせに、恨みがましくて貪欲だ。あれでは商売に向かんと思うが、相当のブレインでも雇っているらしいな」
モントリーヴォの口調は淡々としていた。エドアルドに言葉はない。黒とも紺ともつかない、深い色の目が、互いをじっと見詰めている。何て男だ、これが、自分の父親か。思いながら、エドアルドはきつく歯軋りする。
「……だったら、ロミッツィの奴らの、好きにさせたらいいでしょう。ボロージアに、何の価値があるというんです。守るべき家に、何があるんですか」
「この家が潰れれば、グラローニ諸共だ。町に住む人間の総てが、何かしらの余波を被る事になる」
「貴方が、そんなことを考える人間には、到底思えない。違いますか」
叫び出しそうに、胸の中には怒りがある。なのに口調は静かだ。エドアルドは自分自身のことを、不思議に感じていた。怒鳴りつけても、叫んでも、恐らく足りないほどに、自分の中に怒りは満ちていた。だというのに、心はどこか落ち着いている。それは、この男に対する絶望のためか。それとも、何か他に理由があるのか。父親を見据えながら、エドアルドはそんなことを思った。沈黙が二人の間を支配する。モントリーヴォは苦笑を漏らす。そして、息子と同じ色の髪を、力ない仕種で掻いた。
「父さん……」
「だろうな。町の人間のことなど、どうでもいい。奴らは所詮、ボロージアに寄生しなければ生きていけない、その程度の人間だ……お前の言う通りだ、エドアルド」
歪んだ笑みが自分を見る。それまで対峙したことのない父親の姿に、エドアルドは驚き、うろたえる。気付いたのか、今一度モントリーヴォは苦笑した。そして、疲れた口調で言葉を紡ぐ。
「あの夜からずっと、お前が察しているように、リザとグラン・グラローニにいた。聞かれたくない話をするのに、あそこは都合がいいからな。予想以上に居座ってしまったが……」
「……何の、話を……」
「ルクレチアと、お前のことだ」
思わずこぼれたその質問に、モントリーヴォは容易く答えた。エドアルドの心臓が、驚きと焦りでぎくりと強張る。笑うのをやめて、モントリーヴォはエドアルドを睨む。
「お前は、ルクレチアをどう思っている？」
「どう、ですか……」
問われて、突然の事にエドアルドは答えに窮する。全く構わず、モントリーヴォは続けた。
「それ以前に、自分の立場をもっとよく理解する方が、先だろうな。この家を継ぐのはお前だ。リザも、言って聞かせたと言っていた」
「……何を、です？」
聞かなくとも、その答えは解りすぎるほどに解った。叔母は、彼女と自分の関係に気付いたのだろう。それであの子に釘をさしたのだ。エドアルドはこの家を継ぐ人間なのだと。それが意味するところは、容易く理解できる。
「ロッシ以外にも、年頃の娘が、と言ってくる輩は多い。暫くはそれを餌にさせてもらうが、お前も真剣に、そういうことを考える年頃だ」
「だから俺とルクレチアの事には、何も言わないと？」
「傷が浅いうちに、やめておけ」
モントリーヴォの言葉は冷たく、短い。エドアルドはその声に、息を詰まらせる。
「その辺りの女なら、金で何とでもできる。前にも言ったはずだ。金で片の付かない女と関係を持つな、と」

「ルクレチアは、貴方の姪ですよ？娼婦のような言い方をっ……」
その口調に、エドアルドの声が震えた。怒りで、声だけでなく体が震え出す。モントリーヴォの表情は変わらない。そしてその声で、言葉は続けられた。
「今回の事でボロージアが打撃を受けることは確かだ。建て直しには、それなりの時間もかかる。グラローニごと潰される訳にはいかん。何か手を打つに越した事はない。ルクレチアがロミッツィに行くか、ロッシからお前が妻を取るか」
「……他に、方法はないんですか」
押し殺した声で、エドアルドが尋ねる。モントリーヴォはしばし黙し、それから、皮肉めいた表情で笑って、
「今までの総てを捨てて生きられれば、な。お前にも、私にも叶うまいよ。他に生きる術を知らんのだ」
「……俺は、あの子のためなら、何でもする。貴方とは違う」
押し殺した声で、エドアルドが言葉を返す。モントリーヴォはその笑みに苦いものを滲ませて、
「……やはりお前は、私に似ているよ、エドアルド」
「ボロージアを守るためなら、手段を選ばないような人間と、一緒にしないでくれ」
「ああ、手段は選ばない。私は、私の守りたいものの為に……あれのためなら、この命さえ、厭わない……」
笑ったまま、モントリーヴォはエドアルドから視線を逸らす。どこか恍惚とした表情を見つけて、エドアルドは息を飲んだ。目の前にいる人間は、普段の彼とは全く違って見えた。巨大財閥の主、某国の王族から分かれた旧貴族の末裔、半ば一地方の支配者のようなその男が、エドアルドの前でそんな表情をするのは、初めてのことだった。息を飲んで、エドアルドはその姿を見詰める。
一体父は、何の為にこの家を守ろうというのだろう。何の為にボロージアを、グラローニを守るのか。その為にどうしてそこまで、冷徹になれるのだろう。そして結局、自分はそんな父親の、道具でしかないのだろうか。
「父さん……」
「ルクレチアとお前の間に、何があるかは知らん。だが、お前はこの家を継ぐべき人間だ。金で片の付く女以外を相手にするな。相手が誰であれ、だ」
モントリーヴォが再び、冷たく言い放つ。エドアルドは舌打ちして彼に背を向ける。話せることはもう何もない。いや、何を言っても無駄だ。そして自分も、何も聞くことは出来ない。そのまま、無言でエドアルドは歩き出す。背中に向って、モントリーヴォが最後に声を投げた。
「リザなら、昼前にはアパルトメントに戻るはずだ。ルクレチアに、早く知らせてやれ」
何の救いにもならない言葉だ。聞きながら、エドアルドは背中で、その部屋の扉を閉じた。

　シャワーを浴びて身支度を整え、支度された朝食を済ませる。メイドはサーブの最中、ずっと笑っていた。昨夜は如何でしたか、と、年の近い、今では友人と言って差し支えない彼女の質問に、ルクレチアは上手く答えられなかった。世間の恋人同士は、みんなこんなものなのだろうか。そういうリラはどうなの、と、思わず聞き返してみたが、あっさり、私達はお嬢様と奥様のお世話で、忙しいですから、と嘯かれた。メイドにまで揶揄われている、と知ったらあの人は何というかしら。このメイドを叱ったりするのかしら。それで、やめさせろ、なんて言われたらどうしよう。こんな話が出来るくらい仲良くなったのに。それとも、一緒になって笑われるかしら。自分達の事なのに。思いを巡らせながら、ルクレチアはエドアルドが戻るのを待った。時計は八時を回っている。学校の始業時刻はとうに過ぎてしまった。どうしよう、遅れてもいいから、行った方がいいのかしら。それとも、母さまを迎えに行くのかな。でも、母さまはどこにいるのかしら。遠くだったら、どうやって行くのかしら。テーブルの上にひじを付く格好で、ルクレチアは溜め息をつく。
　「お嬢様、どうなさいました？」
　「ううん……何でも。兄さま、早く戻ってこないかな……」
　「何だ、若様のことですか」
　メイドはそう言って、そのテーブルを片付けながら笑う。ルクレチアはその態度に頬を膨らませるが、それ以上何も言わない。彼女達は彼女達で、こんな風にエドアルドのことばかり気にしているルクレチアが微笑ましいのだろう。時には揶揄いもするが、二人の事はどちらかというと歓迎しているらしかった。ニャー、と足元で子猫の声がする。ルクレチアは足元に視線を向けて、そこにいた子猫を抱き上げた。
　「ごめんね、ジュリオ。今夜はお前も、自分のおうちで寝られるからね」
　子猫は、飼い主の言っている意味が解るのか、抱かれたそのままでまた、ニャーと鳴いた。膝の上に下ろして、ルクレチアがその背中を撫でる。メイドはその様子にくすくすと笑うと、
　「ジュリオはきっと、若様に妬いておいでなんですよ。こちらに来てからルクレチア様は、毎日「兄さま、兄さま」って仰っていますから」
　「そ、そんなことないもん！」
　「本当に、若様のことがお好きなんですね、お嬢様は」
　言われて、ルクレチアは真っ赤になって口ごもる。が、ややもするとその口許を緩めて、
　「うん……ちっちゃい頃から、ずっと好きだったの。優しくて、ハンサムで、頭も良くて、時々、意地悪だけど……だからね、ここに来るのがいつも楽しかったの。また兄さまに会える、って、それだけで」
　言いながら、ルクレチアがはにかむ。メイドはその幸せそうな微笑を、どこか眩しそうな目で見ている。えへへ、と照れを隠すように笑って、ルクレチアは抱き上げた子猫を見下ろす。
　「だからこの子も、ジュリオ、って名前をつけたの。兄さまとお揃い」
　「お揃い、ですか？」
　「うん。兄さまの二つ目の名前の人と、一緒なの」
　その名を呼ぶのは、二人きりの時だけ。彼が年下の自分に、甘えてせがむその時だけ。思って、ルクレチアはまた赤面した。メイドは意味が良く解らないらしく、はぁ、と言って首をかしげている。ニャー、と子猫が鳴く。部屋の扉が何の前触れもなく開かれたのはその時だった。開閉音に二人が顔を上げる。ノックなしでこの部屋に入る人間は限られていた。屋敷の主か、この部屋の主だ。そこにエドアルドの顔を見つけて、ルクレチアは破顔した。
　「兄さま！」
　声が大きくなる。入ってきたばかりのエドアルドは、出て行った時とは裏腹の、険しい顔をしていた。酷く眉をしかめた、怒ったようなその表情に、ルクレチアの笑顔が消える。どうしたのだろう、何か良くないことでも起きたのだろうか。思って、ルクレチアは椅子から立ち上がる。膝の上から子猫が振り落とされる。構わず、ルクレチアはエドアルドに駆け寄った。
　「どうしたの？兄さま……何か、良くない事でもあったの？」
　飛び込んできたルクレチアの不安げな顔に、エドアルドは我に返った。それまで顰められていた眉間が、驚きと安堵で緩む。怯えまで見えるその大きな瞳に、エドアルドは薄く笑った。
　「……何でもないよ、ルゥ。少し、父さんとケンカしてきたんだ」
　「ケンカ……伯父さまと？」
　真下に見えるルクレチアの顔を見ながら、普段通りにエドアルドが、その頭に手を置いた。苦笑しながらその髪を撫でる。
　「……何か、言われたの？」
　「少しね。でも俺も、色々言ってやったから」
　不安を拭えないままのルクレチアに問われて、エドアルドは軽く答え、その側を離れる。歩き出す彼の後姿を、ルクレチアは見送った。テーブルの側のメイドがエドアルドの姿に一礼する。そのメイドに構わない、慣れた様子でエドア

ルドは言った。
「叔母上は、昼にもアパルトメントに戻るそうだよ。君はどうする？ルゥ」
「え？」
唐突と言えば唐突な言葉に、ルクレチアが戸惑う。エドアルドは振り返って苦笑すると、
「迎えに行く必要も、なくなったらしい……折角だから、デートでもしようか」
「でも、学校が……」
何だか少し、様子がおかしい。エドアルドの言葉に、ルクレチアは胸の中で呟く。普段と変わらないようで、彼の様子はどこかおかしかった。伯父とケンカしてきたせいだろうか。戸惑いながらも、尋ねることも出来ず、ルクレチアはまごつく。エドアルドはそれを迷いと取ったらしい。時計と、部屋にいるメイドとを見比べ、
「そうか、学校か……でも今から行っても、遅刻する、かな……」
「兄さま、あの……」
ルクレチアは何か言おうとして、言葉を詰まらせる。エドアルドは不思議そうに、そんな彼女に問い返す。
「何だい？ルゥ」
「あ……あの……ええっと……」
何があったのか、知りたい。聞いてもいいのだろうか。思いながら、躊躇いがちに、ルクレチアは言葉を探す。けれど上手く見つけられずに、その場でただ、まごつくばかりだ。エドアルドは変わらず、そんな彼女を見詰めていた。が、小さく笑うと、
「散歩でもしようか、ルゥ」
「……え？」
「屋敷に来るのも久し振りだし、帰ったら、今度いつゆっくり会えるかも、解らないだろ？」
言葉に、ルクレチアは驚く。くすくすとエドアルドは笑い、
「顔に書いてあるよ、兄さまともっと一緒にいたい、って」
「えっ……ええっ！」
「違うのかい？」
そこにいるのは、いつも自分を揶揄う彼だった。慌ててルクレチアはその頬を隠すように手で覆う。エドアルドはそんなルクレチアに歩み寄ると、いつも通りにその髪を撫でながら、
「俺では散歩のお相手は、不足ですか？セニョリータ」
ニヤニヤと笑う顔が見える。揶揄われた。自分は真剣に、心配しているのに。思って、ルクレチアは思わず声を荒げる。
「もう、兄さま！」
「ほら、どうするの？ルゥ。迷ってる時間はないよ？」
問いかけが重ねられる。ルクレチアは顔を真っ赤にしながらも、組むようにと彼が示したその腕に、抱きつくように自分の腕をからませる。
「……仕方ないから、今日は兄さまと一緒にいてあげる。わ、私は、別にいいんだから」
「それはそれは。光栄です、セニョリータ」
真っ赤な顔で言っても、全く説得力はない。エドアルドは傍らの少女の、少しだけ尖らせた唇を見ながら、また軽く笑った。少し離れた場所に控えているメイドも、その様子にくすくすと笑っている。また笑われた。でも、言われたことは半分は図星だ。この人の側にいたいのは事実だし、それに、伯父との間に一体何があったのか、聞けるものなら聞きたい。思いながら、ルクレチアは歩き出そうとする。エドアルドは少し慌てたその歩調につまずきながら、
「何だい、ルゥ。そんなに早く二人きりになりたいの？昨夜だって、ずっと一緒に……」
「お散歩に行くんでしょ？兄さま。こんな所につっ立っていないで、早く行きましょ」
エドアルドの言葉に強く返しながら、ルクレチアは更に歩みを進める。やれやれ、と息を吐きながら、エドアルドは引っ張られるようにその部屋を出た。

昼前の庭先は光に満ちている。とは言え、そこに夏の暑さはない。ここに来た頃には、早朝でなければ日中、まともに散歩も出来なかった。老女中が口喧しいのもそうだが、グラローニの夏は、元いたところよりも厳しい。大人しく日陰にいるように、と言われた理由は暑さだけではなく、体質にもあるのだけれど。その、来た頃よりもやや寂しくなった庭を見ながら、ルクレチアは何気に思いを巡らせる。一ヶ月ほどを過ごした屋敷を出て、それからもう一ヶ月が経過している。この庭も、良く歩き回った。一人での外出が止められていたせいもあったが、彼女はその屋敷の広い庭が、嫌いではなかった。手入れされた植栽や色とりどりの花々、その間に遊ぶ蝶達は、一人で過ごしていたルクレチアの心を慰めてくれたし、何より、どこにいても彼の気配を感じられた。腕を組む相手を、歩きながらちらりと見ると、見られた相手はいたずら小僧のような目で、何だい、と小さく尋ねてきた。
「何だか、兄さまとお庭をお散歩するのも、久し振りみたい」

「そうだね……アパルトメントはどう？」
エドアルドは、普段の落ち着きを取り戻した様子だった。先程感じた苛立ちのようなものは感じられない。良かった、いつもの兄さまだわ。思いながら、ルクレチアは小さく笑う。
「最初は、狭くてびっくりしたけど、今はもう慣れたわ。色んなものが一つのところにあって、面白いの」
「色んなものが一つのところに、ねぇ……君は本当に、変わった事を面白がるね」
ルクレチアの言葉に、首をかしげながらもエドアルドは笑う。ルクレチアは少し膨れて、
「そうかしら。兄さまだって、見てみたらきっとそう思うわよ。こんな広いところにしか住んでいないんだもの」
「確かに、この家はやたらと広い気はするけどね」
そんなルクレチアを見て、エドアルドがかすかに笑う。ルクレチアは膨れたまま、その視線をぷいと彼方へ背けた。夏よりも生気の薄らいだ、とは言えまだ青い葉を茂らせた庭木と、その側の花壇が見える。何気にルクレチアは足を止めた。同じく、エドアルドも立ち止り、そちらに目をやる。
「ルゥ？」
「あれ、ベラドンナの花かしら」
「ああ……良く知ってるね」
視線の先で、青い花が揺れているのが見える。ルクレチアは少し笑って、
「母さまが、大好きなの。青くて綺麗で。お部屋にもよく飾ってあるのよ」
「へぇ……」
くすくすと、ルクレチアが笑う。何がそんなに楽しいのだろう、そんな風に思いながら、エドアルドは続く彼女の言葉を聞いた。
「あの花は、毒の花なんですって。本家のお屋敷のお庭は、毒の花だらけだ、って母さまがいつか言ってたわ」
「それは……物騒だな……」
笑う声とは裏腹に、その言葉は剣呑だった。エドアルドが僅かに辟易する。ルクレチアはそんな彼の顔を見上げると、
「でも、昔の貴族のお屋敷の庭って、そういうものだったのでしょ？ほら、お薬になるものもあるし」
「……そういうものも、なくはないね」
それよりももっと短絡的に、毒を作っていたと考える方が、普通ではないだろうか。思いながらも、エドアルドにはそんな言葉しか返せなかった。ルクレチアは困り顔の彼を見上げて、
「もし今度、兄さまが意地悪したら、あの花でお仕置きしようかしら。内緒で、お茶に入れるの」
「……ルクレチア、怖いことを言わないでくれよ……」
「冗談よ。でも不思議よね。毒の花の名前が「美人（ベラドンナ）」なんて」
無邪気にルクレチアが笑う。エドアルドは苦笑すら出来ず、そんな彼女を見下ろし、言葉もない。ルクレチアは笑いながら、抱きつくように組んだ彼の腕に、そっと頬を摺り寄せる。しながら、彼女はまた小さく笑った。
「……何だか、今日の君は、ちょっと怖いね、ルゥ」
「そう？それは兄さまに、何か疚しいところがあるからじゃないかしら？」
「俺は別に、何も疚しくは、ないけど……」
返す言葉が濁る。エドアルドは言葉に詰まって、楽しげなルクレチアをただ見ている。
「同じ名前で、小さな実がつく花もあるの。昔伯父さまも母さまも、まだ子供だった頃に、あんまり美味しそうだったから、それを食べてしまったんですって」
「へぇ……」
どうやら、彼女が笑っているのはそれを思い出したから、らしい。何気に安堵して、エドアルドはかすかに笑う。ルクレチアはそのまま、言葉を続けた。
「それで、気がついたら、二人で病院にいたんですって。もう少しで、死ぬところだった、って、ばあやが大騒ぎしたみたいよ」
「死ぬところ、って……」
「きっとここのお庭では、もう作ってないと思うけど……昔はその毒で、目を大きく見せる目薬を作って、女の人を美人に見せていたから「美人（ベラドンナ）」って言うんだって、母さまが言ってたわ」
ルクレチアが、その花に向って歩き出す。引かれて、エドアルドも歩みを進める。手折って捨てたなら、すぐにも萎れそうなその花に、腕を解き、ルクレチアが顔を近づける。無邪気な仕種にエドアルドがそっと笑う。
「叔母上が好きなら、少し持っていくかい？ルゥ」
「……ううん、折角ここで咲いたんだし……寒くなったら、お花も終わってしまうもの」
ルクレチアはそう言って首を横に振る。どことなく寂しげなその様子を見ながら、エドアルドは優しく言葉を紡いだ。
「季節が巡ってくれば、花はまた咲くよ。そしたら、また見においで」

「うん」
ルクレチアが振り返る。エドアルドはその頭に手を乗せて、そっとその髪を撫でる。
「「美人（ベラドンナ）」か……君もすぐに、そうなるのかな」
「え？」
「綺麗で……危険な大人の女性に」
エドアルドの言葉に、ルクレチアは目をしばたたかせる。意味が解らないらしい。その幼い様子に、またエドアルドは笑う。この子が毒を含んでいるとしたら、すでに自分はそれを食らって、当てられて、逃れられなくなっているに違いない。この先もっと、自分を捕えて離さない、そんな風に育つなら、一瞬たりともそれを見逃したくはない。自分は、欲張りだろうか。ルクレチアの髪を撫でながら、エドアルドは思った。その手が頬に下りる。撫でられて、ルクレチアは少し戸惑うように視線を泳がせる。
「……兄さま？」
「何？」
「……あんまり、じっと見ないで、くれる？あの……」
真直ぐに向けられた視線に、耐え切れずにルクレチアが俯く。エドアルドは笑って、
「どうして？俺は、ずっと見てたいけど」
「どうして、って……だって……」
「だって君は、俺のものだろ？見て、触って、抱きしめて、何がいけないの？」
その言葉に、ルクレチアの顔が赤くなる。頬を撫でる指先を感じながら、ルクレチアは小さな声を振り絞るように言った。
「だ、だって……恥ずかしい……」
「だったら、君も同じ様に俺を見たらいいよ。俺は君のものだし……俺を見て……俺に触ってよ」
そっと手を離して、エドアルドが囁く。ルクレチアは目を上げるが、またすぐに逸らす。そして何故か、彼に背を向けた。何だか、奇妙だ。この子の、この態度は、何だろう。何気に、エドアルドは思い、その背中に呼びかける。
「ルゥ？」
「……ごめんなさい、何でもないの」
それは夜にも、聞かされた言葉だった。昨夜も突然泣き出して、彼女は何でもないと言って自分から目を逸らした。何かあったのかと問うても、答えてはくれず、ただ黙って涙を流すばかりだ。どうしてだろう。この子は一体、何が哀しくて、苦しんでいるのだろう。小さく震える背中を見詰めて、エドアルドは思った。そう言えば、父がさっき言っていた。お前はこの家を継ぐべき人間だ、立場を弁えろ。ルクレチアとのことは、傷が浅いうちに、やめておけ、と。父も叔母も、自分達のことをどこまで知っているのだろう。離れられない、失ったら死んでしまうと言ったなら、あの二人はどうするのだろう。
「ルゥ」
呼びかけて、その肩を抱き寄せる。ルクレチアは驚いて、その顔をそっとエドアルドに向けた。
「兄さま……」
「叔母上に……何か言われたの？」
「え？」
「俺との事を、聞かれたんだろう？」
問いかけに、ルクレチアの肩が跳ねた。図星らしい。そのまま抱きしめて、エドアルドは軽く笑う。
「……兄さま？」
「俺も、さっき父さんに言われたよ。立場を弁えろ、お前はこの家を継ぐ人間だ、って」
苦い、そして何かを嘲る笑みがその口から漏れる。ルクレチアはその腕の中で振り返って、不安げな目をエドアルドに向けた。
「兄さま……あの、あのね……」
「君を失うくらいなら……他の何もかも、捨てても構わない」
腕の中で、また彼女の肩が跳ねる。驚くというより、怯えているようだ。そう感じながら、エドアルドはその腕を解く。真直ぐに、エドアルドはルクレチアを、不安げな目のままでルクレチアはエドアルドを、じっと見詰めていた。沈黙が降りる。微塵も動かないまま、エドアルドは言った。
「君を失うくらいなら……死んでしまった方がましだ」
「に、兄さまっ……」
「この家も、土地も、財産も、名前も……君のためなら捨てられる……」
もしかしたら、異常なのかもしれない。自分は狂っていて、まともに物事を考えることすら、出来なくなっているのかもしれない。思いながら、エドアルドは目の前の、まだ少女としか呼べない、愛しい女を見詰めた。
彼女にずっと恋してきた。いつからかは解らない。けれど、いなくなると感じたその時には、無くしたくないと願うよ

うになっていた。気持ちを確かめて、その体に触れて、今となってはもう、彼女なしでは生きてはいけない。それほどまでに愛している。この子は、どうだろう。それほどまでに自分を思ってくれるだろうか。いや、こんな自分を、拒んだりしないだろうか。もし拒まれたら、自分はどうなるのだろう。もっと狂って、愛おしさのあまりに、この手で殺してしまうだろうか。例えば、その毒の花を使って。思いながら、エドアルドがその青い花を見遣る。視線がそれると、ルクレチアが震える声で、エドアルドに呼びかけた。
「に……兄さま？」
「……君は俺と……いや、何でもない」
もし引き裂かれる事になったら、彼女は一緒に死んでくれるだろうか。ふと思った疑問を口にしかけて、エドアルドは苦笑した。自分は相当狂っているらしい。彼女と一緒に、死ぬ、だなどと。そんなことが出来るはずもないのに。彼女を手にかければ、確かに自分は生きてはいられないだろう。それ以前に、あまりにもそれは馬鹿げている。それ以前に、死などという言葉を、簡単に口にするべきではない。きっと彼女も、怖いと思うに違いない。花から視線を、彼女へと戻す。ルクレチアは変わらず、不安げにエドアルドを見詰めていた。肩が震えている。やはり、怖がらせたらしい。思いながらエドアルドはまた、ルクレチアに笑いかけた。
「ごめんよ、ルゥ……何でもないんだ」
「……兄さま……」
「ただ……君と離れるなんて、考えられなくて……大丈夫だよ、俺は、何もしないから」
怯えた目は、まだ彼を見つめている。ルクレチアはそのまま、ゆっくりとそのすぐ近くまで歩み寄った。ぶつかる直前、その体がよろめく。いや、投げ出されたのか。胸に彼女を受け止めて、僅かにエドアルドは驚いた。寄りかかる重みを感じながら、エドアルドは彼女に呼びかけた。
「……ルゥ？」
「私も……兄さまと離れたら……生きていられない……兄さま以外の人となんて……生きていけない……」
細く、涙の混じる声が聞こえる。その言葉の意味に驚きながら、エドアルドは胸の高鳴りを感じていた。ルクレチアは涙をこぼしながら、小さな声で言葉を続ける。
「兄さまが、他の人のものになるのもいや。他の誰かに、触るのもいや。でも……こんな風に思う自分も、いや……もしかしたら、いつか兄さまを嫌いにならないかって、そう思ったら……」
無言のまま、エドアルドはその体を抱きしめる。ルクレチアは腕の中で泣きじゃくりながら、更に言葉を紡ぐ。
「離れたくない……ずっと一緒にいたい……ずっとずっと……一緒にいたいのに……」
そう願うのに、それでも、その願いは叶わないと知っている自分がいる。この人は、自分のために何もかもを捨てていいと、そう言った。言ってはくれたけれど、きっとそれは叶わないことだ。母親に言われたから思うのではない。心のどこかで、それはずっと感じていた事だ。小さな頃からずっと好きだった。兄妹のように育てられて、ずっと子ども扱いをされてきて、それでも今はこうして、抱かれるまでになった。それでも、何となく解っていた。従兄は、ボロージアの家を継ぐ人間だ。自分と共に、生涯を生きられる人ではないと。
「ルクレチア……」
「……でもルゥは……悪い子なの……」
愛おしさで気が狂いそうになる。もしかしたらそのために、彼を傷付けるかもしれない。誰かに奪われるなんて、考えられない。自分以外の誰かに気持ちを傾けるなんて、許せない。でもそれを思うと、自分の愚かさに哀しくなる。こんな自分には、彼に大切にしてもらう資格など、ないのではないかとさえ、思える。例え従兄妹同志であっても、だ。
「ルクレチア……」
「だから兄さまは、ルゥの事、嫌いになってもいいの……それはルゥが悪いからで……兄さまのせいじゃ……」
「……愛してるよ」
耳元で、その言葉が囁かれる。ルクレチアは息を詰まらせて、声もなくただ涙を流す。
「君を愛してる……だから、そんなこと、言わないでくれ……」
「だって兄さまは……幸せにならなくちゃ……このお家を継いで、次のボロージアの当主様になって……私より、美人で、優しくて、賢くて、素敵な……ちゃんとした人を、奥様にして……」
「やめてくれ、ルクレチア……君に、そんな風に言われたくない……」
腕の中の少女が紡ぐ言葉に、耐え切れずにエドアルドが声を上げる。ルクレチアは小さく笑って、笑いながら、吐息とも囁き声ともつかない声で言った。
「チェーザレ……私の……」
ルクレチアが顔を上げる。その髪を撫でながら、かすれた声でエドアルドが、その名を呼ぶ。
「ルゥ……ルクレチア……」
「若様……お嬢様！何をしておいでです！」
唐突に、その声は響いた。驚いて、二人は同時にそちらに顔を向ける。抱き合ったままの二人を見ていたのは、老女中だった。驚いているのか血相を変えて、もたつく足で駆けてくる。しまった、二人して学校を休んだ事が知れたか。思

いながら、エドアルドは苦笑する。泣いていたルクレチアは慌ててその涙を拭い、
「ばあや……な、何でもないわ。ちょっと、ケンカして……」
慌てるあまりにエドアルドを悪者にするような嘘をつく。エドアルドは思わず、
「酷いな、ルゥ。また僕が悪者かい？」
「え？あ……ご、ごめ……」
「何をしてらっしゃるです、こんなところに、お二人で……」
駆けてきた老女中には二人のやりとりが聞こえていないらしい。どこか青ざめた顔で、彼女はまくし立てるように言った。
「お、お二人は、ご兄妹なんですよ！幾ら誰も見ていないからと言って、こんな……こんな真似を……」
彼女は相当混乱しているようだ。その言葉にエドアルドは苦笑した。そして、
「ばあや、何を言ってるの。僕だよ、エドアルドだよ」
この屋敷で兄妹と言えば、父と叔母の事だろう。思って、エドアルドは言い返す。ルクレチアは老女中の混乱する様子に驚いて、彼の腕の中で何も言わない。老女中は言葉を失い、しばしそのまま黙していた。が、突然、我に返った様にはっとすると、
「え……エドアルド、様……？」
「そうだよ、ばあや、僕だ。大丈夫かい？僕と父さんを見間違えるなんて……」
エドアルドが、揶揄う様に笑いかける。しかし老女中の青ざめた顔色は、変わることはなかった。その視線を泳がせて、彼女はこちらを不安げに見ているルクレチアを見る。視線がぶつかって、ルクレチアは恐る恐る、それまで見たことのない、動揺する彼女にそっと声をかけた。
「ばあや……顔色が悪いわ……大丈夫？」
「……お二人とも、こんなところで……学校は、どうなさったんです？」
よろよろと、老女中がよろめく。様子がおかしい。思いながらも、ようやくのその質問に、エドアルドはいつものように返そうとする。
「行きそびれたんだ……ばあや、本当に、どこか具合でも……」
ぐらりと、彼女の体が傾いたのはその時だった。そのまま、彼女はその場に無防備に倒れこむ。驚き、エドアルドは腕の中のルクレチアを離し、倒れる老女中に駆け寄った。
「ばあや、しっかりしろ、ばあや！」

老女中はそのまま、屋敷の使用人達によって病院に運ばれた。エドアルドもルクレチアも、何も出来ずにそれを見送った。落ち着いたら後でお見舞いに行きましょうね、と、心細げにルクレチアが言うと、エドアルドは無言で頷いた。彼女は三代にも亘ってこの家に仕えているのだ、もう年なのだろう。何事もなければいいが、そろそろ本当に暇を取らせた方が、いいのかもしれない。半ば親代わりのような彼女が屋敷からいなくなるのは寂しいが、致し方ないことだろう。自分ももう子供ではないのだし、老いた彼女に甘えてばかりでもいられまい。
屋敷で起こったその騒ぎの最中にも、父親は姿すら見せなかった。執務室に篭もったきりらしい。何をして、いや、何を考えているのだか。苛立たしげに思いながら、ふとエドアルドはばあやの言葉を思い出す。
彼女は倒れる前、恐れおののく様子で、兄妹で何をしているのか、と詰め寄るように問いかけてきた。兄妹、と聞いて、彼女が自分と父親とを見間違えている事はすぐに解った。が、あの動揺の仕方は過剰な気がする。兄と妹だとて、挨拶に抱擁くらい交わすだろう。仮にケンカをして泣かせたら、宥めるのにそうすることも、考えられなくもないだろう。最も、自分もルクレチアも、そうして宥めたり宥められたりするには、やや成長しすぎてはいるが。
二人は兄妹なのだから、幾ら人目がないと言っても、こんな真似をしては。その言葉は、思えば思うほど奇妙だった。人目のあるなしはともかく、そもそも、二人きりでいることさえ咎めているような言葉だ。兄妹であると言うのに。いや、むしろ兄妹だからこそ、なのか。
「ねえ兄さま、ばあや、大丈夫なのかしら」
傍ら、ルクレチアがそんな風にエドアルドに尋ねる。エドアルドは我に返って、不安げなルクレチアに笑いかけた。
「どうかな……いつも元気に見えるけど、ばあやも年だし。ここのところ色々あったから、少し無理していたかも知れないね」
「それって……私や、母さまのことも？」
その視線が、不安気に泳ぐ。いつものようにその頭を撫でて、エドアルドは優しく言った。
「君達のせいじゃないよ……ばあやはそんなこと、一言も言わなかっただろ？」
「でも……」
ルクレチアの目に涙が浮かぶ。頭を撫でる手でそのまま彼女を抱き寄せて、エドアルドは言葉を重ねた。
「大丈夫だよ、ルゥ。ばあやは働きすぎなんだよ。何しろ死んだお祖父さまの若い頃からこの屋敷にいるんだ。もうそろそろ、楽隠居してもらってもいいくらいなんだから」

「……うん」
エドアルドに身を寄せて、ルクレチアが小さく頷く。体を摺り寄せるルクレチアを支えながら、エドアルドはそれでも、と、別のことに思いをめぐらせた。
彼女は父と叔母とが、人目を避けて二人になることを、恐れているようだった。兄妹というものがどういうものなのか、はっきりとエドアルドには解らない。姉はいるが、幼い頃から一緒に育てられた訳でもないし、二人でいることを、今までそうして、誰かに咎められたこともない。あの二人に一体何があるのだろう。確かに父親は、自分の妹に執着しすぎている部分がある。それ以前に、人を間に入れずに二人だけで話をするためだけに、夜半連れ出して、その後数日に亘ってホテルに逗留する、ということは、世間の兄妹にはあり得るのだろうか。
「……兄さま？」
物思いに耽るエドアルドに、そっとルクレチアが声をかける。エドアルドは我に返ると、自分を呼んだ彼女に笑いかけた。
「何だい？ルゥ」
「……何か、考え事？」
「……ちょっとね」
問われて、エドアルドはそんな風に返す。ルクレチアは不安気な目のまま、そんな彼を見上げて言った。
「何か困ったり、悩んでいるなら……私にも、教えてね」
「ルゥ？」
「だって……兄さまが困ってるなら……私だって、力になりたいもの……なれないかも、しれないけど……」
力なく視線は逸らされる。頼りなげなその仕種に、エドアルドは苦笑した。どうやら不安にさせているらしい。しかも、彼女はそんな自分のために、何かしらしようとしてくれている。何もできないかもしれないと言葉を濁す横顔には、自己嫌悪のようなものも見える。笑いながら、エドアルドは息をつく。まだまだ子供だと思っていたのに、そんなにも自分を思ってくれているとは。そして、そんな心配をかけたことに、少しだけ苦笑する。ルクレチアは自分が笑われたと思ったのか、必死の目で、
「兄さま、わ、笑わなくても……」
「ごめん、違うよ……君に、心配させたらいけないな、って……」
「私なら、平気。だって兄さまのことだもの……私だって、兄さまのこと、大切に思ってるんだし……何でも、って言う訳には、いかなくても……」
「うん……有り難う、ルゥ」
そんな風に言われるだけで、心が安らいで、癒される。思うことは、時に苦痛だ。けれどこうして思われる事は、どこか気恥ずかしいけれど、嬉しい。思いながらエドアルドはルクレチアの顔を覗き込む。ルクレチアは困ったように視線を逸らして、それから小さく、えへへと笑った。彼女がこうして側にいてくれるなら、どんな事が起こっても乗り越えていけそうな気がする。例えこの家を放逐されても、二人でなら、いや、彼女のためなら、もし一人でも、何をしてでも生きていける。そんな気さえする。そのためにはまず、目の前の問題を片付けなければならないだろうか。エドアルドは重い溜め息をつく。ルクレチアが不安気に、その目をちらりと彼に向けた。
「兄さま……？」
「ルゥ……これから、何が起こっても……俺が君を守るよ。だからずっと……俺の側にいてくれる？」
見下ろして、エドアルドが尋ねる。ルクレチアは一瞬戸惑いを見せるが、すぐにも笑い返して、
「勿論よ。私、何があってもずっと、兄さまの側にいる。私だって、兄さまを守りたいもの」
「有り難う、大好きだよ、ルゥ」
言葉に、エドアルドは頬を緩める。ルクレチアは照れくさそうに笑いながら、彼の腕に抱きつくように、自分の腕を絡めた。

昼をすぎる頃、ルクレチアはメイドとエドアルドを伴って、アパルトメントに戻った。車を用意してくれた時点で、構わないと言ったのだが、心配性の従兄は着いていくと言って聞かなかった。母に、一体何事があったのかを聞きたいらしい。それは自分も同じなのだが、それ以上に様子のおかしい従兄に、ルクレチアは不安になった。この人はもしかしたら、自分の母親を叱るのかもしれない。子供を放っておいてどこに出かけていたのか、とか、怪我をするなんて不注意だ、とか。母は、確かに余所の婦人に比べて余りにも頼りない。家事らしいことは全く出来ないし、いつもどこでも、どことなくふわふわしている印象がある。こんな人が、人の妻であったり主婦である事なんて、できるのかとルクレチアでさえ思う。それでも彼女はルクレチアの母親だったし、たった一人の家族だ。もし今、今は連絡さえしていない父親が、二人の状況を知ったら、どうするのだろう。私は母さまと、引き離されてしまうかしら。何気にルクレチアはそんなことすら考えた。最も、ルクレチア自身も、母の最初の夫の連絡先さえ知らない。そして、その記憶すら曖昧だ。父親という人間とは、縁が薄いのかもしれない。それが寂しいと思った事はないが。思いながら、ルクレチアは傍らの従兄を見る。

移動の車中、従兄は何か考え事をしていて、殆ど口を聞かなかった。何かに怒っているようにも見えて、話しかけることもなかなか出来なかった。何か悩んでいるらしい事は、見ていれば解る。そして、それを自分に話したがらないことも。いや、彼が考えているのは、先程話していたことなのだろうか。彼はいずれ、巨大な財閥を率いる名家の主になる人間だ。しかるべき妻を迎えるのだから、自分と結婚など、できるはずがない。とは言えそれも、彼に強く否定されて、ルクレチアがそれを口にすることさえ嫌がられて、話は終わった。もしかしたらそう言った母親を、責めるのかもしれない。もしそうなったらどうしよう。従兄は母よりずっとしっかりしているから、そうなることも在り得ない話ではない。
「に、兄さま」
アパルトメントの表玄関までやってきて、ルクレチアは意を決したように、傍らの彼に声を投げた。エドアルドはどことなく物憂げな目を上げて、
「何だい、ルゥ」
「あ、あのね……」
メイドは、運転手と共に荷物を運び始めていた。側にはいない。足元に子猫の入ったバスケットを置いて、ルクレチアは困ったように彼を見上げている。
「……何だい、ルゥ」
「……母さまを、叱るの？」
問いかけに、エドアルドは目を丸くさせる。その反応にあせって、ルクレチアは慌てて弁解を始めた。
「あ、あ、あのね！兄さま、母さまにも、思ってることがあると思うの。た、確かに、何日も家にいなくて、見付かったら病院、なんて、驚くし心配だけど……きっと何か訳があったと思うの。だから、その……」
エドアルドの目は丸くなったままだった。ルクレチアは混乱して、更に慌てふためく。その様子に、間をおかず、エドアルドは吹き出した。そして、
「うん……そうだね。それで、ルゥは俺が、どうすると思ってるの？」
問われて、ルクレチアは更に混乱する。真っ赤になって泣き出しそうなその目に、エドアルドは笑いながら、
「叔母上が心配なの？俺に叱られるんじゃないか、って」
「……違うの？」
「うーん……それは少しは、注意しようとは思ってるよ。けど君の母上だって、大人の女性なんだし。訳もなく気まぐれで出かけた訳でもないようだし……」
「母さまのこと……怒ってない？」
重ねて、ルクレチアが尋ねる。エドアルドは笑いながら、
「そんなに心配？俺が怒るのが。別に、ぶったりする訳じゃないから、大丈夫だよ。それに……叔母上が留守をしてくれたおかげで、君と一緒にいられたし、ね」
最後の一言だけ、耳元で囁かれる。ルクレチアはその一言で真っ赤になって黙り込む、が、
「もう兄さま！私、真面目に聞いてるのに！」
途端に怒って怒鳴り始める。エドアルドはくすくす笑って、
「ごめんごめん。ほらルゥ、早く中に入ろう。叔母上だって、きっと君を待ってるよ」
言いながらルクレチアの頭を軽く叩く。揶揄われて、ルクレチアは膨れてそっぽを向く。が、内心、安堵の息を吐きたい気分だった。彼はいつも通りらしい。特別に怒っても、悩んでいる訳でもないようだ。恐らく母は、自分の前で少しは叱られるだろう。けれど、それ以上のことにはならないに違いない。何の根拠もなく、それでもそう思って、ルクレチアは安心していた。傍ら、エドアルドが足元の籠を拾い上げる。
「ほら、ジュリオも、早く出せって鳴いてるよ」
「あっ、ご、ごめんね、ジュリオ」
エドアルドが抱えた籠の中から、カリカリと音が聞こえる。ルクレチアは慌てた様子で中の子猫に呼びかけると、そのまま早足で歩き出した。

数日の間、主のいなかった室内は、その外出以前と何ら変わった様子は見せなかった。いや、その数日があったのかと思われるほど、その場所に変化らしい変化は全く見られない。メイドが留守居をしているのだから、それは当然と言えばそうだが、自室のベランダで、いつも通りに長椅子に腰掛ける母親の様子は、いなくなる以前と余りにも変わらなさすぎて、それがルクレチアに何故か違和感を与えた。
「一体、何日も何をしてたんですか、ルゥをほったらかしで」
従兄の第一声は、やはり叱責の言葉だった。母はいつものようにお帰りなさい、と、何日も留守をした事、そして心配をかけたことをまずルクレチアに謝罪し、エドアルドにはいらっしゃい、と声をかけるところだったらしい。先制攻撃を受けて、困ったように笑いながら、けれど何も言い返そうとはしない。エドアルドは少し苛立っているらしい。少し重い息を吐きながら、
「しかも、怪我をして入院していたなんて。あまりルゥに心配をかけないで下さい」

「ごめんなさいね、エドアルド。貴方にまで……」
「俺はおまけですから、構いません。でもこれからは、何かあったらちゃんとルクレチアにも、話してあげてください。もう彼女も、子供じゃないんですから」
言いながら、エドアルドがルクレチアを見る。突然視線を向けられて、ルクレチアは少し驚く。母は相変わらず、困ったように笑っていた。そして、
「ええ、そうするわ。ごめんなさいね、ルゥ。まさか何も連絡が行ってなかったなんて、思わなかったものだから……」
「ううん、いいの……母さまは、ちゃんと帰ってきたんだし……今度から、気をつけてくれたら……」
母親に謝罪されて、ルクレチアが戸惑いながら言葉を返す。その様子を見て、エドアルドは苦笑していた。そして何気に、
「もういっそ、ここは引き払って、うちに戻ったらどうです？その方が色々と、都合がいいでしょう？」
言葉に、二人の顔がそちらに向いた。エドアルドは変わらず、困ったように笑っている。やや過保護な発言に、ルクレチアは頬が緩みそうになった。屋敷に戻れば、また以前のように、彼と一緒に過ごす時間も増える。それを思うとただ嬉しかった。が、
「そういう訳にはいかないわ、エド。私は、出戻りなのだし……」
困り顔で、エリザベッタがやんわりと、その提案を退ける。ルクレチアは落胆を隠せないまま、そう言った母親に向き直る。エリザベッタはそんな娘に笑いかけて、それから、
「貴方も……お父さまに、言われたでしょう？どこかの、銀行の……」
「その事で……俺も貴方に、話があります」
笑っていたエドアルドの表情が、固くなる。ルクレチアは不安気な目で、今一度エドアルドを見遣った。エリザベッタは嘆息して、
「ルゥ……外してもらえるかしら」
「っ……え？」
「エドと二人で、お話したいのよ」
言われて、ルクレチアは戸惑う視線をエドアルドに向ける。エドアルドは笑わず、エリザベッタを見たまま、
「俺は、彼女にも、聞いていて欲しいんですが」
「私は、聞かれたくないわ。確かにこの子は、もう小さな子供ではないけれど、まだ話していないこともあるし」
「なら今、一緒に済ませても構わないでしょう？」
いつになく、エドアルドの口調は強い。一体彼は何を話すつもりなのだろう。思いながら、ルクレチアは母と彼とを交互に見た。困ったように、薄く母は笑っている。そして、
「ルクレチア、向こうに行っていてくれる？」
「叔母上っ……」
「……解りました、私は、自分のお部屋にいます」
激昂しかける彼を余所に、ルクレチアは言った。エドアルドの、怒りと、どこか頼りなげなものが混じった視線がこちらを向く。ルクレチアは困ったように笑うと、
「何かあったらすぐに呼んでね、兄さま」
そう言って自ら部屋を出る。ルクレチアを無言で見送って、エドアルドはその眉をひどく顰めた。安堵の息を漏らしたのはエリザベッタだ。耳にして、エドアルドは思わず、彼女を睨んだ。
「まあ……怖い顔ね、エドアルド」
普段と変わらない、柔らかく、どこか幼い声が聞こえる。エドアルドは嘆息して、その視線を窓の外へと投げた。この人が一筋縄では行かないことは、うすうす解っていたことだ。見た目や態度とは裏腹に、彼女の中には鋭い何かが潜んでいる。それは策略なのか、それとも、それがこの人の本性なのか。思いながら、エドアルドは意を決して言葉を紡ぐ。
「父と、グラン・グラローニにいたそうですね」
「ええ……本当は、一晩で戻るつもりだったのだけど……」
「何の話を？」
言い訳など聞く気はなかった。エリザベッタは困ったように笑って、
「それは、もう解っているんじゃなくて？エドアルド」
「ルゥをまた、ロミッツィにやる気ですか。今度は貴方ではなくて、あの子を……」
「そのお話なら、お断りしたわ」
その言葉に、思わずエドアルドは振り返る。エリサベッタは柔らかに笑ったまま、驚く彼に言った。
「私はあの子の母親ですもの。それに私も、意に沿わない相手と二度も結婚したのよ。こんなことを言いたくはないけれど……苦しくなかったと言えば、嘘になるわ。だから、あの子が貴方を好きだと言うなら……せめて貴方が結婚するま

では、自由でいさせてあげたかったの」
「俺が、ですか」
意外な言葉が聞こえて、思わずエドアルドが聞き返す。エリザベッタはそのまま、
「ええ。いずれは貴方も、しかるべき相手を妻に娶るでしょう。でもそれまでの間、あの子が貴方に恋をするだけなら、構わないと思って」
にこやかに、彼女は笑っている。僅かに翳りも見えるが、それは、いずれはその恋も終わりが来るのだと、そう思っているからか。そんなことを思いながら、エドアルドは息をつく。この人と、こんな風に、幾度も気持ちを切り替えて話す日が来ようとは、思わなかった。何気に胸の中で、エドアルドは呟く。エリザベッタの表情は、あまり変わらない。穏やかで、それでいてどことなく寂しげに見える笑みのままだ。息をついて、エドアルドは真直ぐに彼女を見る。そして、
「ロッシの銀行の頭取に、十九になるお嬢さんがいるそうです。聞かされたのは今朝ですが」
「そう……それで、貴方はそのお話を？」
「その時、父に言われました。ルクレチアを、どう思っているのかと」
挑むように、エドアルドは言葉を紡ぐ。エリザベッタはその目をしばたたかせて、それから、困ったように声を立てて笑った。
「どう思っているのか、ね……そんなことを言われても、困るでしょうに」
「何も困りませんよ……驚きはしましたが」
エドアルドの言葉に、彼女の表情が強張る。そうだ、自分は誰の思い通りにも、ならない。エドアルドは思って、僅かにその口許を歪めた。エリザベッタの瞳が大きく見開かれる。そして、
「それは……どういう意味なのかしら、エドアルド」
「俺は、彼女を愛しています。他の女性と結婚する事なんて、考えられない」
言葉は、淀みなく紡がれる。エリザベッタの顔に驚きが表れる。が、すぐにも、その表情は緩んだ。くすくすと彼女は笑い、思わず、エドアルドは憤慨する。
「何がおかしいんです……俺は……」
「あら、おかしいわ。貴方とあの子は七つも年が離れているのだし、ルゥはまだ子供よ？貴方の様な人が……」
「だったら、何だと言うんですか」
「エドアルド、貴方は本当にルクレチアを、一人の女性として愛しているの？単に、ボロージアの家に逆らおうという為に、利用しているのじゃ……」
「俺は……あの人とは違う！ルゥをそんなことに利用する気なんて、ありません」
感情に揺さぶられて、エドアルドの声が大きくなる。エリザベッタは驚き、一瞬その眼を見開く。が、すぐにも元の、穏やかな表情に戻る。眉を吊り上げて、エドアルドは更に言葉を続けた。
「貴方がたから見れば、確かに俺は愚かでしょう。でも一つだけ言える。俺はあの子を、自分のために利用しようなんて思っていない。仮に、女性として愛していなくても、家のためにあの子を犠牲にするような真似はしない。俺はあの人とは違う。自分の子供だけでなく、妹である貴女や、姪であるルクレチアまで、たかがボロージアの為に……」
「たかがボロージア……貴方のお父さまも、昔はそんな風に言っていたわ」
荒ぶるエドアルドの言葉を遮るように、唐突にエリザベッタが言った。不意打ちの声に驚き、エドアルドは黙り込む。エリザベッタはその目を細めて、何か懐かしいものでも眺めるように、その視線を窓の外へと投げた。
「私のお兄さまも……昔は、そう言っていた。私や、私達とは母親の違うあの人を、そんな風には利用しないと。それで貴女のお祖父さまと、どれだけ言い争いになったことか」
「……父が？」
エドアルドはその言葉に驚いて、思わず問い返す。彼女はそっと笑って、そして今一度エドアルドを見た。笑ってはいない。ただ、哀しそうな顔をしている。
「エドアルド、私には、難しいことは解らないわ。でもあの人は……モントリーヴォは、何も悪くないの。悪いのは私。私のためにあの人は……これからも、背負わなくてもいい苦しみを、ずっと背負い続けるのよ」
「……どういう意味です？」
その男に、彼女はどれだけの目に合わされてきたのか、知れない。だと言うのに彼女はまだ、彼を庇おうというのか。哀しそうに、エリザベッタは笑う。そして、
「総ては私の罪……私さえいなければ……そうね、貴方ももっと、安寧に暮らしていけたでしょうね」
「どういう、意味ですか……叔母上……」
言葉の意味が解らない。迷いながら、エドアルドが尋ねる。エリザベッタはまた少し笑って、それから話し始める。
「私達のお母さまという人は、私を産んですぐに亡くなったの。だから私は、母親を知らないわ。お兄さまはその頃七歳。お父さまは、母と知り合う前からずっと、別の女の人を余所に囲っていた。その人、昔はお屋敷のメイドだったそうよ。お父さまが外で作った子供は、その人の間に一人だけ。私にとってはお姉さまで、モントリーヴォにとっては妹になるのかしら」

「……その人が、何だと……」
「フィオフィレーナ。アデレードの、母親よ」
淡々と紡がれたその言葉に、エドアルドは息を呑む。それはいつか、姉があの老女中に詰め寄っていた時に言っていたことだ。自分の母親は、祖父が外に作った女に、産ませた子ではないのか、と。エリザベッタの表情は変わらない。そのまま、言葉は続いた。
「お父さまは、彼女を自分の娘として恥ずかしくないようにと、大学まで通わせた。それが仇になったのね。彼女は大学でモントリーヴォと知り合って……時々、お屋敷にも遊びに来るようになったわ」
「……父は、それを知って……」
「知っていたから連れてきたのよ。血の繋がった妹だから。そしてあろうことか、愛し合うようになってしまった。最初は、私の話し相手に、そういうつもりだったの。だって彼女は……」
「エレナの、姪だったからですか」
喘ぐような声でエドアルドが言う。エリザベッタはそれに一瞬言葉を失うが、すぐにも元に戻って、
「ええ……知っていたの？」
「……姉が、調べているようで……もし本当にそうなら、父も祖父も、許さないと……」
途切れがちに、エドアルドが答える。その言葉にエリザベッタは、
「そう……でも、それも総て、私のせいよ。私がもっと丈夫な体だったら……わざわざお兄さまが、彼女を連れてくることもなかったのだし」
哀しげに、それでも彼女は笑っている。エドアルドは何も言えず、そして目さえそらせず、そんな彼女をただじっと見ていた。困ったように少しだけ笑みをこぼして、エリザベッタは続けた。
「子供の頃の私は、本当に病弱で……殆ど家の外にも出してもらえないくらいだった。お母さまも早くに死んでしまって、お父さまも、家にいてもあまり一緒にいてはくれなかったから……外の世界と私を、唯一繋いでいたのが……いいえ、私にとってはお兄さまが、世界の総てだった。あの人がいなければ、生きている意味も、理由もなかった。フィオフィレーナを連れてきた時も、最初はとても哀しかったわ。私は捨てられてしまうんじゃないかって、本気で思って、何日も泣いたもの」
くすくすと、昔を懐かしみながら、エリザベッタは笑う。エドアルドは、咽喉が渇ききるような感覚に、小さく喘ぐ。今語られている事は、一体何なのか。彼女が言う、彼女の罪とは何なのか。姉の出自と、姉の母親の出自と、自分達のことに、一体どんな関係があるのか。思いながらも、何も言葉は浮かばない。ただ今は彼女の語る事を、聞いていなければならない。逃げることは出来ない。それだけは解っていた。逃れられない。しかし、何からだろう。思いながらエドアルドは、眉をしかめる。エリザベッタは少女のように笑ってから、ふと哀しげな目になり、そしてまた、話し始めた。
「本当に小さな頃……お屋敷のお庭で、毒の実を食べてしまったことがあったわ。ベラドンナって、貴方は知っていて？」
「……ルゥに、教えてもらいました。目を大きく見せるための、薬だったとか……」
突然振られた話題に、何気なくエドアルドは返す。そう、と短くそれに返して、彼女はまた、語り始める。
「子供だったから、それが果物に思えて。お兄さまと一緒に食べてしまったの。昔の貴族の家では、良く作られていたのですって。今は屋敷にはないようだけど……食べると神経障害が出て、酷いと死んでしまうそうよ」
そう言ってくすくすと、彼女はまた笑う。そして、
「あの時に、私は死んでしまったら良かったのよ……そうしたら、こんなことにはならなかったのに」
「……叔母上」
「この手も、本当はそのために切ったの。でも、アデレードに言われたわ。手首を切ったくらいでは、人は死なないのだって」
その言葉に、エドアルドは息を詰める。左手首に巻かれた包帯を眺めて、彼女はもう笑ってはいなかった。哀しくその目を閃かせて、彼女はどこか淡々と、離し続ける。
「お兄さまは、最初はフィオフィレーナに、本気ではなかったの……お父さまに逆らう為に、ただ利用しようとしていただけ。でも彼女は本当に、お兄さまを愛していて……だからアデレードを身篭った時、グラローニを出て行ったの。お兄さまはそれから、彼女への気持ちに気がついて……いいえ、あれは私がそう言ったからかしら……同じ妹なのだから、酷いことをしないで、って……他の人を妻にするくらいなら、彼女と結婚して、って……」
手首を見詰めるままのその瞳から、涙が溢れて零れる。肩を震わせて、彼女は言った。
「もし出来ないのなら……私がいなくなるから、あの人を妹として、お屋敷に迎えて、って……だって彼女は私のお姉さまだもの……同じ様に、愛せるはずだからって……」
「同じ様に……愛せる……」
エドアルドはその言葉を繰り返す。そして、自分の体が震え出すのを感じていた。その人が語っている事は、一体何だろう。ぼんやりする頭で思うと同時に、体の奥から、重く熱い衝撃が沸き起こるのが解った。驚いている、などという簡単な言葉では言い表せない衝撃が、そこにあった。飲み込まれて、打ちのめされる。けれど、何に。思いながら、その

答えはもう解っている、そんな気がして、エドアルドは掠れた声で、やっと言葉を紡いだ。
「エレナが……僕とルクレチアを見て、兄妹で、何をしているのか、と……俺が、父に見えたんでしょうか……」
エリザベッタがエドアルドを見る。口元が微かに笑っている。
「そうね……貴方は、あの人に良く似ているわ。髪の色も、目つきも……見間違えても、おかしくはないわね」
「……グラン・グラローニで……貴女は父と、一体、何を……」
答えなど、聞くべきではないのだろうか。問いかけながら、エドアルドはそれを考えていた。エリザベッタは涙に濡れたままで、小さく笑う。
「叔母上……」
「エレナは……私達を、ずっと見てきたから……不安で仕方がないのよ。私達だけでなくて、貴方達まで、過ちを犯さないかと」
「……ルクレチアは、従妹です。確かに、近い血縁です……けど……」
「そうね……貴方とあの子は、従兄妹同士だものね」
何者かにそれを言い聞かせるように、確かめるように、エリザベッタが言う。エドアルドは青ざめて、思わずそれを口にした。
「……まさか、あの子は……」
「私が、もっとまともな人間だったなら、どんなにかお兄さまも、救われたかもしれない。いいえ……これは半分、呪いの様なものね。ボロージアの人間は……近い血縁にある相手しか、愛せないのかもしれない……」
うっとりとした目で、どこを見るでもなしに、彼女は言った。その目を閉じて、小さく呟かれた声音は、到底家族の誰かを呼ぶものではなかった。
「モントリーヴォ……私の……私だけの、お兄さま……」
「……貴女は、一体何を考えているんです。あの人は貴女の実の兄でしょう。それも、家のために二度も、貴女に愛のない結婚をさせた様なっ……」
「そう、私はあの人のためになら、どんな事でも耐えてきた……だからやっと帰って来られたのよ……あの人の側に。もう二度と、私はあの人から、離れなくても良くなったの……私の、私だけの……愛おしい人……」
驚愕と、言い知れぬ怒りのあまり、エドアルドが声を上げる。それを全く意に介することもなく、彼女は恍惚に染まった声で言葉を紡いだ。
「もうどこへも行かない……例え神が、私達を引き裂こうとしても……私はあの人の側にいる……もう、どこにも行きたくない……」
閉じたその瞳に、涙が浮かぶ。目の前の彼女の様子も、その口から紡がれる言葉も、その名を呼ぶその声色も、何もかもが信じられない。吐き気さえ覚えて、エドアルドは思わず口許に手をやった。
「それでも……私の罪は余りにも深いわ……こんなにも愛しているのに……誰にも、許されない……」
音もなく、彼女の頬を涙が伝い落ちる。その場にいることに耐えられず、エドアルドは無言で踵を返し、逃げるように歩き出す。
世界が、大きく揺らいでいる様だった。今まで信じてきたものの総てが、音を立てて崩れていく様な、それを目の前にして、立ち竦んでいる事しか出来ない様な、そんな気がして、何故か彼は笑った。衝撃の余り、だろうか。頭がぼんやりする。何も考えられなくなって、視界までもが暗くなっていく気がする。目の前が真っ暗に、などと言うが、今感じているこの感覚が、それか。思って今一度、彼は笑った。何が起きているのか、何が起ころうとしているのか、自分は彼女に何を聞いて、何を知ったのか。何もかもが混沌として、彼に濁流の様に襲い掛かる。
このまま、何もかも忘れられたらいいのに。今まで生きてきた間の、総ての記憶を、今間近に感じている、冷たい闇の中に、葬ってしまえたら。願うように思いながら、エドアルドはよろよろと歩いた。足取りも覚束ない。踏んでいる床の感触も、余りにも頼りなげに思える。自分のいる世界とは、こんなにも不安定で、脆いものだったのか。思って、彼は小さく喘ぐ。そして、
「……ルクレチア……助けてくれ……」
掠れた声で、彼はそう呟いていた。体中の血が、どこかに流れ去っていくような感覚が起こる。痺れるように頭が痛い。手足の感覚が、消える。
「ルクレチア……」
「兄さま……兄さま！」
自分を呼ぶその声が聞こえて、彼は笑った。そして、記憶が途切れた。

IX

　眠っていたのだろうか。思って、エドアルドが目を開けると、見えたのは不安げな、ルクレチアの顔だった。頭が痛い。思いながら、エドアルドが体を起こそうとする。
　「兄さま、大丈夫？」
　「ルゥ……俺は、何を……」
　「母さまのお部屋から、出てきたと思ったら、急に倒れて……」
　起き上がると同時に、抱きしめられる。何が起こっているのか把握できないままに、自分を抱いたルクレチアが泣き出して、ぼんやりしたままでエドアルドは言った。
　「ルゥ……どうしたんだい？泣いたりして……」
　「だって、兄さまが、急に倒れたりするから……気がついて、良かった……」
　すんすんと、すぐ近くで彼女が鼻をすするその音が聞こえる。思わず笑って、エドアルドは抱きつく彼女の髪を、そっと撫でた。
　「有り難う、ルゥ……心配させて、ごめんよ……」
　ルクレチアが、彼を抱いていた腕を緩める。顔が見えると、エドアルドはその頬に手を伸ばし、そっと触れた。瞳からこぼれた涙で、指先が濡れる。また、泣かせてしまった。もしかしたらこの子は、自分といるとずっと、こんな風に泣いているのかもしれない。何気に思って、エドアルドはその手を下ろす。ルクレチアは少し笑って、
　「兄さま、昨夜ちゃんと、眠っていないんでしょ？そんな風だから、貧血を起こしたのよ」
　「貧血……俺が？」
　「そうよ。汗びっしょりで……目の前が真っ暗にならなかった？」
　どこか得意げにルクレチア問いかける。エドアルドは我に返って、そうか、と小さく呟いた。考えてみれば、昨夜は帰りも遅かったし、眠るというほどに眠れてもいなかった。それで自分は疲れて、倒れたのか。凡そ若者らしくない事だが、その事に彼は納得していた。ルクレチアは笑いながら、
　「何か食べる？兄さま。お腹はすいていない？」
　「……特には」
　「そう。じゃ、お茶でも飲む？」
　「……うん」
　彼を労わる、と言うより、自分自身が楽しんでいる様子で、ルクレチアが問いかける。曖昧に答えて、エドアルドは楽しげなルクレチアを見て、僅かに笑った。ベッドにいる自分から、ルクレチアが離れる。見送って、姿が消えると、エドアルドはその場で嘆息した。
　倒れる寸前の事は、よく覚えていない。だがその前に聞いた総ては、彼の頭に焼き付いていた。姉の母親である女性の出自と、父と叔母との関係。思い出せばまた、眩暈を覚える。
　父、モントリーヴォは自身の父親に逆らうために、異母妹である女性を利用しようとしていた。彼女は子供を身篭って、一度はグラローニを、いや、ボロージアから去った。叔母、エリザベッタは彼女を兄の妻にと願い、その時にも、自殺しようとしたらしい。自分がいなければ、自分さえいなくなれば、と。今その手に負っている傷も、そのためにつけたのだと言っていた。手首を切るくらいでは死なないと言われた、そう言った彼女には、死の気配は感じられなかった。いや、それが余りにも近くにあるせいで、彼女はもう、それを恐れていないのだろうか。自分が死ねば、兄が苦しむ事はもうなくなる、そうも言っていた。いなくなりさえすれば、彼は自由になれる。どういう意味なのだろう。解らない、というよりも、理解する事を、頭だけではなく全身で拒んでいる。そんな気がして、エドアルドはその身を震わせた。
　彼女は言った。実の兄である男を、愛していると。それが、誰にも許されない、罪深い事だ、とも。その為に彼が苦しんでいる、とも。正気の沙汰とは思えなかった。両親を同じくする兄妹でありながら、男と女として、互いに愛し合う、などと。けれどもし、そうだとするなら、あの時の老女中の言葉も頷ける。二人は兄妹なのだ。あってはならない事だ。例えどんな理由があろうとも、犯してはならない禁忌だ。
　同時に叔母は言っていた。それは呪いの様なものだと。
　ボロージアの家の人間は、血を同じくする相手しか、愛せない。けれどそうだと言うなら、自分はまだ幸せなのだろう。ルクレチアは従妹だ。親族ではあるが法的にも、婚姻は許されている。そう、従兄妹同士であるなら。
　思って、エドアルドは一人、その場所で背筋を凍えさせる。
　叔母は、父を愛していると言った。世界の総てに等しい、彼が存在しなければ、生きる理由もない、とさえも。彼女ほど相手を愛しているのなら、体を重ねる事も望んでいるに違いない。いや、例え禁じられて、罪深い事だと諭されても、それを厭わないに違いない。
　人は余りにも欲の深い生き物だ。求めて、それが叶うと知れば、その欲は更に深く、強くなる。自分の中に住む、その余りにも大きな力に、抗う事は叶うのだろうか。心を通わせるだけではなくて、時には相手の血肉を食らいたくなるほどの、その欲望を、封じて、忘れることなど、できるのだろうか。

自分には、無理だ。思うと、エドアルドの胸が軋んだ。三年前の夏の夜にも、そして、一ヶ月ほど前のあの夜にも、自分は抗えなかった。手を伸ばして、奪えるほどの近くにいて、細い声で彼女が自分を呼んだ時に、諦められない事を悟った。止まることができずに、心のままに、彼女を愛した。叔母は、きっとこんな自分よりも、もっと激しい感情を抱えているに違いない。でなければ、得られない渇望や、自分の罪の深さゆえに、自死など選びはしまい。命をかけられるほどの思いとは、どんなものだろう。命を懸けて愛するとは、どれほどの苦しみだろう。思い、エドアルドは小さく、愛おしい女の名を呼ぶ。

「ルクレチア……」

名を呼ぶだけで、涙がこみ上げる。失うとなったら、自分はどうなるだろう。叔母の様に、死を選ぶか、彼女にそれを迫るか。それとも、忘れて、生きられるだろうか。目を閉じて、彼はもう一度、その名を呼ぶ。

「ルクレチア……」

「……なあに、兄さま」

答える声が聞こえて、彼は顔を上げた。トレイに紅茶道具を乗せて、ルクレチアがこちに向って歩いてくる。テーブルにそれを置くと、彼女は躊躇う様子も見せず、彼のいるベッドに歩み寄った。そしてそのまま、彼のすぐ側に腰を下ろす。

「ルゥ……」

「なあに、兄さま……やっぱりまだ、気分が悪い？」

エドアルドの顔を覗き込んで、ルクレチアが尋ねる。頬が緩むのを感じながら、エドアルドはその手をルクレチアに伸ばした。目の前にいるこの人を、愛している。失ったら、生きてはいけない。けれどもし失うことになったら、それでも、生きていかなければならないなら、自分はどうするのだろう。諦めて、忘れられるのか。それとも、忘れられずに、狂うのだろうか。父を愛していると言った、叔母の様に。

「……兄さま？」

いつもするように、エドアルドがその髪を撫でる。不安げに、ルクレチアはそんな彼を見ていた。手は髪を捕まえて、それを口許に運ぶ。その先に口付けして、エドアルドはまた少し笑った。

「……兄さま？」

「ルクレチア……君が、大好きだよ」

「……うん」

「失いたくないんだ……ずっと、側にいたい……」

「……私もよ、兄さま」

「でも、俺は君を、幸せには出来ないかもしれない……」

答えを聞いて、言葉を返す。ルクレチアの表情が、強張った。驚きよりも、悲しみの色の強い目で、ルクレチアがエドアルドを見る。手にしていた金色の髪を離して、エドアルドは言った。

「俺は君を、不幸にするかもしれない……それでも、俺の側にいてくれる？君を傷付けて、酷い目に合わせて……もし君が逃げたくなっても、離さないかも知れない……」

愛しい、だからこそ、幸せを祈りたい。この愛おしい人が、永劫に幸いであれと、願いたい。けれどそれよりも、自分の抱えたこの感情の方が強かったなら、どうなるのだろう。どこへもやりたくない、誰にも奪われたくない、もしそうなってしまったら、きっと正気ではいられない。そうなったなら、どうしたらいいのだろう。彼女を愛している、傷付けたくはない。なのに。

「兄さま……母さまと、何か……」

恐る恐る、ルクレチアが問いかけようとする。エドアルドは苦笑して、どこか怯えた彼女の顔を覗く。

「……何でもないよ、ルゥ」

「でも……兄さま、苦しそうだわ」

「何でもない……何でもないよ」

言いながら、エドアルドは彼女を抱き寄せる。腕の中に納まって、ルクレチアは戸惑いながらも、その胸に寄りかかる。エドアルドは深く嘆息した。そして、その眉をしかめて言った。

「ルゥ……俺が好き？」

「……うん」

「ずっと俺と、いてくれる？何があっても……例え、誰にも許されなくても……」

「……うん。私、ずっと兄さまと一緒にいる。だって兄さまのこと、大好きだもの」

「……有り難う、ルクレチア」

無邪気に答える声に、エドアルドは眉を強くしかめる。何度も何度も繰り返し、思うことはただ一つだ。けれどそれで、もし彼女を不幸にするのなら、もうこれ以上はそれを、望むことは出来ない。腕の中に確かにあるその気配を抱きながら、エドアルドは絞り出すような声で、言葉を紡いだ。

「……ロッシの銀行の頭取に、十九歳になる娘がいるって……父さんに言われた」

唐突に始まったエドアルドの言葉に、ルクレチアは目を剥いた。腕の中で顔を上げて、彼女はそこにある、苦しげな彼の顔を見る。
「……兄さま？」
「姉さんの手がけていた事業が失敗して、かなりの打撃を受けたらしい……穴を埋めるのに、二千万近くかかるだろう、って……」
腕を緩めて、エドアルドは腕の中の彼女を見下ろす。怯えた目で、ルクレチアは何も言わず、じっと彼を見上げていた。これまでに何度もしたように、エドアルドがその髪を撫でる。しながら、言葉は続いた。
「ロミッツィは……君のお母さんを追い出したけれど……それでもまだ、ボロージアとのつながりを持っていたいらしいんだ。もし出来たら、今度の事にも力を貸してくれるって」
「に……兄さま？」
「でも君が、家のために犠牲になる必要なんて、ないし……姉さんだって、そうだよ……今まで酷い目に合わされてきたんだ……こんなことで、邪魔をされたら……割に合わないよ」
腕から、ルクレチアの体が開放される。けれど今度はルクレチアが、その胸に抱きついた。そして、
「兄さま……何を言ってるの？ルゥやアデレード姉さまが、って……どういうこと？」
「俺は……君や姉さんに、そういう役目を負わせたくないんだ……家なんて、どうでもいい。でも……君を不幸には、したくない……」
いっそ殺してしまいたい。いや、この場で、彼女の手によって、殺されてしまいたい。裏切り者と罵られて、嫌われて、憎まれて、憎しみのあまりに、この胸を引き裂いて欲しい。一緒にいられないなら、生きている理由もない。思ってエドアルドはほんの少しだけ笑った。自分も、叔母と同じだ。もしかしたら父も、こんな風に思っているのかもしれない。失えば、生きる理由も無くなるほどに、愛している。命と等価値、いや、それ以上だ。
「いや……そんなのいや！だって今、兄さま、言ってくれたじゃない！ルゥとずっと一緒にいたいって。大好きだって、愛してるって。私を、どこにもやらないって……あの時にも、何度も、言ってくれたじゃない……」
エドアルドにしがみ付いて、ルクレチアが叫ぶように言う。ぼんやりとした顔で聞きながら、エドアルドはその胸で震える彼女を、ただ感じていた。
「チェーザレ……私を、どこへもやらないで……離れるって言うなら、今ここで、私を殺して……」
言葉が、胸に突き刺さる。この子も、そんなことを考えるようになったのか。それとも、ずっと前からこんなにも、強く激しく、自分を思っていてくれたのか。思いながら、エドアルドはその目を閉じる。吐き出す吐息が重い。目頭が熱くなる。泣きたくなる様な胸の痛みが、なのにどこか、心地好く感じる。彼女を愛している。きっと忘れられない。失っては生きていけない。それでも、不幸には出来ない。
「ルクレチア……」
「お願い……私の側にいて……他の誰にも、触らないで……貴方の他には何にもいらない……貴方がいないこと以上に、辛いことなんて在り得ない……私を、離さないで……もし離れるなら……今ここで、殺して……」
細く、それでも力強い、懇願の声がする。それをどこか遠くに聞きながら、エドアルドはただぼんやりと、そこに座っていた。胸が、ルクレチアの涙で暖かく濡れる。泣かせている理由は解っていた。けれど、泣いてくれることが、嬉しい。どうしてだろう。どうしてこんな風に、この子のことを思うのだろう。手に入らないと解っていたはずなのに、どうして自分は彼女を得たいと、願ってしまったのだろう。それが不幸の始まりなのだと、知っていたはずなのに。
「チェーザレ……お願い、私を今ここで……」
「……酷いな、君は……俺にそんなこと、出来ないって、解ってるくせに……」
「だったら、ずっと私と一緒にいて。誰のところにも行かないで……他の誰にも、触らないで……」
ルクレチアの肩が震えているのが見る。力の入らない腕で、エドアルドは彼女をそっと抱きしめる。
どうしたら、今ここで泣いている彼女を、泣き止ませられるだろう。どうしたら、今抱いている愛しい人を、不幸にしなくてすむのだろう。そんなことばかりが頭を巡る。けれど答えは見つからない。
もうどこにも、行きようがないのかもしれない。逃れられない袋小路に迷い込んで、出来る事は、世界の終わりを待つ、それだけなのかもしれない。離さないで、と彼女は願った。どこにも行かないで、自分以外の誰にも触れないで、と。出来ることなら、彼女の望みの総てを叶えたい。天に輝く星を取って来いと言うなら、空さえ翔けてみせよう。そう思いはするものの、自分は余りに無力だ。ここでこうして、泣きじゃくる彼女を受け止める、それだけしかできない。
「ルクレチア……」
その名を何度も呼ぶ。繰り返し、呪文の様に。時に愛おしく、時に冷たく、時に狂おしく。そしてその度に、胸に締め付けられるような苦しさを感じる。愛しているとは、そういうことか。喜びよりも、痛みや哀しみの方が、余りにも大きすぎる。一度手に入れたなら、その瞬間から失うことに怯え始める。失う痛みを恐れて、身動き一つ取れなくなってしまう。だから自分は、彼女を、求めるべきではなかったのだ。こうやって、崩壊が始まる事を知っていたのだから。何もかもが壊れてしまう。そして、何もかもを、失ってしまう。それは愛すればこそ、愛故に、だ。
「……ルクレチア」

名を呼んで、エドアルドはその腕を解いた。怯えた目で、ルクレチアが間近にある、彼の顔を見上げる。エドアルドは顔を背けて、小さく笑った。そして、笑いながら言葉を紡いだ。
「ごめんよ、ルゥ……それでも俺は、君をこれ以上、不幸にしたくないんだ」
「……チェーザレ……」
言葉の意味するところを、ルクレチアは感じていた。エドアルドは、自分を見ないまま笑っている。何がおかしいのだろう。この人は、何を笑っているのだろう。思いながら、その答えも知っている気がして、ルクレチアは眉をしかめる。
この人が、ずっと大好きだった。今も勿論、きっとこれからも、こんなに愛しく思える人は現れないだろう。その人に愛していると言われて、求められて、側にいられて、どんなに嬉しかった事だろう。愛し合って、体を重ねて、朝を迎えることが恥ずかしくもあったけれど、それでも、その喜びを分かち合えて、どれほど幸せだっただろう。
それなのにこの人は、自分を傷付けると言って、今、自分の側から離れようとしている。ついさっき、離さないと言ってくれた声が、その口が、今度は別れを告げようとしている。今までの、総てを忘れろ、と。そんなことが出来るはずもないのに。だってこんなにも、大好きなのに。思って、ルクレチアは目を伏せる。涙は止め処なく溢れて、哀しみに肩が震える。
「……殺して」
ルクレチアの口から、そんな言葉が漏れた。
「今すぐ、ここで……死んでしまいたい……」
ルクレチアが顔を上げる。目があって、エドアルドは息を飲む。
「ルゥ……」
「貴方を失うくらいなら……生きてはいけない……今ここで、殺して……」
涙に濡れる目は、真直ぐ彼を見詰めていた。哀しげで、だというのに力強い視線を向けられて、エドアルドは言葉を失う。
「だってルゥには……もう生きていく、意味もないもの……兄さまがいてくれなきゃ、これから、生きていたって仕方ないもの……だから今すぐ、ここで……私を抱いて、一緒に死んで、チェーザレ……」
ルクレチアが、再び彼の胸に身を投げる。取りすがるように抱きつかれて、エドアルドは動けない。その声は、今までに聞いたことがないほどに、熱に浮かされたように、どこかうっとりとしていた。ぞくぞくするものが、背中を駆け上がる。眩暈に似た感覚に、彼はその息が乱れるのを感じた。
「……ルクレチア」
心の奥底から、熱いうねりのようなものがせり上がってくる。それは体を強く揺さぶった。彼女を愛している。叶うことなら永遠に、側にいたい。そして願う事の総てを、叶えてやりたい。もしかしたら今なら、自分はそれを叶えられるのかもしれない。思うと同時に、エドアルドの胸が強くきしんだ。心臓がどくどくと高鳴る。そうだ、もう死んでしまいたいと、自分の手にかかって殺されたいと、この子が願うなら、それを叶えてやればいい。自分もそれを思わなかったわけではない。ならば。
「……一緒に、死んでくれるかい？ルクレチア……」
囁く声が、甘い。それは口付けをねだる時と変わらない気がして、エドアルドはまた微かに笑った。ルクレチアが目を上げる。一瞬驚きを映した瞳は、けれどすぐに、満足げな光を浮かべた。うっとりとした声で、ルクレチアが返す。
「……いいわ。兄さまがそう言ってくれるなら……抱かれるのと同じくらいに、嬉しい」
目の前にあるのは、笑う女の顔だった。愛していると囁いた後に、満足げに、嬉しいと答える時と同じ、穏やかで満ち足りた表情だ。手をそっと伸ばして、その額に触れる。ルクレチアはくすくすと笑って、そのまま、目を閉じた。
「愛してるわ、チェーザレ……だから今、ここで殺して……」
何も言わずに、エドアルドはその顔を両手で包む。口付けの雨をその顔に降らせて、それから彼も、同じ様に呟いた。
「愛してる、ルクレチア……愛してるよ……」

ぼんやりと、エドアルドはそこに座っていた。日はすでに西の空に落ちている。振り返ると、年若いメイドが不安げな目でこちらを見ていた。室内は明るく照らされている。窓の外に見えるのは、夕闇に包まれた広い庭だった。どうして今自分は、こんな所にいるのだろう。ぐったりと疲れた体で、それでも横になる事も叶わず、彼は自室で、何をするでもなく、ただ椅子に腰掛けていた。テーブルの上には食べるものと紅茶道具が置かれたまま、放置されていた。手はつけられていない。何かを口にできるような状態ではなかった。咽喉が渇いた気もするが、ならばいっそ、乾ききってしまえばいいとさえ、思える。
叔母のアパルトメントで貧血を起こして倒れ、ルクレチアに介抱されていた。それは覚えている。後のことは、本当に自分の記憶なのかどうかも、解らない。何かしばらく話をして、その後、彼はその胸に体を預けていた彼女の首に手をかけた。差し出されたのだ、締めるように、と。いや、動脈を切った方が確実だったか。しかしあの時、近くに刃物が見当たらなかった。だから締めたのだ。彼女は涙の浮かぶ瞳で、それでも笑っていた。まるで口付けを待つように。謝ったよ

うな気もするし、そうではなくて、幾度も繰り返した愛の言葉を、囁いた気もする。
　その手の中で彼女の顔が、苦しみながら色を変えるのを見ていた。その体がぐったりと、力を失った時、その手を離して、何かを叫んだ。何と言ったのかは覚えていない。いや、言葉になど、ならなかったのかもしれない。それであの家のメイドが驚いて駆けて込んできたのだ。
　それから、外で待っていたはずの運転手がすぐに駆けつけた。メイド達は混乱しながらも救急車を手配し、自分は、その様子を見届ける事も出来ずに、アパルトメントから引きずり出され、自宅に連れ戻された。だからあの子があの後、どうなったのかを知らない。死んでしまっただろうか。上手く、殺せたのだろうか。それとも、死ぬよりも酷い事になって、どこかの病院のベッドの中にいるだろうか。思うと、胸がぎりぎりと痛んだ。
　殺して欲しいと言われて、それを叶えた瞬間に、まるで自分の命さえ奪われた気がした。当然だろう。彼女は自分にとって、命よりも大切な存在だった。どういう成り行きでこんなことになったのか、今となっては思い出せない。けれどさほど、嘆く事でもないのかもしれない。自分もすぐ、後を追うのだから。今はこうして監視をつけられているが、すぐにもその隙を突いて、この屋敷のどこかで死んでしまおう。彼女のいないこの世界になど、存在する理由はない。彼女をこの手で殺めて、生きていけるほど強くもない。他の誰にも触れないで、いっそ殺して。そう言った彼女の声が、今も耳の奥で谺している。だから殺した。だから、彼女の望みを叶えるためにも、死んでしまおう。思いながら、エドアルドは息をつく。そしてふと、思う。あの子はどんなに苦しかっただろう。どんなに辛かっただろう。自分は何と罪深いのだろう。ただ、愛し合いたかっただけなのに。共に生きたいと、そう思っただけなのに。思うと無意識に、眉がきつく歪められた。
　本当は、手に掛けたくなどなかった。生涯、彼女だけを愛して、死ぬまで側にいたかった。近くに置いて、幸せにしたかった。その笑顔も泣き顔も、総てを手に入れて、ずっと見詰めていたかった。何故こんなことになってしまったのだろう。一体自分は、どこで間違ってしまったのだろう。いや、最初から何もかもが、間違っていたのかもしれない。彼女を愛してしまった、その時から。
　「ルゥ……ルクレチア……」
　小さく、囁くようにエドアルドはその名を呼んだ。もうこの手には二度と戻らない、愛しい人。こんなに愛しているのに、どうして自分は、彼女を守れなかったのだろう。こんなにも愛しいのに、何故殺すことが出来たのだろう。幾度も繰り返し思い続けていたことを、また繰り返し彼は思った。そしてまた、自分に言い聞かせる。すぐにも彼女の後を追うのだから、悔やむ事も哀しむ事もない、と。
　扉を隔てた向こうから、室内に僅かな物音が聞こえる。目を上げると、メイドが慌てた様子でそちらに歩み寄った。僅かに開かれたその扉の向こうから、今度ははっきりと、声が聞こえる。
　「エドに会わせてちょうだい。大丈夫よ、私なら」
　生気に満ちた、同時に、苛立ちを纏う声は姉、アデレードのものだった。扉の向こうには中年のメイドがいるらしい。少し低い女の声が、それを制止しようとしている。
　「姉さんを、部屋に入れて」
　座ったままで、エドアルドはそちらに声を投げる。彼についていた若いメイドは困惑しながらも、扉の外にその旨を告げる。その後、二、三度のやり取りを経て、漸く扉は開かれた。足取り強く、普段より少々力強い様子で、アデレードが室内に足を踏み入れる。エドアルドは何故か笑って、そんな彼女を見遣った。
　「やぁ、姉さん……ごきげんよう」
　「……酷い顔をしているわね、エドアルド」
　アデレードは彼の前にやってくると、嘆息しながら言った。力ない笑顔のまま、エドアルドはそんな彼女を見上げる。
　「お願い、二人にして」
　背後で狼狽する若いメイドに、顔も向けずにアデレードが言う。メイドはうろたえて、でも、と反論しかける。アデレードは苛立たしげに、赤茶色の短い髪を掻き毟り、
　「私が見ているから。お願い、二人にして」
　強い口調で、再びそう言い放つ。メイドは数秒、迷っているのか黙り込み、それから一礼すると、足早に、けれど静かに部屋を出て行った。力ないままの表情で、エドアルドはそれを見送る。二度目の嘆息と共に、アデレードは言った。
　「ルゥは……命に別状はないそうよ。ただ物凄いショックで、しばらくは入院した方がいいだろう、って」
　「……そう」
　殺せなかったのか。言葉の直後、エドアルドは思いながら、深く息を吐き出した。アデレードは眉をひどくしかめ、俯いた弟に向って言った。
　「エドアルド、お前は一体何をやらかしたのか、解っているの？」
　「……姉さんも、聞いたんだろ？その通りの事をしたんだよ、きっと」
　「……どうして、ルクレチアにあんな事を？」
　問いかけの答えは、余りにもあいまいだった。アデレードは質問、というよりも詰問だろう。繰り返し尋ねると、エ

ドアルドはかすかに笑った。
「エドアルド？」
「……あの時、姉さんに言われたことを、忘れた訳じゃなかったのに……どうして俺は、目に見えないものなんかに、振り回されたんだろう……」
独り言のようなその言葉に、アデレードは何も言わない。笑いながら、エドアルドは言葉を紡いだ。
「目に見えないのものなのに……俺には、他には何も確かなものがない、そんな気がした……こんなに確かに、あの子を愛しているんだって……そう思ってた」
「それでルクレチアを、どうして……」
「あの子を不幸にしたくなかった、だから……これで最後にしようと思った」
エドアルドが目を上げる。アデレードはその目を見返して、続く言葉を待った。
「今度の件の穴埋めに、父さんは俺と、ロッシの銀行の頭取の娘との、結婚話を勧めようとしてる。でなければルゥを、ロミッツィに行かせる気だ」
「……そうみたいね。でも、それは……」
「俺はね、姉さん。姉さんやあの子や叔母上を……あの人のために、これ以上振り回したくないんだ」
視線は、逸らされない。アデレードは息を飲んだ。力の抜け切った、抜け殻のようだというのに、エドアルドには強い何かが宿っているようだった。ふと、エドアルドが笑う。アデレードはその表情に、訝しげに眉を動かす。
「エド？」
「あの子は……そんなことになるくらいなら、ここで殺して欲しいって、そう言ったんだ……俺と離れては、生きていけないから……俺もそうだよ。あの子を失ったら、生きていけない……」
「……だから、ルクレチアに手をかけたの？自分も、死ぬ気で？」
彼がここに、監視つきで閉じ込められている理由は明らかだった。叔母のアパルトメントで、彼は自分も死のうとして暴れたらしい。使用人達に詰め寄って吐かせたのだから、間違いはないだろう。何か揉め事があってルクレチアの首を絞めた。見つかって暴れたので、無理やり、運転手が彼を屋敷に連れ戻した。部屋に閉じ込めておくのは簡単だが、何をするか解らない。だから部屋の中と外に一人ずつ、見張りをつけている。指示を出したのは、父親らしい。その父親は今、屋敷にはいない。ルクレチアが運ばれた、いつもの病院だ。
「エドアルド、私は言わなかったかしら？ルクレチアを傷つけたら、許さない、って」
普段どおりに高飛車に、アデレードの言葉が発せられる。エドアルドは苦笑して、
「そうだったね……覚えているよ」
「だったら、どうして……」
「それを言うなら、俺があの子を好きになるより前に言わなきゃ、意味がないよ、姉さん」
その返答に、アデレードは押し黙る。エドアルドは笑って、彼女から目を逸らした。
「叔母上に言われたよ……ボロージアの人間は、血縁しか愛せないのかもしれない、って……姉さんのお母さんのことも、言ってた」
「私の……母さんのこと？」
「前にエレナに詰め寄ってたじゃないか。自分の母親は、死んだ祖父さんの隠し子じゃないのか、って」
言葉に、アデレードの表情が凍りつく。ちらりとそれを見て、エドアルドは肩をすくめた。
「エド……お前……」
「叔母上は……自分の兄貴を、世界そのものだって言ってたよ。失ったら、生きていけない、って。でも姉さんのお母さんの事は、大切に思ってたみたいだ。父さんに、他の女と一緒になるくらいなら、その人を選ぶようにって言ったそうだから……同じ妹なんだから、同じ様に、愛せる、って……」
アデレードの顔が青くなる。エドアルドは力なく、小さな声で笑った。そしてしながら、その額に手を当てて、更に言葉を続ける。
「姉さんは、俺を酷いと思う？今日叔母上に聞いたことを、姉さんが知らないことまで、洗いざらい全部話して……これじゃまるで八つ当たりだ。けど、黙っている事なんてできないよ……苦しいんだ。吐き出さないと……変わりに、血でも吐きそうだ……」
「……エドアルド……」
エドアルドの口から紡がれる言葉に、アデレードが息を飲む。構わず、彼は続けた。
「叔母上は……多分父さんもだ。俺とルクレチアが近くにいることを、恐れてる。自分達と同じ様にならないかって、そう思ってる……気がついた時にはとっくに手遅れになってるのに……だからかな。引き離すつもりだ」
あはは、あはは、と、奇妙に乾いた笑い声が室内に響く。アデレードは歩み寄って、すぐ近くから彼を見下ろした。眉がしかめられる。哀しげで苦しげな表情で、呟くようにアデレードは弟の名を呼んだ。
「エドアルド……」
「一つ、気がついたんだ」

エドアルドは言って、顔を上げた。笑ってもいない、怒ってもいない、静かで落ち着いた表情が見える。アデレードは黙って、続く彼の言葉を待った。
「どうしてあの子が「ルクレチア」なんだろうって……俺の二つ目の名前は、父さんがつけたんだろ？祖父さんのものを。父さんはよっぽど、祖父さんが嫌いだったんだな……」
エドアルドは、笑うのをやめた。そして、
「ルゥの名前は……何か意味があるのかな……あるとしたら、それは……」
言葉は、途切れる。けれど予測は出来た。息を詰まらせて、アデレードは慄く声で、呟く。
「……まさか、あの子は……」
「俺達は従兄妹同士だ、って、叔母上は言ってたよ……でもあの人は、多分、自分の兄貴が……」
言葉は、そこで途切れた。アデレードは驚愕の表情で、その額に脂汗を浮かべる。エドアルドはどこか冷たい目でそんな彼女を見て、それから少し笑った。
「エド……」
「俺は愚かだ……余りにも浅はかで、どうしようもないよ……解りきってた事だ。あの子をどんなに愛しても、求めても、得られないことなんて。なのに、自分の気持ちに逆らえなかった……だからこれは、報いなんだ」
「そんな……そんなことは……」
アデレードの声が、僅かに震えている。怯えているのだろうか。でも何に？思いながら、エドアルドは言葉を続ける。
「許されるなら、何でもする、どんな罰でも受ける。でも……俺達を許すものなんて、どこにもいないし、いなくても構わない……あの子が殺してくれというなら、俺は何度でもあの子を手に掛けるし、死ねと言われれば、今すぐにでも……」
「……それ以上、ばかな事を言うのはやめなさい」
その声から、震えが消える。アデレードは再び強い視線を取り戻し、エドアルドの襟首を両手で捕まえる。
「姉さん……」
「……もういいわ、エドアルド。お前の気持ちは、良く解ったから……でも、それ以上ばかな事を言うのはやめなさい。言ったでしょう？ルクレチアを傷つけたら、私が許さない、って」
「もう遅いよ……姉さん……」
エドアルドの視線が逸らされる。その襟首を締め上げるようにして、更にアデレードは言った。
「許されるなら何でもするって、今言ったでしょう？私は、あんな事をしたお前を、簡単には許さないわ。私に許されたかったら、ばかなことを考えるのはやめて、もっと物事を前向きに考えなさい。ルクレチアにしてもそうよ。許して欲しいのは、私でも他の何者でもなくて、あの子でしょう？お前が悔やんでいるのは、あの子を哀しませたこと、ただそれだけでしょう？」
掴まれた襟首ががくがくと揺さぶられる。聞きながら、エドアルドはその通りだと、胸の中で思った。
彼女を愛している。誰に許されなくとも。けれどそれでも、自分は余りにも酷く、彼女を傷付けてしまった。愛しているのに、いや、それ故に。近くにいればこの先も、きっともっと深く傷付ける。それでも、誰よりも側にいたい。手放しては生きていけない。だから自分の総てを、彼女に許して欲しい。二度と傷付けないと、確かな約束は出来ない。それでも、こうして愛している事を、許されたい。他の何者でもない、彼女に。神が例え二人を罰しても、引き裂こうとしても、愛しいと思うことすら許さなくとも、彼女にだけは許されたい。そして、愛して欲しい。名前を呼んで、側にいて欲しい。触れることを許して欲しい。抱きしめ合って、そのぬくもりを感じていたい。命が尽きるその時まで、ずっと。
「姉さん……」
我に返ったかのように、エドアルドの目に生気が戻る。アデレードは軽く笑って、彼の首元からその手を離した。
「ルクレチアに許されたいなら……生きて、その身で償いなさい。死のうだなんてばかな事は考えないで、あの子の為だけに、一生生きなさい。例え許してくれなくても……お前はそうするべきよ。それが愛しているって事でしょう？」
言葉の後、アデレードが深く呼吸する。そして何か思案するように少し黙ると、額に手を当てながら、彼から視線を逸らした。
「……しばらく、留守にするわ」
「姉さん？」
唐突な言葉に、エドアルドは目をしばたたかせる。アデレードはどこか不敵に笑って、
「今度の事は、元はと言えば私の失態よ。まさかここまで傷口が広がるとはね。お父さまは私のこの窮状を救ってくれるつもりらしいけど、正直言ってあの人にそれをされるのはごめんだわ。それでその余波が、お前やルゥにまで及ぶのもね」
額に当てた手で、アデレードは髪をかき上げる。何かするつもりなのか。思いながら、エドアルドはアデレードに尋ねる。
「姉さん……何をするつもりなんだい？」
「言っておくけど、これは私が撒いた種で、私はそれを収拾しに行くのよ。お前の我侭のせいで、私が割りを食う

訳じゃないわ」
　それは半ば、彼女が彼女自身に言い聞かせているような言葉だった。わけが解らず、エドアルドは狼狽する。そんな弟を見て、アデレードはまた笑った。
　「いい？お前は生きて、ルクレチアを幸せにするの。誰が何と言っても。この先何が起こっても、それだけを必ずやり遂げなさい」
　「……何だか、遺言みたいだな……」
　エドアルドは言いながら、僅かに笑った。アデレードはその言葉に目をしばたたかせ、それから苦笑すると、
　「あら、そんなつもりじゃないんだけど……でもそんな風に聞こえるなら、尚更、ちゃんと約束して、守ってもらわなきゃ。お前は生きて……」
　「ルゥを守る。一生あの子を愛し抜く。誓うよ」
　力強く、エドアルドが返す。アデレードはその言葉に満足げに笑うと、その身を軽く翻す。エドアルドはその背中に、どこか不安げに問いかけた。
　「姉さん……一体、何をする気？」
　「『白騎士』に会いに行って来るわ」
　問いかけに、背を向けたままでさらりとアデレードは答える。エドアルドは目を丸くさせ、
　「『白騎士』？」
　「最も、そんな呼び方をされるほど、相手は清廉潔白でもなければ、聖人君子でもないようだけど。一週間もしないうちに戻るから、いい？約束を、ちゃんと守るのよ？」
　扉に向ってアデレードは歩き出す。その手前で振り返った彼女は、どこか楽しげに笑っていた。エドアルドはその笑みに苦笑し、
　「解ったよ、姉さん。行ってらっしゃい」
　そう言って彼女を送り出した。

　高台の病院の離れは、資産家が所有するには小さめの別荘、という趣さえ持っていた。病室とは思えない贅沢な、しかし落ち着いたその部屋を中心に、幾つかの客間や、入院患者の世話をするために付き従う人間のための、控えの部屋、それとはまた別に客間までが添えられている。しかも離れは、医師や看護婦は本体の病棟からカートで移動しなければならないほどの距離すらある。元々はあまり大きくない宗教施設だったその場所を、ボロージアが買い上げて病院にしたのは先代の頃だ。その妻の療養のためだけに、その離れは作られている。以来離れに入院する事が出来るのは、その血縁関係者で、施設の利用料の他にも多額の寄付が出来るレベルの資産家に限られていた。最も、規模は地方の一総合病院だ。使う人間はボロージア以外にはいなかった。
　「……ルクレチアの容態は？」
　「今は、眠っていますわ。落ち着いたみたいよ」
　その主たる病室に隣接する客間に、二人はいた。一人は入院患者の母親で、もう一人はその母親の兄だ。不安を隠しきれない兄に、妹は柔らかに笑いかける。その表情を見て、彼は言った。
　「すまない、リザ……まさかあいつが、こんな真似を……」
　モントリーヴォが頭を垂れる。エリザベッタは困ったように笑って、彼を責めるでもなく言った。
　「お兄さま、エドが悪い訳じゃないわ。それに、あの子も命に別状はないし……そんな風に言わないで」
　「しかし、リザ……」
　「こんなとこになったのも、元はと言えば私達の罪……責められるのはむしろ、私ですもの」
　エリザベッタは室内のソファに歩み寄り、疲れたように腰を下ろす。モントリーヴォは目で追って、その場に立ち尽くしていた。
　「リザ」
　「神は私達を許さない……最初から解っていたことよ。それなのに今、私達がいるのは……元は祈りの場だったなんて」
　言葉と共に苦笑が漏れる。エリザベッタはそっと目を閉じた。ゆっくりとした足取りで、モントリーヴォが歩み寄る。
　「私が生まれなければ……お母さまも、生きていたかもしれない。お兄さまは、そう思ったことはない？」
　「……何を言い出すんだ、リザ」
　「私がいなければ……フィオフィレーナももっと安らかに生きていられたかも知れない……貴方もそうよ、モントリーヴォ」
　その目の前に立ち、モントリーヴォは彼女を見下ろす。どこかうっとりした声で、彼女はその名を呼ぶと、そっと目を開く。見上げる顔の、哀しくも厳しくも見える表情に、エリザベッタは瞳をゆがめた。
　「あの子を……産むのではなかったわ」
　「リザ」

「でなければ、こんな風に苦しめる事もなかった……貴方も、あの子も」
モントリーヴォが膝を折る。近づく顔に、彼女は笑いかける。
「それでも、貴方は私を愛してくれる？こんな風に、不幸を連れて来ることしか出来ないけれど……それでも」
「……あの時、私はお前を連れて、この家から逃げるべきだった」
真正面からその顔を見て、モントリーヴォが悔やむ様に言った。エリザベッタは笑っている。モントリーヴォの手が伸びて、その頬を捕まえた。優しく撫でる指の感触に、身をゆだねるように、エリザベッタは目を閉じる。
「お前を連れて……ボロージアを、捨てるべきだった」
「お兄さまが悔やむことではないわ……私は、貴方に留まって欲しかったもの。小さなアデレードやエドアルドのためにも……フィオナのためにも」
「……なら何故、お前はあの時……」
彼女は子供を身篭った時、ここで死のうとした。隠し持っていた毒草の実を口に含もうとして、寸でのところで看護婦に見付かり、それを止められた。それを思い出して、エリザベッタは笑う。そして、
「貴方の罪は、私の罪。私とあの子がいなくなれば……貴方の罪も、一緒に消えるわ」
「……私にその後にも、一人で生きろと？」
「だって、一緒には連れて行けないわ。大好きな、お兄さま」
喘ぐような声が聞こえて、彼女は笑った。目を開けると、頬に触れていた手はそのままに、口付けが唇に下りる。触れ合うだけの接吻の後に、モントリーヴォは彼女を抱き寄せる。胸に寄りかかると、エリザベッタは無邪気な少女のように、くすくすと笑った。そして笑いながら、
「私は、狂っているのでしょうね……でなければこんな時に、嬉しくなんてならないはずよ」
「……それなら、私とて同じだよ、エリザベッタ」
「貴方は違うわ、モントリーヴォ。貴方はただ、優しすぎるだけ」
言葉に混じるのは、歓喜の吐息だった。たった一人の娘が殺されかけたその後に、その加害者の父親であり、自分の兄である男に、体を預ける事に、喜びを感じている。正気の沙汰ではない。まともな人間なら、二度と顔も見たくないと罵って、彼をここから追い出しているだろう。でも、自分にはそんなことは出来ない。もう二度と会わない、そんな別れになるのなら、それより先にその目の前で、死んでしまいたい。思いながら、エリザベッタはまた少し笑った。腕の中で笑う妹を見下ろして、モントリーヴォはその眉をしかめる。そして、いつも繰り返し思った疑問を、心の中で繰り返す。どうしてこの女が、妹なのだろう。どうしてこんなにも愛おしいのに、そんな大きな枷があるのだろう。ただ自分は、彼女を愛したい、それだけなのに。血を同じくした妹だという事で、何も許されないとは。
「お兄さま……」
うっとりとした声で、その声が自分を呼ぶ。いつ聞いても、それは彼の総てを震わせた。もし妻に出来る女だったら、その声を聞くたびに、自分はこんなにも慄き、怯えることなどなかっただろうか。こんな風に心を震わせて、求めたりもしなかっただろうか。人は、手に入らないものほど欲しがる。支配欲は本能だ。理性でそれに抗う事は、敵わない。ましてや、目の前の女が、愛してくれと望んだなら、何者に咎められても、抗う事など出来ない。けれどそれは、愛ではないだろう。相手を愛おしく思っているから、ではない。ただ、欲しいだけだ。
「……明日にも、ルクレチアに会わせてくれないか」
低く小さな声で、モントリーヴォが言う。エリザベッタは訝しげに瞬きして、
「それは……構わないけれど……」
「あれのしたことを、私からも謝罪しなければ……それに……」
言葉がにごって、そのまま途切れた。自分から視線を逸らす彼の表情に、エリザベッタは眉を軽くしかめる。
「モントリーヴォ……」
「いい方策だと、本当に思ったんだ……あの子とエドアルドを離してしまうには。モリエーロはあの子にとっては、故郷のようなところだろうし、全くの見ず知らずの男のところよりは、親しく行き来があった、あの男の息子なら、と……こんなことになるとは、予想もしていなかったよ」
どこか苦しげにも聞こえる声に、エリザベッタは笑って見せる。そして、
「ええ……解っています。お兄さまは、あの子のためを思ってくれたのよね。私達の……あの子のために……」
離れていくのを引き止める様に、エリザベッタが彼を抱き返す。互いに支えあうようにして、二人はしばらく無言だった。くすくすと、不意にエリザベッタは笑った。
「リザ？」
「あの時……私は本当に、嬉しかった……貴方が私を抱いてくれて……あの子を授かったその時に、笑ってくれて……」
けれどその喜びの代償は、あまりに大きすぎた。二人の父親は余りの事に嘆いて、生まれてきた彼女に戒めをこめて名付けた。「ルクレチア」と。それが二人の永遠の、罪の証だとでも言うように。どこにでもある、良く在る名前は、けれど一つのことを示唆している。それに誰かが気付いても、何もおかしくはない。

「……明日をすぎたら、しばらく会いにも来られないだろう」
唐突に、モントリーヴォが口を開く。無言で、エリザベッタは彼を見遣る。
「今度の事が片付くまでは、手が離せない。幾つか、手放さなければならない事業も出てくるだろう。ロミッツィに、してやられたよ」
モントリーヴォが苦笑する。不安げな目を閃かせ、エリザベッタは視線を彼から逸らす。その髪を撫でて、モントリーヴォは優しく言った。
「大丈夫だ……お前は、私が守る。もう二度と、どこへも行かせない。ルクレチアもだ。私がこの命に代えても、必ず守ってみせる……だから、待っていてくれ」
「お兄さま……」
「死ぬというなら……私を殺してからにしてくれ、エリザベッタ……愛してくれているというなら……お前の腕の中で、死なせてくれ」
そう言って、モントリーヴォはその額に口付ける。エリザベッタの瞳に、涙が浮かぶ。くしゃりとその顔をゆがませて、彼女は笑った。
「愛してるわ、お兄さま……私の、モントリーヴォ……」
目を閉じると、大きな手がその涙を拭った。肩を震わせて、彼女は声もなく、その体を抱きしめながら泣いた。

X

　そのあまり大きくない家に、彼が訪れたのは、家主の母親が倒れた次の日のことだった。
　八十に手も届こうというのに、彼女はまだ、この辺り一の名士である、かつての雇い主の屋敷にメイド勤めを続けている。そろそろ引退したらどうか、という息子や娘、それに孫達の意見に耳を貸したことは一度たりとてなかった。が、今回ばかりは勝手が違うらしい。ストレスと過労で倒れた彼女は、正気を取り戻すと自分の孫娘に、そろそろお屋敷をお暇する時かも知れないね、と小さくぼやいた。家主もその他の家族も、それに最初驚きはしたものの、彼女ももう高齢だ。そんなことを言ってもおかしくない、そう思ったらしく、だったらこれを機会に、とその話を勧めていた。
　「ばあやももう、年でございますよ。いつ何が起こっても、何もおかしくありません」
　「珍しく殊勝なことを言うじゃないか。俺がいつだったか、そろそろ引退したら、って言った時には、まだまだそんな歳じゃない、って言ってたのに」
　昨日、自分の目の前で倒れたその老女中の言葉に、エドアルドは苦笑する。エレナはベッドの中であるにも拘らず、その態度は普段と全く変わらなかった。くつろいだ寝巻き姿を屋敷の若君に見られて、多少なりとも思うところはあったようだが、その訪問を疎んでいる様子は見られない。その家族も同様だった。まさかボロージアの若君が、わざわざメイド如きの見舞いに来ようとは、と驚いている。エドアルドは老女中の家族の対応に驚くと同時に、苦笑を禁じえない気分だった。
　「若様、学校は、どうなすったんです？」
　そんな彼に、エレナはいつも通りの、ややもすると使用人らしからぬ態度で応対していた。エドアルドはその言葉にも苦笑して、
　「俺はいいんだよ、今はばあやの方が大変なんだし」
　「いいえ、何も良くございません。ずる休みなんかなさって。仮にもボロージアの……」
　「監視つきなんだ。何をしでかすか、解らない、って」
　その言葉に、老女中は顔色を変えた。青ざめた彼女に、笑いながら彼は言った。
　「ルクレチアと、心中しようとして、失敗した」
　「若様っ……」
　「今日はエレナに、聞きたいことがあって来たんだ」
　エドアルドは笑うのをやめる。老女中は怯えの覗く目で、どこか冷たくも見える青年の目を見返す。
　「若様？」
　「答えられないなら、それでもいいよ。きっと俺も父さんも、死んだ祖父さんも……エレナとその家族に、ひどいことをしてきたんだろうし」
　室内が静まり返る。老女中は彼から視線を逸らし、その様子に、エドアルドは苦笑した。きっと彼女は何も語るまい。そしてそれは恐らく、自分の疑問に対する、肯定の答えでもあるのだろう。ボカロジアにとっても、彼女にとっても、その因縁は忌まわしいものだ。そして余りにも重く、苦い。
　「……やっぱり、やめておくよ。これ以上エレナの体がおかしくなったら、俺が沢山の人に恨まれるからね」
　溜め息混じりの、砕けた口調にエレナが顔を上げる。エドアルドは肩を竦めて、それから言った。
　「今まで、本当に有り難う。エレナには感謝してもしたりない……謝っても、きっと足りないんだろうな」
　老女中の、戸惑うような寂しげな目が、泳ぐ。エドアルドはそれに笑いかけて、しながら、言葉を続ける。
　「これ以上エレナに心配かけないよ、って言いたいけど……多分無理だ。うちにいれば、エレナはずっと、煩わされなくていいことで、悩んでなきゃならない」
　「……若様やお嬢様が、このばあやの手を煩わせなかった事なんて、今までにございましたか？」
　「それはそうだ。いつも本当に、世話になりっぱなしだね」
　普段よりも力ない、それでも強気の言葉に、エドアルドは笑う。彼女は小さく笑って、それから一つ息をついた。
　「若様も、お嬢様も……もう立派に大人になられたんです。ばあやがこれ以上、何かにつけて口出しなんかしなくとも、しっかりおやりになれますよ」
　「だといいんだけど……ねぇ、ばあや」
　「何です、若様」
　言葉に、エレナが問い返す。エドアルドはそのまま、穏やかに言った。
　「俺は、ルクレチアを愛してるんだ。あの子がいなかったら、生きていけないくらいに」
　「若様……」
　唐突な言葉に、エレナの表情が強張る。エドアルドの落ち着きは変わらない。何かを覚悟したように、静かで落ち着いた態度のまま、彼は言葉を続けた。
　「姉さんに叱られたよ。だったら、その為に生きろって。あの子を一生愛して、守って生きろ、って。自分の為じゃなくて、あの子の為に」

エレナは何も言わない。エドアルドは溜め息の後、彼女に尋ねた。
「俺とルゥは……兄妹なの？」
答えは返らない。顔を逸らして、エレナはその目を固く閉じる。構わず、エドアルドは問いを重ねた。
「あの時ばあやが止めたのは、父さんとあの人じゃなくて……俺とルクレチアなんだろ？」
エレナは黙して、無言だった。室内が再び沈黙する。エドアルドは僅かの間、答えを待つ。が、すぐにも苦笑交じりの息を吐いて、
「それでも、俺はあの子と一緒にいたいんだ。離れるなんて、考えられない……」
「……旦那様や、エリザベッタ様や、分家の方々が、何と仰るか……若様は、ご本家の跡を継がれる方なんですよ？」
喘ぐように、エレナが言葉を紡ぐ。エドアルドはかすかに笑って、
「だったら俺は、あの家を捨てる。名前も家も、分家の奴らにくれてやればいい」
「無理でございますよ……あの御家を出て、どうやってお暮らしに……」
「死ぬ覚悟だって出来たんだ、何だってできるよ」
言って、エドアルドは彼女に笑いかけた。エレナは答えに窮し、無言で笑う。エドアルドはそんな老女中を見て、その肩を竦めた。
「若様も……大人になられましたね」
「言う事だけはね。でも、大変なのはこれからだよ。この覚悟で行って、ルゥに振られたら元も子もない。尤も……許してもらえるなんて、思ってもいないけど」
「情けないことを仰いますな。若様はお亡くなりになられたお祖父さまにも、今のご当主であるお父さまにもよく似ておいでの色男ですから、お一人に振られたくらい、何と言う事もございません。もしそうなっても、きっとまた素敵な方が見付かります。大丈夫でございますよ」
叱咤するような老女中の声が聞こえた。先程の、力ない、戸惑う様子はそこには見られない。
「何だ、それじゃ俺が、本当に振られるみたいじゃないか」
その言葉に、エドアルドが笑う。エレナはしれっとした顔で、
「若様は、確かにハンサムでおいでですが、ばあやの知っている限りでは、日頃の行いも、あまり良うございませんからね。多少は神様も、罰をお当てになりますよ」
「酷いな、それは」
声を立てて、エドアルドは笑う。そして、
「でも……俺は別に、神様とやらに許されなくても構わない。ばあやにも」
「……お好きになさいませ。私の妹も姪も、思うように生きましたから。誰がそれを止められた訳でもなし……若様も、そうでしょうから」
呆れの吐息と共に、突き放すように彼女は言った。エドアルドは苦笑して、
「エレナ……ごめんよ」
エレナは無言で、どこか寂しげに笑っている。エドアルドも、それ以上は何も言わなかった。

病院とは思えないような、贅沢かつ落ち着いた調度の部屋で、ルクレチアはただぼんやりと座っていた。自分の部屋で、愛しい男に首を差し出して、締められて、意識が遠のいたところまでは覚えている。息苦しさと血の気が引いていく感覚に、笑った事さえも。けれど気が付いた時、彼女は落胆した。死ねなかった、いや、殺してもらえなかったのか。目蓋を開けたのは無意識だったが、直後彼女はそれを悟っていた。覗き込む母親の、今にも泣き出しそうな顔に驚くよりも、自分の落胆の方が余程大きかった。けれどそれを口にすることは出来なかった。意識が戻って、何事があったのかの説明をうけても、彼女には何も、ぴんとくるものがなかった。ただただ、生きていることがショックだった。その所為だろうか、声らしい声も、言葉らしい言葉も、あれから全く口に昇らない。いや、きっと出そうと思えば出せるのだろうが、それをどこかで拒んでいる自分がいるのか。それとも、何を言い出すのか解らない恐怖、とでも言うのだろうか。それも、ないことはないだろう。視界に入ってきた母親が真っ先にしたのは、泣きながら自分を抱きしめる事だった。そんな母親に、どうして死なせてくれなかったのか、などと、問い詰められる訳がない。母は、余りにも世間擦れしていない。頼りなく、時に自分よりも子供で、余りにも弱いのだから。
そう、死んでしまいたかった。あのまま目覚める事もなく、この世の何ものとも、決別したかった。それが何者かの怒りを買って、例え地獄に堕ちても構わなかった。生き続ける方が、今の自分にとっては余程つらい事だ。愛しい人と引き離されて、このまま時を過ごす、その方が。思って、ルクレチアは目を伏せた。彼の名を心の奥で呼ぶだけで、瞳に涙が溢れる。そして同時に、思いが込み上げる。その顔を見たなら、きっと自分は彼を罵るだろう。どうして殺してくれなかったのか、と。それが、彼にとっても苦渋の選択だったと、知らない訳でもないのに。責めたい訳ではない。詰って、罵りたい訳でもない。それなのに、どうしてそうせずにはいられないのだろう。恨み言を言ったところで、何かが変わるわけでもないのに。思うと、胸は苦しくなるばかりだった。
そう、彼を責めたい訳ではない。それなのに、そうしないではいられない。責めて、詰って、罵って、そうして本当は

、憎んで、忘れてしまいたい。思いながらルクレチアは一人、ベッドの中で涙を流す。咽喉からは、嗚咽の声さえ漏れてこない。まるで、哀しみのはけ口が、塞がれているようだった。もしかしたらそれは、罰なのかもしれない。彼の手を汚してまで、死にたいと思った、自分への。体を哀しみで震わせながら、ルクレチアはそんなことを思った。それでも、そうして死ねるのなら、自分はどんなに幸せだったか知れない。愛しい彼の手にかかって死ねるのなら、離れて生きるよりも、ずっと。流れる涙で枕が濡れる。見ながら、ルクレチアは思った。こんなことで、こんな風に泣いているのに、あの人にこの涙を拭いてもらえたら、どんなにいいだろう、と。

「ルクレチア」

ベッドの中、ルクレチアはその声に慌てて涙を拭った。ゆっくりとした足取りで、シーツに潜り込んだルクレチアに、エリザベッタが歩み寄る。

「起きている？」

普段と変わらない声色で呼びかけられて、そっとその顔をシーツから覗かせる。母親は柔らかに笑いかけ、その傍らの椅子に腰掛けた。

「気分はどう？何か飲む？」

横たわったままで、ルクレチアは首を横に振った。その応答に、彼女の表情が僅かに曇る。

「そう……どこか痛いところや、苦しいところはない？」

言葉と共に、母の手が額に下りてくる。ゆっくりとした手つきで、彼女がその髪を撫でた。ルクレチアは視線だけを彼女に向けて、同じ様に小さく首を横に振った。さらさらと、その金色の髪が揺れる。エリザベッタは笑って、そっとその手を収めた。

「貴方の髪の色は、私とそっくり同じね、ルゥ。私のお父さまは、お兄さまと同じように、夜の闇の色をしていたけど……貴方は私に似たのね」

どこか懐かしげに、彼女は目を細める。唐突に始まった彼女の話を、ルクレチアはベッドの中でただ聞いていた。エリザベッタは彼女に笑いかけて、それから、未だ包帯の解かれない、自分の腕を眺める。

「こんなことになるなら……私が死んでしまえば良かった」

その眉がひどく歪む。同時に紡がれた言葉に、ルクレチアは目を見張った。エリザベッタはその様子に気付かないまま、無言でその包帯を解き始める。それは、白いはずの腕に、未だ赤黒く描かれていた。鋭く引き裂いた痕に、ルクレチアが息を飲む。それは誰が見ても、不慮の事故でついたようなものではなかった。故意に、何か鋭いもので引き裂いた痕は、未だ生々しく、そして痛々しい。母さま、どうしたの、何をしたの。そう言おうにも、ルクレチアの咽喉から声は出ない。奇妙な緊張に、胸がどくどくと高鳴った。

「私は悪い母親ね……貴方を授かって、あんなに嬉しかったのに……貴方をこんな目に合わせるなんて」

言いながら、彼女はその手を下ろす。ルクレチアは脅えと戸惑いの混じった目で、そんな母親を見上げていた。彼女の表情は変わらない。普段と同じ、頼りなげでどこか幼い、そんな目で笑っている。

「ルクレチア……私を許してくれる？貴方をこんな風にしてしまったのに、それなのに……私はあの人を、忘れられない……貴方よりもずっとずっと、あの人を愛している……失ったら、生きてはいられないくらいに」

この人は一体、何を言いたいのだろう。思いながら、ルクレチアは体を起こした。

こんな風に、彼女が謝罪した事など、今まで一度たりともなかった。一体何について、彼女は自分に許せと言うのだろう。戸惑い、脅え、恐怖さえ覚えて、ルクレチアは母を見上げる。エリザベッタはそんな彼女を見下ろして、ベッドについたルクレチアの手に自分の手を重ねた。ルクレチアの唇が、母さま、と空回りする。

「貴方を産んで、悔やんだ事はないわ。貴方は私の娘だもの……母親らしい事は、何も出来なかったけれど……それでも、こんな風に不幸にしてしまうなんて……本当にごめんなさい。許してなんて、もらえないわね」

エリザベッタは言いながら、ルクレチアの頭を撫でる。そしてそのまま抱き寄せて、深い嘆息を漏らす。

「こんなに大きくなったのね……これから貴方は、もっと大人になって……素敵な女性に、育つんでしょうね……」

エリザベッタは目を伏せる。そして、小さく笑った。抱き寄せられて、訳が解らず、ルクレチアは混乱する。くすくすと笑いながら、エリザベッタは楽しげに、更に言葉を紡いだ。

「大好きよ、ルゥ……貴方は私の大切な子供……私と、あの人の……とても大切な、たった一人の娘だもの……」

言葉が途切れて、しばらく二人はそのまま動かなかった。何度も確かめるように、エリザベッタはルクレチアを抱きしめて、ルクレチアはされるまま、ただ混乱していた。母が何を言っているのか、何を言おうとしているのか、解らない。それでも、彼女が尋常でない事は解る。その腕の傷は、割れたグラスで切ったというにはあまりにも酷く、そして痛々しい。この人は、自分でその腕に傷をつけたのだろうか。でも、一体何のために、どうして。思いながら、ルクレチアは声を出そうとする。が、咽喉の奥からは、力のない呼気ばかりが出るばかりで、音を成そうとはしない。

「奥様」

開け放たれたままの、病室の扉の向こうから、若い女性の声が聞こえる。エリザベッタは抱いていたルクレチアを離し、そちらへ顔を向ける。

「お客様がおいでになっていますが……」

声は若いメイドのものだった。あらあら、と小さく言って、エリザベッタは立ち上がる。
「一体何方がいらしたの？メグ」
「それが、その……」
困惑した様子で、メイドの言葉が途切れる。エリザベッタは何度か瞬きして、それから、
「ルゥ、母さまはお客様に会って来るわ。少し待っていてね」
そう言ってベッドを離れる。待って、と声を投げようとしたルクレチアの唇が、再び空回りする。振り返りもせず、エリザベッタは病室を出て行く。声が出ない、でも、引き止めなければ。何故かそんなことを思って、ルクレチアはベッドを出ようとする。が、体に力が入らないのか、そのままルクレチアはベッドから転げ落ちそうになる。
「お嬢様！」
メイドの声で、エリザベッタは振り返った。ベッドから落ちそうになったルクレチアを見つけて、慌てて駆け寄る。
「ルゥ、どうしたの？」
その腕になだれ込む形になって、ルクレチアはエリザベッタを捕まえる。そして必死の顔で、その口をぱくぱくと動かす。待って母さま、行かないで、どこへ行くの、その傷は何？そう言葉を発しようにも、声は咽喉の奥から、全く出てはこない。歯がゆさに、ルクレチアは思わず唇を噛んだ。困った様子でそれに笑いかけて、エリザベッタは抱きかかえた彼女をベッドに戻す。そして、
「……すぐに戻ってくるわ。それまで、ここで大人しくしていてね、ルゥ」
そう言葉を残し、踵を返す。ルクレチアはただ、眉をしかめてそれを見送るだけだった。

ここは本当に病院の別棟だろうか。通された客間で、エドアルドはそんなことを考えていた。ストラーリのこの病院は、先代のボロージアの当主が、元は教会に付随する施療施設だったものを買い上げて、造らせたものらしい。グラローニは大きな都市ではない。そのためか、福祉の整備も中央に比べて遅れがちだ。しかしこの病院のおかげで、町の人間は随分助かっているらしい。自分も、患者として何度か訪れた事がある。とは言えそれはいつでも些細な疾病で、入院するような事はなかった。ここに、ボロージア専用の特別な病棟がある、とは聞いていたが、まさかここまでのものとは。思いながら彼は苦笑する。ということは、叔母もつい先日までは、ここにいたと言う事か。そして今度は、ルクレチアが。彼女は今、どうしているのだろう。思うと、苦いものを含んだ笑みさえ、その顔から消え、苦しげに眉は顰められる。
自分は余りにも、愚かだった。いくら悔やんでも、悔やみきれない。いっそその罪のあまりに、死んでしまいたいとさえ思う。けれど、それは逃げでしかない。一度は過ちを犯した。それが許されるとは思わない。けれどそれでも、いや、だからこそ、か。姉は償うために生きろと言った。本当に彼女を愛しいと思っているのなら、生きてその身で、償えと。確かに言われる通りだ。自分は彼女を愛している。失いたくないと思って、思いつめて、死という安易な選択肢に、踊らされてしまった。それでももし、その罪を償えるのなら、彼女に、許されるなら。生きて生涯、この身でそれを償おう。理由はたった一つ。彼女を愛しているから。
あの子が幸せなら、何にも脅かされず、幸せに生きていけるなら、側にいられなくても構わない。それを祈るだけでもいい。例え、自分ではない別の誰かと一緒になったとしても。思ってエドアルドは、その目を閉じる。
失うと、思うだけでこの胸は張り裂けんばかりになる。それは変わらない。誰にも渡したくないのも、離したくない気持ちも、変わらないどころか刻一刻と強くなるばかりだ。けれどそれでも、それよりも、彼女の幸福を祈りたい。誰に許されるでもない身で、何物がそれを聞き届けてくれるのかは解らない。
けれどそれでも、無力な自分に出来ることはそれだけだ。どうかあの子が、幸いでありますように。これからずっと、何の憂いもなく、生きていかれますように。例えこの腕に抱く事が、二度とないとしても。彼女を愛している、だから。
「……ごきげんよう、エドアルド」
声が聞こえて、エドアルドは目を開いた。困り顔の叔母の様子に、エドアルドは苦笑を漏らす。あまり歓迎はされていないようだ。当然だろう。会ってくれるだけでも、十分有り難いくらいだ。エリザベッタはエドアルドと対面するように、彼の着いているテーブルに歩み寄り、向い合わせのソファに腰掛ける。エドアルドは苦笑のまま、皮肉めいた、普段どおりの口調で言葉を紡いだ。
「てっきり、追い出されるかと思っていました。有り難うございます、叔母上」
「私に、そんな権限はないわ。ここは貴方のお父さまの持ち物で、私達はその人に、養ってもらっているのだし」
言葉は、いつになく刺々しい。当然か。思いながら、エドアルドは構わず言った。
「ルクレチアは、どうしているんですか？」
「……その前に、どうしてあんな事をしたのか、聞かせてもらえるかしら」
問いの答えは得られず、逆に尋ねられる。エドアルドは短く息を吐き出すと、彼女を見詰めたまま、淡々と言った。
「そうしたかったからです。彼女を殺して……俺も、死んでしまいたかった」
「どうして、そこまで……」
エリザベッタの顔が僅かに青ざめる。口許に、笑みが昇るのを禁じえず、エドアルドは薄く笑って返す。
「ルクレチアに望まれたら……俺には抗えません」

「あの子が……自分で死を望んだ、と？」
エリザベッタの瞳が、驚きで見開かれる。エドアルドは苦笑したまま、無言で頷く。彼女はその笑みから目を逸らして、そして自分も、困ったように笑った。
「あの子も……いつの間にか、一人の女になったのね……」
「会わせて、もらえませんか？」
溜め息と共に紡がれた言葉の後、単刀直入にエドアルドが尋ねる。エリザベッタはくすくすと笑うと、
「会ってどうしようと言うの？ここでまた、あの子に酷いことを……」
「ルゥが嫌だと言うなら、二度と彼女には会いません……何かしたい訳じゃない。もしかしたら、貴方とももう二度と、会わないことになるかもしれない」
落ち着き払ったその声に、発した彼自身も驚いていた。エリザベッタは笑うのをやめる。射抜く様な、真直ぐな視線がそこにあった。エドアルドは黙したまま、エリザベッタをただ見詰めている。静かで、力強い視線に、エリザベッタは困ったと言わんばかりに嘆息した。そしてまた、彼から目を逸らす。
「……叔母上？」
「意識は戻ったし、命に別状もないわ。それでも今、あの子と貴方を会わせることはできません」
「……何故です」
「目が覚めてから、声が出ないのよ、全く」
目を逸らした彼女の口から出た言葉に、エドアルドは息を詰まらせる。彼女は、驚く彼に気付いているのか、そのまま淡々と続けた。
「お医者様の話では、ショックが強くて、一時的に声が出なくなっているだけだろう、ということだけど……それは、それだけあの子が傷ついた、そういうことなのじゃないかしら」
エドアルドに言葉はない。エリザベッタは彼を一瞥すると、何かを嘲るような笑みを漏らした。
「グラローニに、戻ってくるのではなかったわね……私は一生、死んだ人の妻として、モリエーロにいるべきだった」
「叔母上……それは……」
紡がれた言葉に、エドアルドが反論しようとする。けれど言葉が続かない。エリザベッタは軽く笑って、更に続ける。
「でも、私は望んでしまった……ボロージアに戻る事を。あの人のために、どんな事にも耐えられた、そのはずなのに……あの人のところに戻れると解ったら、何も見えなくなってしまった……」
声もなく、エドアルドは息を飲む。それは、紛れもない一つの真実だった。彼女がここに戻らなければ、ルクレチアを連れてこなければ、こんなことにはならなかった。時を辿って言うなら、兄妹である二人が愛し合いさえしなければ、こんなことにはならなかった。けれどそれは、今悔やんでも仕方のないことだ。そして同時に、自分にそれを糾弾する事など、出来ない。思って、エドアルドは苦々しく、眉間を歪ませた。それは、不幸でしかないのだろうか。愛しいと感じたその相手を、愛する事が、何故許されないのか。ただ、兄妹だというだけで。いや、それ以上の枷など、この世界には存在し得ないのかもしれない。神によって禁じられた禁忌。それを犯さざるを得ない身とは、何と罪深い事か。
「叔母上……」
「あの子がもし、自分の母親が、こんなにも愚かしくて、罪深いと知ったら……どんなに哀しいかしら。いいえ……私は嫌われてしまうわね。憎まれるかもしれない。でもそれでも構わない。許して欲しいことは、たった一つだけ……あの人の側にいたい。何を失っても構わない……でも、私がそれを望んではいけなかったのよ。罪は、貴方にあるわけではないわ。総ては、私の罪」
エドアルドは、身動き一つ取れず、彼女の言葉を聞いていた。微笑むような表情で、彼女は目を閉じる。エドアルドは続く言葉を待つように、黙して彼女をただ見ている。
「エドアルド……貴方は、あの子が望んだら、抗う事ができない、そう言ったわね。それは何故？」
「……どうして、そんなことを……」
問いかけに、エドアルドは答えられない。エリザベッタは薄く、力なく笑って、
「あの子を愛してくれているの？だから、望む総てに抗えないの？」
「……そうです。俺は……」
「エドアルド、それは「愛しているから」ではないわ。貴方があの子に「愛されたいから」よ。本当に愛しているなら、過ちを犯す前に、それを止められるわ。愛しい相手に間違いなんて、させられないはずだもの」
答えに、言い返される。彼は言葉を失う。エリザベッタは笑っていた。笑って、更に言った。
「私は……あの人もね。抗えなかった。だって私は愛されたかったもの。どうしても、あの人のものになりたかった。他の誰にも渡したくなかった。それがどんなに悪い事でも、誰に許されなくても。今となっては、悔やんでも悔やみ足りない。エドアルド……貴方には、そんな風に間違いを犯して欲しくないの。あの子にも」
「俺が……彼女を求める事が、間違いだと言うんですか？」
押さえつけた声で、エドアルドが問いを投げる。エリザベッタは困ったように笑うと、

「それは、私が決める事ではないわ……いいえ、本当は、誰にも裁けることでもないのかも知れない……」
「俺は彼女を……ルクレチアを愛しています。貴方に何と言われても、それは変わらない。彼女の為なら、この命も捨てられる。それには、変わりません」
睨むように、エドアルドはエリザベッタを見ている。薄い笑みのまま、彼女は言葉を返した。
「それなら……本当にあの子を大切に思ってくれるなら……どうかこの先にも、あの子を守ってやって。貴方が本当にそう思って、ずっとあの子と共にいてくれると言うなら……私に、それを咎める理由はないわ」
言って、エリザベッタは立ち上がる。目で追いながら、エドアルドは彼女に呼びかける。
「叔母上……」
「貴方も私も、あの人も……そうね、フィオフィレーナも……抗うことが出来なかったのは、どうしてなのかしら……何もかもを捨ててしまえる訳でもないのに……どうしてなのかしらね」
例えば、兄であるあの男も、家を捨てられたなら、と悔やんでいる。この家を捨てて、その手を取って逃げられたら良かった、と。
過ぎ去った事は、何もかもが悔やまれる事ばかりだ。僅かな過ちさえ、余りにも大きな失敗のように思える。思いながら、エリザベッタは歩き出す。立ち上がって、エドアルドは視線だけでそれを追う。
「叔母上っ……」
「あの子に会ってあげてちょうだい。ずっとベッドに入ったままで、きっと退屈しているでしょうし……貴方に会えたら、きっと元の通りに、元気になると思うわ」
部屋を出る直前、エリザベッタが振り返って、笑う。言葉もなく、エドアルドはそれを見ていた。くすくすと、少女のように笑って、彼女は部屋を出て行く。姿が見えなくなるまで見送って、エドアルドは歩き出す。
心は決まっていた。彼女を愛している。拒まれないと言うなら、生涯をかけて守る。何ものがそれを許さなくとも、彼女さえ許してくれるなら、死ぬまで変わらず、彼女だけを。一度は死さえ覚悟できたのだ、叶えられない筈がない。思うと何故か、口許に笑みが昇る。気分は、高揚しているようで、どこか落ち着いていた。奇妙な感覚に、僅かに体が震える。
自分は、何かを恐れているのだろうか。何気にエドアルドは思った。そして思いながら、彼女の病室に向って歩き始めた。

屋敷の主がその連絡を受けたのは、彼が経営する中でも中枢を担う企業の執務室だった。秘書の一人が、電話が入っているが、とそれを取り次ごうとしたが、彼はそれに取り合わなかった。電話の主は、それなら伝言を頼みたいと言って、あっさりとそれを切ってしまった。その為、彼は直接その相手から報告を受けたわけではなかった。
「……サヴォイアの隠居に会いに行く、だと？」
数十年来の片腕であるところの秘書は、眉を顰める彼を見て、苦笑混じりに、今度の事をご自身で何とかするつもりのようですよ、と、やや冗談めかして付け足した。他地方の、ボロージアと同じく旧貴族の流れを汲む資産家の名前に、彼はいつでもいい顔をしない。加えて、隠居と呼ばれるその男を、毛嫌いしている感さえあった。舌打ちする彼に、秘書は困り顔で付け足す。
「何と言いましたか、あの青年」
「青年？」
「アデレード様の部下ですよ。ヴィアリ、でしたか」
その名前も、彼はあまり気に入っていないようだった。渋い表情が益々険しくなる。秘書は肩を竦め、自分の上司の不機嫌さにやや呆れている様子である。表には出さないが、彼は血族の女性に甘い。妾腹に産ませた、とは言え彼女は確かにその男の娘だ。女性にしておくには勿体ないくらいの強気と気風の良さ、そして度胸の据わり具合であっても。その為に、最近彼女と婚約した、と報告を受けたその男の名にも、いい顔をしないのだろう。とはいえ、今しているのは彼の家族の話ではない。仕事の話だ。構わず、秘書は続けた。
「ルオーティの出身、のようですね。老サヴォイアと、何かあるんでしょうか」
「……そのようだな」
言葉に、彼は舌打ちする。モントリーヴォは自身の片腕の、少々遠まわしで、愚鈍さを誇張するような話し方が、あまり好きではなかった。自分がここまでやってこられたのは、その切れ者の片腕によるところも大きい。それを認めてやっているにも拘らず、その男はいつもどこか、自分をはぐらかすような態度を取っていた。解っていてやっているのだ、そう思いながら、彼はその夜の色の髪を苛立たしげに掻き毟る。
「ようだ、ですか」
「本気で言っているのか、アントニオ」
「……ええ、まあ」
苛立つ声に、秘書である男は目を丸くさせた。本格的に機嫌を損ねたのだろうか。しかし自分は、単に予測で話をしているに過ぎないのだが。老サヴォイアという人物にも、ルオーティの情勢にも、自分は詳しくない。ただ、噂は何度か聞

いたことがある。アデレードがどこかの夜会でその老人にいたく気に入られ、何度かサヴォイアとの提携を持ちかけられている、と。しかしボロージアの主は全くそれに取り合わず、ルオーティとグラローニが離れていることもあって、話が現実味を帯びた事は今まで一度としてなかった。それが、ここへ来てその名が、彼女の口から出たのだ。ボロージアの主は彼女の父親だ。幾ら何でも、その意思を全く無視してサヴォイアと彼女が繋がりを得ようとしている、とは考え難い。下手を打てばアデレード自身、彼女が手にしている事業を、根こそぎ父親に奪われかねない。若しくは、サヴォイア側に食いつぶされるか。
「……ボス？」
「名前を聞いた時から、疑ってはいたがな。まさか本当にそうだとは……」
モントリーヴォが強く舌打ちする。秘書は傍らで首をかしげ、続く言葉に目を剥いた。
「あの老人の、妹の孫だそうだ。マルコ・ヴィアリ……サヴォイアの本家には跡取りがない。養子に入って、本家の統領に、ならんとも限らん男だ」

開かれたままのドアをノックする。病室は、その別棟のメインルームだ。客間より余程ゆったりと作られ、調度も派手すぎず、落ち着いている。その部屋の真ん中に、凡そ病人が使うとは思えないベッドがしつらえられている。子供なら数人が一緒に寝られそうなほどのそのベッドに、ルクレチアの姿はあった。不安げな視線がこちらに向く。引き攣る頬を感じながら、エドアルドはそれでも彼女に笑いかけ、部屋の外から声を投げた。
「入ってもいいかな、ルゥ」
彼の姿に、ルクレチアは驚きと脅えを見せる。その傍らのメイドの表情までも固くなって、思わずエドアルドは苦笑した。昨日の今日だ。まさか会いに来るとも思っていないのだろう。メイドの方は、もしかしたらまた自分が暴走するのでは、と危惧しているのかもしれない。まるで立ちはだかるように、メイドはその体でルクレチアを隠した。
「何もしないよ……話がしたいだけなんだ」
「若様……でも、お嬢様は……」
戦慄の表情で、メイドが何か言いかける。言葉を先んじるように、エドアルドは言った。
「聞いてるよ。声が出なくなってしまった、って」
平静を保ったその上、自嘲の混ざった声が聞こえると、メイドと、その背後のルクレチアが奇妙に体を強張らせた。警戒というよりも、拒否されているようだ。思いながら、もう一度エドアルドは言った。
「入ってもいいかな、ルゥ。君と話がしたいんだ」
困惑の目で、メイドがベッドの彼女に振り返る。ルクレチアは視線を泳がせて、俯いたままで小さく頷いた。短く吐息して、エドアルドはゆっくりと、そのベッドに歩み寄る。ルクレチアは、視線をベッドに落として、彼を見ようとしなかった。間際まで辿り着いて、エドアルドはその名を呼ぶ。
「ルクレチア……」
「わ、若様……」
「大丈夫だよ、何もしない……君は、下がってくれるかな」
すぐ側で、メイドの震える声が聞こえた。メイドは、困惑と脅えの混じった目をルクレチアに向ける。ルクレチアはそっと顔を上げて、やはり無言で首を縦に振った。そうしてくれ、という合図らしい。そのまま一礼して、メイドは部屋を出て行く。途中、不安げな顔で振り返る彼女を見て、エドアルドは苦笑した。信用されていないらしい。いや、当然か。もし自分がまた、ルクレチアに何かしたなら、席を外した彼女の責任問題にもなるだろう。そんなつもりは毛頭ないのだが。思いながら、エドアルドはベッドのルクレチアを見る。ルクレチアは俯いて、盗み見るようにそんな彼を見ていた。言葉はない。いや、何か言おうとするが、その唇から、声がこぼれる事はなかった。それはただ空回りするばかりだ。その様子に、エドアルドは眉をしかめる。
「ごめんよ、ルゥ……君を、こんな目に合わせてしまった」
ベッドの側に立って、見下ろしたまま、エドアルドが低く言葉を紡ぐ。ルクレチアは彼から目を逸らし、その目を強く閉じる。まるで、自分の外の何もかもを、拒むように。震えるその肩を見下ろして、エドアルドは嘆息し、言葉を続けた。
「こんなことをしておいて、言える事じゃないけど……本当に悪い事をしたと思ってる。許してくれ、なんて言えない。けど……これは俺の罪だ。だから、生涯かけて償う。君をもう二度と哀しませない……誓うよ」
ベッドの上の、彼女の膝の上の手に、エドアルドは手を伸ばす。細い指先を捕まえると、ルクレチアが驚いたように顔を上げた。その顔を見もせず、エドアルドはその手をそっと握る。振り解こうとすればすぐに解けるほど、力なく。
「ルクレチア……君を愛してる……本当に、心から……君に許されなくても、きっと俺はずっと……君を忘れられない」
エドアルドの指先が震える。ルクレチアは戸惑いながら、空回りする唇で彼の名を呼んだ。声は音にも、吐息にさえならない。もどかしさに、ルクレチアは自分の指を掴むその手を握る。震える手が止まって、エドアルドが顔を上げた。ルクレチアは肩を震わせながら、自分の指に更に力をこめる。

「ルゥ……」
呼ばれて、彼女は顔を上げた。視線が絡む。同時に彼女は笑って、それから、空回りする唇で言った。泣かないで、チェーザレ。そう言葉をなぞる動きに、エドアルドは戸惑う。指は繋がれたまま、確かめるように幾度も握り返された。
「ルクレチア……」
名前を呼びながら、指と指とをからめる。ルクレチアは笑うのをやめて、再びその顔を伏せる。同時に、その瞳から涙が溢れた。声の出ない、言葉を失った彼女の泣き出す姿に、エドアルドは戸惑い、混乱する。手を取ったまま泣き出したルクレチアは、絡んでいたその手をそっと持ち上げて、彼の指先に優しく口付けする。そのままそれを頬に寄せて、摺り寄せるのを、エドアルドは呆然としながら見ていた。
「ルゥ……俺を、許してくれるの？」
問いかける声が、震える。ルクレチアは頷いて、それから、首を横に振った。意図が解らず、エドアルドは苦笑する。
「どっちなんだい、ルゥ……それじゃ、解らないよ」
手は、捕まえられたままだった。甲が、柔らかに導かれて、彼女の頬を撫でる。抗うようにその指を開いて、エドアルドは自分の意思で、ルクレチアの顔を捕まえた。驚きもせず、委ねる様に、ルクレチアが軽く首を傾げる。ちらりと上げられた視線は、いたずらっぽい光を宿していた。エドアルドは訳が解らず、その場で戸惑う。
「……ルゥ？」
捕まえたままの顔が、僅かに上を向く。つんと唇を突き出して、彼女は目を閉じて見せた。悪いと思って、謝るつもりなら、キスでもしろということか。その幼い、そして余りにも変わらない仕種に、エドアルドは笑った。そして同時に、恐怖に似た何かに、その体を震わせる。
「ルクレチア……いいの？キスしても」
ルクレチアが片目だけを開ける。同時に唇が、不機嫌な形に小さく縮んだ。いつもの不貞腐れた、愛らしい顔がそこにある。震えながら、エドアルドは重ねて問いかける。
「俺を……許してくれるの？」
首は、横に振られる。さらさらと、その金色の髪が同時に揺れた。
「だったら……どうして……」
ルクレチアがその両目を開く。戸惑い、どこか脅える彼の体は、直後彼女に強く引き寄せられた。顔が間近に迫る。眉を吊り上げて、ルクレチアはエドアルドを睨む。いいから、キスして。不貞腐れた唇が、そんな風に動いた。怒ってはいるらしい。けれど、どうしてそんなことを言うのか。思いながら、エドアルドは近付いたその顔に、もう一度手を伸ばした。ベッドに屈みこむように、ルクレチアの、声を失った唇に、自分のそれを押し当てる。数秒、触れ合うだけの接吻の後、ルクレチアはやわらかに彼に笑いかけた。そして、
「……チェー、ザレ……」
「ルゥ、声が……」
途切れがちに、かすれた声で名を呼ばれる。エドアルドの驚きの声の直後、ルクレチアも気付いて表情を変えた。ひび割れて、元の通りとは言えないが、その咽喉は音を取り戻したようだ。体を起こし、すぐにもエドアルドは身を翻す。
「っ……待って、兄さまっ……」
「叔母上を呼んで来るよ、それから、医者も……」
「待って、兄さま」
声が戻った直後だというのに、叫ぶようにルクレチアは彼を引き止める。エドアルドは振り返って、ベッドのルクレチアにもう一度向き直る。
「ルゥ？」
「……待って、兄さま……もう少し、ここにいて」
細く途切れがちの、時折、酷く喘ぐ声でルクレチアが彼を止める。エドアルドは黙したまま、再び彼女の側に戻った。ベッドの側にある椅子に腰掛けると、ルクレチアは小さく笑い、それから言った。
「王子様の、キスみたいね」
「ルゥ……」
はにかむようにルクレチアが言った。エドアルドはその様子に、眉をしかめる。そして、
「俺は、そんないいものじゃないよ……もし君が話せなかったのが、呪いだとしたら……かけたのは俺なんだし」
「でも、名前を呼びたいって思ったら……元に戻ったもの。兄さまが治してくれたのと、同じよ……チェーザレ」
噛み締めるように、ルクレチアがその名を口にする。脅えるようにエドアルドは、そんな彼女が笑うのを見ていた。ルクレチアは笑いながら、意地悪く言葉を紡ぐ。
「さっきの言葉……もう一度、聞かせて」
「さっき？」
「兄さま、言ったでしょう？生涯をかけて、償う、って」

甘い言葉と同じ様に、それをせがまれる。エドアルドは困惑しながら、それでも先程と同じく、謝罪のための言葉を口にした。
「君をもう二度と、哀しませたりしない……ひどい事をしたと思ってる。だから俺は、生涯をかけて……」
「酷いことをしたのは、私も同じよ、兄さま」
ルクレチアが、エドアルドの瞳を覗き込む。笑顔が、ぎこちなく歪んだ。驚いて、エドアルドは思わず息を飲む。
「ルゥ……」
「酷いことをしたのは、私だって同じでしょう？でも、ここに来てもっと、酷いことも思ったわ……どうして殺してくれなかったの、って……」
笑顔が、曇る。目を伏せて、ルクレチアはその肩を震わせた。
「どうして殺してくれなかったの、って……どうしてあのまま、死なせてくれなかったの、って……ずっと思ってた……このままずっと一緒にいられないなら、あのまま、死んでしまいたかった……どうして今更……会いに来たりしたの？兄さま」
その目が再び、涙で濡れた。エドアルドは何もできないまま、ぼんやりとした頭で、問いかけに答える。
「君に、謝らなきゃって、思ったんだ……許してもらえなくても、だったら……これで最後にしようって、そう思って……」
拒まれたなら、別れるつもりだった。嫌われて憎まれて、遠く離れてしまっても、それでもきっと忘れられないだろう。それなのに、それが最善だと言うなら、そうしても構わないと思っていた。離れたくない、それも本心だ。側において生涯、愛したい。けれど叶わないなら、せめて彼女の幸いだけでも、祈りたい。それを許される身ではない、それでも。思いながら、エドアルドは眉をしかめた。
思うだけで胸が痛い。愛おしさで苦しくなる。離れては生きていけない。世界の総てに等しい、愛しい人。けれどそれなら、その幸いを遠くから見守ることも、できるはずだ。独占するだけが愛ではない。むしろそれは、愛しているならしてはならない事だ。相手を捕まえて、支配して、傷付けても、自分の欲求が満たされるだけだ。彼女のためにはならない。
「叔母上に言われたよ……君の望むことを総て叶えてやりたいと思うのは、愛しているからじゃない、愛されたいからだっ、て……本当に君を大切に思っているなら、間違いを犯すことを、止められるだろう、って」
ルクレチアが顔を上げる。哀しくゆがんだ瞳で、二人は互いを見詰めていた。
「……チェーザレ……」
「君のことが大好きだよ……だから、どこへもやりたくないのには、変わらない……だけど俺は、君を傷付けたり、哀しませたりするだけで……守ったり、優しくなんてできないのかもしれない……酷い目にも合わせた」
エドアルドが目を閉じる。ルクレチアは身を乗り出して、
「そんなこと……兄さま、そんな風に言わないで」
「誰かの許しなんて、いらないくらい君が好きだよ……誰にも許されなくても、認めてもらえなくても構わない……だけど君にだけは許して欲しいんだ……俺を許して……愛して欲しい……そんなことを言っても、もう遅いのかもしれないけど」
エドアルドの目が開かれる。ルクレチアは、無言で彼に抱きつく。受け止めても、彼はその体を抱き返さない。肩を震わせて、ルクレチアが言った。
「チェーザレ……ごめんなさい……」
「……何が？ああ……やっぱり、俺は君の側にいちゃ、いけないってこと？」
「違うの……違う……」
抱きしめられて、聞こえる言葉にエドアルドは苦笑する。ルクレチアは首を横に振りながら、言葉を続けた。
「私が、あんなこと言わなければ……兄さまをこんな目に、合わせなくて良かったのに……ごめんなさい、ごめんなさい……」
「何言ってるのさ、酷い目にあったのはルゥだろ？さんざん泣かされて、殺されかけて……傷付けられて……」
「だって兄さまは、私がそうしてって言ったから、したんでしょう？私のために……兄さまだって、傷ついてるじゃない……」
自分の胸で泣きながら、ルクレチアが言葉を紡ぐ。ぼんやりと聞きながら、そっとエドアルドはその肩を抱き寄せる。ぬくもりが心地いい。だというのに、胸が痛い。目を閉じて、エドアルドは嘆息した。そして繰り返し、同じ事を思った。腕の中にいる彼女を、愛している。失えば生きていけない。こんな風に泣かせて、傷付けて、これからもきっと、それは止むことはないだろう。それでも、求めずにはいられない。この思いは止まらない。
「ルクレチア……君が好きだよ……」
幾度も繰り返した同じ言葉が、口から漏れていく。言わずにはいられない。吐き出さなければ、血を吐く程に苦しくなる。けれどそれなら、この体中の血を総て吐き出して、死んでしまったほうが楽なのかもしれない。例え今ここにいる彼女が、それを許してくれたとしても、抱え込むこの思いがある限り、苦しみは永劫に続く。愛しいと思わずにいられ

ない。それはまるで、地獄の炎のようだ。何もかもを焼き尽くすほどに熱くて、そして激しい。その激しさ故に、滅ぼしたくないものの総てをも、焼き尽くしてしまいそうだ。守りたいと願うものさえも、傷付けるように。
「俺を……許してくれる？側にいて……君に触れても、いい？」
「……どうして兄さまには、解らないの？」
熱に浮かされたように呟かれた言葉に、ルクレチアは眉をしかめる。顔を上げて、彼女はそこにいる彼を睨みつけた。
「ルゥ……」
「いやだったら……兄さまが嫌いなら……ルゥはこんなこと、しないわ。どうして解らないの？それに……貴方に許されたいのは、私なのに……」
言って、ルクレチアは目を伏せる。そして、
「……許して欲しいって言うなら……もう一度、キスして」
「ルゥ……」
「たった今、生涯かけて、償うって言ったじゃない……償うものなんてないけど……だったら……だったら……ずっと側にいて。命の終わる時まで、死ぬまでずっと……」
詰るような、責めるような声が聞こえる。エドアルドの口から、かすかな笑みが漏れた。抱きながら、エドアルドはその背中をそっと撫でる。ルクレチアはすねた目で、今一度彼を見上げた。
「何だい？ルゥ」
「……キスは？してくれないの？」
せがまれて、思わずエドアルドは吹き出す。無言のまま、彼はその額に口付けして、それからいつもの口調で言った。
「そんなにされたいのかい？ルゥ」
「……もう、他の人には、させないんだから」
「解ってるよ。他の誰にも……こんな風には触らない」
「どこにも行かせないし、それにっ……」
「ずっと君といる。君が許してくれるなら……命が尽きるまで、ずっと一緒にいる」
せがまれる言葉を先読みして、エドアルドは笑う。ルクレチアは顔を赤くして、それからはにかむように笑った。
「兄さま……大好き」
「……光栄です、セニョリータ」
普段どおりに、からかい口調でエドアルドが言う。ルクレチアは軽く眉をしかめて、
「……私、真面目に言っているのよ。そういう言い方はよして」
「だって嬉しいんだ……君を好きになって、良かった……」
僅かに憤慨する言葉にも、エドアルドは笑う。ルクレチアはしばし膨れていたが、すぐにも、花が咲き零れるように笑った。笑うその顔を、エドアルドが両手で捕まえる。口付けの雨は、いつもと同じ様に降り注いだ。唇が塞がれると、小さく彼女は笑った。笑いながらも、その瞳から涙が溢れて、零れる。唇をそっと離して、エドアルドがその涙を拭う。えへへ、と小さく笑って、ルクレチアは満たされたように、言葉を紡いだ。
「愛してるわ、チェーザレ……もう二度と、離さないで……」

十日もすると、アデレードは出先からグラローニに戻っていた。とは言え、屋敷に帰ってきたのはそれから更に数日後の事だった。出かけて行ったその二週間後、戻った彼女は疲れ切った様子で、しかし、父親に遭遇するとその疲れなど感じさせない力強さで、激しい口論を繰り広げた。出くわしたエドアルドは、久々に会った姉の様子に驚きながらも、どこか安堵していた。二週間近くも何をしていたのかと尋ねると、彼女は少々忌々しげに言った。
「『白騎士』が、私を助けてくれる事になったのよ」
「『白騎士』？」
「友好的に買収してくれる相手よ。そんなことも知らないの？」
その言葉に、エドアルドは目を丸くさせる。庭先はすっかり秋めいて、夏の力強さは感じられない。とは言え、気候はすごしやすく、庭に植えられた広葉樹も、その色を鮮やかに染め替えていた。露台の紅茶道具と数種類の焼き菓子を目の前に、アデレードは少々不機嫌な様子だ。周りの景色など、見ている余裕もないようだ。
「『友好的買収』？」
「仕方ないわ、これは自分で蒔いた種だもの……これでしばらくは、ロミッツィが何か仕掛けてきても安心よ」
アデレードが苦笑まじりに言う。エドアルドは丸くさせた目のまま、
「それで、父さんの機嫌も、あまり良くないのかな？」
「……そうね。友好的とは言っても、ボロージアの末端が『買収』された訳だから、あの人には気に入らないんでしょうね」
問いかけに、アデレードが答える。エドアルドは黙して、そんな彼女を無言で見詰める。視線に気付いて、アデレードは笑った。

「なんて顔をしてるのよ、エドアルド」
「だって……そんなことになったのも、元はと言えば……」
「元はと言えば、何？お前が意に沿わない結婚に従わなかったから？違うでしょ？元々これは、私の失態だもの。その煽りを、お前やルクレチアが被らなくて済んで、返って良かったわ」
そう言ってアデレードが笑い飛ばす。何も言えず、エドアルドはそんな彼女をただ見詰めていた。アデレードは焼き菓子を口に運び、それから改めて、エドアルドに尋ねる。
「それで？今日のこの支度は、何？」
問われて、エドアルドは我に返る。ああ、と声を漏らしてから、
「これから、ルゥが遊びに来るんだ」
「あらあら、それはそれは」
その言葉に、アデレードの瞳がいたずらな光を帯びる。エドアルドは苦笑して、
「姉さん、何が「あらあら」なんだい？」
「何がって、私は何も言ってないわよ？相変わらず仲が良くて……私がいたらお邪魔かしら？」
くすくすとアデレードは楽しげに笑う。エドアルドは苦笑したまま、
「そんなことないよ。姉さんだって、あの子に会うのは久し振りだろう？時間があるなら……」
「そうね、顔くらいは見られるわね。これからまた、出なきゃならないけど」
言葉に、エドアルドの表情が固くなる。アデレードはそんな彼の顔を覗き込むと、
「エドアルド、私との約束は、覚えている？」
「ああ……覚えてるよ、姉さん」
「絶対に忘れない？」
「勿論……何があっても、俺はあの子とずっと一緒にいる……例え、血を分けた妹だったとしても」
この三ヶ月あまりで、自分達の周りはすっかり変わってしまった。目に見える変化は殆どない。けれどまるで、自分という人間の中身が、ごっそり入れ替えられてしまったかのようだ。思いながら、エドアルドは辺りを見回す。アデレードはそんな彼を、親愛に満ちた目で優しく見詰めている。
「もうすぐ、冬が来るね……この先、俺達は一体、どうなるんだろう……」
自分を口煩く叱った老女中の姿も、もう屋敷にはない。父親は相変わらず、屋敷にいても顔を合わせないような生活を送っている。最近また、無断外泊も増えた。姉は姉で忙しく飛び回り、休む暇もないようだ。犯した失態の処理の目処はついたものの、やることはまだまだ山積みらしい。この広い屋敷で暮らしているのは、実質自分一人なのではないかとさえ、エドアルドは思う。未来は、通り過ぎた時よりも長く遠く、果てしない。そして余りにも曖昧で、頼りない。思うと、無意識のうちに表情は固くなる。
「何辛気臭いこと言ってるの。お前はまだまだこれからでしょ？それに、先はず一っと長いわ。今からそんなことを言ってたら、何にも出来やしないわよ」
エドアルドとは対照的に、アデレードは生き生きとした目で言った。笑いさえ混じる声に、エドアルドが振り返る。アデレードは笑っていた。普段の通りに、まるで太陽のように、輝かしく。
「お前を信用していない訳じゃないけど、そんなに弱気なら、もう一度聞くわ。私との約束は、覚えている？」
「……勿論。姉さんとの約束を破ったら、後が怖いしね」
肩を竦めて、冗談交じりにエドアルドが返す。アデレードは一瞬目を丸くさせるが、すぐにもまた、その顔に笑みを浮かべ、
「後が怖い？それは一体、どういう意味なのかしら？エド」
「それはまあ……色々と。そう言えば姉さん、俺達のことより、自分のことはどうなんだい？」
返答に困り、とっさにエドアルドが話題を変える。聞くなり、アデレードの表情は一変した。不機嫌を顕に、舌打ちまでする彼女の様子に、エドアルドは目を丸くさせる。
「姉さん？」
「してやられたわよ、あの男には。だから、クビにしてやったわ」
「……え？」
唐突な話に、エドアルドは首をひねる。苛立たしく、アデレードは言った。
「そうしたら次の日、何をしたと思う？改めて、プロポーズに来ました、ですって」
「……話が、見えないんだけど」
あの男、というのが誰なのかは、何となく解る。姉が感情的になって、その男を解雇したらしいことも。だが、その前後が解らない。思いながら、エドアルドは答えを待った。アデレードは憤慨も甚だしく、声を大きくして言った。
「サヴォイアの養子になるのには、私との結婚が条件だから、どうしてもしてもらわなきゃ困る、それで自分は貴女に近付いた、なんて、いけしゃあしゃあと！ああもう、腹が立つ！」
「……ごめん、やっぱり、話が良く解らないんだけど……」

これは「彼女の恋が破れた」という解釈で、いいのだろうか。それにしてはあまりに力強い様子に、エドアルドは辟易する。しかしそれも束の間だった。エドアルドは笑い出し、アデレードはそれに気付いて、彼を鋭く睨みつける。
「何、エド、その顔は」
「いや……姉さんらしいと思って」
「それは一体、どういう意味なのかしら？」
凄みを利かせた顔で、アデレードがエドアルドに詰め寄る。エドアルドは笑ったまま、
「焔の様だ、そういうことですよ、姉上」
「それは、褒められているのかしら？それとも、ばかにされているのかしら？」
「勿論、褒めているんですよ。貴女の様な人は、きっとこの国広しと言えども、そんなに多くはいませんよ」
満面の笑顔の弟の言葉に、アデレードは無言だった。が、納得していないらしい。その、焔の様な姉の様子に、またエドアルドは少し笑った。
「若様、お嬢様！」
慌てた様子のメイドの声がしたのは、その時だった。何気なく、二人は声へと視線を投げる。年若いメイドが、息せき切って欠けてくる。慌てた様子に、アデレードが問いかけた。
「何、ルカ、そんなに慌てて。どうかしたの？」
駆け込んだメイドは二人の側までやって来ると、その胸を押さえて、息も絶え絶えに言った。
「す、ストラーリからたった今、連絡があって……エリザベッタ様が、危篤で……危険な状態だと！」

その日の夜、エリザベッタはそのまま息を引き取った。毒物を故意に飲んだらしいと彼が聞いたのは、駆けつけた先の病院で、それを語ったのは、彼らの父親だった。葬儀は近親者のみで行なわれ、彼女の遺骸はボロージア本家の墓地に埋葬された。旧貴族の血を汲む、大資産家の執り行うにしては余りにも質素な葬儀の後、エドアルドはルクレチアと、彼女達の暮らしていたアパルトメントにいた。慌しい葬儀の間中、ルクレチアは一人取り残されるように、ぽつんと座っていた。今も、何が起こったのかさえ解らないように、ぼんやりとしている。
「ルゥ……」
「……母さま……いなくなっちゃった……」
誰もいない、女主人の部屋を眺めながら、ルクレチアがぽつりと言った。その背中を見ながら、エドアルドは眉をしかめる。
「ルクレチア……」
「母さま……私をおいて……死んじゃった……もう、戻って、こない……」
言葉か途切れると、ルクレチアはそこに崩れる。そのまま座り込んだルクレチアを見下ろして、エドアルドは動けずにいた。座り込んだルクレチアはどこか冷たい目で、その部屋を見回した。そしてまた、冷めた口調で言葉を紡ぐ。
「昔から……何だか変わった人だなぁって……きっと余所の子のお母さんとは、違うんだろうなぁって、思ってた……私の母さまなのに……私より、子供みたいだったし……綺麗な手をしているのに、何にも出来なくて……」
「ルクレチア……」
「でも、こんなのって、ない……勝手に、死んじゃうなんて……酷い……」
言いながら、ルクレチアは顔を覆って泣き出す。歩み寄ってしゃがむと、エドアルドはその背中を抱きしめる。
「私をおいて、勝手に死んじゃった……私が、死のうと思った時には、生きていて良かったって、言ったくせに……」
体を震わせて、ルクレチアが慟哭する。何も言えずに、エドアルドは彼女をただ抱きしめる。
「母さま……母さま……母さま……」
その臨終の間際にも、そして葬儀の間にも、彼女が泣く事はなかった。堪えているのでも、悲しんでいないのでもない。泣くことができなかったのだろう。目の前で過ぎ去る総てが、余りにも衝撃的で、そして余りのスピードで、何が起きているのか、把握する事さえできていなかったのかもしれない。
「どうして……どうしてよ……どうして私をおいて、勝手に死んだりするの……大事だって、言ってたのに……たった一人の、大事な娘だって……なのにどうして……」
腕の中で暴れるように泣きじゃくるその姿に、エドアルドは無言で眉をしかめる。
叔母は何故、死んでしまったのだろう。思って、エドアルドは小さく嘆息する。思い当たる節が、ない訳でもない。彼女は自分を罪深いと言っていた。その罪の余りの深さに、今までにも幾度も、自殺未遂も繰り返していた。あの手に追った傷さえも、その証だった。あの時にも、言っていた。自分は余りにも罪深い、幼い日、毒の実を誤って食べてしまったその時に、死んでしまえば良かった、と。
生きることさえ許されない罪とは、どれほどのものなのだろう。何者にも、許されなくとも構わない、彼女はそうも言っていた、その筈なのに。彼女はその罪の重さに、耐えられなかったのだろうか。自分自身の過ちを、それほどまでに悔やんでいたのだろうか。思いながら、エドアルドは腕の中のルクレチアを見る。ルクレチアは泣きながら、幾度も繰り返し、もうどこにも存在しない母親を呼び続けている。

「母さま、母さまっ……母さま……」
「ルゥ……ルクレチア……」
慰めの言葉など見付からない。ただ名前を呼ぶだけだ。
葬儀の時、父親が言っていた。どうしてそこまで、自分を責めたのか。こうしてやっと手元に戻す事ができたのに、何故死んでしまったのか、と。人の死は、近しい人間に、余りにも大きな衝撃を与える。その命が失われることで、どれだけの人間が哀しみに揺さぶられることになるのだろう。嘆き叫んで、その命さえ消耗させてしまう事もある。ルクレチアがそうだ。このまま泣き続けたら、その細く小さな体は、一体どうなってしまうのだろう。涙と一緒に命さえ、流れ去ってしまわないだろうか。哀しみのあまり、彼女も自らその命を、絶ってしまわないだろうか。不安にかられて、エドアルドはその顔を覗き込む。ルクレチアは体を震わせて、エドアルドの胸に抱きついている。背中を撫でて、エドアルドはそっと言った。
「ルゥ……大丈夫かい？」
「……うん」
呼びかけに、ルクレチアが顔を上げる。彼はその額を撫でて、ぎこちなくはあるが優しく、彼女に笑いかける。
「母さま……どうして死んでしまったのかしら……私がこんな風に哀しむって……解らなかったのかしら……」
「……どうかな」
答えられず、エドアルドはそう言って黙り込む。あの人は、それを思わなかったのだろうか。自分が死ぬ事によって、彼女自身が愛した人達が、どれだけ嘆き哀しむのか、どれほど苦しむのかを。けれどそれは、考えても解る事ではない。総ては、死んでしまった彼女の胸の内にある。今更、問いただす事も叶わない。不安げに、ルクレチアがエドアルドの顔を覗く。気付いて、エドアルドはそんな彼女に笑いかけた。
「何だい、ルゥ」
「兄さまは……私をおいて、死んだり、しない？」
脅えた捨て犬のような目で、ルクレチアがエドアルドを見上げている。エドアルドは声もなく笑う。そして、
「俺は、君を置いて一人でなんて、死なないよ。俺が言ったことを忘れたのかい？ルゥ」
問い返されて、ルクレチアは目を伏せる。その髪を撫でて、エドアルドはまた、小さく笑う。
「叔母上にも、約束したんだ。ずっと君の側にいる、一生守るって。それとも……俺の言うことが、信用できない？」
ルクレチアは俯いたまま、答えようとしない。その体を抱いたまま、エドアルドはただ笑っていた。
例え、何ものに許されなくても。この腕の中にいる愛しい人を、失いたくはない。手に入れるよりずっと前から、手に入れられるとは思っていなかった。叶わないはずの思いが、叶えられたのだ。どうして手放す事ができるだろう。
側にいて、一生離れずにいられるのなら、命の他の総てを捨てても構わない。時にその感情は、激しさの余りに、愛しいその誰かを傷付けてしまう。けれどそれでも、離れられない。死んでしまった叔母も、きっと自分と変わらないのだろう。その激しい胸の内ゆえに、重い罪を犯したと言っていた。実の兄を世界と等しいと思うほどに愛し、その為に、その意識から逃れられなかった。だから死を選んだのだ。いつか誤って食べた毒の実を、再び口に含んで。
いつか自分も、もしかしたら彼女も、そんな思いに苛まれるのだろうか。互いを愛しいと思うそのことさえ、罪なのだと思う日が、やってくるのだろうか。考えるだけで、眩暈さえ覚える。それでも愛しいのだと、例え血を分けた兄妹だったとしても、離れられないのだと、そう言ったなら、愛しい人は、許してくれるだろうか。それが禁忌でも、重い罪であっても。
「ルクレチア……君が、大好きだよ」
目を閉じて、嘆息するように、エドアルドは言葉を紡ぐ。ルクレチアはそっと目を上げて、そこで初めて小さく笑った。その頬を彼の胸に摺り寄せて、甘えるように言葉を返す。
「私も。兄さまのことが、大好き」
「……名前を呼んでよ、ルゥ……俺は君の……」
続く言葉は、口に出来なかった。誰もが恐れたのは、その事実だ。そして叔母は、それを彼女に話す事なく逝ってしまった。
それを知ったら、この腕の中にいる彼女は、どうするのだろう。いつかの自分のように、離れていこうとするのか。共にいられなければ生きていけないと嘆きながら、それでも罪深い事なのだと悔やんで、遠くに逃れようとするだろうか。それを隠したままでいることは、罪深い事なのだろうか。このまま彼女をずっと欺く事は、彼女への裏切りになるのだろうか。思いながら、エドアルドは額が痛むほど、眉をしかめる。
こんなにも愛している。手に入れて、体を重ねて、これほどの幸福はないと知った。父も、同じだったのだろうか。その妹を愛して、腕に抱いたその時、彼も同じ様に、幸福だったのだろうか。
「愛しているわ、私の、チェーザレ」
囁くように、腕の中でルクレチアが言葉を紡ぐ。眉をしかめたまま、エドアルドは笑った。
これが罪でも構わない。何者が許さなくとも、誰にも許されなくても、彼女にさえ詰られても構わない。神に背いても、いや、そんなものに許されたいとさえ、思わない。

神たる者は知らないのだ。人を愛する幸福も、それを得たいと思う欲求の激しさも、愛しながらも傷つけてしまう、その苦しさも。知っているのなら、それを咎められるはずがない。それとも、知りうるからこそ、禁じられるのか。この引き裂かれんばかりの、胸の苦しさを。思いながら、エドアルドは笑う。愛おしさで、神は胸など焼かない。生きとし生ける総てを平等に愛する、絶対の存在は、それ故に誰も救わない。けれど自分は違う。肉の体を持った、血の流れる、矮小な人間だ。そして彼女を愛している。この世界の誰よりも、何よりも。

一度手に入れれば、それを失うことは出来ない。満たされても、次の瞬間から失うことに脅える。失っては生きていけないと思いながら、近くにあることで、不幸にするかもしれないと不安になる。彼女を愛している。誰よりも、何よりも。例え世界の総てを敵に回しても、きっとそれは変わらない。それがどんなに重い罪でも、その罪を、愛しい誰かに背負わせる事になっても、この気持ちは止まらない。もし愛してくれると言うなら、それさえ分かち合って欲しい。命の果てるまで、自分の側で、ずっと。

「ルクレチア……愛してる……」

囁く声は、甘く響いた。ルクレチアは笑いながら、言葉もなくその頬に口付ける。柔らかなキスに、エドアルドは笑みをこぼした。そして言葉もなく、唇を求める。

例えば、得られないのなら、貴方を殺してしまいたい。
誰の目にも触れず、誰の声も聞こえない、暗闇の中に閉じ込めてしまいたい。
例えば、愛する事さえ叶わないなら、死んでしまいたい。
思うことさえ罪深いと言うなら、殺して欲しい。
愛おしい誰かの手に掛けられるなら、それ以上の幸福もない。
愛しい貴方を得られないなら、それを飲んで死んでしまおう。
貴方を、愛しているから。